第36回
青少年指導者育成セミナー報告書
2014年3月20日～23日

テーマ
「グローバル」

RYLA
Rotary Youth Leadership Awards
Seminar

主催
国際ロータリー第2670・2680地区
RYLAセミナー運営委員会

目　次

RYLAセミナーの方針・ねらい …… 3

スケジュール …… 3

■ 1日目 ■

● 開講式

ガバナー挨拶

国際ロータリー第 2680 地区
ガバナー　大室　儁 …… 4

国際ロータリー第 2670 地区
ガバナー　関　裕司 …… 5

オリエンテーション

パストガバナー（2680 地区）　安平　和彦 …… 6

RYLA 委員長（2670 地区）　森　廣一 …… 16

● ロータリアンの夕べ

ガバナーエレクト（2680 地区）
滝澤　功治 …… 21

■ 2日目 ■

● 講義１「グローバル化の中で必要な資質」

徳島大学総合科学部教授
饗場　和彦 …… 35

● 講義２「日本・日本人の国際化とメディア」

ジャーナリスト・メディアコンサルタント
藤澤　秀俊 …… 59

● ロータリアンの夕べ

「地域における社会奉仕」

…… 79

■ 3日目 ■

● フォーラム「リーダーとはどういうものか」
– リーダーが目指す社会とはどういう社会か – …… 98

● カウンシルファイアー
RYLA 委員（2680 地区）　安行　英文 …… 133

■ 4日目 ■

● 講義３「グローバルなリーダーシップ」
パストガバナー（2680 地区）　深川　純一 …… 137

● 閉講式
閉講の挨拶
パストガバナー（2680 地区）　三木　　明 …… 161

参加者感想文 …… 163

受講生名簿 …… 185

第36回 RYLA セミナー運営委員会 …… 187

RYLA セミナーの方針・ねらい

RYLA セミナープログラムのねらいは、受講生に５つの特色を味わってもらうところにあります。

① 高いレベルの講義と討論
② キャビンタイム（親睦とその熟成）
③ 自由と自律
④ 余島の自然
⑤ カウンセラーシステム

恵まれた自然のなかでテーマに基づく講義、キャビンタイム、思索の時間、バズセッション、フォーラムなどを通して、学び、語り合い、考えていただきたいと思います。

スケジュール

	3月20日（木）	3月21日（金）	3月22日（土）	3月23日（日）
7				
8		朝　食	朝　食	朝　食
9				
10		講義−1 講師 饗場 和彦氏	バズセッション	講義−3 講師 深川 純一氏
11				
12		昼　食	昼　食	閉講式 学友会案内 記念植樹 記念撮影 昼　食 解　散
13		講義−2 講師 藤澤 秀敏氏	バズ集約	
14	集　合		フォーラム	
15	開講式 講演 安平 和彦氏 オリエンテーション	思索の時間		
16		レクリエーション		
17				
18	オープニングパーティー	夕　食	夕　食	
19			カウンシル ファイアー	
20	キャビンタイム ロータリアンの夕べ	バズセッション （キャビンタイム）	キャビンタイム	
21				
22		キャビンタイム ロータリアンの夕べ		
23				
24				

ガバナー挨拶



国際ロータリー第 2680 地区ガバナー
大室　　儁

皆さん、こんにちは。 国際ロータリー第 2680 地区のガバナー宝塚武庫川 RC の大室です。

今日のこの RYLA セミナーは、第 2670 地区四国がホストとなりお世話頂いております。ガバナーの挨拶はコホスト地区から始めるのが恒例ということですから、私からまず一言ご挨拶いたします。

ロータリーはアメリカ・イリノイ州シカゴに生まれました。ポールハリスという 38 歳の青年弁護士が、3 人の友人と集会を持ったのが始まりです。1905 年のことでした。今から 109 年も昔のことです。

友人 3 人の職は、石炭商・洋服の仕立て屋・鉱山技師でした。そして、集会場は、会員の集合場を持ち回ることにしたことから、ロータリークラブと名付けました。

シカゴの町は当時、商業道徳が乱れ、騙してでも儲ける　騙されたものが悪いのだという風潮で、社会全体が腐敗して、誰も信用できない様な町でした。

ですからこの会では、4 人の間だけでは信用できる取引をしよう、互いに仲間うちは原価で売買しようと約束しました。相互扶助の会で、これを back scratch club といいます。互いに背中を掻きあう会という意味です。

このことが評判になって、入会希望者が増えましたが、取引上での競争が起こらないために、一つの業種には一人しか入れないというルールを守ることとしました。そして、その年の末には 30 人にまで会員が増え、翌年には 100 人を越す会員となります。

しかし、ある入会希望者から、「自分達だけが得をする会はおかしい。一業種一人なら、入れない人はどうなるのだ、そんなクラブに未来はないよ」と言われました。

ポールハリスはその通りだと思います。

そこでまず、汚れたシカゴの町に公衆便所を作りました。これがシカゴ市民の間でロータリークラブはなかなかいい事をするなと大変な評判となって、ロータリーの名が広まりました。

シカゴクラブにこれからも何かいいことをしようという気運が生まれます。この社会で何かいいことをしようという考え、これを今ロータリーでは“社会奉仕”と呼んでいます。ロータリーに社会奉仕の概念が加わったことで、ロータリーがシカゴの町だけに留まらなければいけない理由はなくなりました。つまり、いい事はどこの町でもやった方がよい、やるべきだという考えです。そしてロータリークラブは世界中に一挙に広がります。

まず 1908 年には西海岸のサンフランシスコに 2 番目のクラブが出来ました。

そして国境を越えてカナダに、大陸を越えてイギリスに、そしてアジアに、東京クラブが出来たのは 1920 年のことです。既に世界中には 800 を越すクラブが出来ていました。

今では世界 200 ヶ国以上に 120 万人を超す会員、34,000 のクラブがあります。

日本にはおよそ 2,300 クラブ、90,000 人の会員がいます。

120 万人はつながっており、しっかりとしたネットワークが出来ています。

ロータリーは人を育てる所であるとも言われています。

若者を育てるプロジェクトには、この RYLA の外に皆さんには聞きなれないものばかりですが、12 歳から 19 歳　インターアクトクラブ、19 歳から 30 歳　ローターアクトクラブ、そして、青少年交換があり、ロータリー財団のプログラムでは海外留学生や平和フェロー等の沢山のプログラムがあります。

これらのプログラムに参加する若者は 60 万人ともいわれていまして、この人達はロータリーファミリーと呼ばれています。

皆さんも含め、これらの若者にはロータリーと生涯に亘り関係を持ち続けて頂くことをお願いしております。将来このプログラムからはロータリーの会員が生まれます。

つまるところ、ロータリーは地域社会で、そして世界でいいことをしよう、住み良い社会を作り、世界平和を目指そうと世界的ネットワークを作っています。

以上、簡単にロータリーとはどんなところか説明いたしました。

最後に、若い皆さんにサムエル・ウルマンの“青春の詩”を贈ります。

1922 年ウルマン 78 歳の時に作られたもので、松下幸之助も座右の銘にしていました。最近では細川護熙さんが東京都知事選で引用したそうです。

この詩は長いので一部のみ紹介いたします。

青春とは人生の或る時期を言うのではなく、心の有り様を言うのだ。
優れた創造力、逞しき意志、炎ゆる情熱、物怖じしない勇猛心、危険を顧みない冒険心、こういう心の有り様を青春というのだ。

人は信念と共に若く　疑惑と共に老ゆる
人は自信と共に若く　恐怖と共に老ゆる
希望ある限り若く　　失望と共に老い朽ちる

20 歳であろうと人は老いる。頭を高くもたげて希望に満ちている限り人は老いない。

サムエル・ウルマンは、若くても人は老いると言っています。

皆さんは決して老いることなく、これからも優れた創造力、炎ゆる情熱を持ち続け、これからの人生を切り開いていかれることを期待いたしまして、挨拶とします。

ガバナー挨拶



国際ロータリー第2670地区ガバナー
関　裕司

本日は、RYLAへの大勢の方のご参加ありがとうございます。

本事業は2680地区（兵庫県）と2670地区（四国4県）の共同事業です。元々、両地区は一つの地区であったという親しい関係ですが、それ以外にも、先ほど挨拶された2680地区の大室ガバナーの奥様のお姉さんが、私の所属する高知RCの会員という関係でもあります。

ロータリーは様々な奉仕活動を行っておりますが、青少年に関わる活動が近年重要度を増しているのはご承知の通りです。長期交換、短期交換、米山奨学生と並んで、RYLAもその一角を占めています。RYLAとはRotary Youth Leadership Awards（ロータリー青少年指導者養成プログラム）の略で、20歳から30歳までの青少年を対象とする集中研修プログラムで、延3日間行われます。ロータリーは、その中核的価値観として、①奉仕、②親睦、③多様性、④高潔性、⑥リーダーシップを持っています。将来を担う若い皆さんにこそ、この5つの価値観を期待しています。ご出席の両地区各地から参集された若い皆さん方は、RYLAプログラムを通じて、楽しみ友人をつくりながら、専門職務上の責務と人間関係の問題について討議し、友情を深めるとともに、指導力と伝達力を磨いていただきたいと思います。

今日のテーマはGlobal（地球規模の視点と行動）です。本日のレジュメの中の私の挨拶の中に、ロータリーに国境はないと書いてありますが、誤解を招かないために申し上げますが、その意味はロータリーの活動には国境はないという意味です。ロータリークラブは地域（国）があって、その地域での奉仕が基本にあり、それらのクラブが世界的に集まっているのがRotary International であります。

今回のプログラムはご覧の通り、大変密度の濃いものとなっております。

是非、このRYLAを楽しんでいただきたいと思います。

また、お世話いただくロータリアンの皆さん、そしてカウンセラーをお願いしているロータリアン並びに奥様方、大変ご苦労様でございます。皆さんのご尽力に心より感謝申し上げ、ご挨拶といたします。



オリエンテーション



パストガバナー（2680 地区）
安平　和彦（姫路 RC）

皆さんこんにちは。2680 地区、兵庫のパストガバナーで姫路ロータリークラブの所属の、安平でございます。先ほどは、両地区のガバナーからロータリーについて大変詳しいお話をいただき、もうこれ以上私は喋ることはないと思っておりましたし、特にうちの地区の大室ガバナーは、私が喋ろうと思ったこと皆喋ってます。実はここでばらしてしまうとウルマンの詩なんて、私、それを最後に長々喋ろうと思っとったんが、大室ガバナーに先越されて、先手必勝ですね、喋られてしまったんですが、翻訳がちょっと違うようなので、時間があれば、私もちょっと喋ろうかなという風に思っております。実は、私は、このRYLA セミナーには第 3 回セミナーの時に見物に来まして、翌年はカウンセラーで来まして、その後はずっといろんな形でその RYLA セミナーに関わって参りました。ということは私にとってこの RYLA セミナーは、かれこれ 34 回目のセミナーということであります。私は今年 68 歳でありますので、34 年前といえば、34 歳であります。皆さん方はまだお生まれになっていらっしゃらなかったかもわかりません。

池田さんは今いくつですか。

「29 です。」

「29、私の半分以下ね。やっぱり」

「松谷さんは今いくつですか。」

「22 です。」

「22…1/3 やな。」

そんなことで、注意しといて下さい。人間本当にすぐに歳取ってしまうもんで、中年になって、あっという間に老年になってしまうんですよ。今笑ってる人達は信じないかもわかりませんけれど、かつて私もフサフサしてた。あっと気がついたらこうなってたわけでございます。私も 68 という歳になりました。ヘンリー・フォードというのが、こんなことを言うております。ウルマンの詩に共通する所があるんですけれど、「20 歳だろうと 80 歳だろうが、とにかく学ぶこと、働くことを辞めてしまった者は、老人である。学び、働き続ける者は皆、若々しく有り続けるだけでなく、幾多の限界とは無関係にさらに役立つ人間となり続けるのだと。」私も、ヘンリー・フォードの言うように、いくつになっても学び続けたいと思いますし、働き続けたいと思います。もっとも、私は弁護士を生業としておりますので、悲しい事に退職金もありませんし、現金も僅かでありますので、働き続けるよりしょうがないんでございます。

パソコン、これ実は原稿が入っておりまして、紙の原稿は、だんだんと目が読みにくくなったんで、パソコンを原稿代わりにしまして、喋っております。

まぁそんな冗談はさておきましてですね、先程も両ガバナーからお話がありましたけれども、ロータリーの話をまずしたいと思います。先刻の話、難しかったですよね。私の話はもっと難しいですからね。覚悟しといて下さい。ワークブックの 4 ページ、そこに「ロータリーの誕生について」と、僅かに「日本のロータリーについて簡単な説明がされています。大室ガバナーが仰いましたように、ロータリーは、1905 年の 2 月 23 日に、当時勝つか負けるかという激しい資本主義の嵐が吹き荒

れていたというシカゴの街でポール・ハリスという青年弁護士、青年と言ってもですが、ポールは1868年4月19日生まれですからすでに36歳になっておりました。その当時のポールの頭はすでに私と一緒で殆ど毛が無かったということでありますが、一応は青年弁護士。

そのポール・ハリスと、それから3人の友達が、たった4人で話し合って、そして始まったという大室ガバナーからのご説明がありましたけれど、1回目が2月23日、2週間後にもう1回、3月23日に第3回目の会合をいたしました。その間に仲間を集めて、3回目の会合では、9人の仲間がいました。

ポールが、「いよいよ機は熟した。規約を定めて役員を選ぼう」と言う風に提案をいたしまして、2つの大原則を提案をいたしました。彼は、「私は、まず2つの大原則を決めておきたいと思う。ひとつは、一業種一会員制の原則で、もう1つは、例会出席強制の原則だ。まず一業一会員制の原則だが、この厳しい資本主義の嵐が吹き荒れているシカゴの町で、われわれは、食うか食われるかの過酷な自由競争に明け暮れている。そういう中で同業者がいると、なんとなく疑心暗鬼になって、お互い気持ちが落ち着かなだろう。だから同業者を排除して、異なる職種から一人だけ選ぶことにしたい。」そういう風にポールが提案をいたしました。そうすると、皆は「それはいい考えだ。賛成するよ。」と言う風に賛同を得たわけであります。

次に、ポールは、「さて、第二の例会出席強制の原則だが、わたしは、連続4回例会を欠席した者は、自動的に会員資格を失うことにしたい。われわれは、このシカゴの町の弱小な実業人や専門職業人だ。お互いに心を通わせ、助け合って行こうと言う風に誓い合った仲間だ。その誓い合った仲間が2週間に1回の例会、当時は、今と違って2週間に1回の例会だったんですけれど、それに連続4回も出てこなければ、2ヶ月間も顔を合わせないことになるじゃないか。そのような者は仲間の資格がないと考えるのだ。どうかな。」と言う風に提案をいたしました。参加者は、「成る程、少し厳しいルールだけれども、ポールの言うとおりだと思う。我々はお互いに仲良く助け合ってやっていこうと誓い合った仲間だ。だから当然だろう。」ということで、賛成を得ることが出来た。これが、二大原則が採用されたいきさつであります。

そこで、ポールは、「ありがとう、みんな。さて最後に残ったのが、クラブの名称だ。何がよいかな。」と言う風に問いかけると、ある者は「ブースター・クラブ、こう飛ぶブースター。ブースター・クラブはどうかな。」とか「コンスピレーターズ・クラブ、密かな集まり、コンスピレーターズ・クラブはどうかな。」、「それよりシカゴ・サークルはどうだい。」「いやいや、ザ・ラウンド・テーブル・クラブが良いよ。」と言う風に、てんでにいろんな主張をして、収拾がつかなかったです。ワイワイガヤガヤ、ワイワイガヤガヤと経て、そのうち誰かが「みんな聞いてよ。我々は、例会を回り持ち、ローテーションでやっているから、ロータリー・クラブっていうのはどうかな。」と言う風に声が出たのであります。それを聞いたポールは、「おぉ、それはいいな。みんなもどうだい。」と言う風に言うと、もういい加減に議論に飽きていた参加者達は、「もう、どうでもいいや。」ということで全員「わかった、わかった、それにしよう。」ということで、そんなことはないんですけど、と言う風なことで。ロータリー・クラブという名称が決まった、ローテーションだからロータリー・クラブになったという真面目な協議から出たという風に出ておりますけれど、話によれば、「もうええ加減邪魔くさいから、もうええやないか。」こうなったと言う話もございます。ちなみに、今申し上げました、一業一会員制の原則と例会出席強制の原則は、今日は大変緩和されてしまっております。殆どその原型を留めておられないようです。残念ながらね。ただ、このような初期ロータリーの貴重な考え方を、

出来るだけ大切に守っていこうという風なクラブも見受けられるということであります。

そのようにして発足したロータリー・クラブは、もともとは、殺伐とした大都会の中で、お互いに胸襟を開いて、どんなことでも語り合える、助け合える友人を作ることを目的としておりました。したがって、親睦と相互扶助、お互いを助け合えるをクラブの目的としておりまして、定款上も、会員の職業上の利益の増大、お互いの職業上の利益の増大と社交クラブに付随する親睦。この２ヵ条だけが定款にありました。そしてこれも、大室ガバナーが仰いましたように、当初は会員同士の原価の取引、マージンをつけないで原価で取引をしようという風なことを奨励いたします。これが物質的相互扶助という風に言われています。それぞれ職業が違いますから、いわゆる違業種の交流ですね、そういう所からもたらされる企業管理の発想、それぞれの職業、業種間、それぞれ企業観が違うわけですからお互いにその企業間の発想を交換するという風なことをやったわけで、それが精神的相互扶助という風に言われております。そういう風にお互いの相互扶助は、必然的に会員達の事業を繁栄をもたらしたというわけであります。同業者排除による同業者たちと、同業者排除でどんどん金が儲かっていった。そうすると、一業一会員制ですから、同じ職業の者はそこに入れないわけですから、排除されてしまう。そういう風なことで、同業者が排除されることによって、そういう同業者達と違和感を生じまして、「ロータリーの連中は、エゴイズムの連中だ。」というふうに非難されるようになったということもあったようであります。

こういう中で、これも大室ガバナーの話にありましたけれども、ロータリーの奉仕概念を導入するきっかけになったのが、ドナルド・カーターという便利士の入会物語であります。すなわち、便利士のドナルド・カーターに、クラブに入るとこんなにいいことがあるよ、儲かるよ。そういう風な利点を説明して入会を勧めたところ、喜んで入るよという風うに予想したところ、カーターは、「そんなお互いの単なる互恵主義は、クラブ内部の利益の交換に過ぎない、対社会的な意義を欠いている。君達はいいだろう。だけど、入っていない者はどうするんだ」まあ、こういう風な話です。「そういうふうに利己的なことに終始するクラブは、将来性も入会も意義も認めない。」ということで、入会を拒否したのであります。話にありましたように、そのことの報告を受けたポールは、成る程、カーターの言うとおりだ、ということで痛く反省をいたしまして、



クラブに諮ってシカゴ・クラブ定款を改正し、第３条に、「シカゴ市の利益を推進し、市民のなかにシカゴ市に対する誇りと忠誠の精神を普及すること」というのを付け加えました。それによって、ドナルド・カーターも喜んで入会し、初期ロータリーの伝統形成に大きな役割を果たしたという風に言われております。

以来、ポール・ハリスは、「クラブの親睦で培ったエネルギーを、挙げて世のため人のために放流しよう」という風に提唱しました。その流れの１つが、お話を伺いましたように、シカゴ市の公衆便所設置運動につながったわけであります。

一方、先程言いましたように、ロータリーは職業人の集まりですから、職業人の倫理運動という側面でその理念を深めていきました。そして、難しいですね。アーサー・フレデリック・シェルドン。ロータリーの哲人と言われた人物によってですね、奉仕という概念、サービス・コンセプトが提唱されたということになっております。ちょっと難しいですが、聞いて下さい。

シェルドンというのは、ロータリーのモットー「He profits most Who serves best」（最もよく奉仕する者、最も多く報いられる）というモットーを提唱したことで有名なんです。彼は、ミシガン大学の経営学部の卒業で、シェルドン流科学的経営専門学校において経営科学理論を広めていました。彼は、「企業経営者たる者は、特定の利潤獲得が、それと直接関係する者だけ、つまり、売買だったら売り手と買い手なわけで、これと直接関係するわけですけれど、それだけじゃなしに、間接的にもこれと関わる人々、最近よく「スティックホルダー」なんて言ってますけれど、そういう何らかの形で利害関係を許す人達の承認できる取引であるかどうかを、そういうことをまず心の中で検証することが必要です。その思考プロセスを経て、そして得られた利潤を"Profit"という風に呼んだり、そして、そういう風に思考プロセスを経て、そしてそういう判断の世界を"Service"という風に呼んだという風に言われております。彼は、企業の利潤追求において、企業倫理の原則をその根底に置くならば、企業の永続的繁栄、最近は"サステイング・ディベロップン"というふうに言われておりますけれど、永続的繁栄が得られると共に、それと同時に、それと関係する地域社会に物心両面の幸せを配分するのだ。という風に言ったわけであります。

皆さん、近江商人の三方良しという話を御存じかも分かりませんけれども、近江商人達は、売り手良し、世間良し、買いて良し、という風に言って、ずっと商売をやると売り手と買い手がお互いに利益を得られて、ウィン・ウィンの関係がになっていいよ。だけど、それだけでは駄目ですよ。例えば、ギャングの取引、それもお互い Win-Win の関係だけれど、それは世間的に言うと、駄目じゃないか、違法じゃないか。こうなるわけで。三方良しの近江商人の話は、売り手良し、買い手良し、そして世間、世間がその取引を使うことによって、世間が利益を得られるねということで、三方良しという、これが日本の商人道で昔からあるわけです。そういう三方良しの実業倫理とか、それから最近 CSR という、皆さん方もお聞きになったかもわかりませんけれども、Corporate Social Responsibility という、企業は、単なる儲けだけではあきませんよ、そのことそのものが世間に対してフットビジネスにならないないといけませんよ。そういうことを言っているわけです。このシェルドンの先程言ったこの三方良しに尽きる言葉です。

この CSR の発想と大変よく似ていると私は思っている。そういう風に言って、シェルドンは、「経営の科学は奉仕の科学に他ならない」(The science of bisuness is the science of service.) こういう風に言ったわけであります。

ちょっと難しいですね。要するに、最初に出来た原始ロータリーはですね、互いの親睦と助け合いだけを目的としていたのが、その後、それでは単なるエゴイズムの団体ではな

いか。社会に対する奉仕をしなければ存在意義がないと言う風なことで、ロータリーは奉仕概念に目覚め、そして、職業人の集まりであるところから、当時の資本主義の嵐の吹き荒れるシカゴの町で、その反省として、職業倫理の向上を提唱したという風になったわけでありますが、その後いろいろあったようであります。親睦派と奉仕派との対立とか、個人奉仕か団体奉仕か、などの対立を経ながら、その都度上手く調和しながら解決しながら今日に至っているわけであります。

ちなみに、今回のRYLAのテーマは、「グローバル」です。

今日現在ロータリーは、話にございましたけれど、全世界の200以上の国と地域に、3万4,558のクラブと122万115人の会員を擁する、まさにグローバルな、グローバルで巨大な組織になったわけであります。これも、関ガバナーが仰いましたけれども、ロータリーの第一標語としては、「Service Above Self」を掲げ、国際ロータリーの使命としては、「職業人と地域社会のリーダーのネットワークを通じて、人々に奉仕し、高潔性さを奨励し、世界理解、親善、平和を推進することである」という風にあると謳っておりますし、国際ロータリーの中核的価値観としては、奉仕"Service"に親睦"Fellowship"、多様性"Diversity"高潔性"Integrity"リーダーシップ、これが"Leadership"としているわけであります。そんなことで、一応説明を申し上げました。ところで、昨年度の国際ロータリーの会長、世界の会長ですね、これは日本からの3人目の会長が出まして、田中作次さんという方がRI会長になられました。昨年度のテーマは「Peace through Service」でありまして、昨年度のRYLAのテーマは「平和と命」でありました。せっかく日本から会長が出られたわけですから、田中会長の仰ったことを少し取り上げたいのですが、田中会長は、「私達には、人生の一日、一日、自分のベストを尽くし、世界をこれまでよりも良い場所にするチャンスがあります。人生ではいろいろな方法で喜びが得られます。しかし、他の人を助けることで得られる喜びが一番です。人を助けることで、自分も幸せになります。誰かと人生を分かち合いたいと思うのは、自然で人間的なことです。幸せな時も、悲しい時も、成功した時も困難な時も、それを一緒に分かち合う人が側にいて欲しいと思うように。それと同時に、自分も他の人ために側にいてあげることが大切です。『超我の奉仕』は、単なる言葉ではなく、生き方を表しています。私達がいかに生きるかを教えるものです。とされました。奉仕するということは、平和に貢献することです。平和は単なる言葉ではありません。平和は理念です。私達が奉仕を通じて実現する私達の生き方そのものです。」という風に語られました。

ところで、また話戻りますけれど、ロータリーができたばかりの頃、ポール・ハリスは、このロータリーという組織が、たった4人で立ち上げたロータリーという組織が、世界中で平和を推進する力になるなどとは全く思ってなかったんですね、当時。しかし、よく考えてみると、ロータリーというのは、創立当初から「親睦」、「相互扶助」、それからその後に「奉仕」、そういう風なことで、平和を構築していくための全ての要素を最初から備えていたわけです。歴史を辿りますと、古い話ですが、100年前の1914年に第一次世界大戦が勃発しました。まもなく、テキサス州のヒューストンで開かれた年次大会で、「国際平和会議を収集し、ロータリアンが国際的な平和運動を支援する」という風な決議がこのヒューストンの年次会議で採択されました。そして、チェスレー・ベリーという初代事務総長が、ロータリアン達に、草の根レベルでの平和キャンペーンをするように呼びかけ、「私達は、全ての主要な友愛団体、新聞、教育機関、そして全商業団体、そういう団体を、親睦へと引き寄せましょう。そして、その広がりによって、国を導いてる為政者達が、再び戦争を始める前に、戦争を始めることに躊躇し、

二の足を踏むような世論を喚起しましょう」という風にチェスレー・ペリーが言ったわけであります。

それにもかかわらず、戦争は容赦なく1917年アトランタの世界大会がありましたけれど、それにも暗い影を落としました。そのようななかで、当時のアメリカ第26代大統領セオドア・ルーズベルトという方がいらっしゃいますけれど、そのセオドア・ルーズベルトが、時のアーチ・C・クランフ国際ロータリー・クラブ連合会会長に、次のようなメッセージを寄せました。大統領のメッセージです。

「私は、国と国との政治上の固い約束や同盟を信じていない。むしろ、国際ロータリーのような団体が持っている理念の方を信ずる。国と国の利害が相反し、意見が食い違った時は、いかなる同盟や条約があっても、友好的な関係を保つことは出来ない。お互いの国民が互いに理解と共感を持ってさえいれば、両国政府間の同盟など不必要である。国際ロータリーを組織するような人々の交流は、確実に相互理解を深めるに違いない。」

こういうメッセージを、時のRI会長に大統領が送ったというわけであります。まさに、国と国との条約、破るやつなんていうのは、国と国との理解が、対立すればすぐに破棄されてしまう。そうじゃなく、国を越えた、そのお互いの友情、信頼、それが平和に繋がっていくんだという風に、セオドア・ルーズベルト大統領が仰ったんです。その1917年の大会で、その主幹を受けたクラブの会長が、「世界でよいことをするための基金」の設置を提案し、今日のロータリー財団に繋がったのであります。そういう意味で、ロータリー財団というのがあるんですけれど、このロータリー財団は、教育と人道的奉仕を通じて、世界中に国際ロータリーの平和のメッセージ、平和のメッセージを広める手段を、ロータリアンに提供するというようなことです。

そして、第一次世界大戦後の1922年にロサンゼルスで国際大会が開かれました。そして、その時にロータリーの、これが一番大切なものです、今は目的というのに訳されてますけれど、「奉仕の理想に結ばれた、事業と専門職務に携わる人の世界的親交によって、国際間の理解と親善と平和を促進すること」という風に、一番大事なロータリーの綱領の中に、その一文を加えたわけであります。ついでに言いますと、翌年、1923年にセントルイス国際大会が開かれましたけれど、その時にまた、今度は第29代アメリカ大統領ウォーレン・ハーティングがですね、「もし私が世界中のあらゆる地域社会にロータリーを植え付けることができたとしたら、そのようにするでしょう。そうすれば、世界の平穏と前進は保証されるでしょう。」という風に語ったわけであります。

そういう風に、ロータリーというのは世界の平和を広げていくんだ、という風に、アメリカの大統領が何度にもわたって、そういう風に認めて、しかも、きているわけであります。

ただ、先も言いましたが、世界の人達の平和への熱い思いにもかかわらず、人間というのは愚かな生き物ですね、またもや人類は、第二次世界大戦という未曾有の大戦争を経験しました。日本では、広島と長崎に原子爆弾が投下され、大勢の市民が亡くなりました。戦後は、今度こそ戦争のない平和な世界の枠組みを作ろうということで、ロータリーは、国際連合の創設に多大の協力をしました。日本が、最近のニュースにありますように、これまで世界は、多くの地域紛争や民族間や宗教を巡る紛争、富める国と貧しい国との争いやその他の紛争が絶えない環境であります。また、領土と資源に関する争いも、より先鋭化してきております。

私は、そんなこと理想主義だという風にいうかもわかりませんけれども、国と国との利害が対立し、友好的な関係を保つことができないときでも、ロータリアン同士のように、お互いの国民が国を越えて理解と共感を持っ

てする草の根の交流は、そういうことは、きっとお互いの平和を築いていけるとことに繋がるという風なことを信じたいと思っております。もう一度、セオドア・ルーズベルトの言葉を借りたいと思います。

今年度のRI会長は、アメリカのロン・D・バートン氏であります。今年のテーマは、「Engage Rotary, Change Lives」公式訳は、「ロータリーを実践し、みんなに豊かな人生を」というふうに言ってますけれど、大室ガバナーは、「ロータリーに、いろんな形で参加し、そして、自分達または人達の生活を変えていこうじゃないか」とこういう風なことを仰っていたと思うんです。今回のRYLAでは、これをもじって、「Engage RYLA,change Lives」という風なことで、RYLAでいろいろ学んで、ご自分達の人生を変えていっていただきたい、という風に思っております。

RYLAの話が最後になります。さあ、RYLAの話をします。ワークブックの3ページです。

RYLAとは、Rotary Youth Leadership Awards Seminarの略であります。すなわち、若い方々に、リーダーシップを身に付けていただく、というセミナーであります。3ページの下半分に、「私たちのRYLAセミナー」という説明がありますが、我々がやっているこのセミナーは、他の地区で行われている一般的なRYLAとは少し異なっておりまして、キャンプの設営の仕方、テントの張り方、そういう単なる技術的な修練だけではなしに、修練では、既に一定程度のリーダーシップを持っていらっしゃる皆さん方に、より高度な精神的境地を得ていただいきたいという風に、思ってるわけであります。そういうセミナーで、そのためには、ハイレベルな講義もお聞きいただきます。それから、バズセッションとかフォーラムも実施いたします。そのためには、大学の教養部を出た程度のレベルが必要だという風なことで、参加資格も20歳以上に限っております。そうして、受講生の皆さん方の自主自律を最大限に尊重し、消灯時間・起床時間、全くありません。キャビンにおいて、お互いに語り合い、徹夜で徹底的に語り明かしていただいても結構であります。また、語り合うのに少し、少しですよ。少しのアルコールが必要なら、それも結構であります。但し、酔っぱらってしまっては、まともな議論は出来ませんので、その点はご注意ください。ロータリアンですよ。

それから、このセミナーでは、短い時間ですし、思索の時間というのを設けております。プログラムで言いますと、明日の3時ぐらいからってなってますか、思索の時間というのがあります。最近の世の中は、皆孤立してる



という風に言われながら、人と繋がっていなければ生きていけないという若者が増えてるように思います。そういう中で、自分を見逃し、見失なっているようにも思うんですね。そこで、このセミナーでは、皆さん方各自がひとりぼっちになって、自分自身を見つめ直して欲しいという趣旨で設けられました。ひとりぼっちになって、自分で「お前は何処から来て、何をしに、何処へ行こうとしているのか。そもそも、お前は何者なのか」そういうことを皆、自ら自分に問いかけていけたらという風に思っております。但し、その間はですね、ケータイもスマフォも駄目ですよ。一人になってじっくり、「お、やってるな」と思ってヒュッと見たら、スマフォさわってたり。そういうことでは駄目なので、ケータイもスマフォも全くやらないで1時間じっくりと自分で自分を見つけていただきたいという風に思います。そういう意味で、自分で自分を律するということであります。今、自分で自分を律するということを言いました。「自律」ということを申し上げたときに自分で律するの自律ですね。この言葉の意味は、ズバリ自ら律するという言葉でありまして、なんでもかんでも自由放漫にやっていいという意味ではありません。特に、話がありましたけれども、講義の開始時間とか、何らかの集合時間に決して遅れないようにしていただきたい。よく時間はみんなの共有物という風に言いますが、一人が5分遅れると、皆5分遅れるということ。一人が遅れることによって、全体が遅れてしまうということになりかねません。よろしくお願いしたいと思います。それから、講師の先生にはそれなりの敬意を払ってください。間違っても、講義中に、顔を伏せていびきをかいて寝るようなことのないようにしていただきたい。かつて、あったんですよ。一番前に座って、こう、寝てしまっている人が。キャビンタイムで一生懸命やったと思うんだけれども、だけど、いくら何でも講師の先生に失礼ですよ。少なくとも、睡魔に襲われても、必死になって講師の先生の話を聞こうというファイティング・ポーズをしていただきたい。やっぱり、講師の先生がせっかくおいでいただいて、皆さんにお話をしてあげようというわけですから、しっかり敬意を払っていただきたいと思います。

それから、このRYLAでは、カウンセラー・システムをとっております。皆様方の班には、それぞれ男性のカウンセラー1人とロータリアンの奥様1人が、それぞれカウンセラーとして、寝食を一緒にして、良き相談役になっていただきます。何でも遠慮なく相談してみていただきたいと思います。

それから、ここ余島は、このRYLAを最初に企画考案された元国際ロータリーの今井先生、今日はちょっとおいでになってませんけれども、今井パストレディーがこの島を見つけられまして、そして、神戸YMCAと共に、1950年から大切に整備されてこられた自然に囲まれた美しい島であります。見てのとおり離れ島ですので、火事が起きても消防車が渡って来れません。皆様方の中には、煙草をお吸いになる方もいらっしゃると思うんですけれど、火の用心だけはご注意願います。

さて、一番大切なことが最後になってしまいました。我々ロータリー、ロータリアンは、何故、何のためにこのRYLAをやっているのかということであります。今日は、この後オープニング・パーティーがあります。それなりに豪華な食事もアルコールも出ます。飽食の時代という現代に生きられてる皆さんですから、なんだ、こんなもんかという風にお思いになるかもしれません。

しかし、このRYLAを始めた36年前は、日本は、まだまだそんなに豊かではありませんでした。特に当時は、学園紛争が終息していたとはいえ、まだまだその余韻を残していたころでありまして、若者はまだまだ貧乏な時代でありました。そんな中で、当時、大人達に不信感を持ちながら、このRYLA参加した青年達は、目を見張るほどの豪勢な料理を食

べろと言われ、酒も飲んで良いよという風に言われ、その金はロータリーが全部負担するから要らないという風に言われて、何か離れ島に隔離されて、思想教育でも受けるんちゃうかな、という風なことまでどうも疑ったようでありますけれども、彼らが、3泊4日のRYLAセミナーを終えたときには「我々は、今まで大人というものを信じてこなかった。けれども、このRYLAに関わっているロータリアンだけは信用するよ」という風に言ったそうであります。

そうなんですね。我々ロータリアンがあなた方に、一人当たり、お金のことを言って恐縮ですけれど、5万円以上の費用を負担して、毎年毎年今回で36回目を迎えるまで続けてきたというのは、若い皆さん方に、講師の先生方の有意義な講演、それからカウンシル・ファイヤー、バズセッション、フォーラム、そしてキャビンタイムにおける皆さん方の若い同士の意見交換、熱い意見交換、熱い語らいを通じて、次代を担っていただく方としての皆さん方々に、我々ロータリーの思いと理想を伝えたいからであります。

最初に言いましたが、人生は、決して長くありません。ヘンリー・フォードの話をしましたけれども、80歳を超えて若者のように元気でいても、やがては肉体も衰えまして、100歳まで生きるのは至難の業であります。皆さん方は、今は若いですから、これからの人生においていろいろと何か良いことがあるんじゃないか、これからの人生が自分に何かを与えてくれるんじゃないかという風に、何かを期待しているのかもわかりません。しかし、そうではないんです。人生に何かを期待するというんじゃなしに、人生があなたに何を期待しているのかということを考えて生きなければいけないわけであります。読まれた方もいらっしゃるかもわかりませんけれども、有名な「夜と霧」という作品があります。ユダヤ人のヴィクトール・フランクルが、書いたんですけれども。彼はユダヤ人でしたから、第二次大戦の時に、あのアウシュビッツの収容所に収容されました。明日はガス室か、明後日がという風な、本当に生きていける望みのない中で、絶望と闘いながら生きる力を得たのは、「我々が人生から何かをまだ期待出来る、要するに誰か助け出してくれるんちゃうかなそういうことではなしに、人生が何を我々から期待しているのか、という風に発想に転換したとき」、すなわち、彼の言葉を言うと、「われわれが人生の意味を問うのではなく、我々自身が人生から問われた者としての自分を意識したときだ」という風に書いておりますけれども、ちょっと難しいですが、これ、普遍の真理なんです。まさに人生から問われる者、もっと言えば、神から「お前はどうだ、何者だ」という風に、人間としてやってるかと、神から問われる者としての自分の資質。そして、自分を向上して、させていくことが大切ではないかなというという風に思っております。

大変僭越なことを申し上げました。後で、メインホールの向かい側に、礎石があります。メインホールの裏に。それを見ていただきたいと思います。ちょっと木が茂って見えにくくなってるんですけれど。そこにはこういう風に刻んであります。「人と出会い、神と交わり、愛の火のもえるところ」(2回繰り返し)この余島というのはまさにそのような場所でありまして、そしてRYLAはまさにそのような機会なのであります。4日間、どうぞ体に気をつけてセミナーを楽しみ、かつ学んでいただきたいと思います。最後に、大室ガバナーが、話しようと思ってたのを喋ってしまったんですが、ちょっと翻訳者が違いますんでね、少し、長くなりますがこれを朗読して終わりたいと思います。

サムエル・ウルマン、この方もユダヤ人になりますね。彼も有名な青春の詩がです、戦後に、占領軍の総司令官として日本に来られたマッカーサー元帥が、昭和天皇と会見した執務室に掲げていたそうであります。それを朗

読致しまして、締めくくりをしたいと思います。何人かの訳がありますが、一番新しい新井満さんという方の訳を紹介したいと思います。ちょっと長いですけれど、大室ガバナーが遠慮されて、一部しか。私は、時間がまだありますから、全文をやります。

「真の青春とは、若き肉体のなかにあるのではなく、若き精神のなかにこそある。薔薇色の頬　真赤な唇　しなやかな身体　そういうものは　たいした問題ではない。問題とすべきは　つよい意思　ゆたかな想像力　もえあがる情熱　そういうものが　あるか　ないか。こんこんと湧きでる泉のように　あなたの精神は　今日も新鮮だろうか　いきいきしているだろうか。臆病な精神のなかに　青春はない　大いなる愛のために発揮される　勇気と冒険心のなかにこそ　青春は　ある　臆病な20歳(はたち)がいる、〝にじゅっさい〟がいる　既にして老人　勇気ある六十歳がいる　青春のまっただなか　人は歳を重ねただけで　人は老いない　夢を失ったとき　はじめて老いる　歳月は皮膚にシワを刻むが　情熱を失ったとき　精神はしわだらけになる　苦悩　恐怖　自己嫌悪　それらは　精神をしぼませごみくずに変えてしまう　誰にとっても大切なものは感動する心　次は何が起こるのだろうと眼を輝かせる　子供のような好奇心　胸をときめかせ　未知の人生に挑戦する喜び　さあ眼をとじて　想いをうかべてみよう　あなたの心のなかにある無線基地　青空高くそびえ立つたくさんの光輝くアンテナ　アンテナは受信するだろう　偉大な人々からのメッセージを　崇高な大自然からのメッセージを　世界がどんなに美しく　驚きにみちているか　生きることが　どんなに素晴らしいか　勇気と希望　ほほえみを忘れず　いのちのメッセージを受信しつづけるかぎり　あなたはいつまでも青春　だが　もしもあなたの心のアンテナが倒れ　雪のように冷たい皮肉と氷のように頑固な失望におおわれるならば　たとえ20歳であったとしても　あなたは立派な老人　あなたの心のアンテナが　今日も青空高くそびえ立ち　いのちのメッセージを受信しつづけるかぎり　たとえ80歳であったとしても　あなたはつねに青春　真の青春とは　若き肉体のなかにあるのではなく　若き精神のなかにこそある

有り難うございました。



オリエンテーション

RYLA 委員長（2670 地区）
森　　廣一（美馬 RC）



○森　森です。それでは、オリエンテーションを始めます。オリエンテーションは、これからプログラムの簡単な説明。それから、皆さん方に注意していただく注意事項についての説明です。それから、余島の施設についての説明。最後に、皆さん方のグループ別、班別を発表するという形の流れになります。

まず、プログラムです。これから、オリエンテーションが終わりましたら、班別の発表がありますので、カウンセラーの方のご指示によりまして、それぞれ部屋の方に移動していただくようになります。オープニング・パーティーが 18 時、午後 6 時ちょうどに先程の食堂で始めさせていただきますので、5 分前に集合してください。それから、20 時、約 2 時間後の午後 8 時にオープニング・パーティーを終了致します。その後、皆さん方は、キャビンタイムということで、カウンセラーの皆さんとそれぞれの部屋の方に帰っていただいて、カウンセラーの方の指示によって過ごしてください。その間に、入浴も致しますが、入浴につきましては、カウンセラーの方の説明を聞いてください。

2 日目は、朝食は朝の 7 時 30 分です。同じく食堂で始めます。それから、講義の第 1 講が 9 時 30 分、ここのセンター室であります。全て、時間の 5 分前には必ず受講生は、着席していてください。それから、昼食が 11 時 30 分。昼からの第 2 の講義が、13 時から開始。同じくここでお話します。15 時から思索の時間とレクリエーションの説明がありまして、約 1 時間ぐらい思索の時間をとっていただきまして、先程安平先生から仰いましたけれども、1 人の時間ですので、その点、特に 2 人で行動したりとかはしないようにしていただきたいと思います。また、具体的な説明は後ほどございます。それから、16 時 10 分レクリエーション。それから、6 時から夕食。夕食後、18 時 40 分から、バスセッションということで、それぞれのキャビンに入っていただいて、バスセッションについての話しをしていただきたくようになります。

同じく 3 日目は、7 時 30 分より朝食ということになります。それから、9 時からバズセッションということで、それぞれの班ごとに行動していただくようになりまして、12 時昼食。それから、13 時からバズの集約をしていただきます。1 時間後の、14 時からフォーラムを、ここで開始致します。それから、17 時 30 分に、カウンシル・ファイヤーについての説明がありまして、18 時夕食。19 時から、カウンシル・ファイヤーをすることになっています。そして、21 時に終わりまして、それぞれのキャビンタイムということで、お部屋の方に行っていただいてということになります。

4 日目ですが、同じく朝食は 7 時 30 分。それから、最後の講義になりますが、9 時から、深川先生のお話がございます。10 時 50 分閉講式がありまして、その後、船が来るまで、学友会の案内とか感想文を書いていただく。それから、こちらの外に出て、記念植樹、記念撮影等がございまして、最後の昼食を摂っていただいて、解散という風になります。それからにつきましては、班別の行動をしていただきますので、カウンセラーの方に聞いていた

だいたら分かると思います。

一応、簡単なプログラムの説明をさせていただきました。

次に、注意事項です。さっきから同じことを繰り返しますけれども、まず、パンフの7ページを見てください。ここに、皆さん方の、受講者の皆様へということで書いてます。先程のお話に出ましたけれども、ここは禁煙です。食堂かインフォメーションセンターに喫煙場所がございますが、それ以外では、もう絶対に吸わないようにしてください。火災が起きますと、大変なことになりますので、是非3泊4日、4日間ですので、是非お守りいただきたいと思います。

それから、携帯電話ですが、講義中は出来たら電源を切って下さい。そして、講義が終わって休憩時間がありますので、そういう時にですね、メールとか何か連絡があったらするような形でお願いします。それから、セミナーの期間中は、先程も言いましたが、班ごとに分かれます。ですから、行動は班ごとにしてください。同じ地区の友達の方もおりますが、セミナーが終わって、一緒に話していただいて、原則的に班ごとの行動をとっていただきたいということをお願いしたいと思います。

それから、講義中は、出来るだけここを出たり入ったりしますと、皆さんの注意がそちらに行って、せっかくの良い講義が、聞けないことがありますので、休憩時間に出来るだけトイレをして、原則的に移動しない。要するに、講義中については動かないようにご協力をお願いしたいと思います。それから、見学のロータリアンの皆さんについても同じことです。今回のセミナーは、受講生が中心になっておりますので、出来るだけ受講生が集中して受講出来るようにご協力をいただいたら有り難いと思います。

それから、あと、ロータリアンの方につきましては、メーキャップカードがですね、本日分が、インフォメーションセンターの所のカウンターの上に置いてますので、まだ貰ってない方は、各自お持ち帰りいただけたらと思います。このメーキャップカードは、4日間それぞれ色が違います。インフォメーションセンターに置いときますので、参加された日の有無をお書きいただいたらと思います。

○黒田　副ディーンの黒田です。若干補足しておきます。まず、お風呂の関係は、これから班、各班のカウンセラーの説明があります。大浴場ですから、バラバラに行くってわけにもいきません。集中して、勿論、男子と女子は別々ですから。それで、カウンセラーの指示に従ってください。

それから、携帯に関してなんですけれども、携帯は、ここで使わないというよりも、キャビン・タイムで行きますと、これは、協働作業、その場では集中して皆さん一緒に、いろんな話をしていただきたい。そうすると、誰かが勝手にスマフォなんかで遊んでいるというような状態、なんていうのは、これは非常に好ましくない。絶対に止めて欲しいという、そういう、今まで若干生活的に言うと、自由がないという風に思われるかもしれませんが、このセミナー自体が、目的自体が、元々皆さん我々は、完全に成人だと思っているだけではなくて、非常に優秀なリーダーになろう、これからさらに、そのリーダーのスキルをアップしてもらうための3日間です。正確に言えば4日間ですけれども。その間、僅かの3日、4日を、遊びの為に携帯を使ったりとか、そういうことがなくても充分、生活は出来るはずです。ただ、勿論、家族の皆さんとどうしても連絡を取らなければいけないとか、そういうとこはやむを得ませんけど、そこは、皆さんの自覚が、まさにこれはもう、大人としての対応を、私共は前提にしておりますから。本当はこんなこと言いたくないんですけれど、やっぱり、たまにあります。

もう一点、同じような意味で、一旦キャビンタイム、キャビンに入りましたら、なるべ

くそのグループの中で、お互いのことを理解して、且つ話し合っていく。理解することによって、話し合いの具合っていうのは当然、高くなるはずですよね。そうすると、他の班との交流なんですけれども、これは、個人個人としての対応はなるべくやめていただきたい。カウンセラーが、「1回あの班の人と話し合ってみようよ」というようなことがあれば別ですけれど、たまに、突然2、3人いなくなっちゃうとか、そういうことがあった。これ、遊んでるんです。その形としてはいいんですが、やはり、この狭い所で、特に自由な時間が、ほぼ晩に、夜になるんです。だから、非常に危険ですから、なるべく共同生活をしていただきたい。これも同じように、自由をかなり制約することになりますけれど、それを自覚して、そういう場であるということを自覚して、生活をしていただきたいというふうに思います。あと、細かいことですが、電気、電気に関しても、これもかつてあったんですが、同時に例えば、ドライヤーを同時に使うと、一発でショートしてしまいます。島中真っ暗になる可能性があります。ですから、1台はどうも、部屋に各1台ずつはいいみたいですよ。だけど、2台使うと、2台目使った人は責任を取ってもらいます。そこら中全部、蝋燭を持って歩いて下さい。そういうことに、本当に消えちゃうことになりますから。その電気についてもほどほどということで気をつけていただきたい。

あと、体のことなんですけれども、お酒は、ここは恐らく皆さんが私共が聞いてる限りでは、20歳以上、つまりノンアルコールがついていなくてもお酒が飲めます。お酒を飲むことは全く禁じてません。「飲め！」ってわけじゃないですよ、禁じてないってことですよ。ですから、そういう意味でお酒を飲む、いろんな意味で生活が普段と違う、非常に緊張した中で、その緩和をするためのお酒なんですが、やっぱり体調を壊す、ということもあるかもわかりません。その場合はすぐに、カウンセラーの皆さんに報告して下さい。幸いにして、今日は少なくとも2780で2人お医者さんが来ております。非常に名医です。ですから、そういう意味ですぐ対応が出来ますので、あまり我慢しないようにお願いしたいと思います。以上です。

○森　最後にですね、今の注意事項は必ず守って下さい。よろしくお願いします。
それでは、余島の説明を今から職員の方にしていただきますので。

○池田　それでは改めまして、こんにちは。この神戸YMCA余島野外活動センターの責任者をしています池田と言います。どうぞよろしくお願いします。もう既に、皆さんのお話の中で出たかもしれませんが、こちらの神戸YMCA余島野外活動センターが、今年で64年目を迎えます。初め、こちらの島を見つけて、キャンプを始めるというスタートをしたのが、皆さんもご存じの今井静雄先生が、この島を見つけてキャンプが始まった歴史があります。皆さんのRYLAセミナーの方も、36回目になります。こちらのセンター、少年キャンプ場の、皆さん来られてた、グランドが広く広がっている子供達のキャンプのエリアと、こちらの通年を使える施設が、エリアが分かれてるんですけれども、この、皆さんが今回利用されるエリア、ちょうど今年で38年目を迎える年になります。こちらの開設以来、こちらの方でロータリーのRYLAセミナーという形で、若い皆さん、20歳を超えた若い皆さんが、次の社会を担うために、いろいろ勉強の場をみんな先生方を始めとして、やっていただけたらと、きっかけの場所となっています。是非、その歴史を感じながら、今回のいろいろな取り組みを頑張っていただきたいなと思います。

多少、こちらの島、先程電気のことでもありましたけれども、不便な部分が多々あります。水を使いすぎると、水が出なくなります。

笑いごとではなく、何度かあります。電気を使いすぎると、ドン…！、真っ暗になります。笑いごとではなく、何度かあります。決して、施設が古いわけではありません。自然にやさしい環境の中での、最低限限られた生活を少し皆さんの中で、今回体験できたらなと思います。是非、良き学びを皆さんしていただけたらなと思ってます。あと、皆さんの関係あるスタッフの方も紹介しまして、また、ちょっと細かなインフォメーションをさせていただきたいなと。

○原田　皆さんこんにちは。うちの所長は、皆さんに笑われると、ピンと、スイッチが入って、ついつい喋りたくなると思うんでね。あんまり反応しないでいただきたいです。

（一同笑い）

○池田　喜怒哀楽は、大切です。

（一同笑い）

○原田　私は、ここのスタッフの原田と言います。原田です。余島に来たのが、初めてだという人、手を挙げてみて下さい。

（挙手）

はい、ありがとうございます。

いや、俺は2回、3回、10回ぐらい来てる、という人手を挙げて下さい。2回以上。はい、ありがとうございます。いないですね、今言われました。36回来てるんや、という方いらっしゃいますか？…いないですね。いないですね、ちょっと今、ほっとしました。

余島ですね、毎年こうやってRYLAセミナーを開催してですね、毎回新しく来られたり、何回も来てます、という方がいます。それから私がですね、このRYLAセミナーを見ていて、最後、最終日にいつも感じるのは、一体感です。皆さん今はそれぞれ探り合いだったり、自分の本心を出せないという人が大半だと思います。ですけども、最終日に感じる一体感ていうのは、毎年変わらず、続いてることなのかなと、私は見ていますので、今回の最後に、そういう一体感を感じるのかな、という風に、私自身も期待を込めて見ている部分があるので、是非、この3泊4日、良い関係を作って欲しいなと思います。

最後に一つだけ。ここの食堂の入り口の正面の所に、一つ石碑があります。その石碑に彫られた言葉があります。後で是非、見てみてください。彫ってある言葉というのが、「人と出会い　神と交わり　愛の火の　もえるところ」という言葉が彫ってあります。最後の「愛の火の　もえるところ」「ところ」って書いてますので、私なんかがそれを見て感じるのは、ここの余島のことを言っているんだろうな、という風に感じていますが、勿論そうなんですが、ここで活動しているYMCAという団体は、世界中125の国と地域に分かれて活動しています。その中の1つが、この日本の、これまた香川県の、ここの小豆島の余島という場所で活動していますが、それぞれの場所に、たくさんYMCAがあって、それぞれの場所に、きっとあの言葉にしている言葉なんだろうなという風に、最近は感じてきています。それは恐らくYMCAだけではなくて、今回こうやってここで開催されている、RYLAセミナーという場所も、そういう場所なんだろうな、という風に、個人的には感じていますので、どうぞ皆さん、この後食堂の前で、もう一度その言葉を見ていただいて、皆さん個人個人でね、いろんな思いを汲んでいただけたらなという風に思います。ちょっと長くなりましたが、所長よりまともな挨拶をしたと思っております。

ありがとうございます。

○佐々木　こんにちは。余島スタッフ、私は1年目になります、佐々木と言います。よろしくお願いします。ちょっと緊張しているんですけれども。私は昨日、久しぶりに余島をぐるっと1周回って、この1週間の間に、たくさんの新しい命が夜中芽生えていることに気がつきました。皆さんも、少し注意して歩いてみていただくと、新しい春に向かって芽

生えている命を、見つけていただけるんじゃないかなと思います。この皆さんの３泊の中でも、たくさんの学びを得て、新しい何かが皆さんの中に芽生えたら、すごく素晴らしいことだなと思っておりますので、頑張って、楽しんで、そして、良い時を過ごして下さい。

私の方から少し、余島の施設についてのインフォメーションをさせていただきます。

先程もお話しされてたと思うんですけれど、まず、余島の資源は小豆島から全て来ておりますので、電気、水道、大切に使ってください。何度も言われてますが、水道止まります。電気も、ドライヤーを２つ使うと落ちます、と仰ってましたが、本当ですので、本当に本当ですので、気をつけてください。

あと、煙草を吸われる方がいらっしゃるかと思うんですけれど、煙草は、そこのメインホールの前か、インフォメーションセンターの前に灰皿がありますので、そちらを使ってください。たばこ１つで、余島が丸ごと燃えてしまうということもありますので、火の取り扱いには、充分注意をしてください。

受講生の方は関係ないと思うんですけれど、それ以外の方々は、余島から、期間中に出入りをされることがあると思うんですけれども、渡船の時刻表をこの部屋の、この大研修室の後ろと、フロントと、あともう１カ所に掲示しております。

で、ですね、渡船の時間を皆さん合わせていただきたいので、フロントの所に出入りの時間に表にしてますので、そちらの方に記入していただく形で、渡船させていただきますので、ご記入をよろしくお願いします。それと併せてですね、タクシーも表を作っておりますので、そちらに書いていただいて、乗り合いをしていただくようにお願いいたします。

○原田　はい、ちょっと追加です。余島なんですけれど、潮の満ち引きがあります。恐らく知ってる方もいると思うんですが、潮が引くと、余島と小豆島が繋がります。知ってました？知ってますかね。奇跡的な場所です。パワースポットですから、潮が引くとね、小豆島と繋がるんです。歩いて行けちゃいます。が、そこを勝手に出入りしないようにしてください。いいですか。潮が引くと、道が出来ますが、勝手に行ったり来たりしないでください。お願いします。きっちり船代いただきますんで。それは冗談で、満ち引きがあるということは、当然、満ちてきますので、勝手に渡ってる間に「うわ～満ちてもうた、帰られへん…」というパターンもありです。もう１つ、重要なことは、今、その道になっている中余島ってね、ちっちゃい島がポツポツあるんですけれども、実はそこ、今崩れてきてる場所が幾つかあって、ロープを張って近づかないようにということを、行政からしてる場所もありますので、ちょっと危険な場所もあります。ですので、万が一のことを考えて、そこをプラプラプラ～っと行って、バーンと当たってね、コケちゃったらどうしようもないんで、そこだけ充分に気をつけてください。勿論、観光目的でね、見る分には構いませんので、ただ勝手にいなくなるようなことがないようにだけお願いします。

私からは以上です。

○佐々木　では以上で、よろしくお願いします。





ガバナーエレクト（2680 地区）
滝澤　功治（神戸須磨 RC）

さて，それでは早速，私が出席してきた国際協議会の内容を報告いたします。

国際協議会については，皆様ご承知でしょうけれども，ここで簡単にご説明します。この国際協議会というのは，ガバナーエレクトに出席が義務付けられている会合です。

すなわち，ガバナーエレクトは，その就任の前に開催されるGETS(ガバナーエレクト研修セミナー)，これは昨年の９月と12月の２回にわたって開催されましたが，これとこの国際協議会の全日程に出席しないと，ガバナーに就任できないことになっています。ちょうど，クラブの会長エレクトがPETSと地区研修・協議会に出席しないと会長に就任できないと全く同じであります。

そして，ロータリーの研修システムというか情報の伝達システムというのは合理的にできていまして，まずはガバナーエレクトが国際協議会でRIの次年度の運営方針を学ぶ，それを地区研修･協議会で会長エレクトなど，クラブの次年度のリーダーに伝える，その結果をリーダーがクラブの持ち帰り，それぞれのクラブのクラブ協議会で会員に伝えるというシステムになっています。

さて，今年度の国際協議会は，１月13日（日）から18日（土）までの１週間，アメリカ，カリフォルニア州のサンディエゴで開催されました。

サンディエゴというのは，ご存じの方も多いと思いますが，メキシコとの国境に近い，アメリカ有数のリゾート地です。

これが会場のホテルです。マンチェスターグランドハイアットという，ツインタワーの巨大なホテルで，ここに全世界から527人のガバナーエレクトとその配偶者が集められました。ですから，RIの役員や職員も入れたら，おそらく1300人は超える人数がここに集まったということになります。

ホテルの部屋は，別に日本人ばかり固まるように割り当てられていませんで，バラバラでしたから，エレベーターでも常に外国の人と一緒という状態でした。

これはホテルの近辺の写真です。

サンディエゴは軍港として知られていますが，確かに散歩の距離で港に出れば，遠くに航空母艦ミッドウェーの姿も見ることができます。

実際、ホテルの中で移動しておりますと、エレベーターでも外国の人と一緒になりまして、日本人の方と一緒になるということは、確率的には少ないという風に思います。

そして、これがこのホテルの近辺の物件であります。行かれた方は「懐かしい」と思われるでしょうが、こういう風にホテルの前には、ヤシの木があります。基本がだいたい常時20度前後ということでありますので、ちょっと日差しはきついんですけれども、日陰に入ると、私なんかは寧ろ、肌寒い感じがするぐらいであります。ところが、このホテルの中にはプールがありまして、屋外のプールなんですが、もう朝から、もうどんどんどんどん人が泳いでおりまして、皆さん現地の人は、半袖でありますし、私なんかからしたら、ちょっと皮膚感覚が違うなという思いがいたしました。

さて、スケジュールでありますが、13日の

最初の日は、登録と免許証がありまして、14日の月曜日から金曜日までは、毎日フォーラムがきっちりございます。全体の会議、本会議ですが、これが毎回、毎日1回ないし2回ございました。これは全員集まります。それから、毎日2つないし3つのセッション、これは小グループに分かれての討論というものです。それからもう1つ、フォーラムというのがありまして、これはグループディスカッション、参加者は100人ぐらいのグループに分かれて、同じフォーラムは複数回開かれていますけれども。そういうものの組み合わせで、毎日進行していきます。

休みは、ちょうど中日の水曜日の午後だけでありまして、各会議は、席が指定されております。したがって、誰かが休んでいると、その席が空席でありますが、すぐに分かるというシステムで、頻繁にそのSAAさんが確認します。

この写真は、各国から来られたSAAの人達です。偶々、この写真に一番右側に写ってらっしゃるのが、白髪の似合う方なんですけれど、これが日本のSAAさん、日本から来たSAAでいらっしゃいまして、3年前に、ガバナーを修めた、パストガバナーの方です。

土曜日の最終日の朝食が終わった後、解散すると、そういうことでありました。これがプログラムであって、各自一人一人渡されるんですが、全部ここに、何列の何番という風に指定されています。自分の席が決まってますから、欠席が許されない、サボることが出来ないというシステムであります。さて、開会オピニオンのセミナーですが、まず最初に、RIの会長のロン・バートンさんの開会のスピーチがございます。それから、役員の紹介がありまして、歴代の会長、それから理事、元理事、財団管理委員、元管理委員、それから国際協議会の研修リーダー、そういう方々が順次紹介されます。

後ろのスクリーンに「RI Past RI Presidents」と書いてありますが、元会長です。1番左側にいらっしゃるのが、直前会長の田中さんという人。その隣が、もう一つ前のカルヤン・バネルジーさんと奥様。そういう順番であります。たくさんの職がありますので、会長だけでも2組、3組交代で来られます。

さて、開会のセレモニーでありますが、各国の国旗が研修リーダーの方々によって、一つずつ紹介をされます。これは、日の丸を持っていらっしゃる方です。持っていらっしゃる方は、日本の研修リーダーではありませんけれども、日の丸を紹介された時です。

最後に、RIの会長のロン・バートンさんが、アメリカの国旗と一緒に入場されています。そして、台湾の国旗と共にエレクトのゲイリーC・K・ホァンさんがご自身で入場された。最後は国際ロータリー、RIの旗、そういう順番で全国の旗が揃ったら、アメリカと台湾の国歌が演奏されるということであります。

今日お話しします前半は、こういうちょっとどんなことをやったかというお話をまずしまして、後半は、スピーチの内容についてのご紹介をしたいという風に思います。

皆さんの周知であろうと思いますが、RI会長のエレクト、ゲイリーC・K・ホァンさんは、台湾の台北ロータリークラブ所属の実業家で、アメリカの大学を出てらっしゃるということで、英語は堪能で、全部英語でスピーチをなさいましたけれども、台湾で幾つもの会社を経営してらっしゃる方ということであります。ご婦人は、コリーナさんという方です。RIでは、国際ロータリーの理事を2000年-2001年度務められ、その翌年副会長、そして、財団管理委員を務められということで、次年度会長になられます。会長のテーマの発表であります。これが国際協議会のメインイベントであります。現に、ホァンさんが正面の大きなスクリーンの前に立って、今年のテーマについて発表するわけであります。

「Light up Rotary」というテーマでありますが、それを発表した途端に、前面の大きなスクリーンに、いっぱいに花火が上がりました。

会場が大変大音響でありまして、はっきり言いまして、聞いてる方がびっくりするような音でありましたので、さすがに台湾の演出は派手だなというのが、率直な感想でありました。

さて改めまして、テーマは「ロータリーに輝きを」と、「Light up Rotary」ということ。ゲイリー・ホァンと奥様が正面のスクリーンで手を振る画面では、それぞれ手を振って歓声に応えると、皆スタンディング・オベーションという状況でありました。

会議の状況ですけど、これは本会議、先程皆さん全員が集まっての会議は、こういう風に大きな会議場に集まって、これ下側全部人の頭であります。これをゲイリー・ホァンさんがスピーチをしている時であります。それから、少人数のセッションというのがこういう形で行われます。言語別に行うと、だから、日本人は当然日本語ですから、日本は34地区ありますので、34人いるわけでありますが、半分ずつ、十何人ずつのグループに分けられて、こういうふうに討論をいたします。オレンジ色のプリントは、それぞれの名前が書いてありまして、座席が指定されております。研修リーダーが真ん中に立ちまして、議論を方向づけするということで、研修リーダーが非常に心を砕いて、議論を進めていくわけであります。研修リーダーは、それぞれの国から選ばれておると思います。全部の国ではない、勿論ありませんけれど、日本は3人の研修リーダーが選ばれておりまして、たいへん幸運なことに、この2680地区の三木パストガバナーが、RIの研修リーダーの一人でございました。私はたいへん、その点では恵まれておる状況でありました。これが先程言いました、フォーラムっていうパネルディスカッションですね。前にRIのそれぞれの、これが一番左の方が青少年交換の担当の職員の方ですが、それとかパストガバナーの方が出てきまして、それのやりとりを我々が拝聴するという流れであります。

配偶者がやはり招集されるわけでありますが、配偶者は別に遊んでるわけではありませんで、実は、全く同じように全てプログラムがぎっしり入っていて、暇な時間がないという状況。配偶者だけの本会議というのがありまして、これは議長が、ロン・バートンさんの奥さんのジェンヌさん、或いはゲイリー・ホァンさんの奥さんのコリーンさん、てことで。

それから配偶者だけのセッション、少人数での会議もありました。私の家内は、人前で話す経験がないもんですから、非常に苦痛であったという風に言っておりました。それも、研修リーダーの配偶者が指導いたしますので、ミセスも奥様もそういう指導役をやってらっしゃいました。ということで、配偶者も遊んでる時間はなかった。例えば、ロータリーにおける配偶者の役割とか、ロータリーにおいて、どのようなことをこれからしていくのか、とかいうようないろんなテーマで、配偶者同士が話し合いをするということでございます。

さて、お楽しみの話もちょっとだけさせていただきますけれども、これは、国際親善晩餐会といいまして、民族衣装を着用するということになっております。アトラクションは、当然のことでありますが、中国の獅子舞でありまして、たいへんな大音響で派手なアトラクションでした。日本は、当然のことながら奥様は皆、着物を着ていくという決まりになっておりまして、しかも、自分の持ってる着物の中で、一番派手な着物を着ていくように、という指定がございました。アメリカの方、ヨーロッパの方には、上品な、日本でいう上品な色なんていうのは全然パッとしない。できるだけ、芸者に近い派手な着物を、ということでありました。お坊さんは必ず袈裟を持ってきなさい、という話でございます。やっぱり金襴緞子の華々しいのがやっぱり一番受ける。確かに、このお坊さんの衣装は、皆さんカメラで写してらっしゃいました。男性には、羽織袴でいらっしゃる方もいらした。私はスーツでありました。下の写真の右側は、

もう見たらすぐ分かるように、エジプトのエレクトの奥さんですけれども、もう完璧にクレオパトラでありました。衣装からそれから、頭の飾り物から、完全にクレオパトラ。

もう一つ、国際祭というのがございまして、いわば、各国の隠し芸を披露する一晩、がありまして。毎年、日本は踊りを披露するということで、今年は阿波踊りをやりました。配偶者とそれから、女性のエレクトが一人いらっしゃいますので、やはりこの中に入ってらっしゃるんですが、阿波踊りしてます。女性は舞台の上で踊って、我々男性はですね、舞台の下でやれやれ～と、かけ声と手を挙げる役割でありました。で、何かこの辺に、何か一人、どっかで見たことのある人ががいますけども、三木パストガバナーです。

この下の写真はですね、これは私でありますが、こちらは、2670の佐々木エレクトでいらっしゃいます。終わった後、記念写真を撮ったんでありますが、今日は佐々木エレクトはいらっしゃってませんけれども、私と一緒に勉強してまいりました。実は、こういう風に男性は法被を着ておりまして、着とったら終わった途端にですね、会場でいろいろ所望する人がたくさんいらっしゃった。私も、その場で欲しいという人にあげました。佐々木エレクトはですね、これ着てらっしゃるのが、ブラジルのチームの衣装です。佐々木エレクトは、ブラジルのチームの人と法被を交換して、こういう風に着ていらっしゃいます。私も交換すればよかったなあ、と思いました。

毎朝、皆さんがいろんな所で聞かれると思う「It's Our Rotary」という台湾の人が作った歌、これがもう、毎日毎日朝からかけられておりまして、もう本当に、頭の中でメロディーがグルグル回るような状況でありました。朝一番は、歌から、ロータリーソングから始まるんですが、ソングリーダーがこういうふうに真ん中で、意識をしてやるという状況でありました。

文化交流っていう、これはもっぱら研修リーダーの配偶者の役割でありまして、ここは、真ん中で頑張ってらっしゃるのが、三木研修リーダーの奥さんです。こっちは、インドの方ですね。そういうふうに、たいへんいろんなプログラムが用意されてて、飽きさせない、という、良いように言えばそうですし、ちょっと本音を言えば、大変。次から次へとプログラムがあって、大変しんどかったです。

さて、ここから少しスピーチの話で堅くしめたいと思います。ロータリーについて、ゲイリー・ホァン会長のことはお話になりました。ロータリーを通じて、私たちは友情を育み、地元に貢献し、また、より良く、より安全で健康な世界を実現するために力を尽くしてきました。そして、人々が互いの違いを乗り越えて手をつなげば、驚くべきことが達成できることを、実証してきました。

こういうお話をなさって、それからテーマについて解説をされるわけでありますが、ゲイリー・ホァン会長の言葉は、孔子の言葉を引用されました。中国の2600年前の孔子でありますが、彼に言わせると、最初のロータリアンだ、ということになるわけですが、孔子の言葉で、「ただ座って暗闇を呪うよりも、ロウソクを灯したほうがいい」と。

「世界には問題が山積みとなっており、大勢の人が助けを必要としています。〝自分にできることはない〟と言って、何もせずにただ座っている人が大勢います。これでは何もかも暗闇のままです。」と言ったのであります。

「ロータリーの考え方は孔子と同じだと。ロウソクを灯すのがロータリーだと。私が一本、あなたが一本。こうして、120万人の会員全員がロウソクを灯します。力を合わせれば、世界を光で輝かせることができるのです。」ということで、この話をなさっているときに、スクリーンにですね、ワーッと、ロウソクが一斉に火が点けられるんですね。だから、映像的にもたいへん印象的な場面でありまして、確かに、聞いてて「ああ、そうか」というような感じがいたしました。

さて、2014-15年度には、ロータリーをご一緒している人と分かち合い、クラブを強力なものとし、地域社会でロータリーの存在感を高めることで「ロータリーに輝きを」もたらしてください。「2014-15年度、34,000を超える地域社会で、これは、34,000世帯のロータリークラブと言うんですが、クラブを強化し、ロータリーに輝きをもたらせば、ロータリーの奉仕で世界に輝きをもたらすことができるでしょう。と、こういうお話をなさいました。

あと、幾つか会長が言ったこと、お話になったことを、ちょっとご紹介させていただきますが、まず最初に、会員増強であります。これが1番やっぱり大事だということで、「活気あるクラブを築くために、私たちは率先してまず新会員を迎え入れることから始めようではありませんか。」で、「ロータリアンは、自分の配偶者をロータリー入会へと誘うべきです。クラブに男女両方の会員がいれば、活気が高まり、活動も活発になります。会員数がただ2倍になるだけではなく、奉仕のレベルもずっと向上します。」要するに、あなたの配偶者を、ロータリーに入れてください。と、入れましょう。という言い方をします。で、会員が2倍になるじゃないですか、という言い方をするんで、聞いてる方は、え〜、そりゃまあ、そうだけどね。という感じでありましたけれども。かなり、力を入れて仰ってました。やはり、2013年度の厳しい委員会で、専業主婦の方も他に仕事があるだろう、ということを踏まえてのことだろうと思います。

それから、財団への寄付の推進でありますが、「ロータリー財団は、私たちロータリアンの財団です。ロータリーでは全員が財団を利用できますが、そのためには全員が財団を支援する必要があります。ロン・D・バートン会長は、今年度のガバナー全員にロータリー財団への寄付をお願いして、75万ドルを達成し、これを「ファーストクラス」としました。私は、「ベストクラス」という名前を付けて、皆さんには今年度の記録を塗り替える「100万ドルの寄付を達成してくださいというお話をしました。結果的には、100万ドルを達成できたというわけでありますが、これをまた、ロン・バートンさんは「ファーストクラス」、ゲイリー・ホァンさんは「ベストクラス」、そしてこの次の、スリランカの会長のラビンドランさんは「ワールドクラス」ということで、120万ドルを目標とするということです。そのようなお話がありましたので、また来年、そういうお話があろうかということです。

さて、ポリオのお話もありました。ポリオは、「ロータリーに輝きを」もたらす種にできる一番重要なこと、これはおそらく私たちが四半世紀以上にわたって取り組んでる仕事を完遂することでしょう。これは、1994年の研修会で、ポリオの撲滅がロータリーの第一の目標である、という風に決定されているわけでありますから、会長としても、やっぱりそれを力を入れてやりたいというお話もございました。ポリオを撲滅すれば、ロータリーが偉業を成し遂げる力を備えた組織であることが実証されるでしょう。なにより重要なのは永遠に続くプレゼントを世界に贈れるということであります。

実はこの期間中に、ちょっとショッキングなことがありまして、1月13日、会議中でありますが、インドのポリオの撲滅の達成をしたという宣言が行われました。3年前の1月13日に、最後の発症があって、3年間新規の発症がなかったということで、撲滅が達成された、という要件をみたしたということであります。そういうことで、インドの撲滅宣言が出されて、あと、野生ポリオの常在菌は、パキスタンとアフガニスタンとナイジェリアの3カ国だけだと。2018年の完全撲滅の目標まで、あと少しだ、ということを更に強調されました。

さて、ゲイリー・ホァンさんの力を得て、多分されるんでしょうが、ロータリーデーというフォーラムをお話になりました。これは、ロータリーを輝かせる方法は数多くあります。

地域社会の人に、ロータリーは何をしているのか、どんな団体なのか、ということを知ってもらうために、ロータリーデーを開催してください、と。その中に、ローターアクトやインターアクトの若い人にも入ってもらって、いつかロータリーに入会してもらえるように、彼らを導いていって下さい、という言い方をなさいました。

ロータリーデーについては、別途で会長ごとにまたお願いすることでありまして、実際にお願いをいたしました。

さて、あと残された時間で私が国際協議会で印象に残ったスピーチについて、ちょっとお話をさせていただきます。国際協議会では、元会長達が所謂シニアリーダーと言われる方が、たくさんスピーチをなさるわけでありますが、その中で、特に感銘を受けたスピーチをご紹介します。まず1つは、ロン・バートン今年度会長でありまして、「若い世代の会員増強」というお話をなさいました。どんなお話かと言いますと、ロン・バートンさんはまず最初に、奥様と2人で、あるロータリークラブを訪ねた時のお話をされました。それは、土曜日の11時頃、そのクラブの例会場ですが、教会の一室。そして行ってみれば、会員はスーツ姿の人が1人もいない。皆カジュアルなラフな服装でした。しかも、家族連れであると。子どもを連れて来たり、ちっちゃい子が、部屋の隅でドーナツを食べてる。食事といえば、それぞれが持ち寄った菓子パンを食べてる。会費は勿論、すごく安くしてあるわけでありますけれど、ただ、それでも奉仕活動、ヒスパニックの人が多いらしいですけれど、そういうヒスパニックの方が多い地域に、いろんな奉仕活動をなさっていらっしゃるということで、奉仕活動は充分にしてあると。そういうクラブを訪ねた時のお話をなさいまして、会員が増えればそれだけクラブが強くなり、地元や海外での活動の影響力を高めることが出来ると。また、ロータリー財団への支援も高まり、より多くの人々の人生を豊かに出来、ここの辺りは、今年度のテーマをもらってるわけですね。それが公共イメージの向上へと繋がり、結果としてロータリーを強化出来るというお話でした。

そして、私達が同じ目標に向かって、同じ理想を分かち合っている限り、私達は全員、ロータリアンです。例会の食事が、例えばホテルで、フルコースの料理を食べるクラブも、勿論あってもよろしいんですよ、そういう人達は、そういう料理を楽しまれたらよろしい。ただ、例会の食事が一切れのピザであっても、それはそれでいいじゃないですか。その場所が、例えば教会の地下室であろうと、或いは地元のパブや公園であろうと、問題ではありません。問題は、ここに書いてあるように、

問題は、ロータリアンがなすべきこと、つまり「超我の奉仕」が本当に実践されているかどうか、ということであります、という言い方をされました。ロータリーには、勿論伝統的なスタイルを維持しているクラブもありますし、それはそれで素晴らしいことだと。ただ、そうでない新しい形のクラブっていうものが、そういう人達にそれこそロータリーの精神で、寛容で皆さんを受け入れましょうということを訴えられました。世界が変化し続けている中で、私達はそういう変化に大胆にかつ柔軟になる必要がある、ということを強調されまして、ロータリーではそれぞれの違いを受け入れ合うことが出来るんだと。各ゾーンや各地区が一様でないのと同様に、全てのクラブが同じでないということを、私達は受け入れる必要があるということを仰いました。ロン・バートンさんの語り口が非常に良いし、説得力ある語り口でお話になりますので、感銘を受けたところでありました。ピザの一切れでもいいじゃないか、というのがたいへん印象的でありました。

「そんなことはロータリーではやらない」という考え方から、「何か新しいことにチャレンジしてみよう」という考え方へ、つまり、消極的な態度から積極的な行動へと転換すべき

時期に来てると。こういう積極性こそが、クラブを元気にし、明日のロータリーを強くしていくんだと。そういういい方をされました。成程な！という風に思ったところであります。

さてもう一つ、カルヤン・バメルジーさんという、先程もちょっと言いましたように、田中作次さんのもうひとつ前の年の会長でいらっしゃいます。インドの方です。3年前の会長であります。この方のスピーチ「ロータリーの価値、Our Rotary Values」というテーマでお話になったのが、非常に印象的でしたので、ちょっとご紹介をさせていただきたいと思います。

親睦と多様性が大切な価値観であるのは勿論ですけれども、ロータリアンの最大の特長は、高潔性-Integrity-、すなわち私達の職業における高度の倫理性です。ということを紹介した。この職業奉仕を通じて、ロータリーは、他のいかなる団体より物事を上手く進めていけるのです。職業における倫理性こそ、私達ロータリーがこの自由競争の世界で実践をしなくてはいけないことだ、というお話をなさいました。ここで、カルヤン・バメルジーさんは、2つほどエピソードを紹介されました。1つはカルヤン・バメルジーさんが、子どもさんを連れて、サーカスに、ごめんなさい、ある父親が、子どもさんを連れてサーカスに行った時のお話です。子どもさんは、7歳とそれから3歳の男の子だったんですが、そのサーカスっていうのが、日本風に言えば7歳以上が3ドル。という、7歳未満が無料という、サーカスの料金だったんですね。父親が、自分と7歳の子どもで全部で6ドルですね。という風に言ったら、入口の、入場のとこにいた男は、「いや～、上の子どもさん6歳だって言えばいいじゃないですか。そしたら、あなた3ドル助かるし、その3ドルで何か買えばいいじゃないか」という言い方をしたそうなんですね。そうするとその父親は、「確かにあなたが言うように、その3ドルで私は得するかもしれない。だけど、この子達は恐らくこれをずっと覚えてるよ。僕はそういうことは出来ないよ。」というお話をなさった。それからもう一つは、トリノの冬季のオリンピックのお話をなさいました。イタリアで、あの荒川静香さんがフィギュアで、金メダルを獲った、あのオリンピックでありますけれども、クロスカントリーの女子の試合で、カナダのチームの女子選手が、試合中に一生懸命滑走している時に、ストックが折れてしまったそうなんですね。その選手が一生懸命折れたストックで走ろうとしたんですが、いかんせん全然前に進めないと。その時に、ある人がサッと新しいストックが彼女に手渡された。彼女はそれをもらって、またコースに戻り、それから後、一生懸命走って、結果的には銀メダルを獲ったというんですね。じゃあ、誰がそのストックを渡したのかというと、これがノルウェーチームのコーチなんだそうです。ある意味では、競合相手、競争相手ですから、敵に塩を送るようなことを何でしたんだ。というようなインタビューで質問で出てくると、「え、そういうことは当然のことだろう」というふうに答えたんだそうであります。私、昨日の晩ちょっとインターネットでちょっと見てみましたら、この時の成績をネットで調べたら、カナダチームが、女子のクロスカントリーで銀メダルを獲ってました。ノルウェーチームはメダルなしでありますから、ある意味では、文字通り敵に塩を送ってという状況であったわけですね。そういう、エピソードを押さえた上でお話になった上で、最も重要なことは、私達ロータリアンが実践することだと。それが、私達がクラブに、そしてロータリーに集う理由です。このことは、奉仕が、私達の周りの地域社会での小さな奉仕活動であろうと、ポリオ撲滅のような世界中を巻き込んだ大きな奉仕活動であろうと、同じことだと。いうようなことを仰いました。

ロータリアンとして、そしてリーダーとしてなされる全ての行動は、中核となる価値観、奉仕の価値観ですね。それらを一言で言えば、

信頼です。Trustです、という言い方をされました。偉大なリーダーは常には何かの答えをくれないかもしれないけれども、あなたが答えを見つける手助けをしてくれます。偉大なリーダーのゴールデンスタンダードは、「私がガバナーになるんだったら、あのようなガバナーになりたい」といわれるようになるかどうかだという言い方をなさいました。

その後、非常に印象的な言葉が続くわけでありますが、ガバナーの言うこと、あなたたちの時間は1年しかありません。たくさんのことが出来ると思っても、実際に出来ることは僅かです。もしあなたが、何か記念的な事業であり、自分の名前を残したいと考えても、多分失敗するでしょう。本当に成功されるには、将来を見据え、長期的な展望に立って、そしてあなたのクラブや地区や地域社会の状況に見合った計画を立てなさい。そして、1年が終わったら、次のリーダーに引き継いで、自分のクラブに戻りなさい。そういう言い方をされました。

1年間で、あなたが地区のために為すべきことは、その地区を、今より強くすることだ。問題は、1年間で何ができるというのではなくて、どの程度地区を強化できるかだ。こういう言い方をされて、1年間で何かしようと思っても絶対失敗するよ。という風に言われた。地区をとにかく少しでも強くすること、強化することがあなたの役割ですよ。ということを言われたのが、たいへん印象的でありました。実は、ロン・バートンさんが閉会の時の挨拶でも、同じような趣旨のことを仰いまして、ロン・バートンさんは、「あなたがたは、これからガバナーになるわけだけれども、その間にこれをした、あれをしたと言って、自分で言い、或いは人に言われるようなことを目指しては駄目だと。あなた方の役割は、クラブ、そして地区を強化することだと。そういうことを、とにかく訴えてください。ということを仰いました。私はそれは、要するに、地区やクラブを活性化するということが、あなた方の役割だという趣旨に理解を示したので、たいへんその点も感銘を受けたところであります。

カルヤン・バメルジーさんは、最後にインデラ・ガンジーさんの言葉を引用されて、「世界には2種類の人がいる。1つは汗を流す人、もう1つは、それによって名誉を受ける人である。」「その2つまでには、大きな違いはないのですから」ということで結ばれました。非常に印象に残ったスピーチでありました。

さて、若干の感想を述べさせていただきます。私は今、ITの技術が進歩しているこの現在、たくさんお金をかけて、汗や時間と負担をかけて、全世界からエレクトを、1ヶ所に集めるということの、合理的な理由があるのかしら、という風に思っとったんですが、実際に行ってみますと、やはり世界中から500人を超えるガバナーエレクトとその配偶者が、一同に会して、しかも1つのホテルの中に、いわば缶詰めの状況になって研修を受けるということで、一体感を認識をさせるということに加えて、実際に周りには世界中いろんな国の人もっと言えば人種の人がいらっしゃるわけで、様々な民族衣装に包まれた方がたくさん行き交うわけでありますから、ロータリーの国際性というものを、否応なく認識いたしました。まさに、国際ロータリーは、「国際」なんだなということを認識をしたわけでありますが、そういうことを通じて、自分がこの国際ロータリーの、一番末端の役員になるという、そういう意識を植え付けるのが、この国際協議会なんだな、てことをつくづく思いました。本当にちょっと、話をしたPETS（会長エレクト研修セミナー）とGETS（ガバナーエレクト研修セミナー）ということに違いがありますけども、先般の地区の研修リーダーから教えられた所でありますけれども、PETSとGETSというのはパラレルに捉えられると。さっき私が言いましたように、会長の言うことと同じですよ、ということを言ってたんですが、GETS或いは国際協議会というのは、国

際ロータリーが自分の一番末端にいる手先にいろんなことを教え込むわけです。それに比べてPETS或いは地区研修協議会っていうのは、国際ロータリーの側がクラブに教えるものです。クラブは、自主性があるわけですから、国際ロータリーの方針に一色に染め上げられるわけではないんでしょうけれども、しかし、国際ロータリーの側から見れば、そういうのがお前の役割だろ、ていう意識をガバナーの人に植え付けて、それを、一生懸命クラブ会長或いはクラブのリーダー達に訴えることを命ずるようにし、要請するのが、国際協議会の役割なんだな。私は、やっぱりそういうことを経験をして、つくづくそう思いましたし、実際そういう意識になりましたから、やはり国際ロータリーというのは、そんな力があるな、という風に思った所であります。

というようなことで、若干の感想でございました。

どうもありがとうございました。

○黒田　どうもありがとうございました。ディーンがいないので、とりあえず副ディーンの私が進行役もやりますけれども、今の滝澤エレクトのお話をに対して、何かご質問とかございましたら。

三木先生、どうでしょうか？ご質問なんか。

○三木　いや～、もう滝澤先生の素晴らしいお話をいただいたので、それ以上もうないです。

○2680のお話なんですけれど、今年度どういう方向で、目的ですけど、端的にというか、具体的にというか、どういう形でしていきたいのかな。ということを、ちょっと、もう少し。

○滝澤　2680は、先週の土曜日にPETSをやりました。そこで、会長に言ってお願いをしたのは、まず第一に、うちの地区の問題は、会員の減少。地区の財政っていうのは、会員の分担金によって賄われているわけですから、会員の減少によって地区の財政が悪化するということ。収入が減っても去年と同じ事をやってきたので、少し観点を変えて違うことをやってみてください。新しいことをやってください。ていうことを、会長に訴えました。

今、クラブが、そして地区が私の目には少し停滞しているように見えるんですけれども、それはある意味では、マンネリ化という風に、いうことが出来るかと思いますが、やはりそれを活性化するということが、今必要だと思うんで、具体的に何を期待したらいいのかというのは、それはクラブで考えるべきだし、それから地区の運営、これはガバナーが一番先頭を走らなきゃいけないのでありますけれども、この地区の委員会の皆さんに、いろんな発想を出していただいて、新しいことをやってくださいと。そういうことで、皆さんに地区研修セミナーでもお願いしましたし、フォーラム別でもお願いしました。というので、新しいことをやってください。去年と同じことをやってたのでは、我々は歩みを止めて停滞してしまいますよ。それでは地区は増々輝きを失いますよ。ということを訴えました。

○黒田　ありがとうございます。RYLAセミナーっていうのはこれをやると、お金がかかる、だけどお金がない。じゃあ一体どっちがどうなんだ、優先するんだと。例えば今、RYLAで言うなら学友会があります。2670でそろそろ動きそうな気配です。これ必ずお金が要るんですね。お金がないから、じゃあやんないのか、っていう話。これは2680も、非常に大きな課題としてあるわけなんですけれど、じゃあそのお金をどういうふうに使うのか、その辺りのジレンマについてをちょっと。

○滝澤　学友会っていうのは、私はやっぱり1つは、将来にむけての投資だろうと思うんですね。大室ガバナーが、盛んに今年度言っ

てらっしゃるように、学友を組織化して将来ロータリアンになる、そういう道をつけましょうよ。ということを指摘されてる。

私は、それは本当に正しいと思いますし、私、例えばそれを受け継いでインターアクト、ローターアクト、RYLA、そういう受講生を、できるだけロータリアンに育てていくということを、私達はしなければいけないわけでありますね。だからそういう意味で、学友の活動に対して資金を投ずるということは、これは将来に対する投資だから、消さなくてもいいわけです。ただ、ただやっぱり財政的に問題があるから、無尽蔵な資金があれば別ですけれども、現実には制限があるわけですから、それは合理的な範囲で制限を付けますよと。これは使っちゃ駄目だよ、という話にはなるかとは思いますが、しかし、必要な支出はちゃんとする。そういうことです。

○大室　学友会でこれから2680地区は、学友会組織を作ることにしました。学友会委員会。ここには、米山の学友も入るし、それから全ての学友が入る。その学友会何してたんや、というと、同窓会をさしてるという、これは絶対良くないと思います。やっぱり学友会は、将来の投資或いはその過程においても、やっぱりその奉仕活動、社会に対する奉仕活動をやっていかなあかんと。それだったら、我々もサポートしましょうと。だけど、自分達が集まる時のハガキ代や、自分達が集まって、同窓会をする、これを、我々がサポートするもんではないと。これは、自分達で出そうと。奉仕活動するていうことと、自分達が将来、ロータリアンになるというふうなことで、我々は投資するということなんじゃないかと思うんですけど。どうですかね。これはなかなか、学友には受け入れ難いかもしれませんが。

○大森　伊丹ロータリークラブの大森と言います。同じ理想を分かち合ってることは、素晴らしいことですね。私が、地元のクラブに出ますのは、理念に基づいた活動をしよう、ということですけど、分かってる方は、何が理念だと言うわけでありますね。実は去年のうちのクラブのパーティーで、ちょっと言うたんですけど、借り方ではなく貸し方で行こうと。そういう人間の集まりであろうと言うたんですけど。貸し方で行こうというのは、理念に入るんですかと、若い方に聞かれるんですけど。難しい理論は別として、態度としてはやっぱり、先生の先程のお話聞いてると、貸し方で行こうと。それはやっぱり、私としては理念として考えてもいいんじゃないかな、という風に思ったんですけれど、先生のお考えはいかがでしょうか？

○滝澤　これすごく難しい質問で、的外れてる答えになると思うんですけれど、理念ていうか考え方と、それから実践ていうのは、常に車の両輪のように必要なことであって、理念だけに閉じこもってては駄目だけれど、常に実践を伴わなければいかない。ただ、闇雲に実践をするだけでも駄目だと。きちんと理念を踏まえて、それを基礎においてあげるのが、先程のお話だろうと思ったんですね。職業奉仕、職業における倫理性、てことを非常に重要に、重要視された上で、その上で実践をしなさい。というお話をされたと私は思いますけど。

○大森　さっき大室先生言われましたけど、例えば学友会の経営にしても、どういう基本的な方針で学友会を運営するかということが一番大事だと思うんです。同窓会、単なる同窓会という運営では、意味がない。だから、将来に繋がるような、僕に言わしたら、貸し方で行こうという人間を作っていこうという方向で、学友会を運営するんだったら、私は全然違うと思うんだけど。単なる同窓会、集まってワーワー言うような、そういう学友会はあんまり良くないのではないかなという風

に思ってますけれども。

○滝澤　学友会の力をアップするためにも、今4つ学友会があるんだけども、4つの学友会が、それぞれバラバラに総会をやるんじゃなくて一緒にやることを考えてください、ってことを言ったんです。そうすると、「学友会が違うのに何で総会を一緒にやるんですか」という答えが返ってきたんだけど、私が言うのは、要するに学友会の今、力のバランスがちょっと違いますよ。非常に活発な学友会もあれば、必ずしもそうでない学友会もある。だけど、一緒にやって、横目で「あそこの学友会、こんなこともやってるわ」いうのが見えたら、じゃあこれもこうやろうねという話になるかもしれない。だから、いっぺんそういう機会を設けたらどうだ、てことを1つ言いたいのと、それからもう1つが、出来るだけ意識をやっぱり1つにして欲しい、という時がある。例えば、仰るように奉仕活動ていうのは、単純にね、募金箱を持って歩くのだけでは駄目だと。何か行動することによって、例えばちょっと自分達で何かものを作って、それを売ることだって、良いことではあるけれども、そういうふうに行動をするってことによって、ファングラジングをするっていうことを、何かの活動をするってことが必要なんで、それを皆で考えていくっていうことのためには、皆のいろんな分野の違う人の相手を交換することによって、新しい行動計画が出てくるんじゃないのか、ってことを言ったんですけれど、ちょっと理解してもらうのに、まだ時間がかかりそうです。

○猪野　2670地区の猪野です。先程のRI会長エレクトの話の中で、配偶者をロータリアンに入れましょうと。専業主婦でも、ロータリアンになる資格があるんです、っていうふうに仰ったような気がするんですが、それでいいんでしょうか？

○滝澤　いいです。

○猪野　そういう資格はあるんですか？

○滝澤　2013年から。国の会員増強のセミナーが東京でありましたけれども、その時の質問の中の1つに、そういう人達の職業分類というのは、ファミリービジネスって言うそうです。職業を全く持ってないけれども、それを配偶者や子どもの養育のために、仕事を諦めざるを得なかった人、それから中途で辞めた人も資格があると。仕事を諦めざるを得なかった或いは職業を持つことが出来なかったという風に職業に関連性をつけているから、私も何かその尻尾だけでもいけるかなという感じがするんですけれど。

○猪野　確かに、家事も仕事、大変な仕事ではありますよね。

○滝澤　ファミリービジネスっていう形ですよね。何か和製英語みたいだけれど、本当らしいです。

○三木　職業というのは何か、ということになりますと、この場で語れる、語り尽くせる問題じゃないと思うんですね。今の議論の中で言ってますファミリービジネスっていうのが、単語のあり方で質問がありました。じゃあ、ファミリーを持たないシングルの人どうするんだ、仕事を持たない、何もしない、そういう人達に会員資格があるわけです。今、RIの中では。ですから、その職業は何たるものや、或いは職業分類どうするんや、というものは、全く違う理念で語らないと、この議論はいつまで経っても語り尽くせません。それを、入会をしてもらうかどうかというのは、クラブの真理の中にあるという。或いは、1つの指針を示しただけで、決してそうしなさい、そうしてはいけない、ということではなくて、それはクラブの中で考えなさい。それ

は、ハウスキーピング、ハウスワイフ、ハウスハズバンド、なんとかファミリー、そんな単語の遊びではなくて、クラブの中で自分達のクラブに相応しい人に入ってもいいんだよ、ということを自分達の中で考えなさい。ということを、今RIが言っていると僕は思ってます。職業は何だ、職業分類は何だ、ということよりも、RIは全く手放しですからそれはクラブの自治権の中でお考えいただいて、私達のクラブにこういう人入って欲しい、この人は仕事してないけれど、素晴らしい人なんだよ、ということを認識すれば、入ってもらったらいいし、幾ら職業分類が適切な人であっても、今ひとつクラブに相応しくないと思えば入ってもらわなくていい。まさに、クラブの自治権の問題であると私は思っています。

○滝澤　国際ロータリーの定款の入会状況について、子どもの世話または配偶者の仕事の手伝いのために、仕事を中断した人または同じ理由のために仕事をしたことがない人。仕事をしたことがない人。

○大室　私、公式訪問で、3人から言われましたよ。いつも奥さんに車運転してきてもらってるんですって。奥さんを例会の外で待たしてて、例会済んだらまた乗せて帰ってもらうんですって。聞いたら、うちの家内を、うちの会員に入れて一緒に飯食って、ほんで帰ってなあ。それ、ガバナーどうですか？そうしてよろしいか？いや、実はこれはそうしてもいいよ、と言ってるだけで、良いか悪いかは、お宅のクラブで決めてもらわないかんのですよ。ていう答えをしましたよ。でも、3人の方がこれやっとりますから。だから入れたいと思ってる方も、いらっしゃるということで。

○大江　西宮RCの大江と申します。現実的な話で、御主人が会費を2倍払うということですか？生計を、1人で生計を持ってるんで、同じ会員だったら半分免除するというとか、そういうことは少しおかしいと思うし、何か、ちょっと、とっても違和感を感じたのですが、

○滝澤　夫婦の財産というのは、夫が外で稼いできたお金だけで形成されるのではなくて、専業主婦の奥さんの家事労働も合わさって形成されるという考え方なので、離婚するときには、財産分与は基本的には1/2ずつですから。

○例えば、夫婦で入ったら片方が半額にするとか、入会や会費を。それは、クラブの裁量で出てくることなんですか。

○三木　出来ます。

○森田　高知東ロータリーの森田と申します。全然話題が違うんですけれど、こういう場所でお聞きしたいと思ってました。この前のNHKのニュースで、ポリオあと僅かっていう、そういうロータリーのテーマにあるんで。パキスタン、もう僅かなんですけど。ユニセフがぶつかってる壁っていうのが、パキスタンのイスラム原理主義者と、対抗するのでゼロになるということは、ほぼないんじゃないか。足を引っ張るという言葉もあるんですけれど、そういうふうな反対の勢力がある国ですから、ゼロになって、3年から5年ぐらいはフォローしていかないと、全くゼロにはならないというのもあります。ユニセフはそういうことを言ってるんですけど、ロータリーの方ではどうなんでしょうか。

○大江　そういうパキスタンの原理主義の、紛争がある。それに対して、ロータリーを含めて、ポリオをゼロにしたい、その問題と現実の、パキスタンであるとかアフガニスタンとかのそういう財務、状況とが、どうクリア出来るのか、そういう質問だったと思うんです。

○森田　そうです。それをクリアしなければ、永遠にゼロにさえ、もう少しもう少しかかるし続くと思うんです。

○丸尾　解答ってことではないんですけれども、2680ガバナーノミニーの丸尾でございます。解答ではないんですけれど、まず一つは、宗教ってのは全く関係ありません。イスラム原理主義がどうのこうの、じゃあ不可能じゃないかとか、それは分かります。でも、もしポリオが撲滅出来れば、誰の名前でもいいんです。我々は、名前が出たいが為にやってるんじゃないんです。一人一人のお子さんを救う為にやってるんです。

私は、そう思っています。勿論、もの凄く紛争地域ですから、難しい問題があります。命懸けてまでは、よう行くかと言ったら、ちょっと自分の中では半々かもわかりません。でも、世界中からポリオを無くしたいという気持ちはあります。

○安平　2680の安平です。今までも話が出ておりましてですね、WHO、それからアメリカの疾病センターCDC、それからユニセフ、それからロータリー、それから各国政府、皆協力して今やってる、という中で、ロータリーもそれなりの寄付はしてますけども、何もロータリーが主体でやってるというのではなしに、WHO辺りが、ないしユニセフ、CDC辺りがもっともっと中心になってやってるという中で、やはり紛争地域において、撲滅運動、大変困難な作業を今やってるわけです。パキスタンとかその辺の所で、ワクチンの投与に行った方々が襲われて殺されたり、そんなこともあって、現実問題っていうのは、かなり難しい部分もあるんですが、紛争地域での戦争を一時中断してそれをやろうよ、というような中でやってる、ということもありますし、やはり中にはなかなか理解されなくて、寧ろ「ワクチンは悪魔の細菌を運んで行ってるんや」というような誤解でですね、襲われる場合もあるわけですけども、少しずつ浸透して撲滅の努力は出来てると思うので、ここまで来た以上止めるわけにはいけへんわけですよ。一旦止めちゃうとまた元に戻っちゃうので、とにかく、撲滅するまでやらなしょうがない。それは、数年間で出来るかどうか分からないと思いますけれども、やらざるを得ないという所まできてるし、RIの方はもうちょっとや、ということで言うてますけども、そんなに上手くいくかどうか分かりませんけれども、やらざるを得ない。だけどやれば、インドは3年間出てませんし、パキスタンにしたってタジキスタンにしたって大分減ってますから、何とか出来るんやないかと思ってますけども、大変難しいことだろうと思います。それと、やはり生ワクチンを投与すると、百万人に一人ぐらい発症するという問題もありますので、友でも取り上げましたけれども、ワクチンについては、生ワクチンやなしに不活性ワクチンを使うとかいう風なことでやっていかなあかんのかな、という風に思ってます。

○大室　だから、不活性ワクチンをね、使うということは分かってるんですけども、だけど今、生ワクチンは一人60セントで、でも、不活性ワクチンのこの注射は、2000円か3000円するんですよ。そんなのとても出来ません。だから日本は今、全部不活性ワクチンですけども。だけど、あそこでそれはできない。だから、とりあえずは生ワクチンでやらしてる、ということです。

○私はいつも言ってんだけど、皆完全的になりすぎているわけよ。職業分類、ロケーションね、「飯の種」なのよ。日本語で言えば、何で飯食ってんの。それから、奥さんを会員に入れるだとか、そんなものは我々が決めることじゃない。例えば、あなたの奥さんが、すごく何か貢献してて、「あの人に入って欲しいなあ」と思えば入ってもらえばいいし、「何か

卑しいなあ」と思えば入ってもらわなきゃいいんだしね。

○大江　違うロータリークラブの者ですけども、同じロータリーに、夫婦入るのはどうでしょう。

○いや、それは良い悪いかは、本人次第だし、周りの人次第だし、余所の人が言うことじゃないと思うね。

○大室　2680地区には、ご夫婦で入ってられるクラブはありますよ。

だから、ご夫婦で入るには問題ありませんよ。

○黒田　9時半終了になりますけども、いろいろまとめるのは大変だと思うんですけれど、まだ明日若干時間がありますし、基本的に今晩あとまだ2、3時間は話し合う時間はありますし、やや中途半端な時間になるかもしれないですけれども、今日はこれにて先の夜のお開きにということで一応締めさせていただきたいなと思っております。今日は本当に滝澤さん、大変ご苦労いただいてありがとうございました。

講　義　（2日目）



徳島大学総合科学部教授

饗場　和彦氏

プロフィール

●略 歴

1986年　早稲田大学法学部卒業、読売新聞入社
1992年　読売新聞社退職、英国に留学
1995年　ブラッドフォード大学大学院修了・M.A.in Peace Studies
1999年　大阪大学大学院修了・博士（国際公共政策）
2000年～　徳島大学総合科学部講師、助教授、教授

●専門・活動

国際政治学、安全保障論、国際協力論。ボスニア、パレスティナ、東ティモール、ルワンダ、アフガニスタン、北朝鮮など紛争地域に出向き調査をする傍ら、紛争地での国際協力の一環として選挙支援活動にも従事。

皆さん、おはようございます。さすがですね。私は大学で講義をしてますけども、朝の講義の時間に「おはようございます。」と言っても、大学では殆ど返ってきません。ここは挨拶なしでいかなあかんのですけど。今日の2時間、これからお話をしますが、普段も私、マイクを使わないで講義をするもんで、マイクとか用意してくれましたけれども、一応置いといて、マイクなしで話していくんで、もしお聞き苦しいことがありましたら、言って下さい。反響があって、私については、プログラムに略歴がありますので、だいたい背景は分かるかと思います。元々は、出身は滋賀県ですが、大学は東京の大学に行きまして、卒業して、実は大学は6年間いたんですけれども、医学部でもないのに6年間もいました。卒業後は、バイトしたり、或いはインドやネパールを半年、1年ぐらい所謂、貧乏放浪旅行をしてまして、そんな関係で結局留年してしまいましたけれども。今日の午後の講師の藤澤先生は、同じ早稲田の出身で、且つ同じメディア関係者です。森さんに言うと偶然らしいんですけれども。そんな関係で、同じ系統の今日は内容のセミナーになるわけなんですけれども。

大学を出てから、読売新聞社に就職し新聞記者をしておりました。6年間記者をして辞めたんですけれども、これはクビになったからじゃなくて、理由があって円満退職しました。一つは、留学をしたい、という理由がありました。社内留学もあったんですけれども、ちょっと上手いこと順番が来ないということもありまして、そろそろ辞めたろうということであります。もう一つは、当時新聞というのは、いろんな担当分けを経て作りまして、内勤とかの仕事場です。当時、内勤の仕事をしていて、取材をして記事を書くという仕事じゃなかったんで、それもちょっと心外ということになったという理由です。それが幾つかありまして、イギリスに行こうってなって、大阪大学のまた大学1年生で。偶々、徳島大学で採用があったので、現在は徳島大学で13、14年ぐらい仕事をしてます。

そんなことで、今日はお話をする機会をい

ただいて、「グローバル」というテーマでと言われまして。私、専門が、国際セミナーというか、国際関係或いは国際協力であったり、安全保障という問題をやってるので、そういう観点で、グローバルは非常に近いテーマですけども、いろんな入り口、内容があるので、この話をしようかと思いまして、今日はいろんなテーマはありますけれども、一つお手元にある、イラクの人質事件というのをテーマに考えてみようかと思っています。詳しいお話は、後半この問題に入っていきますから。前半はですね、お手元のA4のレジュメがあります。これに沿って話をしていきます。

まずは、このA4の小さい紙をご覧ください。グローバルというテーマなんですが、若干補足しまして、グローバル化の中の必要な資質というので、4点ここではご紹介しようというように構成しました。まずは1点目がですね、「グローバル化」ということで、よく意味は知ってますが、「グローバル」というと、まずイメージには、「国際的な海外の何か」というイメージですね。グローバル化する国際社会、というようなことですけども。これは、国際的にですね、色んな関係で国相互、或いは市民とか企業とか組織もです、お互いに相互に依存し合っていて、お互いが相手なしではなかなかやっていけないという状況が、どんどん進化していくというようなイメージです。そういう風な状況が出来ていくと、まず、グローバルというのは、確かに国際的なレベルの話ですけれども、必然的に国内の社会にも関わってきます。ですから、グローバルというとまず、海外、国際というイメージじゃなしに、実はある種盲点は、実は日本の国内においても、グローバルというのは密接に関係するという点です。ですから、国際等や国内の育成というのが一つ見落とされがちな点です。具体的には、「グローバル人材」という言い方もするんですが、大学では最近、グローバル人材の育成ということで、非常に重要視します。これ何かと言いますと、外国でも英語を駆使して、バリバリ働くグローバル人材というようなイメージがありますけれども、これはこれで確かに、先に言ったグローバルの一般的なイメージに添った人材ということです。ところが、それだけではなくて、国内の地域社会において、グローバル化する社会の中で生じてきた地域の問題、これに対応する力のある人をグローバル人材といういい方をするわけです。ですから、こういう小豆島とかです、徳島や香川の山間地などで、いろんな過疎を含めた問題がある。これは、グローバル化に密接に関連していて、そういう問題が生じている部分がありますので、そうした地域の田舎の問題に取り組む人材も、立派なグローバル人材。と、そういう見方が出来ます。ですので、ここに来られている受講生の方は、これから各地域でリーダーシップを発揮して、いろんな問題にあたっていくと。そういう人を養成する講座ですので、まさに海外に行って留学をして、多国籍企業でバリバリ働くのだけではなくて、田舎の限界集落等に行って今の問題に取り組むというのも、非常に重要な一つの使命ということになります。

同時に、ここに書いてませんけれども、グローバル化というと、英語が出来て、国際感覚があってという風なこともありますけれども、私もよく海外に行きますけれども、そこでぬけ落ちているのは、自分の出身の地域や国の文化や歴史をしっかり知っている、というのがグローバルな条件の重要な一つですね。ですから、外国語が出来ていろんな世界史を知っている、いろんな国際関係を知っているだけじゃなくて、日本の文化や歴史や伝統や、そうした良い特徴或いは過去のいろんな失敗、そんなことを含めて充分知っている、という両面というのをグローバル人材の人の条件ということですね。それに往々にして、なかなか自国の文化や歴史を知らないということがよくあるケースですけども。

そういうことで、グローバルを理解した上

で皆さんがそれぞれリーダーシップを以て地域へ貢献するというのであれば、「リーダーシップとは何か」という問題も大事になってきます。

リーダーシップもよく聞く言葉で、イメージとしては「人を引っ張る力、リーダーシップのある人」ということで、イメージはありますけれども、単に人を引っ張るということではなくて、問題を率先して改善できる人、というのが本来といいますか、リーダーシップと理解ができます。例えば、橋本市長は、また選挙をやって大変ですけども、非常に人を引っ張る力がありそうな人間というイメージがあります。いろんな人が、魅力があってついていくという感じであります。しかし、リーダーシップがある意味本当にあるかというとまた疑問が生じて、実際にどれくらい問題の解決に資しているのかという面ですね。例えば、この間も大きな地震がありましたけれど、都市部、神戸とかにて大きな地震等があって、公共交通機関が止まる時に、電車・バスでは帰れない。そういう人がたくさん駅に溢れて、タクシー待ちの長い列ができるというのがよくありますけれど、そういう時に、日本の社会でありがちな光景は、皆さん黙々とタクシーの列に並んでじっと待ってる、1時間も2時間も。そういう光景を、テレビのニュースでよく目にしますけども、それはそれで整然と落ち着いて秩序を守って、というのが日本人の特徴として良いのは良いんですが、問題の解決、改善に資しているか、というわけなんですけれど。例えば、そういう風に多くの人が並んでいる列の中で、誰かが手を挙げて、例えば、「～方面、明石方面に行く人或いは三田方面に行く人とかですね、いませんか」と。「相乗りして4人か5人で行きましょう」という風なことで、三田方面に行く人、大阪方面に行く人、明石方面に行く人とか。いうような形で、誰かが手を挙げて、その乗客を行く先毎に分けていって列を短くする、改善をするというようなことが率先して言い出せる、行動できる人というのを、リーダーシップのある人というような評価ができるわけです。ですから、外国なんかですとそういう場面で、だいたいすぐ誰かが手を挙げて「こっち行く人」という風に言ったりしますけども、恐らく日本ではあんまりそういう人がいなくて、駅員さんが来れば駅員さんなんかがしますけども、そうでない人があんまりそういう風なことをやる感じがないですね。ですから、本来はそういうことができる人がリーダーシップのある人、という風な見方がされて、そういう意味合いで、単に人をワーワー言って引っ張るというんじゃなくて、目の前の問題に対して、改善策を率先して具体化できると。そういうリーダーシップを付けるように皆さんなっていくと良い、という点があると思います。

さてそんなわけで、グローバル化の中でリーダーシップのある人というわけで、逆に言うと地域社会、田舎の、特に田舎の地域で率先して問題解決に踏み出せる人、という形で期待をしたいと思うんですけれども、そのまた前提として、幾つかの資質を持っていた方が望ましい。これは別にグローバル現代だからというわけではないんですけれど、広くどんな場合においても、社会における一人の人間として、こういう資質はやっぱり望ましいと。逆に言うと、日本の今の社会においてこういう点がやはりかなり欠けている、そういう風な印象もあって、以下述べる4つの点をですね、今日はご紹介したいということです。

この問題を理解をしていく上で、今日はイラクの日本人人質事件、ちょうど10年ぐらい前です、この事件を通して考えてみようと思うんですが。この事件は、私の大学の授業でも取り上げているテーマで、だいたい2回か3回にわたってします、時間かかるんですけども。今日は2時間しかないので、ちょっとはしょってお話をしていくんですけども、非常にいろんな多面的な問題を含んでいて、考

える上で有益なテーマなので、非常にこれは取り上げるには良いんですけども、なかなか90分ほどの時間でというと、ちょっと難しいのでありまして、なるべくいろいろと話をしていきたいと思います。

冒頭でも話したけども、ここで重視したいのは、特にグローバル人材の重要性の中ですけども、一つは、多面的な見方の重要さ、裏を返すと、非常に一面的な、表面的な見方をする傾向があると思われます。それから、論理的思考というのは、逆に言うと感情論的な思考が目立つというのも困る、というわけですね。

それから、主体的姿勢の重要さというのは、裏を返すと他人任せ、人任せというような傾向もあって、それも困るという点ですね。

最後は社会、特に、今の日本の曲がりなりにも民主的な社会、この仕組みに対して基本的な理解が、我々はあるだろうか。結構そこは危ういというようなことでは困る、ということです。

そういう4つの観点を確認する上で、これから述べるこの事件というのが非常に示唆的ということになってきます。

それで、4番目はこの経緯を書いているんですが、ちょっと読み上げていきます。

2003年の3月に、アメリカのブッシュ政権は、イラク戦争を開始した。翌年の4月に、日本政府は「イラクは今、戦争が始まって危険だから、行かないように」というように、回避勧告を出していたんですが、にもかかわらずイラクのストリートチルドレン、戦争の孤児ですね、そうした子どもらを支援するという女性、さらには劣化ウラン弾という新しい新型の兵器ですけども、これが非常に被害が大きいと。これを調査する或いは反対する、そういう目的の男性、さらに、フリーのジャーナリストの男性らが、いずれも若い日本人の3人ですけども、イラクに入って武装勢力、現地で武装勢力に捕まったという事件です。この武装勢力は、小泉政権に対して、「自衛隊はイラクから撤退せよ。さもなくば、人質を殺害する」というような脅迫をしました。当時、小泉首相は「テロリストの要求には屈しない」というように即答したわけです。この件に関して、当時日本の社会では、この3人やその家族に対して「それは自業自得である。自己責任である」として、3人に対する批判、バッシングというのがかなり起きたという状況がありました。結果的に、この3人は解放されて、無事帰国をしました。が、その半年後ぐらいに同様にイラクに入った、また20代の日本人の青年は捕まって殺害されたというような経緯があります。

この事件、ちょうど10年ぐらい前ですけども、恐らく後ろに座られてるロータリアンの方は、イメージとしてかなりあろうかと思うんですけども、20代くらいの受講生の方は、結局10年前というと、25であったとしても15くらいの高校生、中学生ですから、あんまりイメージはない、薄い感じもあるんです。ですから、大学の授業をしていて毎年感じるんですけども、日々、年齢が1年1年若くなっていくというんで、話がその分通じなくなってしまうという傾向が毎年あるんです。今回は、10年ぐらい前ですし、受講生の方も20代30代の方多いので、なんとなく認識はあろうかと思います。

それで、当時のイメージを戻すために映像が若干あるんで、これを見てもらおうと思います。

はい、これは当時のニュースの一場面でして、捕まっていたんですけども解放されて、という第一報の場面、模様です。今見た3人。2人の男性、1人の女性。こうした経緯で、現地で捕まったと。幸いにも解放はされたけれども、こういう事件です。

それで、問題はですね、この事件をどのように捉えると良いのかということなんです。経緯としましては、今書いてあるような経緯で結果論としては助かったんですけども、いろんな見方が当時生じて、主に否定的な見方



というのがかなり日本の社会で広がっていたという状況があります。後ろのロータリアンの方は、そこの所はよく多分認識されていて、そうじゃないという前の方の若い方も、今の概略だけざっと知ったとしても、ちょっと微妙だな、という感じはしようかと思います。元々イラク戦争が始まって、当然戦地ですから、いろんな危ない状況があるかと思います。且つ日本政府は、危ないから行かないようにという風な危険情報で最高度の退避勧告、行かない行かないでという風なことを出してるし。そこに、のこのこ行って、危ないからという風に言われてるのに、行ったら案の定捕まってしまったというわけです。それで当時捕まえた方は、自衛隊がイラクに来ているけれども、これを撤退させろと。当時、小泉政権はブッシュ政権と同じ立場で、イラク戦争に賛成をして且つ、イラク戦争のアメリカを助けるために、日本としてもお金だけじゃなくていろんな形の協力をしたいというんで、かなり無理をして自衛隊をイラクに送った、という状況があって、「これを止めろと。さもなくば、3人の命がない」という脅迫をしてきたというんで、これは非常に難題を突き付けられたわけです。それに対して、そんな脅迫には応じない、ということになる感じもしますし、いろいろとそれで世間がお騒がせして或いは心配をかけて、迷惑をかけたというような状況になっているわけで。行くなと言ってるのに、それを無視して行って、「それ見たことか、こんなややこしい状況になってしまって。どうするんだ」という風なニュアンスが、3人に対して向けられてきたわけですね。ですから、当時の日本の社会でも、3人に対しては批判的なバッシングがかなり生じました。それはそれとして、今、受講生の人のこの状況で判断をしたら、ちょっとこの3人困るよという感じがすると思います。特に後ろのロータリアンの方も、当時大勢はやはり、こういう事件を引き起こした3人とは困ったもんだと、特に学校なんかでは恐らく子どもに対して、生徒に対して、こんなことをしたらいかんよと。行くなと言ったのに行ったんだからと。行くな、危ない所に行くなよ。という風なことが、非常にこれもある種の反省材料として、生徒に伝えたような感じ、或いはそういう家もたくさんあったように思います。

そういうような、まず大きな否定的な見方があるというところから、まず考え付く問題のスタート地点になります。

レジュメの5のところを見てもらいますと、当時3人に対して非常に否定的な見方が大半であったというのは何故かというと、一つは、行くなというような政府の意向が当時あったんです。当然、戦争状態だからそこに行ったら危ないからそこに行くな、という風な政府の意向があるのに、それに反した形を3人はしていたと。それは、退避勧告、行っちゃいけないという風な形のルールに反して、この3人はイラクに行っている。それはけしからんでしょ。という理由が一つで。更には、その結果、政府はこの事件の対応に掛かりっきりになりますし、或いは周囲もですね、心配や迷惑、いろんな形で問題が生じて、そういうことを招いたから、3人はけしからんよ、という理由です。更には、この武装勢力の要求が、3人の命を助けたければ、自衛隊の撤退、自衛隊の派遣を止めろというのですから、これは、3人という個人の為に、国家の大きな政策である自衛隊の派遣を変えさせられる。僅

か３人の為に、国家の政策を根底から変える、ような事態になる。これはけしからんじゃないかということです。僅か３人です。国家の大政策、これが根底から逆になってしまう、そりゃあいかんでしょう。

結局、そんなわけで逆に自衛隊撤退をしなかったら、皆命がないというんですけれども、それは、そういう危ない状況に行くなと言っているのに、敢えて行ったんだから、それは自業自得だからしょうがないだろ、というような形の否定的な見方。

それから、オは、イラクで戦争してるっていうのは知っていて、いろんな映像が当時のニュースでは流れていて、何でわざわざ危険な場所に行くのか、意味が分からん。というわけです。何でそんなことをするんか、馬鹿じゃねーかというような、だから否定的な見方というのが。それから、この３人というのは、謝罪もろくにしないし非常に横柄な態度があるんじゃないか、単に目立ちたいだけじゃないか、とそういうような面から、非常に批判的な感じのイメージがあったと。

それから、行きは安全対策が不十分、当時３人が捕まった状況からすると、非常に軽率に現地でタクシーを拾って、バグダッドに行こうとした、という風な状況があって、これはあまりにちょっと、いろんな安全の知識というか対応が不備で、そこの軽率さは否めないという風なことで３人に対する批判、という面です。

ざっと、こういう風な点があって、この事件について、この３人に対しては非常に批判的な空気が強かったということになります。そういうことも最もです。ですから皆さん、特に若い人ですね、この事件の内容を聞いて、今のこの論点を聞いたら、そりゃあ確かにその通りで、やっぱ３人のことは、なかなか賛同できないという風に思いますよ。授業では、こんな形で、先ずはこの３人のことに対して非常に否定的な面がある、というのはこういう風にしてまず理解をしてもらいます。大概の人は、「そりゃそうだ」という風なことで、先ずはそういう見方を持つんですけれど、果たしてそれは妥当なのかというのが、これからの話です。

①


イラク邦人人質 未放映ビデオ分析

脅迫場面の映像に「言って、言って」

犯行グループ 日本語話せる人物？

それを考えて行く上で、当時の状況を知る為に幾つか新聞の資料を配布しました。ちょっと印刷の不鮮明さもあって、若干分かりにくくてすみませんが、先ずは、とりあえず数字、〇で数字を付けたので①の所から見てもらうと。３枚あって、①の脅迫の場面の映像に言って言ってという風な記事があります。これは当時、拘束した武装勢力が映像に撮って、それで日本の政府に要求しているという中で、だが不自然なシーンがある。専門家が解析をしたら、何か「日本語で言って言って」というふうに聞こえる部分もあって、何かこれおかしいじゃないか、という状況に見たんです。要するに、この３人と捕まえた武装勢力は、グルじゃないか。芝居を打って、日本政府に自衛隊を撤退させた。つまり、この３人は元々イラク戦争に反対をしていて、当然自衛隊派遣にも反対であると。何とか自衛隊をイラクから撤退させたいと。そのために、芝居を組んで地元の武装勢力に捕まって、脅迫という形で自衛隊を撤退させようと、そんな目論見じゃないかという報道がありました。だから結論として、そういうことではなくて、していて、というには変な言い方があると思うんですけれども、これは、別に特段問題ないようなところが、本当だったようです。ですから、そういう風に最初グルじゃないかという風なことも３人の印象を悪くした一因な

んですね。これは、メディアの報道によるんですけれども、これは急遽憶測でビデオを報道していた為ですね。ですから、その憶測にかなり多くの人が引っ張られたというテーマです。裏面を見ますと、その同じ紙です。裏面に、⑤という資料があります。この⑤の資

⑤



●OH! CYBER PAPARAZZI●

【サイバッチ!】釈放報道で自作自演疑惑深まる　00666号[04/11/04]07:00

◆配信数：79081◆無許可転載歓迎。でも、上記URLは入れてね
HP(メルマガの登録・解除)http://www.cybazzi.com
表紙置き場 http://freeita.tripod.com/
タレコミ大歓迎。採用社には【プチバッチ!】の無料購読１週間～１年分

●24時間以内に釈放　自作自演疑惑深まる!!
イラクの３バカ・プロ市民は、日本赤軍とグル？

３バカ拉致グループの中に日本赤軍のメンバーが含まれているという情報が公安当局から流れ注目を集めるなか、アルジャジーラが、「24時間以内に３バカが釈放される」というニュースを報じた。
やはり自作自演だったのか？　小泉総理が毅然態度で「自衛隊撤退はなし」と断言し、３バカに対する非難が日本中に渦巻いたため、急遽、シナリオが変更されたのだろうか？
３バカのテレビ出演には、正体不明のプロ市民系"マネージャー"が取り仕切り、情報操作をおこなっている、という。
取材に当たっている蛆虫18号もこう語る。
「アルジャジーラに送られたきた映像には、一部で音声がカットされていました。あるテレビ局が、３人の口元を読唇術で解読したところ、日本語を話しているらしい、というのですね。ああ、なるほど、と思いました」。
状況から考えて、３バカが自作自演の誘拐騒動をでっちあげた可能性は極めて高い。もし、そうでないにしても、身代金はいったい誰がかかったのか？　国税からの出費であるであるすれば、歌舞伎町のぼったくりバーでハメられたオヤジに、国が全額補填してやるのと同じでないか？　雪山で遭難した場合、捜索費用は本人持ち。身代資金どころか、今回の騒動でかかった費用について、国は全額、バカとバカ一家に請求すべきである。
と、いうところで、詳細は【プチバッチ!】で……。
全国の善国的な読者の皆さんから続々と怒りの声が届き続けている。以下では、そのまま、ご紹介させていただきます。

料は、ネット上でこの３人に対して、バッシングが吹き荒れた、そのごくごく一部の文言ですけれども、ネット上では、他には「三馬鹿」と称されていて、酷い非難を浴びていたわけです。根も葉もない、いろんなことがよく言われていて、今もそうです、ネットとかでは非常に根拠のあるなし関係なくて、ある特定の人物や特定の企業を批判する、そういう傾向が甚だしいです。ですから、学生もよくネットの影響を受けるんですけれども、それはそれで意見を自制して、ネット上であるとして接しないといけませんし、ネット上というのは、他に丸きり嘘ということではないけれども。そんなわけで、ネット上でも、無茶苦茶なことで３人が批判をされています。自作自演とかがあったんですけれども、結局はそうじゃなかった。というわけです。

その横の⑥を見てもらいますと、「問われる自己責任」という風に大きな見出しがあります。これがメインの所謂、自己責任の部分でして、要は先刻も言いましたように、退避勧告を無視して行ったんだから、そんな連中まで面倒みきれんと。後は自己責任でやれと。

⑥



問われる「自己責任」

無視された退避勧告
外務省 個人の行動把握 困難

順調交渉 一転暗雲
情報漏れで仲介パイプ切れる

「危険」自ら招く

本紙記者
サマワ退

行くなと言ったのに勝手に行ったんだからと、面倒見きれんと、自己責任だとそういう自己責任ですよ。線を引いた部分をちょっと読んでいきますと、「国民に自己責任を求めることだと、いうような意見が政府や与野党に改めて強まっている。」という風に、最初のリードの部分で書いてあります。上の段で線を引いた部分もそうですけども、今回解放された３人に新たなバッシングがされている。退避勧告を無視して入ったんで、こうした行動を疑問視する声が少なくないということを書いています。自己責任論という形で言われていた一つの記事ですが。今の資料です、逆にまた裏返してもらって、②の所を見てもらいますと、その産経新聞の一面のコラムです。一面のコラム各新聞ありますけれども、産経新聞は縦の形で一面コラムを書いてますけども、当時のこの事件に関してこのコラムでは、このように書いてあります。特に、真ん中の段ですね、線を引いてある。二つ目は、この人質の多くは、反戦活動家と言われている人で、日頃は国家や政府を否定し批判している。甲は反戦、丁は反戦ていう立場ですから。イラ

ク戦争に賛成する小泉政権はおかしいだろうと。或いはそれに協力して自衛隊をイラクに出すというのもおかしいだろうと。というふうに、政府を批判してる。そういう反戦活動家の３人で、普段は政府を否定し批判しているんだけれども、その当人がいざ困った時は、「国家が自分を助けろ」というのは少々虫が良すぎないかということです。つまりは、普段から政府を批判してて、捕まって、助けてという時は頼ると、それはちょっと虫が良すぎるんじゃないかということを言ってるわけです。それは、そういう感じもしますか。

普段僕らも、家庭で例えば、どら息子がいて、もう父ちゃんや母ちゃんの言うことを普段何も聞かない。普段はそういう風に反抗して、親の言うことを聞かんのに、ちょっと欲しいゲームがあってお小遣い足らんから言うて、母ちゃんちょっと頼むわ～と言って泣きつく。で、親としては、「あんた普段から何も親の言うこと聞かんと、ほんで自分が困った時は、ね～ね～母ちゃ～んって言うのかよ。そらアンタ、虫が良すぎるわ」というようなことが、よくある話で。そう考えると、もっともな、これは発想かなと。普段からちゃんと従順で、言うことを聞いてるのであれば、困った時は何とかしてあげようかという気持ちになるけれども、普段は、何やそんな反抗的なことをして、何か困った時だけ手のひらを返しているのは、悪いけどそれはちょっとね…」というのがよく分かる話ということなんです。こういう点からも、この３人を批判する一つの根拠になっている面です。つまり恐らく３人は、普段は反戦活動家ということをしていて、小泉政権とか政府の政策に反対・批判をしている。だけども今回捕まってしまったら、もう助けてくれという状況になってしまうという、それは虫が良すぎるでしょ。という風に書いてあるけれども。それはそうだけど、うーん、でもね。という感覚のある人いますよ。だけども、書いてあるところで、やっぱそりゃそうなんだけども、何かちょっとね。という感じを持つ人、ちょっと手を挙げて下さい。

おかしな感じがしますね。同じような話しをしてもですね、悩んで、大体同じようなリアクションです。何か、何かなあ。という風に言って挙げる人がたまにいますけどね。

では、そういう状況が根底にありまして、このように、当時この事件に関しては日本社会の体制は、批判的な傾向でした。それを今、若い人が、追体験をしてまた分かると、私もそう思う、という感じを結構共通してます。それに対して外国から、その日本の状況を見たら、どういうふうな反応があったかというのが、また別の資料の⑨の資料でピンで示されていますが、このような形で当時日本政府がとった対応に対して、海外から批判がある。つまり、自国民の保護は責務じゃないか、と書いてますが、最初のリードの文章から読んでいきますと、イラクの日本人人質被害者に対して、日本では政府の勧告に従わず、危険地域に敢えて足を踏み入れた当人達が悪いという自己責任論が台頭した。ですが、アメリカのパウエル国務長官は、国務長官というは日本でいう外務大臣ですね。パウエルさんは、リスクを覚悟しなければ、世界は前には進まない。当時、日本人被害者の活動を賞賛した。海外の紛争地帯で、民間人が多くなったことに責任を持ち、海外での異国民保護が政府の当然の責任という認識が定着している欧米各国では、日本政府をいぶかる声が多い。つまり、日本の政府或いは日本の世論では、３人は自己責任だというので、否定してるんですけれども、海外では素晴らしいと賞賛する評価をしてる。この 180 度違う評価の違いは、何なんでしょう？

本文を読んでいきますと、他の国からもイラクに行こうとしてる人はたくさんいて、同様に捕まったりした人が或いは殺害された人がいるわけです。例えば、イタリアのケースもそこで紹介しますけれども、このイタリア人は金銭目的でイラクに行き、アメリカ企業

で警備員として働いていて捕まったという事件があったんですけれど、殺害されたんです。しかし、イタリアでは被害者らへの温かい報道ぶりが目立つ。今回の日本人３人は、金儲けで行ったんじゃなくて、ストリートチルドレンを助けたいと、或いは劣化ウラン弾の問題を告発すると、そういう目的で行ったわけです。イタリア人は金儲けで行ったわけなんですよ。何故かイタリア人の方が、非常に温かい報道をされている。それと下の方ですね、真ん中は、同じパウエル長官、２段目、危険を冒したお前が悪いということはない。無事に救出をする義務があるんだと。自己責任を否定しようと。その本文、下の段を読んでいきますと、また線を引いた所で、韓国でもイラクに行った人がいて、いろんな被害者がいたんですけども、例えば３人が捕まった件では、当時韓国内では３人を非難する声は殆どない。韓国の外交通商報告書は、「無事に帰国した人への批判が出ている日本の雰囲気に、違和感を覚える」という風なことが書いてます。

というわけで、この事件は、世界的には普通、もっと温かい報道或いは見方をするわけですが、日本だけがかなり特異に否定的な見方の状況になっているというわけです。

そうすると、何処が、何がこういう状況になってしまった要因なんでしょうか、海外の場合は、こうした状況になんないですね。同じようにイラクで捕まったとしても。そこを、これから幾つかの点を見ていくことにします。

これからは、何故日本においてはこのような人質事件に対して、諸外国とは違って否定的な見方になっていったのか、その根拠についてこれから示していきます。これが、いろいろと非常にそれぞれ示唆的な観点を含んでいます。

まずは７番、⑦の資料を見てみますと、⑦これは、法政大の杉田先生、杉田先生は非常に著名な政治学者で、いろいろテレビなんかも出たりいろいろと書いたりもしてますけども、学会でも非常に定評のある日本を代表する政治学者です。この杉田先生が、この事件に関して、こういう分析を書いています。ちょっと前段だけ、線を引いている所を読んでいきますね。

「民主政治は、世論（せろん）、世論（よろん）に基づいて行われる。」ちょっと飛ばしまして。ですから、世論が世論が、非常に政府に対して影響が大きいですね。良かれ悪しかれ。２段落目、「例えば今回のイラク人質事件の最中に、政府与党や一部のメディアは、自民党・小泉政権や一部のメディアですね。は、所謂、自己責任論を唱えて人質本人や家族への批判を繰り広げた。普通の政府なら、あの時点では救出に専念するということしか言わない。それなのに、わざわざ早めに人質側を批判したのは、もし人質達が危害を加えられた場合、政府批判が爆発するかもしれないと思って、あらかじめ世論を誘導しようとしたと考える他はない。こういうやり方は、この国の評判を随分落としたのではなかろうかという風に書いてますが、この書いている文書にピンときますでしょうか。ちょっと後半のレジュメを配ります。今言ったこと書いてあります。

その紙のまず、Ａと書いてある部分の話です。目標というのは、Ａという観点なんです。つまり、世界的に特異な日本社会のバッシングという状況が生じたその一因は、政府の世論誘導という部分があるんではないのかというのが、この杉田先生の指摘でもあります。つまり、今の文章で分かれば良いんですが、若干ちょっと、分かりにくいかもしれないんですけども、当時の状況では、人質を捕まえた武装勢力が、この３人の命を助けたければ政府が自衛隊を撤退させろという要求をしてます。政府としてはある種、二者択一の答え、選択しかないわけです。１つは、自衛隊を撤退させるという選択ですけども、これはさっきちょっと言いましたように、当時小泉政権は、ブッシュ政権と非常に親密な関係で、イラク戦争も即賛成をして、単に湾岸戦争でお金を払っただけでは、やっぱ不十分という反

⑦



朝日(夕刊)

文化

小泉訪朝から再訪朝まで

「世論対策」政治の行方

「操作」への違和感広がる今、正攻法を

杉田 敦

法政大教授（政治理論）

59年生まれ。東京大法学部卒。新潟大助教授などを経て現職。著書に『デモクラシーの論じ方』(筑摩書房)、『権力』(岩波書店)、訳書にダール著『アメリカ憲法は民主的か』(同)など。

省があるから、何らかの形で人事的な貢献をしていきたい。その為には、自衛隊を送る必要があると。しかし、憲法９条があるのでなかなか出来ない。しかし、そこのところは小泉さんの力です。本来なら、絶対に通用しない答弁を国会でやって、無理くりイラク特措法を通します。皆さんロータリーの方はご記憶があると思うんですけれども、例えばこんなことを言って、戦闘地域には自衛隊は行かない。非戦闘地域には自衛隊は行く。戦闘地域、非戦闘地域を分けた形の概念を示して、自衛隊は非戦闘地域に行くから、憲法９条には反しないという、ある種詭弁というかロジックですね。じゃあ、何処が戦闘地域で、何処が非戦闘地域ですか。イラク全土がそんなもの戦闘状態じゃないんですかという風な質問があった時に、小泉さんはとうとう、そんなことを聞かれても、私に分かるわけがないという風になった。何処が戦闘地域か、非戦闘地域か、私小泉首相に分かる筈がないという風なことを、そりゃ分かんないですよ。それは嘘じゃないんですけども、分からんという風なことを言える立場じゃないんですけども。自衛隊が行っている所が非戦闘地域だ、という通りだとします。何か、理屈や何もないんですよ、自衛隊が行っている所が非戦闘地域なんだ、というような説明をしたりです。もうかなり普通では通用しない答弁をして、しかし小泉政権の人気もあって、イラク特措法が通ってしまったと。それくらい、かなり苦労をして、自衛隊をイラクに出した。これは、戦闘行為は確かに米軍と一緒に前線で戦闘行為はしないんですけども、いずれにしても、イラクという現地に日本の軍隊が行ってるというのは、アメリカにとってはかなりの評価できる政策なんです。ですからアメリカは、日米関係をそこで非常に重視してくれる、日米関係が良くなれば、それは日本のメリットである。そういう発想があるから、そういう政策を取ってるわけです。今の出てる会見をです、その背景があって、結局そんな風にして自衛隊を出すのも大変な苦労だから、憲法自体を変えて必要があれば、自衛隊を海外に出せる、海外に自衛隊を出すことで、日米関係を強化していきたいと、そういう政策です。それがあるので、そうそう簡単にイラクの自衛隊を、小泉さん撤退させたくない。しかし撤退させんかったら、３人の命がないと言うんですね。日本人が３人殺される。それを見殺しにするという結果になります。自衛隊を撤退させなかったら。そうすると日本政府は、日本人を見捨てるのかと、見殺しにするのかという風に、当然反発が日本政府に来ますよね。日本人を見殺しにする政府だと。それも困る。そんな批判が来たら、政府が持たない。そうすると、どうしたいか。３人を助けたら良いんだけど、これはもう自衛隊を撤退させるしかない。でも、それは出来ない。自衛隊を撤退出来ないなら、３人の命がなくなる。そしたら日本政府は当然、批判を受け

る。それも避けたい。何とか良いやり方は…と考えると、自衛隊は撤退させたくない、しかし結果、3人の命は殺されることになろう。しかし、3人が殺されるのは誰が悪いのでしょう。日本政府が悪いわけではありません。つまり、日本政府は行くなという風に言ってるのに、勝手に無視して本人は行ったんです。無視して行った3人が、自業自得で捕まって命を落とした。自業自得でしょ、本人が悪いんでしょと。イコール日本政府は悪くありません。という論理ですね。3人が殺されたら、殺されたのは誰が悪いのかというと、日本政府が自衛隊を撤退させなかったから、武装勢力は殺した、という風になるんですけども、そうじゃなくて、いやいや3人が殺されたのは、3人が悪いんですと、自分達が。自分達が無視をして勝手なことをして、自業自得で自分で命を落としただけなんですと。日本政府が悪いわけではありません。となると、日本政府が日本人を見捨てたと、国民を見捨てたという風に批判されなくなります。そうなると、日本政府は国民を見殺しにしたという批判を受けませんし、自衛隊も撤退をさせないで済む。非常に一挙両得の状況ができる。その為に日本政府は、官房長官とか閣僚とかいろんな人が、ことある毎に記者会見で「いや〜、今回の事件は困りましたと。当初から日本政府は、退避勧告を出しているんだけども、それを無視して行かれたら、それはちょっとね」という風なことを、盛んに最初から日本政府が敢えてそうした形の見方を、提示していたというのが、この杉田さんの指摘です。それは確かにその通りで、本来は最初事件が発覚した段階で、日本政府は、普通は救出に全力を挙げるということしか言わないのが普通のはずです。ところが、同時に全力を挙げるんだけど、しかし困りますよね、行くなと言ってるのに戦地に行ったら捕まるのは当たり前じゃないですか。まあ困るよね〜こういうことは。というのをチラッと言うんですよ。それは確かに、その通りだと。いう風な面もあるんで、一部メディアが「そりゃそうだ」という風なことで、更に大きくして伝えるという形で、自己責任という見方が、非常に増幅して蔓延していくという一因なわけです。

例えば、その段階で、小泉さんは「テロリストの要求には屈しない」という風に即答してですね、テロリストの要求には屈しないということは、要するに要求には応じないというわけは、自衛隊を撤退させないイコール3人の命は助けないという風な選択をしているのと等しいんですけども、普通は、そこまで明確な返答はしないと思われます。というのも、よくたまに脅迫犯が家族を人質に取って家に立てこもるという事件があったりしますけども、そういう時に犯人が家族を人質に取って、警察に対して「逃走用の車と1千万をよこせ」という風な要求をしてる事件があったりしますけども、そういう時に警察はどう対応するのかというと、即座に「そんなテメェらに、そうした悪い奴らの要求に応じるか」と言って、即座に否定することはまずないです。たいがいが、のらりくらりと話しながら曖昧な返事をして、時間を稼いで隙を見て突っ込み、救出するというようなことをするわけで、即座に犯人の要求には応じないはずです、そういう風な対応は、普通は警察も事件なんかにはしないわけなんです。小泉さんは即座に、「テロリストの要求には屈しない」というふうな返答をしたりします。

そういうことと同時に、自己責任論でやってもらわないと困る、という風なことを言ってるなかで、「そうだよね」と。3人は、勝手にそんな風なことをやってるんだから、そりゃ3人が悪いんでしょ。或いは、何かグルになってるんじゃない。みたいなことも含めて批判的な空気が増幅していって、結局は3人は解放されましたけれども、仮に3人が殺害をされたとしても、恐らく悪いのは3人であって、政府が3人を見捨てたからけしからん政府だという批判は、当時あまり起きなかっただろうと思われます。実は政府という

のは、世論を誘導して自分達に都合の良い状況を作っていこうとするというわけです。これは根本的には、権力に対して、僕らがどういう見方をすべきか、という非常に重要な所に繋がってきます。

レジュメの6番のAの所で書いていますが、政府と権力を疑うという風な姿勢を、常に持ってないとうかうかしてると、大変な目に我々小市民は被ってしまうということがあります。これも本来、大学では時間を掛けて、こういう権力論ていう話を進めるのですけども、今日はなかなかそこまで話はできにくいですけども。リアヴァイヤサンに書いてますけども、これは要するに国家や政府が持ってる権力というのは、怪獣、伝説上の猛獣リヴァイヤアサンみたいなもんだというのは、昔ホッブズが、昔の思想家が言ったんであります。それくらい、国家とか政府が持っている権力というのは、もの凄い力というわけです。これはしかし、この権力がないと社会を法治できないので、ある種必要枠として、大変な権力を持ってるというわけであります。この権力は、政治をする上では必要なんですが、しかし、もの凄い権力なので、乱用されたらもの凄い弊害が大きいというわけです。国家権力は、いろんな例がありますけども、普段は僕らは実感はしません。何もなければ実感はしませんけども、例えば最たるものは、冤罪事件等ですね。冤罪事件で、一切悪いことをしてないというふうな犯人がいて、最高裁で死刑が確定すれば国家によって、命が奪われるというわけで、簡単に国家権力が、我々のいろいろ大事なものを奪う、壊すということができてしまう、そういう仕組みになってるわけなんですね。普段は、普通の生活をしたらそんな危険はないから実感はしないんですけども、その根底にはそういういうのがあるというのを認識する必要があるのですが、そこが実は結構我々は弱いという面があります。それは次のまた会見という所で、少し言及をしたいと思いますが。

続いては、1番大きい要点であるBは、メディアに対する過剰な信頼性、つまり新聞とかテレビで言ってることを鵜呑みにする傾向というのが、結構あるんじゃないんですかという面です。私も以前新聞社にいましたんで、それはある意味分かるところがありまして、日本のメディアは、中国やロシアと違って、まだマシというか、一定度機能している状況です。ですから、それはそれでありがたいんですけども、かといって100%信頼するというのは良くなくて、メディア情報はこうなんだということの対応する仕方、つまり、メディアリテラシーを僕らが持ってないと、非常に悪い影響を受けてしまうという面があります。そこまでなかなかないので、メディアでこう言っている、例えばさっきの、問われる自己責任という風に、大きな活字で書いてあるメディアを見たら、これは、無視された退避勧告で自己責任が問われていて、危険は自ら招いたという風なことを書いてあったら、そりゃまあそうです。新聞にそう書いてあるしという風に、簡単に、新聞にそう書いてあるからという形で、それに引っ張られるという状況があります。例えば、こういう話もよく大学授業でもよくするんですが、日本のメディアは、故意に嘘をつくということはまずありません。意図的に、白のものを黒ということは滅多にないんですが、かといって、メディアが100%真実を伝えてるかというと、そうでもない。つまり、昨日もロータリアンの方でも少し話をしたんですけども、メディアが伝えるのは、例えばこのボトルがあって、皆さん方から見たらこのボトルはこうです。という風な形で、情報が皆さんに伝わると。これも嘘じゃないです。ところが、このボトルはこうなんですというのは、メディアでは伝えないということもあります。更には、開けてみて何が入っているか、どういう味がするのかということも伝えない。ボトルはこうです、という情報は伝わる。これは嘘ではありません。こうでもある、こうでもあるし、

開けたらこうでもある。いうことは、必ずしも伝わらない。したがって、嘘ではないけれども、全体像を把握する真実を伝えてるかというと、そうではない。というのがメディアの特徴です。そこに、よくある大きなニュースで、例えば中国で半日デモ数万人というような大きなニュースがあったとします。数万人も中国で半日デモ、これはえらい数字でたくさんの人が日本に対して怒っているなというイメージを持ちます。多分それは嘘じゃないですね。ところがですね、数万人を13万人というふうに見たとすれば、13万人の半日デモ、これは大変なデモで中国人が殆どえらい敵対しとるなと、日本も対抗してね、我々もデモをするなり何か対応せないかんと、みたいな感情を持っちゃいますけども、13億の人口のうちの13万人、という割合を単純に計算しますと、1万人に1人という計算ですね。9999人中国人はデマをしてはいない、というのはもう真実であると。だけども新聞で、残り9999人はデモをしないで、平穏に日常生活を送っていた、なんてのはニュースになりません。だから騒ぎません。従って、13万人がデモをしたというのは、これはニュースだという風に伝わってしまうので、僕らが持つイメージは、「ペットボトルはこうなんです」というイメージしか出来ない。「こうでもある、或いは中身はこうでもある。」というのは、今のメディアと接していると分かりません。だけども、メディアはそういうもんなんだというメディアリテラシーを僕らが持ってると、「そら13万人が、デモをしたかもしれんけども、大多数の中国人はもっと温厚で、そんな極端な反日ってわけでもないんだ」というのもある、ということが見えてきます。だけども、なかなかそこまでメディアに対し持つことが難しいので、単純にそのニュースが伝える表面の一面だけ見て、対応してしまうイメージを持ってしまうという傾向があるんです。ですからそうした形で、メディアの方に接するという、そこが一つ重要なポイントになります。例えばネット上なんかでは、さっきも言いましたようにも、デタラメな、まるで故意の、悪意を持った嘘もありますので、それも論外という話であります。

次、Cですけども、これはお上意識というものですけども、さっきのAと裏腹の関係なんですが、我々日本人の意識としては往々にして、政府や役所に任せる、頼る、或いは政府や役所に従順な傾向があったりします。ですから今回もですね、日本政府という非常にある種えらい存在に対して、えらい政府が、「行ってはいけないと言うのに、それを背いた」と言いますし、或いは「その結果、政府に迷惑を掛けている」という風なことで、「それはいかんだろ」という風な発想を持ってしまうんですけども、そういうようなお上意識という形で、僕らの意識があると何でもかんでも頼ってしまう、逆に我々の市民の主体性というものが希薄になる。

最近言われている世間の対応はですね、政府や役所に頼り任せるというのであって、自助が最初であって、共助があって、役所の支援が最後だという風な、大学でも言われてますけども、何でもかんでも役所任せじゃなくて、まずは自分達でやっていく或いは自分達の仲間でやっていく、そういう風な主体性もあり得るんですけども、そうではなくて、政府に頼る、政府の言うことを聞くという。そんな姿勢がある。政府の言うことに背いてイラクに行っちゃいかん。ましてや、政府に迷惑を掛けるとはけしからん、みたいな状況になっていってしまうんですね。それから、民主主義に、その中で過去の出来事で政府が批判されるが。さっき話を少ししたんですけども、そういうお上意識がありつつ、我々はよく今の政治家は全然えらくない。特に民主党政権以来です、この体たらくは何かというんで、自民党政権にもするし、民主党に変わって、政治家は全然無能だという風なことをよく耳にしましたけども、確かにそういう面はあって、無能な政治家は少なくはないと思い

ますが、そう言っている我々の立場はどうなのかといいますと、逆に政治家からの立場からすると、決してこんなことは言いませんけれども、「あんたらは、私達政治家が無能だというけども、この無能な私達を選んだのは誰ですか」と言うわけですね。ですから、無能な政治家を選んだのも、本来は有権者である我々で、従って民主主義においては、良くも悪くも全部行き着く元は我々なんですね。ですから結局、政治家が無能だというのは、結局上に向かって唾を吐いているような状況であって、我々がそんな政治家を選んでいる、或いはそんな政治家しか育てられないという状況があります。ですから、よく言う言葉で「その程度の国民にはこの程度の政治家」という風なことが、雑誌に言える話なんです。だから逆に、人任せでいると逆に人を批判するということにもなりますね。だからそうじゃなくて、自分達で主体性を持って考えていくということが、大事なわけです。

今日ちょっと時間ないんで、資料を用意したんですけども、本来は、実は面白い資料がありまして、時間があれば勉強します。如何に、我々が選挙等でちゃんとした選択をしてないかということが、よく分かる、如実な資料なんで、それは後で時間があったらまたご紹介しますけども。

それから、D、民主主義における政府と市民に対する無理解。ここも、非常に重要なポイントとしてあります。先程資料の中で読んでもらいました、普段反政府的な活動や批判をしているのに、自分達が困ったらその政府に対して助けてくれと言うのは、虫が良すぎるんじゃないのという見方がありました。そりゃそうだねという風に、納得しうる面もあるんですが、ここが一つ重要な意味を持っています。この見方は、この問題は市民、国民でもいいんですが、この関係が理解しているかどうかというのが、大きな前提になります。今のこの発想ですね、つまり、普段反政府的なことをしてるのに、困った時だけ政府に頼るのは、虫が良すぎる。裏を返すと、困った時に助けて欲しければ、普段から政府に従順でいなさい。ということです、裏を返したら。普段から政府に対して従順な人は、政府国家は助けます。普段から反政府、政府に刃向かう人は助けません。

こういう仕組みの社会はどうなんでしょう。我々は普段、やっぱり与党政府のいろんなサービスを受けたり、いろんな関わりがありますから、であれば、普段から政府の言うことに対して賛成して同意して、従順に従うことを常に行わなきゃいけないのでしょうか。外国に行って、よくトラブルに巻き込まれます。先程、僕が大学の時に半年、1年程インド・ネパールを貧乏放浪旅行しましたけども、インドで荷物を丸っきり盗られました。財布とか航空券は、お腹に巻いてたのであったんですけれども、丸っきりある状態で荷物全部盗られて、さて困ったなあという状況があったんですけれども、そういう状況で多くの日本人旅行者は、まずは現地の警察に届けたり、それからお金がなかったり困っていたら、日本大使館に行く気分で、事情を説明したりいろんな手続きをしてもらったり、場合によってはお金を工面してもらうということがあります。これは、日本人が困ってるんだから、当然日本大使館として、政府の一機関として、日本人の為にサービスを提供してくれます。それは、日本人の国民に対する政府のサービスとして、当然の仕事の一環です。それが普段から僕が、安倍政権批判、小泉政権批判をずっと授業でしてるとしても、かといって、外国に行って捕まって、「あんた大学で、えらい安倍政権批判してる人だろ。そんな人助けません」という風に、日本大使館が言うわけなんですね。ですから、そんな状況から考えていきますと、この産経新聞が書いてあるような文句で考えたら、つまり独裁社会を前提にしている発想ですよ。独裁者の言うことは全て聞きなさい、そしたら面倒を見てあげる。独裁者の言うことに刃向かったら、そんな奴

は無視する、処刑する、排除するということですから、そんな独裁社会が良いという風に考えてるんですかというような発想ですよね。ですから、その一見虫が良すぎるというのも分かるんですけども、例えば我々個人の、市民同士の関係であれば、例えば友人同士の学生同士で普段から悪口ばっかり言う学生がいて、その学生が試験で困ったからと言って、ちょっとノートを貸してくれと言っていると。普段からあんた俺の陰口ばっか、悪口言ってるやんと。それに、試験で困ったからノート貸してくれと、そりゃあおかしいわ、ということがあります。或いは親子関係で、お母さんが、さっきも言いましたように、普段からあんた言うことを聞かんのに、何でこんな時だけ手のひら返すのそりゃいかんわ、いうのは虫が良すぎる、それはあります。ところが、政府と国民の関係でそういうことは成り立つのかというところなんですね。そこは、普段から反政府であろうが何だろうが、政府は、市民国民を助けるのが義務なわけです。もう前提条件関係なく。その為に僕らは、政府や国家を持っているわけです。だから、要はこの関係が、市民は政府や国家の為にある存在ですよというのであれば、それは我々は政府の為の存在ですから、政府の言うことを聞かないといけない。或いは個人が、政府の政策を変えるということはありません。3人の命を助けるために、国家の政策を変えるというのはありです。それは、3人の国民というのは国家のためにあるものなのだから、そんなことは出来ませんと。お前らのために、何で政府が政策を変える必要があるんだと。お前らは国家のためにある存在だという関係であれば、或いはこの関係であれば、政府が戦争をしますとなれば、お前ら国民は政府のために存在をするもんだから、政府が戦争をするんだから、お前らは戦争に行きなさいという関係になってきます。ですから、戦時中や戦前の関係は、まさに天皇を中心にして、我々は臣民ですから、政府や天皇のために存在するんですから、政府や天皇が戦争をするのであれば、その為に我々は戦場に行って死んでいったという関係です。戦後は、そういう関係ではない筈です。つまり、政府や国家というのは市民や国民のためにあるものですよというのが、今の本来の関係である筈です。ですから、市民や国民、我々が困った状況におかれたら、前提条件関係なく全力でこの問題にあたんなさいと。さっきの何か盗難に遭って、困るという状況だったら、大使館は一生懸命面倒を見てくれます。それは当然です。同じようにイラクに行って、拉致されたのに対して、政府が文句を言わずに全力で救援にあたるというのが、当然の話です。それを、迷惑だよとか、困るよとか言うことを言うなと。当たり前の、あんたらの仕事じゃないですか。国民のために政府が仕事をするというのは。何もなければで、大使館や政府の職員は普通に5時や6時で帰れます。今回の事件があったがために、彼らは残業して徹夜していろいろ情報収集して、この件にあたりました。無料でプラスαの仕事をしています。だから迷惑だよ、困ったよというのは、個人の感覚としてはあり得ても、組織として国家、市民の関係を考えたら、当然の仕事として、オフィシャルにそこで文句を言える立場じゃないはずなんです。ところが、多くの政府官僚が「いや困る」とか言うことを盛んに言っているわけです。文句を言わずに、国民を助けろというのが、本来の立場のあるはずなんですよ。そういうことが、根本に分かっていないと、3人の命を助けるために、国家が国家の政策を変えるというのはおかしいというのは、上の発想ではそんなんなんですけども、下では関係なくて、国民のためであれば、国家は最大限取り得る対応をすべきなわけですね。これは元々、この3人がそもそもこんな事件を引き起こさなければね、勿論そういうこともないわけで、当然今回の件でいろんな税金が多分投入されています。身代金を払ったかどうかは、はっきりしません。はっきり

しませんけれども、身代金を払ってないとしてもいろんな形で、例えば政府の職員の残業代とか、或いは飛行機をチャーターしたり、いろんな形で経費は発生します。それは主に税金です。山岳登山で遭難したら、当然被害者がそのヘリコプター代とかを払うという仕組みですけども、それは市民・市民の関係であればそうですけども、市民と国家の関係だったら、それは確かに税金は使われますけれども、我々の税金は何故払うかというと、私達のために、政府が使うときに税金を払うんですね。我々の生命とか自由とか幸福の追求に資するために、政府に皆は税金を払っている。ですから、そのために税金を使うのは、正当な税金の使い道です。この３人が捕まって、生命や自由っていうのが非常に危機におかれている、その為に政府が税金を使うっていうのは、当然政府が３人を助けるために使う税金の１つで、妥当な１つである。

でも、この３人がこんなことをせんかったら、こんなことは起こり得なかったでしょということはあります。僕らも海外旅行をして、いろんな事件に巻き込まれるっていうのは、今後、あるかもしれませんし、場合によっては、我々が不慮の事故や事態で色んな形で政府の対応が必要な事態が生じます。そういう時はお互い様で、僕らが困った時に政府がいろんな税金を使ってくる。今回は３人のために税金を使ったというだけで、そういう税金の使い道はある種当然の使い道。逆にいうと、そんなような当然の使い道でない形に、税金をたくさん使ってませんか。要りもしない箱物を使って、税金を無駄にしたり、或いはどっか懐に入れたり、そういう本来の税金の使い道でない税金の無駄遣いがたくさんある一方で、この３人の救出のために使った税金ていうのは、妥当な税金の使い方という風な理解も、ここでできてくるというわけです。

その関係で、憲法の存在というものをチラッと書いていますけども、いろいろなテーマがあって、憲法も大きな注目の課題なので、いろいろな話もできるといいんですけれども、１点だけ憲法の関連でちょっと言及していきたいと思います。これは、今安倍さんは解釈、改憲も含めて、憲法を変えようということがありますが、自民党が小泉政権或いは安倍政権の時に、新しい憲法の改正草案を提起しました。その中を見て、もう明白なんですが、改憲問題がこれから大きな政治課題となってきます。国民投票法が出来ましたので、若い人も含めて、憲法改正に賛成か反対かでいうことが問われる状況が、近いうちに多分起きてくる。その時に、きちんとした判断ができるかということが大変重要である。そういうことで、私もいろんな活動をしているんですけれども、そこで大前提の大前提で理解をしておくことがあって、ちゃんと理解できなかったら、幾ら民主主義で我々が判断しても、結果としては間違った結果になります。だから我々がまず、きちんと理解をして、きちんと判断をすることで初めて民主主義は機能する。そう考えると、憲法についても、我々がきちんとその理解がいるんですけれども、そこの１点だけは、憲法の基本中の基本、「憲法は何故あるんですか」という話です。憲法の基本中の基本というと、憲法の三大原則は何ですかということが、よく入試であったりいろんなことで聞かれます。憲法の三大原則、一つは知ってる三大原則。中学高校で聞いてない３つの原則がある。大事な原則が。知ってる。

これは実は意外に正解率が高くて、憲法の三大原則は何ですかということが、実は結構定着して、一つは「平和主義」です。平和主義。もう一つは「人権の尊重」基本的人権、人権の尊重をするということと、もう一つは「国民主権」主権者は国民ですと。つまり、一番えらいのは、天皇でも政治家でもなくて、我々国民。市民・国民が一番えらいんですよというのが、国民主権ですね。その三大原則があって、かなり定着して知られてます。それはそれでいいんです。平和主義、平和は大



事。人権の尊重、勿論人権も大事。

それから、国民主権もです。天皇のための、政府のための我々ではない。独裁社会ではない。それはそれで知ってて良いんですけども、もう一つ根本的な問題、つまり憲法というのは何であるんですかという点です。これは、憲法がそういうイメージかというのと裏表なんですけども、多くの人は「憲法とは何ですか」と言うと、「法律の一番の親玉。いろんな法律があって、その一番親玉みたいなのが憲法、或いはいろんな法律があって、一番そのベースにある、一番基本中の基本が憲法だ、或いは一番てっぺんにある、一番上位にある規範が憲法、その下に法律がある」いずれにしても憲法というのは、法律の中の特別な存在。法・法律の中の最上位、一番基本になる部分。そういうようなイメージを、僕らは大概持っています。それが実は正しくなくて、憲法というのは全然異質なルールという理解がそこにいるんです。何が違うんですかというと、法律というのは、来月から消費税が上がりますけども、新しい改正消費税法では、皆さんに対して政府が8%払いなさいという風な形を命じます。これが法律の基本です。法律は、政府が我々市民に対して命じる形をとります。8%に決まったから消費税計算は、法律に従わないといけない。

憲法は何かというと、こちらは政府で納付税を払いなさいという風に皆さんに命じた。憲法は何かというと、皆さんから政府に対して政府はこうしなさい、してはいけないという風に命じているのが憲法、逆なんですね。普通の法は、消費税を払いなさい、ああしなさい、こうしちゃいけませんということで、我々はいろんな法律の拘束を受けるんです。憲法は、基本的に政府に対して我々が、政府はこうしなさい、こうしてはいけません、例えば政教分離、政府は特定の宗教に肩入れしてはいけません。政府は戦争をしてはいけません、軍隊を持ってはいけません、政府は人権を尊重しなさい、という風に我々が政府に対して命じています。全然方向が逆なので、全く異質な存在という風に理解するのが大前提です。つまり憲法は、我々が政府、さっきも、リヴァイアサンという大変な権力を持っている、簡単に人を殺すことができるその権力を、僕らが規制をしている、枠を嵌めている。リヴァイアサンという猛獣が、勝手にうろうろ歩いて、乱暴をして悪さをしたら、僕らは困りますから、そういうことをしないように檻に入れておくというのが憲法なんです。人権を尊重しなさいというその枠があって、政教を分離しなさい、そういう戦争をしてはいけません。そういういろんな枠を権力に対して嵌めております。ことによって、この権力がうろうろ歩きだして、日本刀を振り回して変なことをしたら、我々は大変な弊害を受けてしまう。しかし権力は、政治をする上では要るんですね。要るんだから、これを無くすわけにはいかない。だけども、この権力を振るうのが、神様ではなくて人間ですから、悪い奴もいるし、乱用する奴もいるし、能力のない政治家がこの権力を使ったら、大変な、逆に不利益、不都合が生じてしまう。日本刀がありますよ、こんな大きな日本刀。能力がない人、体力がない人が持ってたら、こんな「うわ～ごめん」って切ってしまったら大変ですよ。それから、悪意を持った「この日本刀があったら何でも出来るわ。俺の言うことを聞け」という風なことで、この日本刀という権力を乱用する。そういうことをされたら、僕ら

は困るというか、大変な被害を受けてしまいます。日本刀に対して抵抗できませんから。だから、そんなことをさせない為に、能力のある人がちゃんと権力を持ちなさい、或いは乱用するなよという風なことで、枠を嵌めておいてその結果、国家権力があるんだけれども、そうそう無茶をされないで僕らは生きていける。そういう風な仕組みが憲法で、そういう風に権力を規制するんだというのを「立憲主義」という言い方をいいます。憲法とは、法律とは逆に僕らが政府を規制する、そういうものであって、そういう風にして権力を、枠を嵌めて乱用とかの形を避ける。そういうような仕組みなんだというわけです。ところが、自民党が出している改憲案の中身を見ると、これを根底から変える点があります。これも国会審議でよく出てましたけども、この自民党の改憲案らによると、政府が皆さんに対して、「家族を大切にしなさい」ということを命じてます。或いは、「愛国心を持ちなさい」ということを、政府が国民に対して命じてます。或いは、「自由には義務があるから、義務も果たせ」と。いやごめんなさい、「権利は義務もあるから、権利ばっか言ってないで義務も果たせ」という風に政府が国民に命じてます。逆に、自由ばっか言わないで責任も果たすよということを命じてます。

愛国心を持つとか、家族を大切にするのが良いか悪いかではないですよ。それの良いか悪いかていう話ではなくて、政府が国民に対して命じるなよというのがポイントです。政府が命じるのは、国会を通して僕らの民意を反映した法律を作ったら、それは法律が拘束する、命じる、8%払えというのはいいんだけども、そういうような形じゃなくて、政府が乱用する権力を枠に嵌めてるのに、それが憲法なのに、その憲法の中で国民に命じてくるというのが、憲法を全く根本から変質させる、そういう改憲案なわけです。だから9条の問題とは前提の話です。その後で、9条が良いか悪いかが続いていきます。だけども、自民党改憲案の根本的におかしいじゃないかということです。憲法を通して、政府が我々を命じる、拘束する、この新しい仕組みにしようとするというのが、根本的に間違っているということです。ですから、そこが1つ。

要するに、それだけの権力があって、その権力というのを我々は非常に注意しないといけない、というのが、さっきのAの所の話と同じなわけですね。

次、もう少し進めていきますけども。今ですね、一面的、表面的な見方をしてもらってですね、元々最初に言いましたように、多面的な見方をしていくっていうのがグローバル人材、或いはグローバル化というには必要な資質だということですけども、これはこの事件を通して、具体的に何を指すかといいますと、一面的・表面的な見方をすればこれは、「イラクは危ないのに行った。結果、捕まって大きな問題を起こした。だから、この原因は何かというと、イラクに行った3人が悪い」いうのは、ある観点からそういう見方ができます。できますが、違う多面的な観点、違う観点から見たら、或いはその表面の裏側を見るような観点から考えると、3人が捕まってしまったんですけども、それは3人が勝手に行ったからだというのは、確かに理屈としてはそうですけども、じゃあ3人が行って捕まってしまうような状況になったのは何なんですかと、どうしてですかと。通常は、イラクに日本人が行っても捕まりません。ところが、この状況で3人が行って捕まってしまったのは何故なんでしょう。3人が無視していったからという観点だけじゃなくて、そんな状況になってしまったのは何故かという違う観点で考えたら、これは日本政府が自衛隊をイラクに出していたから。更にいうと、アメリカがイラクに対して強硬な武力行使をしたからというようなことが言えるわけで、だから3人が捕まったのは、3人が行ったからじゃなくて、自衛隊を出したからそんな状況になってしまったと。或いはイラク戦争をし

たからそんな状況になってしまったのか。3人が悪いという観点とはまた違う観点ですね。そういう風に多面的に、問題の背景を見るような観点はあり得るんですけども、そういうような見方というのは、あんまりできないという面がありますね。

この多面的な観点というのは、私よく授業中に言うんですけども、自然科学においては唯一の正解というのはあり得ますね。定理、公理というね、そうした誰が見ても不変的な一つの答えというのは、自然科学においてはあるんですが、社会科学や人類科学、つまり人間の営みや社会の出来事については、これだけが答えと、後は間違いだという状況はまずない。いろんな観点から見て、「あ、この観点から見たら成る程、これは言えるよね」と。でも違う観点から見たら、これもそうだよねという風な観点が多様にあるというのが、人間や社会の営みについてであって。ですから、我々は一つの観点から見て、「この問題の答えはこうだ」という風な発想をするんじゃなくて、多様な観点から見てなるべく相対的に見て、「この問題はこうなんだろう」という発想をしていく必要があるんですが、なかなかそれが出来なくて、ある観点からみてこうだという答えで、もう決定という形で発想してしまう傾向が非常に、特に最近強いような気がします。

それからFは、「市民による国際理解の活躍チャンスの理解」これも非常に実は重要でして、今、先程配った資料の中で③という資料があります。③という資料は、これは前の民主党政権で防衛大臣をしていた森本さんですが、元々この方は官僚出身で、今は大学なんかで教えたり或いはテレビなんかでもよく出ますけども、この森本さんがこの事件に関してこういう文書を書いています。その中で書いてあるのは、こうした国際協力に関する市民の支援活動についてです。真ん中3段目、4段目ぐらいに書いてますけども、4段目ぐらいの傍線を引いたところです、「外国でNGO活動するのは、かっこいいという風潮があるのはいかがなものかと。我が国では、国内にも困っている人が多い。国内に目を向けずに、外国に行き、英雄気取りで帰国して報告会等をやる人もいるが、この節度のなさも酷い。というようなことを或いはNGO関係者、報道のやるやつに、自衛隊の派遣断固反対、反戦思想が多いも気になると言ってるんだけども。特にNGO活動してる人っていうのは、非常に多いんですけども、私自信もいろいろ関わってますし、いろんな知っている人が外国でいろんな支援活動をしています。ですが、かっこ良いからやってるとかです、英雄気取りで帰国して報告会をするという人は、殆どそんな人は見たことはないです。だからこれは、ある種の偏見としか言いようがなくて、何で外国に行くんだと、日本の地元、足下では、困っている人たくさんいるじゃないかという風なことはよく言うんですけども、この辺もですね、いろんな反応があり得るんですけども、ですからそういう、まず外国で国際協力なり困っている人を支援しに行く、特に貧しい地域とか紛争の地域なんか大変な所に、何故行くんかというのが意外に分かられてない。ですから元々、先にもイラクなんかにそもそも行く意味が分からん、だから否定的な評価しか出来ないということです。

その関係で考えますと、このもう1個です、大きな12番というので、大きな一面のニュースのコピーがあります。これもですね、アフガニスタンで伊藤さんというベシャワール会というNGOの職員が殺害されたという事件のニュースです。このNGOの邦人遺体発見について、アフガンも大変状況悪くて、そのアフガニスタンは2回ぐらい仕事で行きましたけども、このベシャワール会の話をしました。これは、即時に殺害されましたので、今回の人質事件のように脅迫という状況は生じませんでした。ですから、日本の社会の反応は結構しらけて、そんなバッシングとか起きる間もなく殺害されたんで、状況は違ったん

③



正論

日本人の節度喪失示した人質事件

拓殖大学
国際開発学部教授
森本 敏

気になる自由と権利の履き違え

ですね。この問題で、状況はかなり似ていたんですけども、反応はかなり違っていました。その違った理由は幾つかあるんですが、根底で多くの人が持ったイメージは、確かに可哀相というか、或いは非常に立派というイメージです。根底には、何故アフガニスタンの人を救うために命を捨てるのかわからない。或いはイラクの人を救いたいつっても、何で危ない所に行って殺されるかもしれんというのに、何でそこまでしてやるの。ということがあります。根底にはその疑問があって、それはアフガンで、困っている人がいる、それを支援するのがつまり立派だと思っている。思うけど、そんな命捨ててまでアフガニスタンの人を救うって、分からんなあというわけです。

実は大きな無理解があって、答えはこうなんです。僕も研究等で、紛争地域にはよく行きます。弾が飛んでる最中には行きませんけども、結構地雷があったりという風なのはよくありますけども。僕自信も、いろんな支援活動に直接関わったりします。私の感覚もそうですし、いろんな周囲の人でNGOのスタッフで支援をしてる人に聞いてもそうですけども、誰も命を引き換えに、外国の人を助けようとしてしてる人はいません。命を捨ててまでNGO活動をして、アフリカの人達を救おうという人は誰もいません。中には、特別な宗教的な信念・使命感がある人は、自分の命を捨ててまでというのがありますけども、多くの一般のNGOの市民は、命を捨ててまでアフガンの人を救う、イラクの人を救うという人はいません。じゃあ、何で死ぬかというと、偶々です。偶々イラクに行って捕まってしまうと。或いは、偶々アフガニスタンで状況が悪くて殺害されてしまう。日本においても、運が悪ければその辺歩いていて交通事故に遭って死んでしまいます。ですから、安全の状況が違うから、日本と同じような振る舞いをしていてアフガンで行動をしたら、それは危険度は高まりますけども。状況に応じた対応を持っていれば、日本でも命を落とすことは落とすし、アフガニスタンでも落とすことは落とす。イラクでも捕まることは捕まる。ですからそんなに、安全対策が充分・不充分という問題はありますよ。だから、このイラクの3人は確かに不十分でした。そこは問題として批判されてもいいんですが、そこは批判の対象としてありますけれども、しかし、基本的に何処に行こうが命を落とすことはあり得て、最初から命を捨ててアフガン人を救おう、イラク人を救おうとしてやっている人はいません。だから、その辺の根本的な理解がまずない上に、この3人の行動が理解できない故に。3人を否定的に見てしまうというような仕組みが1つあるわけですね。

あとは、何故そんなボランティアをするんだというのは幾つか理由があるんですけれども、ちょっと時間がないんでそのかっこの中の話は、ちょっと省略をしますね。

最後のGの所は、「突出した個人に対する嫌



悪」という問題で、これがまた大きな問題でして、今の資料の3枚のうちの10番と書いてあるか、10番ちょっと薄いんですけれども、「命の時計動き始めた」と書いてある資料です。「命の時計動き始めた」と書いてある記事がありまして、そこで人質になっていたこの女性、高遠奈穂子さん、安田純平さんは、当時この3人とは違うんですけれども、同じ関連で一時期、拘束されたジャーナリストなんですよ。この真ん中のが、2段目の後半の方ですよね、ちょっと上の方に鉛筆で印をつけてますけども。「人と違うことをする人間は良くないという風潮は、少しも変わってはいない。何か別の問題で、ことに自己責任論が噴出する可能性がある。」ということですよ。つまり、当時イラクなんかに行くという人は滅多にいなくて、ある種突出した行動をする、そうした異端な存在に対して、日本社会ではある種の同調性がある中で、変わったことをする人に対して、非常に足を引っ張るというか叩くというか、そういう傾向があるというわけですね。だから、人と違うことをすること自体、非常に良くないことという一つの、何となく価値観ですね。そういうのが、日本社会に昔からあって、そういう形で、この事件での批判の一つの要因になっていったのかもしれません。そういうような観点です。

そういう同調性というのは、ある意味場の空気を読むというか、一つの美徳として良い面でもあるんですが、何でも裏表がありまして、やっぱりしかし、違うことは違うという状況で敢えて目立つ必要もあるわけです。逆に最近よく、日本の経済力が停滞しているといいますけども、そこでイノベーション、新しい技術革新ということが、大学でも非常にいわれるんですけども、それは、同調性の中から生まれては来ませんよ。異端者、変わったことをする人、何だアイツはというふうな中から、イノベーションが出るわけですから、やっぱり日本の社会で、ビル・ゲイツとかです。ああした形の革新的な才能が出てこない、というのが日本社会の特徴からという見方も出てきますよ。

ですから、皆さんは地域のリーダーとしてそういう意味合いで同調性、協調性はいいんですが、意味もなく同調するのは良くないわけで、そこで、リーダーシップというのが求められてくるというような面があります。

さて最後に、ちょっと言及あと1、2点だけして終わりにしたいと思いますけれども、資料の中で11という資料がありまして、ちょっと言及しそびれていますが、11は何故武装勢力が解放したかということを説明をしているその文書です。

何故3人が無事に解放されたかといいますと、実は見方がいろいろあって、1つの見方はこの11ではなくて、さっきの、6の記事の中で「問われる自己責任」の記事の6の中で、この左の方に、鹿田さんという自衛隊出身の人で、今は大学の客員教授をしてますけども。この鹿田さんが言っています。つまり、何故この問題で成功したかというと、人質解放に成功した理由は、線を引いてますけども、日本政府が、武装勢力の脅しに屈せず自衛隊の撤退はあり得ないと、終始毅然として対応したから、この3人は解放されたという風なことを、この鹿田さんは言ってます。小泉さんは即座に、「テロリストの要求には応じない」という風に毅然として、この要求を蹴ったんです。こういう毅然とした対応が。3人の解放に結びついたという風な見方をしてます。

確かに、これはもう全然幾ら交渉しても、もう見込みないからもう止めるわという発想があるかもしれません。あるかもしれないですが、恐らくそうではなくて3人が解放されたかというと、さっきの11番の資料のこの拘束した集団が言ってますが、何故解放したかというと、さっきの映像に出てきた3人は、イラクのために来てくれたと。つまり、ストリートチルドレンを支援したい、或いは劣化ウラン弾の問題を反対したい、イラクの現状を伝えて社会に問題を伝えたいということで、この日本人の3人はイラクに来たんだと、つまりイラク人の味方であるということが分かったんで解放したということが、この11に、さっきの11の資料に書いています。更には、この3人を哀れんでというふうな文脈もあって、つまりこの3人は小泉政権から見放されたわけです。自衛隊が撤退しないと、要求には屈しないという風に即座に即答します。ということは、あんたら3人はもう知らんわという風なことを言われているわけで、それに対して武装勢力は「お前ら哀れだな～、自分の国の政府に見放されとるぞ」というので、哀れんで可哀相にという風なことが言われてます。ですから、日本政府に代わって私達がこの3人を助けると。そんなような趣旨のことを書いていたわけです。基本はしかし、3人はイラク戦争に反対して、イラクのためにと思って来たんで、これはイラクの味方だということで解放したということが多分理由だというような話です。

そんなわけで、これからもう1枚だけ資料を出します。資料の⑧というのがあります。⑧の資料を見てもらうと、⑧の資料は、これはこの半年後くらいに起きた香田証生さんという20代の日本人の男性の若者が殺害された事件に関して、同じ大学生の大学生が書いている文書です。

香田さんの事件の場合は、大勢の方がご記憶があるかと思われますけども、ちょっと状況が違ってて、イラクを見てみたい。スト

⑧



私の視◎点 ウイークエンド

opinion◎news project

◆香田さん事件 イラク入りの真情理解を

イラクで香田証生さんが殺害されてからひと月が過ぎたが、私の心には今も、香田さんに対する世間の風当たりの強さが納得できないままに残っている。

香田さんのイラク入りが人助けでなかったため。援助関係者でもジャーナリストでもない学生だったからだろうか。香田さんの計画は確かに甘かったかもしれない。しかし、そんな落ち度だけで彼の死を「しょうがなかった」と片づけることはできない。

彼への批判の最たるものは、入国が「イラクを見てみたかった」という軽い動機だったことだろう。しかしこの気持ちは、イラクをめぐる国際問題に無関心な「純粋な好奇心」ではなかったかと責める。

昨今、香田さんのような好奇心からイラクに入った若者の一人として、彼の思いを代弁させてほしい。

今の日本では、「戦争」を実感できることはほとんどない。だから、大半の人が中東を自分の問題意識として位置づけることもないだろう。彼は、イラクの現状を自分の目で見て、人々と話したいと願ったのではないか。彼を批判する人は

強さが納得できないという点です。2段目、ここ線を引いてますけども「彼への批判の最たるものは、入国がイラクが見てみたかったという軽い動機だったことだろう。しかしこの気持ちは、イラクを巡る国際関係に無関心なら、まず生まれることはない純粋な好奇心ではないだろう。」下の段を見ると、「彼を批判する人で、彼以上にイラクの現状を心に留めている人はどれ程いいるのだろうか」と。つまり、イラクのことを関心持って、あの惨状に心を痛めている人が、香田さんを批判する。つまり、軽い気持ちで行って「馬鹿じゃないか」という資格がある。ところが、多くの日本人がイラクの戦争をあまり関心がないし、そのせいでイラク市民がどんだけ苦しんでいるのかということも、大して関心がない。そういう人が、イラクを見てみたいという純粋な関心で行った香田さんを批判する資格があるんですかということを言っているわけですね。

確かに、軽率な行動ではありますけども、彼は純粋にイラクに関心を持っていたと。ところが、多くの日本人はイラクのことなんか関心も持たない。そんな関心も持たない人が、香田さんを軽率と言う風なその資格はないんではないかと。そういうことですよ。特にこういう若い人は、受講生にとってもそんなに慎重なことばっかやっぱり発想するんじゃなくて、若さ故に、やっぱり大胆な。その挑戦するような気持ちっていうものは、やっぱり若者故の美徳ですからね。それは、好奇心ある所に行ってみたいと、見てみたいというようなその好奇心自体は、非常にやはり肯定すべきもんじゃないかということ。そんなこともあるんで、香田さんの事件も非常に冷たい反応ではあったんですけれども、その背景も、ちょっとそれは違うという風なのがあり得たわけです。

そんなわけでちょっと、今回は2時間ということで時間的には少し長過ぎて、通常授業は90分で終わりですんで、ちょっと座りっぱなしで疲れた面もあろうかと思いますけれども、ここで一通り終わりにしたいと思います。本来は、ちょっと資料毎に時間を振ってはいますが、この後まだ暫く私今日もいて、明日帰りますんで、何かもしありましたら遠慮なく話しかけて下さい。

では、長々とご静聴ありがとうございました。

ＲＹＬＡセミナー「グローバル化の中で必要な資質：多面性・論理性・主体性・社会の仕組みに対する基本的理解　－イラクの日本人人質事件をとおして－」

２０１４年３月２１日
蟹場和彦（徳島大学）

1．グローバル化＝国際的な相互依存の深化と一体化、国際と国内の連続性
　グローバル人材＝外国でバリバリ働く人だけでなく、国内の地域社会においてグローバル化による諸問題に取り組む人も

2．リーダーシップ＝人を引っ張る力でなく、問題を改善できる力
　　横下市長はリーダーシップがある？
　　災害時に駅でタクシー待ちの長い列がある時どうする？

3．イラクの日本人人質事件をとおしてわかるのは
・多面的見方の重要さ
・論理的思考の重要さ
・主体的姿勢の重要さ
・社会（民主主義）の仕組みに対する基本的理解の重要さ

4．経緯：2003年３月、米・ブッシュ政権はイラク戦争を開始。2004年４月、「危険だから行かないように」という日本政府の退避勧告にもかかわらず、イラクのストリートチルドレンを支援する女性、劣化ウラン弾の調査・反対運動をする男性、フリージャーナリストの男性らいずれも若い日本人３人がイラクに入り、武装勢力に拉致された。武装勢力は小泉政権に対し、自衛隊のイラクからの撤退を要求、さもなくば人質を殺害すると脅迫したが、小泉首相は「テロリストの要求には屈しない」と答えた。日本の社会では３人や家族に対して自業自得、自己責任だとしてバッシングが起きた。結果的に３人は解放された。しかし10月に起きた同様の事件では日本人の青年が殺害された。

5．当時、３人に対して否定的な見方が大半。なぜか：
ア　行くなという政府の意向、ルールに反したから
イ　政府や周囲に迷惑をかけたから
ウ　個人のために国家政策を変えられないから
エ　命を落としても自業自得だから
オ　わざわざ危険な場所に行く意味がわからないから
カ　謝罪せず横柄で目立ちたがりだから
キ　安全対策が不十分だったから

6．要点：
A：政府の世論誘導（政府は自衛隊を撤退させたくない、しかし国民を見殺しにしたら猛反発を受ける。何かいいやり方は…）　←政府と権力を疑え（日本人はCの点が強いから特に危ない。国家権力は「リヴァイアサン＝猛獣」）

B：メディアの情報に対する過剰な信頼性（日本人は新聞やテレビの言うことを鵜呑みにする傾向。政府の世論誘導に乗せられやすい）　←メディアリテラシーをつけろ（例・「中国で反日デモ　数万人」、ネット情報の玉石混淆）

C：「お上」意識（日本人は政府・役所に頼り、任せ、従順な傾向。えらい政府に「背いてはいけない」「迷惑かけてはいけない」）　←市民としての主体性を持て（政治家がよく批判されるが、民主主義では「この程度の国民にはこの程度の政治家」）

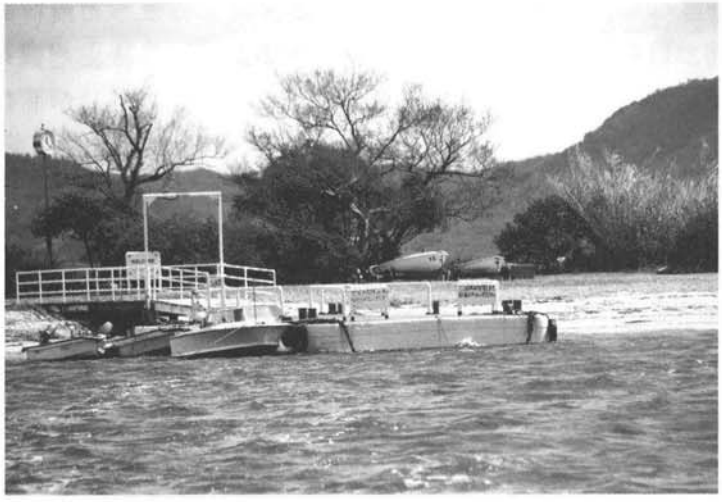
D：民主主義における政府と市民の関係に対する無理解（ふだんは反政府なのに困ったら頼るというのは虫が良すぎる？「市民 for 政府」でなく「政府 for 市民」）　←社会の仕組みの基本を知れ（例・憲法の存在意義）

E：一面的、表面的な見方にとどまる思慮の浅さ（イラクで３人が捕まったのはなぜか、という背景にある本質的理由）　←多面的な観点で本質を見抜け（社会で起きる事象（社会科学）は自然界の事象（自然科学）と違って答えが多様）

F：市民による国際協力の活動に対する無理解（なぜイラクを支援するのか、なぜ危ないところに行くのかわからない。いいカッコをしたいだけ？）　←国際協力の意義を知れ（死ぬ気で行く人はいない。人道主義、互恵、情けは人のためならず、自己肯定感の獲得）

G：突出した個人に対する嫉妬（人と違うことを避ける同調性。逆に目立つ人の足を引っ張る）　←本来のリーダーシップを持て（空気を読む美徳もさることながら、同調しない異端がイノベーションを生む）

7．時間があれば――
①改憲問題
②靖国参拝問題
③領土問題
④北朝鮮問題
⑤イルカ漁問題
⑥NHK 会長・経営委員の言動問題
⑦ボランティア活動の意義





日本・日本人の国際化とメディア



ジャーナリスト・メディアコンサルタント
藤澤　秀敏氏

プロフィール

● 略歴

1948年	徳島県生まれ
1973年	早稲田大学政治経済学部政治学科卒業。4月NHKに記者として入社、札幌放送局、釧路放送局勤務
1980年	報道部外信部
1982年	香港支局長代理
1984年	アメリカ総局ロサンゼルス駐在
1985年	ワシントン支局員
1988年	報道局国際部副部長
1991年	ワシントン支局長
1995年	3年間「ニュース9」キャスター
1998年～2003年	BS1国際情報番組「BS2ワールドニュース」、「BS23ワールドニュース」キャスター。
2003年～2007年	アメリカ総局長
2007年	解説特別主幹
2007年11月～2008年3月	「ニュースウォッチ9」キャスター
2008年	6月　解説委員長
2012年	6月　解説主幹
2013年	3月　NHK退社

藤澤秀敏といいます。徳島県の出身です。実はRYLAのディーンを務められている森さんと高校の同期で、そういうことで紹介いただいてここにお招きいただけました。本当にありがとうございます。

私は、ずっと40年間マスコミの世界にいまして、NHKの公共放送ですね。NHKという会社にいまして、去年4月末に退職しました。饗場先生はずっと教えられていたんですね、非常に教え方お上手だと思うんですけども私は記者という仕事をやってまして、原稿を書いて時々リポートをすると、そういう仕事をやってましたので、まだ教えることに慣れてないんです。話があっちこっち行ったりするかもわかりませんけれども、その辺りは、お許し願いたいと思います。

今日は日本、それから日本人の国際化についてちょっとお話をしたいと思います。私もメディアの出身ですので、その国際化とメディアがどう関わってくるのかということを併せてお話をしたいという風に思っています。

ここに今写真を映してるんですけども、「ダボス会議」という会議、名前聞いたことある人手を挙げてください。

結構知られてますね。ダボス会議というのは、スイスの東の方のダボスという小さなスキーリゾート地のことですね。そこで毎年1月下旬に、世界各国から1500人くらいのビジネスマンとか、政治家とかそれからNGOで働く人とかが、それからメディアの人間とかいろいろな人達が集まって、その年世界がどういうふうに動くんだろうなというのを、3日か4日かけて、いろんなセッション250くらいセッションあるんですけども、そのセッションで話し合うという、原則非公開の会議です。この会議に私は、10年間取材を兼ねて参加者の一人としてずっと参加してきました。

このダボス会議、実は始まって40年以上経ってます、今年で44回目です。金持ちが集まって、いろんなビジネスの話をする場所だという風に最初は言われてまして、金持ちクラブだとかいろいろ批判が多かったんですけども。10年ぐらい前から、ビジネスマンとかや政治家だけでなくて、いろんな人を呼んで

参加してもらって話し合いをしようという風に変わっていって、今では、世界で最も権威のある民間主催の世界の流れを話し合う機会という風になってます。

金持ちクラブという批判があったんで、それに応えて、NGO とかそれから宗教家とか、それから学会の人とか。学会というのは、阿部先生のようないろいろな分野で研究をなさる方なんかも集めて会議を開くようになりまして、今では単にビジネスとか政治とかの話とかではなくて、環境問題とかいろいろなことを話し合う機会となっています。それとこのダボス会議の特徴はこの真冬の寒い時に、世界から 2000 人から 2500 人の人が集まって、こういう風に会議を開くと。これは全体会議なんですけども、スピーカーがいて講演した後の、皆でいろいろ質問をしたり意見を出し合ったりというような会議です。何故この会議の話をするのかといいますと、会議自体が





「グローバル化」っていいますか、世界にはやっぱりグローバルが繁栄して、会議で話し合われることが段々と変わってきてるということをお話ししたいと思います。最初は、さっき言ったようなビジネスの話中心だったのが、それから世界政治も含めたような話し合いの場になって、それが今、環境問題とか、そういう騒がれてるような貧困や失業の問題といったような社会問題とかそういうのも含めて話し合われるようになりました。

それでその会議で、主催者が毎年世界で背



負ってるリスク、危険はないかというのを、参加者に事前に質問をして、それで会議の前に世界のリスクリポート、世界の脅威リポートというのを出しています。この内容を見てみますと、数年前、5 年ぐらい前までは、例えば金融問題ですとか、それから為替の問題ですとか、そういうのが脅威の上の方に来てたんですけども、ここ数年脅威の上の方に、上位に来てるのは、全く変わってきました。どういう風に変わってきたかというと、環境問題、それから資源問題といったようなものです。世界のビジネスマンとか政治家とかメディアの人間が考える、今の世界にとっての脅威であるという認識に変わっていっているんです。そのきっかけは、タイで 2011 年に、洪水が起きてバンコク周辺が水浸しになったという大洪水が起きたんですけども、その時に一番問題になったのが、自動車部品とか電子機器の部品がタイの組立て工場に入らなくなった。サプライチェーンと言うんですけども、そういう部品の供給のルートが絶たれた。それが洪水によって絶たれると。その洪水は

何故起きたかというと、それはその温暖化とかそういう地球の環境変化ではないかと。だから、脅威としてはやっぱり地球の環境変化、環境問題とかですね、そういう問題が非常に大きいんではないかと。そういう認識に変わっていったと思います。つまり、自分達の目先の利益、金融とか株とかです、それから為替がどうなるかといったような、その目先の利益ではなくて、ビジネスマンを中心にしたこの会議で、脅威と考えるものが、もっとグローバルな問題に移っていったということをお話したかったわけです。



この会議いろんな人が出てまして、この右側の２人はこの会議をずっと創設時から主催しているシュワブというスイスの経営学の先生とその奥さんです。この２人がずっと主催をしているという会議ですけども、この人が中心になって、世界の政財界の要人も含めて世界最高レベルの会議に仕立てた人です。



これ、ドイツのメルケル首相ですね。ヨーロッパの地元で開かれるというのもあって、いつも首脳が、来てここでお話をするというのが恒例になってますけども、今年は日本からも安倍さんが出席しまして、アベノミクスについて説明したんですけども、世界の政治家が集う場所ともなってます。

一番左側はイスラエルのペレスさん、真ん中のサラームさん、右の人ちょっと分からない、記憶がないですけども。こういう人達も来て、非公開ということでお互い着飾らない意見を交わしたということです。一番重要なのは、会議とは別にそれぞれ個別に親交を深めるといいますか、話をして、日本からのビジネスマンで、トヨタの社長とか武田薬品の長谷川会長とかいろいろな人が行ってて、こういう所でビジネスの話も含めて親交を深めるという場所です。





これは、ビル・ゲイツですね。面白いのはこういう狭い会場に集まって、こう肩をすり合わせるような形で交流し合うということで。例えばアメリカのクリントン元大統領も毎年来てまして、会ったんですね。横に立ってた

人がクリントンさんだったりです。ということもあるぐらいで、親密な雰囲気の中で会議を開くということです。



これは、ルワンダの緒方貞子さん。この前までJICA、国際協力機構の理事長をやられた緒方貞子さん。UNHCR、難民高等弁務官なさってた人です。

こういう人達が今考えてる世界の脅威というのは、金融問題とかそういうものではなくて、寧ろグローバルな環境問題だとか、それから社会問題、雇用問題、失業問題、特に若年層の雇用の問題といったような社会問題など、それだけ世界全体が、グローバル化した世界に対応していくということを、まずお話ししたかったわけです。

今日のテーマ「日本・日本人の国際化とメデイア」ということにさせていただいたんですけども、まず「グローバル化というのは何か」というのからお話ししたいと思います。グローバル化、グローバル化という風によく言われているように、10代、20代のグローバル化が叫ばれているんですけども、グローバル化というのは、世界の英語の辞書としては一番権威のある「Oxford English Dictionary」一番下に書いてありますOEDに書いてありますけども、OEDという辞書によるとですね、グローバル化というのは、企業や様々な組織が、国際的な影響力を発展させたり国際的な規模で動き始める過程だという風に定義されています。英語で言いますと、「the process which businesses or other or organizations develop international influence or start operating on an international scale」というですね、国際的な影響力とか、それから国際的な規模とかをいう、そういう形でいろんなものが動き始めるそういうプロセスというのが、グローバル化だという定義です。じゃあここに出てきているこのinternationalという言葉ですね、国際的な影響とか国際的な規模というのと、グローバルというのがどう違うかということなんですけれども、つまり、国際化とグローバル化というのは一緒なのか違うのかというういうことなんですけれども、基本的に国際化とグローバル化というのは、同じだというふうに感覚的にですが、感じられる、感じている人ちょっと手を挙げてみて下さい。グローバル化＝国際化であると。

はい。グローバル化と国際化というのはちょっと違うのではないかと、感覚的にそう思われてる方。…はい。残りの方は、分からないという意味ですか。これは、私自身が考えることですので、グローバル化と国際化というのは果たして違うのか同じなのか、という問いを発せられたら、私自身はやっぱり違うのではないかという風に思います。

まず国際化というのは、国とかそこに住む国民が、他の国とか他の国の国民それから社会とより密接に関連すること、関係することということじゃないかと思います。国際化というのは、能動的といいますか、proactiveというか、自ら動くそういう能動的行動を示すのではないかという風に思います。

グローバル化というのも、似たような概念なんですけども、グローバル化というのは、世界が国境を越えて、このより密接に関連し合うということで、これは能動的行動というよりも一つがそういうことをした結果、そういう状態が生まれているという受動的状態といいますかね、それがグローバル化という風な気がします。そこで鍵となるのは、私は国境の有無じゃないかと思うんですよ。

国際化というのは、国境の存在を前提とす

る動きですよ。日本の国際化とか日本人の国際化とかいうのは、日本人が日本という国境を越えて、他の国の人達と結び合う、関係し合うというそういう動きなわけで、国際化は国境があることを前提としているという気がします。



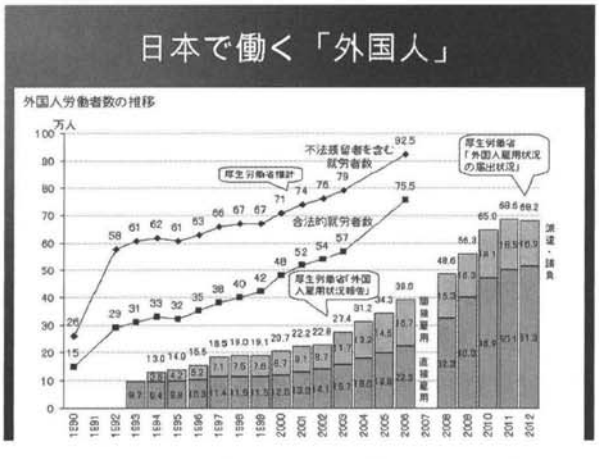
一方グローバル化は、この国境の概念を超越する状態といいますか状況だと思います。国境を越えて社会それぞれの仕組み、人々がより密接に関連し合ったそういう状態で、そこでは国境という存在が薄くなるというような気がします。ただ、そのグローバル化する世界、どんどんグローバル化していく世界では、生きていくためには国際化というのが欠かせないという気がします。そういう観点から私は話を進めていきたいと思います。

では、どうして国際化が必要かということなんですけども、これは世界がグローバル化しているから一国だけでは生きていけないということだからと思います。じゃあ何故今その日本の国際化とか、それから日本人の国際化というのがほぼ毎日のようにいろんな形でいわれているのはどうしてなのかということを考えたいと思うんですけれども。実は日本の歴史というのは、どの分の歴史でもそうなんですけれども、国際化の歴史でもあると思うんです。日本は昔、遣隋使・遣唐使という人達を、国の遣いを中国、今の中国に送っていました。それから、そういう形でずっと他の国との結びつきというのがあったわけなんですけれども、途中、江戸時代に鎖国をして、国を閉ざしてしまった時期もあるんですけども、その鎖国の時代でさえも、この時にも中国とかそれからカトリックではない、商売優先だったオランダという国とは関係を続けたわけなんです。その後、明治時代に入ってですね、その反動として鎖国の反動として、欧化主義といいますか、ヨーロッパに学べ、欧米に学べという風なことでいったわけなんですけれど、それが、その結局富国強兵に繋がってそれが行き過ぎてしまって、日本が欧米の列強、欧米の強い国々と肩を並べようとして戦争になったと、第二次世界大戦になって、しまったというのを。今度は敗戦後は一転して、経済面での国際化をとるのを進めたわけです。それなので今また、国際化をしようというのが起きているというのが、これはとりもなおさずやっぱり世界がグローバル化しているとと。特に経済がグローバル化しているという、その世界の新しい環境の中で生きていくためには、国際化が必要だと、国際化なしでは生きてはいけないんだという意識が高まっているからだという風に思います。グローバル人材の養成とか、それから日本の国際化とか日本人の国際化が必要だと叫ばれているのは、そういう理由じゃないかと思います。

では、日本は果たしてどの程度国際化しているのかという話なんですけども、国際化の度合いを測る尺度、日本の国際化はレベル1だとかレベル2だとかレベル3だとか、もっと上がってレベル4だとか5だとかという、その国際化の度合いを測る尺度はあるのかどうなのかということを考えますと、これはかなり人によって判断はまちまちだと思いますし、判断基準もいろいろあると思うんですよ。どこまで他の国、他の国の社会、その世界との関係が密接であるか、総合的に評価しないと国際化が何処まで進んでいるのかというのがなかなか測れないという風に思います。じゃあ、その測る尺度として、幾つか私自身が考えてる基準があるんですけども、よく言われ

てますけども日本というのは、外国人労働者を受け入れてないという話がありますけども、この外国人労働者を何処まで受け入れてるかというのが一つの尺度でしょうし、それから難民、その政治的な迫害とかいろんな形で、その国に住めなくなったということで外に出て行った難民を受け入れてる数、これも一つの役割尺度じゃないかと思いますし、それから観光客なんかも含めて、海外渡航者数とか海外からの日本への観光客の数、こういうのも国際化を測る尺度になるんじゃないかという風に思います。

例えば、今言った移民の受け入れといわれている外国人労働者について見てみたいと思います。



これは日本で働く外国人労働者の数を示したグラフです。この青の棒がそうなんですけれども、2002年のちょうど真ん中ぐらいの時には22万8000人という数字でした。それが、2012年10年間で68万2000人と3倍に増えてます。この10年間で3倍にも増えていると、日本は相当国際化が進んでいるんじゃないかと、労働者、外国人労働者受け入れの数から見た国際化というのは進んでるんではないかという気がしますけども。ただ、この外国人労働者の数が、その国つまり日本の労働力人口の中で全体のどのくらいの比率を占めているのかということを見てみたいんですけども、68万2000人というのは日本人も含めた労働力人口の何%ぐらいだと思いますか？

10%ぐらいだと思う人、手を挙げてみて下さい。

5%ぐらいだと思う人。

つまり、20人に一人が外国人労働者だと、2%ぐらいだと思う人。

だいたいこの辺りは多いですよね。1%だと思う人。

正解です。1%、100人に一人しか日本の労働力の中には、外国人がいないということなんです。これ、他の国と比べてみたらどうかということですけれど、アメリカは移民の国だといわれてますけども、アメリカはどのくらだと思いますか？

10%ぐらいだと思う人。

それじゃあちょっととんで、30%ぐらいいるだろうと。

40%。

50%は外国人労働者、そこまでは行きませんよね。アメリカが15%。つまり100人中15人の外国人労働者がアメリカでは働いているということです。それによって様々な摩擦が生じています。

ドイツが移民を受け入れるということで、たくさん受け入れるってことで有名ですし、それからトルコ系の人達がたくさん増えすぎていろいろ社会的な摩擦が起きて問題になってるということも聞くんですけども。アメリカ15%だったとすると、ドイツはどのぐらいだと思いますか？

もっと高いだろうなあ、30%という風に思う人。

やっぱり、移民の受け入れが活発な国だから50%はいるんじゃないかという人。あまり引っ掛からないですね。じゃあアメリカよりも低くて、10%ぐらいだろうと思う人。はい。5%ぐらいだと思う人。

だいたいいいところ、10%ぐらいなんです。それから、イギリス・フランスこれが5%ぐらい。それからアジアを見ますと、移民国家といわれているシンガポール。シンガポールどのくらいいると思いますか？シンガポール結構高いですよこれは。

30％ぐらいだと思う人。

いや～、シンガポールは小さい国で外国人労働者いっぱいいるから、50％ぐらいだと思う人。

いや、意外に、低いんじゃないかということで、10％ぐらいだと思う人。

だいたいいいと思うんですけども、シンガポールが28％です。

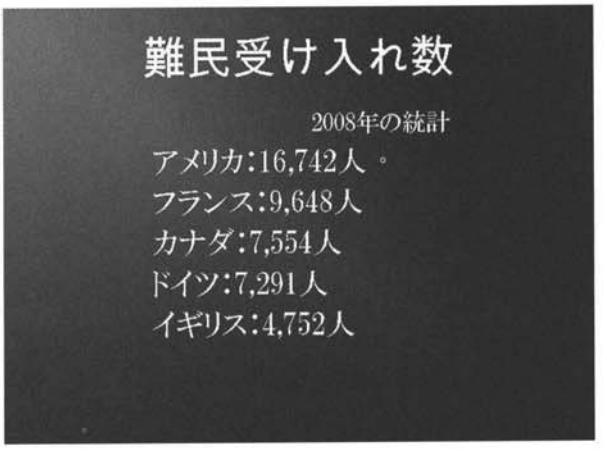
それから、マレーシア、隣の国ですね、シンガポールの隣の国。このマレーシアが8％。それから香港、ここが6％。それから、タイや台湾ここが3％。つまり、日本はタイや台湾よりも低くて、非常に外国人労働者の受け入れは遅れているということです。ちなみに、お隣の韓国と比べてどうかということですけども韓国と日本とを比べて、韓国の方が外国人の労働者数の割合が多いと思う人、手を挙げて下さい。

少ないと思う人。

だいたい同じぐらいだと思うんですけども、韓国は1.3％で、日本の1％とよく似ているんですけども、韓国の方が外国人労働者を受け入れているんです。だから、日本より少ないっていうのは、フィリピンやインドネシアとか中国といった国で、寧ろ外国人労働者を送り出す側のところは0％に近いんでですね、外国人労働者の数、日本よりも率でいえば低いんです。だいたいその他の国は、皆高いと。シンガポールのように28％と28倍の国もありますし、それからアメリカの15％とかドイツの10％のようにかなりの数、労働者の中で外国人が占める割合が高いということで、この外国人労働者の受け入れの数を見ると、明らかに日本が受け入れ後進国といえ、外国人労働者数に関していえば、国際化は遅れているという風にいっていいと思います。

次に、難民の受け入れの数を比較してみたいと思います。これ、難民の受け入れの数なんです。2008年の統計でちょっと古いんですけれどもご容赦下さい。

アメリカは、この1年間に1万6742人受け入れてます。フランス・カナダ・ドイツも7000人台から9000人台、それからイギリスは、4752人という風になってます。



さて、日本は同じこの2008年何人受け入れたと思いますか。これ衝撃的ですから。ちょっと恥ずかしい数字だと思いますよ。

0人という人、0。まあ、近いですよ。

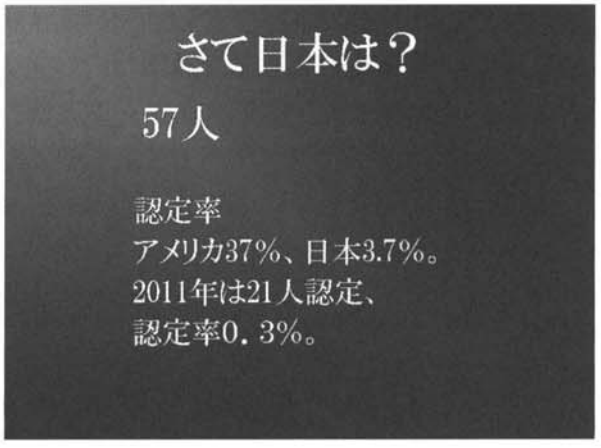
100人だと思う人。

500人くらいは受け入れてるだろうと思う人。

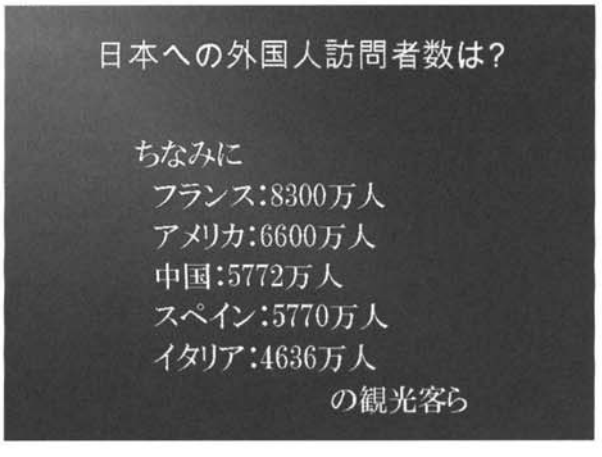
100人より少ないと思う人、手を挙げて下さい。

100人より少ないです。57人しか受け入れてないです。これ2008年ですけども。問題なのは、受入数も少ないんですけども、難民の申請してきているのに、難民として認めないと、それでいて、あなたは難民として受け入れられませんという率がね、日本は非常に高くて、つまり難民として受け入れる認定率というのが非常に低いんです。アメリカは、難民100人が難民申請をした場合、37人を難民として受け入れているんです。日本は、3.7％。つまり、アメリカの1/10でしか受け入れていないということなんです。

さっき57人といいました2008年の数字ですけど、果たして2008年以降上がっているのかどうかということで、一番新しい数字調べてみました。2011年なんですけれども、2011年、何人受け入れたと思いますか。たったの21人、認定率なんと0.3％という低い数字です。

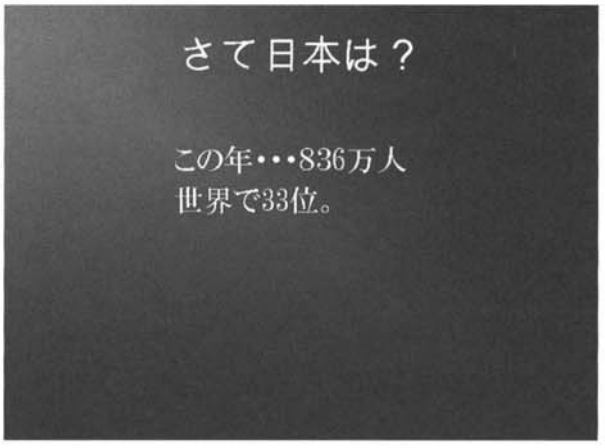


だからこの難民の受入数というのを見ても、やっぱり日本は国際化、その意味では国際化が非常に遅れているんじゃないかという風に思います。



じゃあ次に、観光客の数を比較してみたいと思います。日本に来る外国人観光客、ビジネスのお客様も来るんです、外国人観光客が去年1千万人を超えたというんで、ビッグニュースになりました。

2012年の数字を見てみたいと思います。日本への外国人訪問者の数は、1000万人を超えたんですけれども、フランスは8300万人、2位のアメリカが6600万人、3位の中国がですね5772万人、スペイン5770万人、イタリア4636万人、ということです。これは2012年の数字なんですけれども、その時の日本の受け入れの数というのが、836万人。日本は、日本文化もそうですしいろんな歴史的な建造物や綺麗な富士山とかいろいろありますけれども、観光客の数というのはフランスの1/10ですよ。日本は魅力ある国だと思うんですけれども、観光客の数で比較すると、日本は世界で何番目ぐらいにランクされてるかと思いますか。これ実は33位で、香港の2377万人、それから韓国の1114万人より少ないんです。韓国よりも、外国から来るお客さんが少ないということになります。大体、この数でいうと、チェコとかです、それからスイスとかインドネシアと同じくらいの水準なんです。

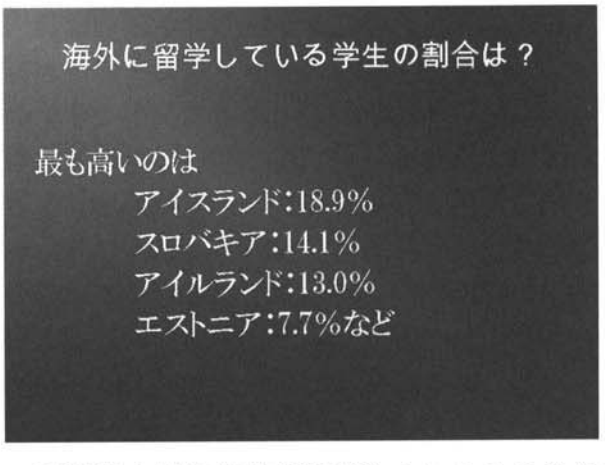


外国に行く観光客の数という面で見てみますと、出て行く人は2849万人と入ってくる人のおよそ2倍ですね。来る人というのは15年で倍増してます。出ていく人、日本から外国に行く人は23年間で倍増してます。世界の人の動きに合わせて、日本人の観光客、外国へ行く観光客の数、それから日本へ来る観光客の数も増えてはいるんですけれども、やっぱり国の規模とかそれから経済力に比べて、依然少ないと言わざるを得ないと思います。こういう観点から、日本の国際化度というのは、相対的にはまだ低いのかもしれません。

数字ばかり並べて申し訳ないんですけれども、もう一つ比較する数字の中で、私一番関心を持っているのが、留学生の数です。日本の国際化を考えると、日本の国際化、将来どうなるんだということを考えると、やっぱり教育面での国際化、つまり留学する人とかです、留学生の受け入れとかそういうのが非常に重要だというふうに思うからです。政府は留学生の受け入れとか留学生を送り出すことに非常に力を入れてまして、教育再生会議、教育を再び甦らせようという教育再生会議と

いうのがあるんですけれども、ここでもグローバル化への対応策として、留学生を倍増させようとか、それから、英語教育を徹底しようという提言がされています。それを受けての安倍政権は、日本再興戦略、日本を再び興す戦略です。Japan Renaissance Strategy と言っても、訳してもいいと思うんですけれども。この日本再興戦略でもですね、2020 年までに今の 6 万人から、留学生、今後留学する人の数を 12 万人に倍増させようという目標値を設定してます。

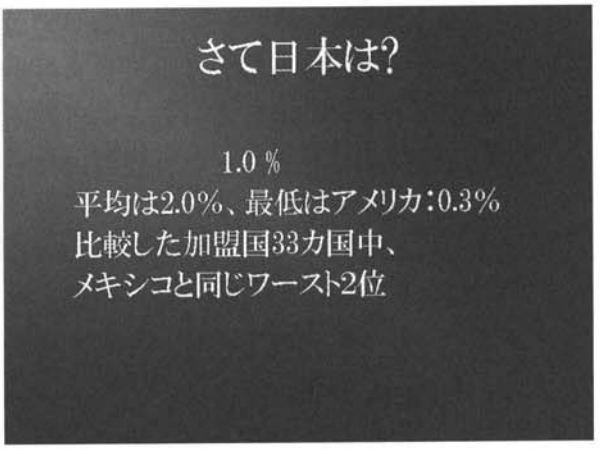
それからご存じのように、文部科学省も、この英語教育というのを重視してまして、小学校 3、4 年生から外国語活動というのを始めようということになってます。今は、小学校 5 年生で外国語活動というのをやってるんですけども、これをもっと下の小学校 3、4 年生から外国語活動と、英語でちょっと遊ぶと言いますか、そういう外国語活動をやろうということです。それで、5、6 年生から英語を正式な教科に週 3 コマ程度ということも考えてますし、それから中学校では、英語の授業は英語でやるというというような方針も打ち出しています。次の数字をちょっと見て欲しいんですけれども。



経済協力開発機構（OECD）というところが、OECD 加盟国の教育に関する調査というのをやっております。この中で、海外に留学している学生の割合というのを調べてまして、これにもあるように、最も高いのはアイスランド、ヨーロッパの国ですねアイスランド。18.9%の学生が海外へ留学していると。次にスロバキア、ここで 14.1%。それからアイルランドでは 13%、それからエストニア、いずれもこれはヨーロッパの国なんですけども、エストニアでは 7.7%が外国に留学してます。そこで質問なんですけども、さて日本は学生のうち何%の人が外国に留学しているでしょうか。

100 人に 5 人、5%だと思う人。

100 人に 1 人だと思う人。



正解です、1%なんですね。日本人の学生の外国への留学数というのは 1%しかありません。これは、比較した加盟国 33 ヵ国中、ワースト 2 位でした。日本 1%。平均は 2%。最低はアメリカで。ワースト 2 位が日本ですから、ワースト 1 位がアメリカで 0.3%。アメリカはだいたい受け入れには熱心ですけども、送り出すのは、全体数は多いのですが、あまりパーセンテージでいうと熱心ではないということです。日本の 1%というのは、メキシコと同じだということなんですね。

じゃあ何故、日本からの留学生というのがこんなに少ないのか、しかも減っているんですけれども。減っているのかというのを見ていきたいと思うんですけれど。

これも、OECD の調査によるものなんですけれど、日本の学生の留学先というのは、1 番上のアメリカが 1 番多いんです。圧倒的に多いです。一番下の合計表で見ますと、全体で右下ですけども 5 万 7000 人ぐらいですけども、そのうち 2 万 5000 人ぐらいが、アメリカに

日本人留学生はどこへ?

上位10カ国留学者数推移表

	2001年	2002年	2003年	2004年	2005年	2006年	2007年	2008年	2009年
アメリカ合衆国	46,810	45,960	40,835	42,215	38,712	35,282	33,974	29,264	24,842
中国	14,692	16,084	12,765	19,059	18,874	18,363	18,640	16,733	15,409
イギリス	6,206	5,741	5,729	6,295	6,179	6,200	5,706	4,465	3,871
オーストラリア	2,407	3,271	3,462	3,172	3,380	3,305	3,349	2,974	2,701
ドイツ	2,182	2,317	2,438	2,547	2,470	2,377	2,385	2,234	2,140
台湾	1,520	1,832	1,825	1,879	2,126	2,188	2,297	2,182	2,142
カナダ	1,478	1,483	1,460	1,750	1,750	1,812	1,611	2,169	2,005
フランス	1,639	1,460	2,490	2,337	2,152	2,112	2,071	1,908	1,847
韓国	697	721	938	914	1,106	1,212	1,235	1,062	989
ニュージーランド	499	502	566	913	916	1,036	958	1,051	1,025
合計	77,930	79,371	72,508	81,181	77,665	73,887	72,126	64,042	56,971

行っているんです、これ2001年、1番左端の数字と比べて大幅に減ってますよ。アメリカに行く学生がどんどん減っているということが、全体の数を減らしてるという理由になってます。英語圏への留学が少なくなったり、もしくはオーストラリアとかニュージーランドとか他の国に移ってるということです。あと、日本人の学生の留学先として、中国・台湾が増えてるということなんです。ただ全体的に、この2001年合計の数で7万8000人だったのが、2009年には5万7000人になってるということで、全体の数も減ってるということなんです。どうして、日本から留学する数が少なくなってるかということなんですけども、このOECDというところが見ているところではですね、これは日本人の学生の内向き傾向や、外国に出るリスクへの恐れを反映しているのではないかと、そういう風に言ってます。それと私自身は、内向き傾向だから日本人の留学生が減っているという部分については同意しませんけれども、外国に出るリスクへの恐れを反映というのは、これは当たってるんではないかという風に思います。内向き思考というのは、やはり経済状況が、ずっとバブルの崩壊以降悪化していたわけで、留学を希望していても、留学を諦めざるを得なかったり、それから、就職が非常に厳しくなってるということで、就職活動が始まるのがどんどん早くなってきて、留学していると就職できなくなるんじゃないかということで、留学を避けるというのが背景ではないかと思います。学生といったら我が儘を、内向き思考、内向き思考だと言いますけれど、私自身は必ずしもそうじゃないと思ってますし、例えば外でいろいろ取材とか仕事で行って、日本人の若い人達を結構見ます。日本に来てたりする学生で留学したり、働いてるという人も多いんですけども、昔に比べてそういう人の全体的な数としては、どんどん外に出てきてるんじゃないかと思うんで、やっぱり内向き思考というのは当たらないんじゃないかなと、そういう風に思います。やっぱり、社会的な環境というのが大きいんじゃないかなと。留学してたら就職戦線に乗り遅れるとか、付いてけなくなるとかいうのもありますし、それから全体的にやっぱり日本の家庭の経済環境というのが厳しくなって、留学する余裕が段々となくなってきてるということが、そういうことがあるんじゃないかという風に思います。ただそういう状況があるにしても、やっぱり留学生の数が減ってるというのは、これはグローバル化の時代で世界の潮流からは外れてるわけで、そこをやはり政府も非常に重要視してて、留学生を倍増させようと一定の目標を出してるんじゃないかと思います。

経団連も、政府の要請を受けて2016年、2年後の4月入社の採用から、大学生の就職活動の解禁時期というのを3年生の一番終わりの月、3年生の3月に繰り下げる方針です。今は、12月ですね。だけど、それをもっと後ろに倒して、3年生の1番最後の月に解禁しようということで、もっと2年、1年2年3年生の間にですね、留学しやすくしようという方針を、経団連は打ち出しています。2016年4月からの入社の人の方が学生対象となります。

それから、日米文化教育交流会議という場があるんですけども、ここでも留学生の問題が大議論となってます。私自身も日米文化教育交流会議、カルコンというんですけれども、カルコンのミーンなんですけども、これ自体はですね、1961年に当時のアメリカのケネディ大統領とそれから日本の池田勇人首相と

の間で作るということを決定したということで、日米の文化教育面での交流を勧告しようということなんですけれども。そこの会議でも、留学生をどんどん増やしていこうということを、政府に提言してます。ここで、このカルコンの会議でシンポジウムを去年開いたんですけども、そこで問題になったのが、アメリカへの留学生が減っているという問題です。このアメリカへの留学生が減っているというのは、日本だけの現象です、インドとか中国とか韓国からの留学生というのは、どんどん出てるんです。



この図を見ていただいたら分かるんですけど、青の線がインドです。ぐーっと伸びてる。中国の学生、アメリカに留学する学生というのも、どんどん伸びてると。それから韓国の学生でアメリカに留学する人の数というのも、どんどん増えてると。ところが、黒の線、日本の学生はどんどん減ってる。日本の学生がアメリカに留学する数はどんどん減ってるという状況です。同じような状況で台湾にもあるんですが、台湾は横ばいになってますので、日本はどんどんどんどん減ってるという状況が起きてます。

中国とか韓国とかそれにインドというのは、経済的にもやっぱりどんどん伸びている新興経済国ということで、国際経験のある学生というものを高く評価してると。その為に、学生がどんどん外国、特にアメリカに留学するという状況が起きてます。海外進出をしなければ生きていけない企業というのが、特に韓国の中では多くなっているわけですけれど、そういうところからです。どんどん英語力を身に付けようということもあって、アメリカに留学する人が増えてます。

中国も、大学生になりたいという人がたくさんいて、中国だけでは進学に全員受け入れることが出来ないということもあって、海外留学を志望する学生が増えてます。ところが日本では、この留学経験てのは殆ど評価されないと、しかも1年以上留学すると、今度就職活動にも悪影響が出るという風に、さっき話したような社会構造上の問題があるという風に思います。ただ、中小企業も含めて、この海外に進出する時代で進出しなければ生きていけないというグローバル化な時代です。こういう人材の活用についてでも、日本企業というのはより積極的に採用するということを始めてますし、どんどん進めるべきだという風に私は思います。

世界というのは、この国際化の時代には、この留学生が就職に不利になるという状況は改善すべきではないかという風に思います。日本人の海外留学生の総数というのは、さっきも見たようにおよそ6万人なんですけども、だいたい毎年1万人ぐらいが留学を終えて帰国してます。こういう人材というものを、どんどん活用すべきではないか、という風に私自身は思います。どうして私がこの留学について、ここまでこだわるかといいますと、私自身、高校時代にアメリカのケントサービスという留学制度があって、アメリカのアイオワ州という中西部の南の町に1年間行った経験があるんですけれども、やっぱりそこでの1年間、アメリカ人の家庭の中に住んで、一緒に生活して一緒に学校に行ったというのが、その後自分の経験にとってもすごく役に立ったと思いますし、自分自身の考え方の幅を広げるという意味でも非常に役立ったという風に思っております。例えば、具体的に仕事でどう役立ったかというとです、NHKに入ってから、アメリカに、特派員として通算12年ぐ

らい行ったんですけども、いろんな大統領選挙とかイラク戦争とか同時多発テロ事件とかいろいろありましたけれども、そういう時にアメリカ人がどう反応するだろうか、アメリカ政府がどう反応するだろうかというのを読むのが、分析して読むといいますか、どう反応するのかというのを読んだ上で、所謂取材したり、リポートしていくというのが特派員の仕事なんですけども、アメリカ人の考え方をを読むという意味においてでですね、すごく役立ったんです。

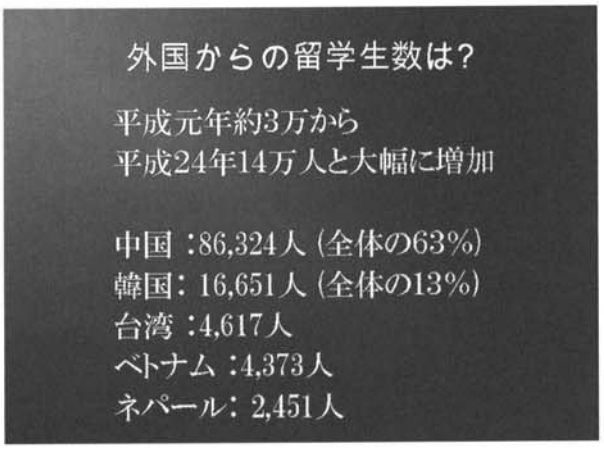
私が高校入学をしたのは、1966年から67年で、相当昔ですので皆さん勿論生まれてなかった時ですけども、その時アメリカは、ベトナム戦争という戦争をしてました。ベトナム戦争って聞いたことあると思うんですけれども、実感として全くないと思いますけれども、アメリカが、相当な数の人間をベトナムに兵隊を送ってですね、当時の北ベトナムと、それから南ベトナムの解放を名目とした戦争をした時期がありました。その時期に、私高校留学してたんですけども、その時にアメリカ人の家庭で、毎晩テレビニュースを見ながら、家族で議論をするんです。私が行った家庭では、父親がベトナム戦争を反対なんで、何故反対かというと「あんな遠いアジアの国にまで行って、アメリカ人が、アメリカの若者が命を落とす必要は全くはない」という理由でベトナム戦争反対ということで、ニュース見ながらそれを盛んに力説してました。それから、私のアメリカの家庭の弟は、逆に反共産主義者でして、南ベトナムが北ベトナムの共産主義制国家に、打ち負かされるのはあってはならないことであると、南ベトナムが共産主義化すると、どんどんどんどんそれが他の国にも広がって、これドミノ理論というんですけども、ドミノが倒れていくように共産主義国家が増えるということで、ベトナム戦争擁護論者でした。

そういうテレビのニュース見ながら、そういう議論を、毎晩親子で繰り広げていくというのを見てまして、それが何十年後かに特派員で行った時に、例えば大統領選挙で誰を支持するかということについて、アメリカの一般の家庭では、どんな議論が今頃やられているのだろうかというのを、何となく想像できたんです。実感として何となく分かって、今度の大統領選挙で、アメリカ中西部のある家庭では、多分こういう議論が親子の間で行われているんだろうな、夫婦の間で行われているんだろうなというのを、何となく読めるということができました。そういう意味で、私の高校留学経験というのはすごく役に立ちました。それから、大学の時にも1年留学したんですけども、大学も同じで、アメリカの学生が社会問題に関していろんな議論をしてるのに参加しましたけども、アメリカの学生達はどんな議論をしているのだろうかな、というのを何となく読めるというような形で、肌感覚で分かるといいますか、そういう風に自分自身のキャリアにも、非常に役立ったという風に思ってます。そういう意味でも、だから留学というのは、他の国の普通の人達が、どういう考えをしているのだろうということがよめて、それに基づいていろいろ仕事も出来るし、それから、私のような特派員の場合なら、分析も出来るという風に役立ったということで、肌感覚で他の国の人達の考え方が分かると言ったら大げさですけども、ある程度推測できるという意味でも、これからやっぱり、いろんな面の人と付き合っていかなければならない時代に入りましたので、やはり留学というのは非常に大事なんじゃないかという風に思います。

異文化体験といいますか、違った文化を体験するというのは。文化というのは、それぞれの文化かが、それぞれ重要性を持っているという、この文化相対主義というものを実感して、お互いの文化というものを尊重しながら共存していこうということを、肌感覚で学べる、そういう機会じゃないかと思います。これはやっぱり国際化時代の、グローバル化

した世界で生きていくためには、非常に必要な能力じゃないかという風に私自身思います。

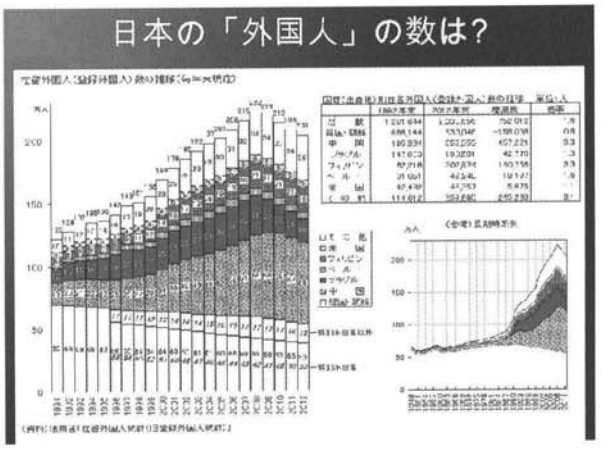
外に出て行くという外国留学の話をしましたけれども、じゃあ逆に外国人の留学生の受け入れの方はどうかというのを見てみたいんですけども。



この中にも、何人の方か留学生の方がいらっしゃるかと思うんですけど、そういう外国からの留学生の数というのはどうなってるのかというのを見たのがこれです。平成元年にはおよそ3万人でした。それから平成24年一昨年ですね、一昨年は14万人という大幅に増加してます。中国がご覧の数字、韓国、台湾という風に続いてます。外国人留学生の受け入れという面では、結構、どんどん進んでるという風に思います。送り出すとともにやっぱり受け入れるというのも相当重要なことで、どんどん外国からの留学生を受け入れて日本を知ってもらうと共に、交流を通じて外国を、日本人も外国を知る機会を得るということで、これも非常に重要なことじゃないかという風に思います。今、日本の大学も、国際教育といいますか、英語による講義を増やすということをやり始めてますけども、こういうことは今後どんどん進めるべきじゃないかと私自身は思います。

さて、今は外国人留学生の数を見たんですが、じゃあ日本というのはどの程度外国人が住んでいる国かというのを示したのがこの数字です。

これも2007、8年までは増えてたんですが、



その後リーマンショックとかいろんなことがあって、その部分では減ってる。これは経済的な影響が一番大きいいう風に思いますし、それから特別移住、一番下の黄色の部分ですね、在日韓国人とか在日朝鮮人とかいう方が、老齢化して亡くなってるということも大きいんですけれども。外国人の数という意味でも、私自身はもっともっと受け入れていいんじゃないかという風に思います。

以上が、いろんな数字から見た日本の国際化というものなんですけど。その国際化、藤澤さん偉そうに国際化、国際化というけれども、国際化にメディア・マスコミはどう対応してきたかということ。テレビの世界を中心に話しをしたいんですけども。残念ながら日本のメディアというものは、この部分ではあんまり偉そうなことは言えないんです。あんまり国際化された世界じゃない。日本のメディア・マスコミは、という風に思います。勿論、視聴者が関心持つニュースというのは、どう同心円的に広がっていくというのは、まず自分の周りのこと、それから自分が住む地域のこと、それから自分が住む国のこと、それから更に広がって世界のこと、という風にやっぱり、一番身近なニュースほど関心を持ってるんですが、これが世界共通のことですけど、日本人はそれが、その傾向がどうも非常に強いんです。他の国よりも身近なニュース、地域のニュース、国のニュースに対する関心が強すぎるというか、強いんじゃないかという風に思います。

国際ニュースに関心？
（東京大学林香里教授ら11カ国の11人の大学教授の共同研究2010年）

①ギリシア59%　②US52%
③豪州49%　④ノルウェー47%
⑤カナダ45%　⑥イタリア43%
⑦SK40%　⑧UK39%
⑨日本28%　⑩コロンビア21%。

日本での国際ニュースに対する関心というのは、ある調査によりますと最も低い部類に入ります。これは東京大学の林香里教授という、ロイター通信というイギリス系の通信社で働いてた人で、名古屋の南山大学を卒業して、記者でロイター通信の記者をやったりして、今は東京大学の教授をやってる人なんですけれど、この東京大学の林香里教授ら11人が、共同研究を11ヵ国の大学教授の人達としました。その結果です。問いは「あなたは国際ニュースにどの程度関心を持ってますか」関心を持ってるという人のパーセンテージを調べたものです。これによると、国際ニュースに関心がある、かなりある、ある程度あるというような答えをした人が、ギリシャが59%、それからアメリカが52%、オーストラリアが49%、以下ノルウェー、カナダ、イタリア、SKは韓国ですけども、韓国、イギリスと続いて、日本は何と9位でした。パーセンテージでいうとギリシャの半分ぐらいということです。非常に、国際ニュースに対する関心が日本の、このテレビニュースに関しての調査ですので、日本のテレビニュースを見る人達は、低いという結果が出ました。それから、視聴者の関心の低さをある程度反映してか、テレビニュース全体に占める国際ニュースの割合も少ないという傾向が見られました。

これがそうですけれども、テレビニュースの、例えば30分のテレビニュースだとしますと、その何%が国際ニュースで占められていますかという調査をしたんですけれども、現実にそれぞれの国のテレビニュースをモニターして数字を弾き出したんですけど。これによると、国際ニュースの割合が1番多かったのがカナダ。以下ノルウェー、イギリスと続いてて、日本は真ん中程度の19%でした。これも比較的低い方です。

国際ニュースの割合？

①カナダ３５%
②ノルウェー３３%
③UK２６%　④イタリア２３%
⑤SK２１%　⑥日本１９%
⑦コロンビア１８%
⑧ギリシア１７%
⑨US１４%
⑩インド１３%　⑪豪州１２%

日本のメディア・マスコミ、特にテレビは、新聞はそうでもないかもわかりませんけれども、日本のテレビ、NHKも含めて日本のテレビニュースは、国内ニュース中心。それも、政局とか事故とか事件とかいうのが多いです。政局のニュースというのは、政治家がどう動いてる、与党・野党がどう闘いを繰り広げているかという、そういう政局ニュース。このところ、全体的には少なくなっているとは思います。これは別に国際化が進んでるから政局ニュースが減ってるとかじゃなくて、日本の政治構造が変化して、自民党の一党体制がずっと続いてたんですけども、その時にはその自民党の中の派閥同士の争いというのが、非常に日本の政治の行方を見る上で大事だったんで、政局ニュースが多かったんですけども、それが今、与野党が政権交代する時代に入って、派閥も解消されたということで、自民党一党支配の終焉が政局ニュースが少なくなった理由だと思うんですけども。いずれにしても、政治ニュースというのは多いと。それから事件・事故というのは重要ですけども、ちょっと取り上げすぎじゃないかなという風に私なんかは思います。交通事故で何人死んだというのは、人が亡くなるという意味では

大変なニュースですけども、でもそれが全国ニュースで取り上げるほどのニュースバリューがあるのかどうか、ということについて私自身はやっぱり疑問です。それから日本のテレビニュースを見てますと、お天気、気候に関するニュースがあまりにも多すぎますよ。暑い、寒い。昨日は今年この冬一番の寒さだとか、台風とかそういう人命に影響することのニュースに関しては必要だと思いますけれども、暑い寒いっていうニュースが、時にはNHKの昼のニュースのトップに「今日は今年一番の暑さ」だとか何とかそういうことで、日本のニュースはどうなってるんだという風に、私なんかは思って、現役の頃は「もっと国際ニュースを増やせ」というので毎日のように喧嘩していました。

テレビニュースのように新聞記事がどうやってああいう紙面になって、どうやってああいうニュースの大台になるかというのは。それぞれのニュースの重要性というのもありますけど、それとともに新聞社でいうところの政治部、経済部、社会部、国際部もしくは外資部と外報部、それから科学部、科学文化部という所がありますけれども。そういうところが、如何にこのニュースが大事であるかというのをニュース、そのニュースなり紙面を構成する編集責任者に対して、アピールするかというところにもかかってるんですけれども、そういう意味で私なんかは、国際現場でずっとやってきた立場からいって、四六時中国際ニュースの扱いが悪いので、編集責任者と喧嘩をしたという記憶があります。

いずれにしても、やっぱり国際ニュースをもっと見れないと、日本のテレビニュースを見てたら世界がどう動いているのかというのが、なかなか読めませんよ。例えば、今度のクリミアのロシアへの編入とか、そういう時にはある程度大きく載るんですけれども、国際ニュースというのは、中程度のニュースなどを継続して取り上げてないと、ぽかっと急に取り上げられても、殆ど意味が分からないというニュースなんで、そういう意味でその国際ニュースの扱いが悪いと、これは相当やっぱり日本は、蛸壺にはまったような、そういう国になってしまうよということで、毎日喧嘩をしたという記憶があります。

では、どうして日本のテレビニュース、新聞もある程度そうと思いますけれども、超ドメスティックかということなんですけれども。やっぱりこれは、視聴者、読者もそうだからと。それを反映して、テレビも新聞も視聴者を獲得する、読者を獲得するためには、視聴者、読者の関心の度合いに応じてニュースを作っていく、構成していく、新聞記事を構成していくと、紙面を構成していくということにならざるを得ないんじゃないかと思うんです。外の世界にあまり関係なく生きていけるという、そういうやっぱり島国意識というのが、まだまだ日本にあるんじゃないかなと。メディアはそれをいいことに、そういったクライアントといいますか、お客さんにおもねっていれば、視聴率も上がる、読者も増えるという、商売もできるという、そういう安易さが、まだ日本のメディアにはあるんじゃないかという風に思います。それを可能にしたのが、一つはやっぱり日本語という特殊言語だと思うんです。日本で、ほぼ100%の人達が喋っているという日本語が、ほぼ唯一の言語であるという。それが、日本語で生活している人が1億人以上もいるという、かなりの規模のマーケットであるという、そのマーケットの大きさというものも、日本のメディアをぬるま湯状況にしている理由じゃないかという風に思います。そういう状況というのは、一つ一つは改善されて、特派員の数とかそれから報道の量とかも、国際ニュースに関しても増えてきてはいるんですけれども、やっぱりヨーロッパ、特にイギリスとかドイツと比べると、まだまだ国際報道が不充分なんじゃないかなと思います。これは、それぞれの国の国際化の度合とか、それから国際化していかなければ機能しないという国の性格

ですか、ヨーロッパとかはE.Uに27ヵ国入っていて、それぞれ国境をチェックなしに乗り換えられると、経済的にもかなり統一されてきているということで、やっぱり外国、外の国のことに関心を持たなければ生きていけないという、そういうことも反映をしているという風に思いますけども。日本だってやっぱり、外の国と付き合っていかなきゃ生きていけないわけですから、そういう面で、もっともっと日本は国際化すべきだと思いますし、特にメディアといいますか、マスコミはもっともっと国際化、グローバル化していかなければいけないんじゃないかという風に思います。メディア、テレビにとっての国際化、グローバル化というのは、そういう風に国際ニュースを、自分の国の国内のニュースでも増やしていくと。新聞の紙面でも増やしていくとともに、もう一つは、もっと外に出て行くと。つまり、例えばテレビでいうと、国際放送をやるという風なことで、もっともっと日本の出来事を世界に知らせるし、世界との日本の関わりを英語でなり日本語でなり、言語を持って世界に伝えていくということをしなければいけないんじゃないかという風に思います。

国際化時代のメディアの役割

- **グローバルな視点とローカルな視点同時に持って報道**
- **グローバル化の中でどう対応するかその指針を与えるような報道**

ただ、世界に向けて放送するとか、世界のニュースを国内に向けて放送する努力を幾らやっても、見てくれなければ駄目ですし、それから記事を読んでくれなければ、そういうメディアの国際化の持続性はないというわけで、じゃあどうすればいいのかということなんですけれども、私がキャスターをやってた時代に、ニュース番組で心掛けたのは、できるだけ世界と国、それから地域、視聴者を結びつけられるようなニュースを、取り上げて放送するということでした。世界の動きを、この身近に引き寄せて、視聴者、読者にとっての指針を与えられるようなニュースにする、ということを心掛けました。

ここに書いてあるように、グローバルな視点とそれからローカル、日本としての視点からですね、同時にこれを報道していくと。それによって、世界の出来事を、どういう影響を与えるのだろうかということを、身近な問題として捉える意識を広げてもらうと。日本や、それから日本国民への影響というものをできるだけ説明するということに努めました。それをやる方法というのは、単に外国の動きを伝えるだけではなくて、グローカルな視点といいますか、グローバルな意識と、それから視点はローカルに持ってくるということで、グローカルな視点での行動で、外国の出来事も、自分の問題として捉えてもらうという風に試み、努力してみました。

メディアの国際化の必要性

グローカル
＝
グローバル（意識）＋ローカル（視点）

「テレビが国境を越える」時代、その役割は
世界と国、地域を結びつけること

グローカルというのは、グローバルとローカルの合成語ですね、要するにグローバルな動きが、グローカルとどう関連しているかということで、お互いグローバルなことを意識しながら、ローカルとしてどういう影響があるのか、どう対応していくのかというのを考えるのが、グローカルな視点だという風に思います。このグローバル化時代のメディアと

いうのは、グローカルな視点での行動というのを、増々迫られてくるんじゃないかというのが、私の考えです。

2007年の11月から何ヶ月間か、ニュースウォッチ9という夜のNHKの番組の司会をやってたんですけれども、この時にも、このグローカルな視点での、報道というのをキャスターとして心掛けたつもりです。

ここでちょっとDVDの映像を見ていただきたいんですけれども。1つは、2008年の1月に放送した原油高と日本中の中小の企業のリポートです。それからもう1つ別に、3月に、温暖化が日本に、日本の産業にどういう影響を与えているのかという放送をしました。話ばかり長くなったので、DVDの映像を見てもらいたいと思います。

まず、2008年の1月に放送した原油高のリポートです。

(映像を見る)

これは、原油100ドル、1バレル100ドルになったと。日本の産業にも相当影響があるんじゃないかということが問題になってきた頃。ニュースウォッチ9の編集会議で、じゃあこれをどう取り上げるかということでいろいろ議論して、日本の産業がどう影響を受けているかというだけではなくて、それにどう対応しているのだろうかと。つまり、単に「大変だ大変だ」というのではなくて、新たな工夫で、どうこの危機を乗り越えようとしているのかというものを取り上げるべきじゃないかということで、全国の放送局にいろいろ呼びかけて作った、そういうニュース企画です。グローバルな現象である原油価格高騰というものを、ローカル、日本としてどう受けとめて、どう対応すべきかという、そういう一種グローバル、ローカルを足し合わせたグローカルな視点からの放送というものの一つの例ではないかという風に思います。

もう1つ、環境問題が日本にどういう影響を与えているのかどうか、それにどう対応しているのかという企画ニュース。これは2008年の3月に放送したものなんですけれど、これをご覧いただきたいと思います。同じような長さですけども。

(映像を見る)

私が言いたいことは、要するに、日本のテレビニュースというのはさっきも言いましたように、国内ニュースが中心で、国際ニュースが少ないと。しかし、全体として国際化が要請されてるし、グローバル化の時代に入ったと。そういう中で、国際ニュースを国際的な動き、グローバルな動きをどうやっぱり、日本の視聴者、新聞の場合は読者に関心を持って伝えるかというと、どうしても身近な問題、自分の問題に引きつけてある程度見てもらう、聞いてもらう、書いてあるなら読んでもらうという風にしなければ駄目だということで、グローバルとグローカルな視点を両方合わせた、グローカルな放送・報道というのが大事だということを言いたかったわけです。やっぱり、メディアも国際化の時代にどんどん変わっていかなきゃならないと思いますし、勿論それぞれメディアが変わることによって、国民も変わる。また、国民が国際化するグローバル化時代の中での、日本の生き方、日本人の生き方を考えるという、国際化するということが重要なわけですけれど。私、このところ世の中の動き見てて、一方で国際化が叫ばれているのに、それと逆行する動きといいますか、ナショナリズムといいますか、愛国主義というのは国を愛する気持ちで、誰もが持っているものですが、行き過ぎた愛国主義といいますか、ナショナリズムが、日本もそうですし他の国も同時に起きているという、そういう状況があるんじゃないかということで、非常に心配してます。

国際化するということと同時に、やはりこのナショナリズムの壁っていいますか、ナショナリズムの首木みたいなものをなくしていかないと、やっぱ真の国際化というものは出来ないんじゃないかという気がします。実はこの国際化とナショナリズムというのは、

コインの表裏のような関係で、国際化しようとする動きが強まれば強まるほど、今度は自分のことを考える動きっていうものが、どうしても強まるんじゃないかと思うんです。グローバル化すると、世界が或いは社会っていいますか、国が国際化、いろんな国際化の動きが起きると、それに引き戻すような、自分に戻る意識が起きて、それが間違った方向に行くと、排外主義といいますかナショナリズムというものが起きていくんじゃないかと思うんです。人間誰もですね、外国との関係が、深くなるにつれて自分に戻る意識というものも起きて、それが悪い方向に行くとナショナリズムになりがちだという気がします。



ナショナリズムの問題として、私一番現実に、その当時アメリカにいたんで感じたんですけども、2003年のイラク戦争の時ですね、アメリカがこのナショナリズムの罠に陥って、メディア自体もマスコミ自体も、ナショナリズムの罠に陥ってしまいました。イラク戦争では、フセイン憎しということで、アメリカのマスコミ・テレビ中心ですけども、アメリカのマスコミが非常にナショナリスティックな報道をした会社もあるということが見られました。例えばニュース番組のキャスターがアメリカの国旗のバッヂを付けて放送するとか、それからフセイン憎しという、フセインを叩く報道を、論評を次から次に繰り広げるというような、冷静なジャーナリストでは考えられないことが、イラク戦争報道では起きました。特に私は、やっぱり商業ジャーナリズムというのが、ナショナリズムに陥りやすいんじゃないかと思うんですよ。商業ジャーナリズムというのは、つまり視聴率を稼いでそれを稼ぐことによって、広告料も増えるという、そういうテレビで言えばそうなんですけども、ジャーナリズムが商業化するということによって、国民のナショナリステックな、そういう感情に訴える構造に陥りやすいんじゃないかという風に思います。

日本の場合も、報道機関が例えば、日中問題それから韓国との関係とかいろんな問題で、非常にナショナリズムな報道に傾く場合も見られます。日中の歴史問題とか、日韓の歴史問題とかということで、ナショナリズムが沸き上がって、特にブログなんかでは非常に感情的な議論が交わされるというようなことが起きてます。どうしてもグローバル化、国際化の時代には、その裏側としてやっぱりナショナリズムにも固まりやすいと、場合によっては行き過ぎたナショナリズムに陥ってしまって、逆に関係を悪くすると、国際化を阻害するといったような状況が起きるんじゃないかと思います。国民もそれからメディアも、共にやっぱりこのナショナリズムの罠というものに陥ることを、出来るだけしないように心掛けるべきだと思いますし、メディア特にテレビの世界において、それを防ぐ一つの手段というのは、私は国際放送ではないかと思うんですよ。

NHKも2009年からテレビの国際放送を始めましたけども、やっぱり日本のことを知ってもらう、外国との関係についても、テレビの番組上で意見を冷静に戦わせると、そういう場がテレビの国際放送ではないかと思うんで、やっぱりテレビの国際放送というのは、これからもどんどん進めていくべきだと。CNNとか、それからアルジャジーラとかですね、いろんな形で世界をマーケットにした国際テレビ放送というのがありますけども、そういうのって、やっぱりBBCもそうですし、そういうのとある程度肩を並べられるような

日本のテレビの国際放送というものを作っていくべきではないかと思うんです。

今、政治家が言ってるのは、日本を宣伝するための日本の政策を広く世界に知らしめるためのテレビ国際放送強化論なんですけれども、私はそうじゃなくて、冷静な報道機関としての立場に立った、中立、公正、独立した編集権のことでのテレビ国際放送というのを、日本としては力を入れて行くべきではないかという風に思います。

国際化時代のメディア、私はもう卒業してしまいましたけども、国際化時代のメディアというのは、広い視野から客観報道というものを原則として、先に言いましたように、ナショナリズムの罠に入り込まないような自覚、それから自律、自制を以てやるべきだという風に思います。結局、どの分の人間も、この地球という一つの星に住んでる住人なわけですから、運命共同体であることに変わりはないと思うんです。だからそういう、やっぱりグローバルという意識を持ちながら、日々ローカルな対応もしていくということでないと、ローカルな対応だけでグローバルなこと、世界、他の国のことはどうでもいいということでやっていくと、日本は孤立していくのではないかという気がします。

このグローバル化時代の国際化のあり方ということについて、私なりに1時間、1時間40分か50分程話をさせていただきました。この時間、もしご質問があれば、ちょっと堅い話をして恐縮でしたけども、テレビの世界どんな世界とかですね「どうやったらテレビ局に入るんだろう、どんな仕事があるの」そういうことでも結構です、何でも結構ですので、ご質問があれば答えていきます。

○質問者　ありがとうございました。今もNHKのニュース9は毎晩放送されておりますけれども、ニュースウォッチ9はですね、どういう部門がどういう風に動いて、どういう風に編集されて当日放送になるのかというようなことを、教えていただけますか？

○藤澤　NHKのニュース番組っていうのを大きく分けますと、定時ニュースというのがありますね。例えば朝、5時から始まるとか6時から始まるとか。それから昼のニュースとか午後7時のニュースとか。これはどういう風に作られてるかといいますと、朝は「おはよう日本」という番組がありますけども、これは一つの、1種独立したプロダクションみたいな形で動いてます。ただ、ここに入るニュースの素材は、全て報道局の政治部とか経済部とか社会部とか国際部とかいろんな所から原稿を出したものを、映像も含め加工して放送するということで、基本的にはNHKの伝統的なニュースの一つです。午後7時のニュースも、同じような形式です。一つだけ、ちょっと系統の変わった番組といえば、昔やってた「ニュース9」、今の「ニュースウォッチ9」で、これはよりプロダクション的な色彩が強くて、独自の編集長と独自の取材陣を持って、できるだけ定時ニュースで扱ってるニュースを、更に掘り下げて放送しているという形です。基本的には、勿論報道局の各部の記者が、参加するわけなんですけれども、各部の記者の中から何人かをフィックスで、専任でニュースウォッチ9に出して、だから編集長も、各部から1人ずつぐらいニュースウォッチ9のプロジェクトの中に入れて、プロジェクトの全体でできるだけ取材を深めて、番組を作っていくという方式です。その他の午後7時とか朝のおはよう日本なんかは、基本的にはこれは報道局での各部で作ったニュースをそこに集めて放送するということになってます。

ただ、そのニュースのオーダーっていうのが大事なんですけれども、それをだから、どうやって誰が決めるのかというのは、おはよう日本では、おはよう日本の編集責任者の方がいまして、各部から集まるニュースを「こっちの方が重要だ」「あっちの方が重要だ」ということで、ニュースを並べると。それから、

それは定時の10時のニュースとか11時のニュースとか、昼のニュースとかでもそうですし、夜の7時のニュースも同じ編責が、やるんですけれども、ニュースウォッチ9だけは独立性が高くて、独自のプロジェクトチームを持ってて、編集長も他の定時のニュースの編集長は兼ねないと。まあ一種のプロジェクト、プロダクションです、というような方向でやってます。ただやっぱり、お互いの報道局とニュースウォッチ9のプロジェクトというのは、連携してやらないとニュースは出ませんので、お互いに、もっとこれ掘り下げてくれとか誰か人を出してくれ、これ出してよというんで、プロジェクトを全てやるんじゃなくて、プロジェクトが中心となって、報道部の各部協力を得て、ニュースを更に掘り下げて伝えていくというそういう方式。どうしてそうなってるかというと、NHKの昔の伝統で、磯村尚徳さんという我々の大先輩ですけども、彼がキャスターニュース的なものを日本で始めて、それが伝統で続いててニュースウォッチ9だけがそういう独自のプロジェクトで動いていると。より欧米的なニュースの出し方かも分かりませんけども、キャスター色を強く前に出してやると。他のニュースはアナウンサーがやってますけども、ニュースウォッチ9だけはずっと伝統的に記者がやってると。つまり記者とは、直接取材する、してきた人間が喋りは下手だし顔もまずいんですけれども、やるというような伝統でやってます。

○饗場　はい。午前中にお話しした饗場ですけども、貴重なお話ありがとうございました。最後の所で非常に重要なことを幾つか言われていたと思いまして、所謂国際化へ対抗するために、対抗するように、ナショナリズムが台頭してきています、それが心配だというお話ですね。全く同感でありまして、2003年のまあ、あの、ナショナリズムの罠というのがあって、それに陥りやすいのは商業ジャーナリズムで、民放であったり、或いは民間の新聞もですね、商業ケースだというわけで、それも確かに同感な感じもします。そういう商業ジャーナリズムに多くが陥りやすいナショナリズムでなくて、そこで強いのは公共放送としてのメディアだと。



○藤澤　そうは言ってないんですけれど。匂わせたかも分かりませんけども。

○森　はい、ありがとうございました。それでは時間が迫っておりますので、これで藤澤先生の講義を終わりたいと思います。ありがとうございました。





地域における社会奉仕

○森　夕食も終わりましてお疲れのところ、ロータリアンの夕べに参加いただき本当にありがとうございます。それで、まずは今日の夕べなんですけれども、ロータリーの夢とか、ロータリーの理念とかそういったものを教えていただいて、参加したロータリアンが、自らを高める勉強の場という風に理解しております。今回は、本日の講師の先生お二人が参加していただけるということで、先生方を交えて、私達ロータリーは、クラブなり個人のロータリアンも、奉仕とかたくさんの奉仕活動をやってこられておりますが、先生方から見た地域における社会奉仕について、何かこういった視点といいますか、見方があるよとか、ヒントを何かいただければいいかなと。まずは講師の先生方にそういうお話をしていただいて、それを踏まえて参加している皆さん方自らの体験談や社会奉仕に関する関わりをお話いただいて、議論が深まって結論が出ないかも分かりませんけども、時間が限られてますので、議論が固まって、また私達の明日のロータリー活動に貢献できたら非常にありがたいと思ってますので、今回は皆さんの意見を出していただいたら有り難いなかなと思います。どうかよろしくお願いします。

今も言いましたように、ロータリー教育というのは、本当にいろいろな、例えば地域におきましたら清掃活動とか、手紙を中学生の2年になったら開ける、5年先の未来の自分への手紙というような活動とか、いろいろな青少年奉仕活動をやってます。特にロータリーは職業奉仕もありますので、今回はこういう風に地域における社会奉仕というのに限定させていただきますので、先生方にはご自分の立場でロータリーを。多分かなりいろいろご理解いただいてないかとは思いますが、ご自分の体験談とかそういうもので、示唆を与えていただくものがありましたら、お願いしたいと思います。

○饗場　簡単に今問題提起という形で、少し何らかのお話をということで、若干考えてはいたんですけれども、私自身はあんまりロータリーとはこれまで深い関わりはなくて、勿論存在は知ってますしいろいろ活動されてるということは分かってましたけども、その理念とか高等的な原則というものを、昨日今日ですね、森さんに初めて幾つか伺いまして成る程という所が幾つかありました。

所謂5つの奉仕ということが原則としてあるので、中でも、倫理的な部分での要素が非常に重要ということを聞きまして、その辺りも非常に印象深いところがありました。今回はその5つの奉仕の中でも、特に地域とか或いは社会奉仕とかいうようなことが中心かと思われまして、私自身は国際関係とかいうのを専門にしているというのもありまして、国際協力というので特に紛争地であったり貧困地域などに外国でいろんな支援をするようなことをやっております。そういうことで考えていくと、地域でロータリーの活動が何らかの形で繋がっていくものが、これから出来るかと考えていきますと、1つは私が大学で仕事をしている関係もありまして、昨今の大学生らの若い世代に対して、何らかのロータリーの活動が繋がるような、そういうものが

あろうかという感じがあるのかなと。

最近の大学生というのは、非常に、小中高も同じなんですけれども、なかなか問題があるといいますか、健全な学生はさほど多くなくて、そういう少子高齢化とかいじめとか、或いは不良行為とかもありますけれども、実はそういう問題があるような若い世代に対して、ボランティア、奉仕がボランティアと若干交わるところがあるんですけど、所謂奉仕活動、ボランティア活動というのに関わらせると、非常に教育方法といいますか、健全に心が立ち直るような、そういう力があるんですね。ですから、そのことで学校、大学も含めて何らかのそういうボランティア活動に若い学生や子ども等が関わるような形をもっと促進していくことで、地域社会に対する寄与というところが大きいような気がします。

大学でも、サービスラーニングという言い方をしまして、いろんなボランティアに関わらせることを授業として取り組んでる面があったりします。それからもう一つは、先程少しお話をしていたんですけども、ボランティアというのは、何となく困ってる人に対して、何か利益が相手に生じるというようなのが一般的で、自分の為にじゃなくて相手の為にというのが奉仕であったりしますけども、実はボランティアというのは、究極には自分の為というところがあって、結局自分も楽しいし、相手も喜んでくれるというところがあったりします。それを更に突き詰めると、今日のレジメにも少し書いてお話はする余裕なかったんですけども、自己肯定感というような表現を書いておりました。自己ですね自分が、肯定する。英語では、Self-esteem と。肯定・評価という esteem ですね。そういう概念がありまして、これは、生まれてきて自分がこの社会で生きている、その自分が存在している意味は何だろうかと、存在する意義はあるのかということです。あなたは存在する意味ないですよとだったら非常に辛いはずですよ。自分がこの世にあるのは何でだというと、お前必要ないからというような状況になると非常に辛くて、場合によっては自殺するとか、暴力的に出る場合は他者に対するいじめとか犯罪ということになってくるわけで、自分がこの世に存在している意味があるのかということを確認したい。それはどうやって確認できるかというと、ボランティアで困ってる人がいて、そこで何か手助けをする。すると相手の人は、わあ助かったわ。とあなたがこれをしてくれたお陰で私は助かった、嬉しい。というのは、そこで自分が、支援活動するという自分がいたことに、大きな意義がそこで生まれるわけです。自分がいて、そこで行動したことで相手が助かった、ということが自分もそこに存在意味があるということが分かるわけで、その自分が、その生きている存在意義が分かるということの自己肯定感、自分は存在している意味がある、肯定できるんだと。これが、持てることによって非常に本人の指針というのが安定して、この社会で生きていこうということになっていくという。そんなことで、実はボランティアというのは、非常にそういう効果があるので、単に人助け、自己犠牲というんじゃなくて、多くの若い世代も含めて自己肯定感が持てない、俺なんかこの世にいても存在する意味がない。よくいじめとかですね、不登校の子ども等は、家庭からも蔑ろにされて、親からも大事にされない。でも「そんな俺なんか生きてる意味がない。」となっちゃって、自ら命を絶ちたいとかいう結論で、そんなことで、実は皆さん方ロータリーを為されているように、非常に大きな力を秘めている。これが上手く活かされたら、地域社会を広くしていく、非常に効果があるというところを、再確認したいかというとこで、簡単ですがちょっと問題提起というふうなことにします。

○藤澤　はい。饗場先生の非常に明確な、ご意見のあとでにざっくばらんに話しますけども、私自身、ロータリーというのに直接関わっ

た経験がありませんので、国際的な組織で親睦を深め合って、そして社会にいろいろ貢献する組織であるというぐらいの知識しかないんですけども、そういう組織が地域でどう社会奉仕していくかということに、やっぱりロータリーの強みというのを活かすのが一番いいんじゃないかという意見を持ってます。

これは、今日講義が終わった後、森君の方から急に夜、講義勉強会があるから参加してくれと言われて、ちょっと考えてたことなんですけれども。やっぱり国際的な組織であると、それで国際的な親睦なり交流を深める組織であるという、その国際的なところがやっぱ強みかなと。やっぱりそれが、ロータリーの特色を示す、活動を通じて示すことになるのではないかと。いろんな社会奉仕をする団体というのは、地域の団体も、それから大きな団体もいろいろありますけれども、ロータリーが、そのように訴えられる社会奉仕は何かというとです。やっぱり国際的な部分に繋がるのが、つまり得意分野を活かすというのが、一つ考え方としてあるのではないかという風に思います。

具体的に国際的な分野で、それぞれの地域で、どう社会に貢献できるかというと、例えば今、中国とか韓国とか台湾とか香港とかが、いろんなところから、特にアジア中心に、北海道十勝が、本当に安い宿に泊まって、鉄道とか航空運賃も本当に安い運賃で来て、それで我々が行ったことのないような所まで観光に行くというようなことで、四国で列車に乗ってましても、聞こえてくるのは中国語とかの言葉です、それからハングルとかそういう場面に居合わせることがあります。

彼らは、自分達の国にはない日本の景色とかそういうのを見たいというのと同時に、やっぱり若者ですので、当たって砕けろということで、いろんなもので日本というものを直に見たいと思って来てるんだと思いますので、そういう人達との交流の場を設けるというのは、そういうことによって、今中国とか韓国といろいろ、日本との間でいろんな問題抱えてますけども、直に日本人の考え方なり、生活を知ってもらうというのも１つのやり方かな、という風に思います。

大事なことは、得意分野で出来ることをやると。それで、つまり財産をいかすことだと。その財産というのは、ロータリーの場合では国際的な交流、親睦、理解を高めることじゃないかという風に思います。それを出来る範囲で、自らの周りでやれるだけやるということが、大事なんじゃないかなという風に思います。

それから、社会奉仕はさっき饗場先生が人の為ではなくて、自らの為でもあると、Self-esteem ですか、自己肯定というものの手段であるということを仰ったんですけども、まさにその通りだと思います。最近実は、私「国境なき医師団」という、これはフランスから生まれた世界のいろんな厳しい医療環境の所に、医師を派遣して、そこで紛争地域だったとか、飢餓地域とか、本当に生命の危険性の伴うような所に行って、医療活動をやってる団体の人と座談会をやったんですけども。やっぱり彼らは、命の危険さえ冒して何でそういう所に行って、医療活動をやるんだろうなというのが、僕の１番の疑問だったんですけども、やっぱり聞いてみると、日本で医師としての活動をやるのも、勿論重要なことなんだけれども、やっぱり、本当に医療を必要としている人達に何か出来ないかと。

医師として元々生命を救うとか、そういう根本的なその目的があるわけですよ。その目的を達成できるような所に行ってやりたいと。場合によっては、命の危険性がある所に行かざるを得ないけれども、その時は最大限のやっぱり注意を払って行くんだという風に言ってました。つまり、やっぱりそれは自己充足、自己肯定という、自らが満足する活動であるという部分があるから、行くんだということが話をしていて分かりました。それは、医師としての使命感といいますか、達成する



一つの手段として活動を重視してると。勿論、それによって多くの人達が命を救われたりしてるわけですけども、それも大事なことだけれども、どうしても医師としての自分の本来目指した部分を、そういう活動によってやりたいということを言ってました。それは結局、自分の一番得意分野でやりたいことをやって、それが世の中の為になるということで、更に素晴らしいという考え方に基づいてやってるんだということを、非常に感動を受けたんですけども。

そういうわけで、ロータリーの場合にも、同じようなことを言いますけども、国際的な組織のパートというか部分でありますから、その部分を活かしてやるのが、やっぱりロータリーらしい社会奉仕の在り方かなという感じがします。

あと一点、いろんなことをやっても、マスコミになかなか取り上げてくれないというご意見があるかと思いますけども、だいたいマスコミというのは、まず面白くなければ何か取り上げないと。意義あることは取り上げないんだけども、意義あることをやってる団体が一杯あると。その中で、ロータリーが何やってるのかをなかなか取り上げられないのは、多分仕方がないことじゃないかなという風に思います。国境なき医師団の人も、全く同じことを言ってました。国境なき医師団というのは、ノーベル平和賞を貰った団体で、世界的に認知されてる団体なんですけども、そこの人達も自分達がいろんな活動をして、それをマスコミにいろいろ説明しても全然取り上げてくれないと。藤澤さんどうすればいいですかという風に聞かれたんですけど。やっぱり、マスコミ・メディアは、それが新しいものであって面白いものであって意義があるものだったら、いろんな取り上げる記事になって、それをある程度全部満たしたものから、取り上げるというところがありますので、あんまりマスコミに取り上げることは、期待しないで自分達がやれることをやるということが、僕はいいんじゃないかと思います。以上です。

○森　ありがとうございました。饗場先生は問題提起をしたいということで。今の饗場先生のお話の中で、その中にも出ましたけども、大学生、最近の若い人は、コミュニケーションが要するに、対相手との意思の疎通というのが非常に苦手だと。それで、高校でもあるんですけども、インターン制度、要するに職場に行って職場を体験して、それで学ぶという。要するに、学校での授業だけでないというのが、今あるらしいんですけども。私達ロータリーは、職業人の集まりですから、その中で先程饗場先生が、一言こういうのがあるよと言っていただいたと思うんですけども。

○饗場　ええ。今現状で、なかなか大学の学長とかがですね、ロータリアンという言葉があるのかと聞きますけども。そうじゃなくて、大学とロータリーの関係というのはあんまりないと思うんです。ですから、もっと協力していろんなことが出来るんじゃないかということは、さっき思いつきまして。その１つに、大学は最近、学問を教えてるだけじゃなくて、所謂社会人の能力、コミュニケーション能力、或いはプレゼン力、或いはチームワーク力、いろんな力が求められていて、その養成も大学の使命ということなんです。それの一例が、インターンシップという形で現場に行く。ボランティアの現場に行くのもそうですし、仕事の現場に行くというのも大きな意味があっ

て、これなかなか検索が限られていくんです。ですから、ロータリアンの方も、そういう自分の職場に大学生を受け入れていただいて鍛えていただくというのは、大変効果がある1つかなということがありまして。別に大学と公的な協定を結んでも結ばなくてもいいんですが、もう少しロータリーの方の協力をいただければ、大学生の教育に大きな進展があるかということで、もしご厚意があれば是非徳大の学生を。中には優秀な学生もいますけども、中にはちょっと大分鍛えがいがあるということもありますけど。そのような提案をした次第です。

○森　直接的に皆さん方講師の先生は、ロータリー的な経験もございませんので、いろいろ第三者といいますか、一般的な考えを披露していただいたと思うんですけど、だいたいロータリーの皆さんは、社会奉仕についてよく言われるのが、やっぱり地域のニーズを的確に掴みなさいと。ニーズがないものを幾らしたって、事業でしたってこれは駄目ですよと、確か言われてると思うんですが。ちょっとそれについて、どういう風に世相のニーズを掴むのか、というのが1つのミソかなと思うんですが。それで何かありませんか、それかロータリアンの方で、今の地域の社会奉仕について、こういうこともやってる、逆に言えば、これからお2人の講師の先生は、ロータリーについての良き理解者として宣伝マンとなっていただける機会なので、ちょっと話をいただいたらなと思いますが。

○秋山　2680地区の秋山です、私のクラブは田舎の神崎ロータリークラブです。

私の場合、商工会にも関与しているので、県立大学の学生さんとタイアップして、地域のことを角度の進う面から見ていただき、その地域の地場産の開発とか、外から見るのでは全然捉え方が違うので、見る角度の違う方々と一緒になって研究開発をし、少しでも地域の活性化に役立たないか、同時にその人達が加わることで、お互いに勉強にならないかと、さらに、欲を言えば地域を知っていただき、今、過疎化問題や、少子化問題もあるので、ここに定着してくれる学生さんがいればもっといいのにと思いながら、お付き合いをさせていただいているのです。

しゃべりすぎで申し訳ありませんが、もう一点、私の場合、障害者施設をやっているのです、これは社会奉仕と言えるかと、障害を持っている人でも、能力があり自力で通える人達はそこでいろんな生産作業等に携わることができ社会の一員として参加できますが、それのできない人たちをお預かりして、その間だけでも家庭の人たちに時間の余裕ができればと、保育施設のような障害施設を運営し、お預かりしているのです。

それともう一点、それをするのに、さっきの話ではないですが、ボランティアにたずさわる人たちが、見返りを求めたり代償を求めることなくして、自然体の中で見返りなく、周りの人達の笑顔が増えることを期待してね、それは自己満足かもしれないがそれでいいんじゃないかと、代償を求めるのでなくそういう形ですこしずつでも輪が広がればありがたいと思って日々の生活に取り入れてやっているのが現状です。

この前の、東日本の震災の時もボランティア、ボランティアという言葉があまりにも一人歩きした感じで、何か違和感みたいな感じのボランティア、それと同時にロータリーがいう社会奉仕、奉仕ということと全く同じ線上ではないような気がするのです。

その辺、何なのかを考えながら見てみますと、ロータリアン自身の生き様、行動を地域の人達からみて、あの人はロータリアンと認めてもらえるような日々の生活をしているのがロータリアンかなと。

「あんな人がロータリーに入ってはる」なんて言われないようなロータリアンになっていただきたいな、そういうクラブであればいい

なという思いで生活しているのです。

私たちのクラブは、田舎だから、余計に地域性が強く、威圧の目がきついもんですからその辺、自覚を持ちながら生活する、言葉で表せば社会奉仕なのかボランティアなのか、どちらがどうということでなく、出来ればいいなと言う感覚で日々暮らしているのが現状です。

私達の揚合、ボランティア・奉仕をロータリアンは前面に出すのでなく、自然体で生活し、白然体で会社を経営、従業員にもその背中が見せられること自体が、ロータリアンの生き方かと、生意気なことをかんがえるのですが、なかなか難しいですね。

○荻田　高松北ロータリーの荻田と申します。会員数は今、78名がおります。マスコミですけど、私達がしてるミャンマー支援は約10年間続いておりますが、多分マスコミに触れられたことはないと思います。出るか出ないかの問題ではなくて。

実は、ミャンマーの支援は、軍事政権の時から、民主化になる過渡期を、ミャンマーの支援をしてきました。その支援をする間には、大津波もありましたし、貧困の話も出ました。食べるものがなくて、飢え死にした人達のニュースもたくさんありました。その日本の中の手が届く所に、困難な人がいるのに、何でミャンマーに行くのかというのが周りの人たちにもありましたし、ロータリーの中にもありました。だけど今、藤澤先生のお話を聞いて何か非常にすっとしました。それは、国際ロータリーでなければ出来ないものは何かということを考えてみたこと、本当に困ってる人が何処にいるか、近くで困ってる人は、市町村等の支援の手が伸びる範囲であるということもありますが、ミャンマーの孤児というのは、国営の孤児の場合は国が面倒を少し見ますが、私達が言ってる孤児というのは、その国営にあぶれた子ども達が本当にウロウロしています。その孤児が10年前が160人だったのが、今は1500人、その1500人の中にはタイの国境のエイズ孤児とか、親がいて親が貧しくなって、民主化になって本当に貧富の差が激しくなって孤児が増えました。それで、家にいて親が面倒を見れない孤児を含めて在宅孤児と言っているんですが、1500人を超えました。それを僧侶が自分で自ら支援をしているわけです。しかもドルを持って行ってそこでミャンマーのお金に換えてお米を5トン、自分達のバスの前に5トンのお米を積んで、そのまま目の前に見える所で孤児院の中にそれを積むわけですね。積むとそのお米の白い山が2ヶ月分、今だったら2ヶ月もないかもしれませんが、2ヶ月分の子ども達が安心して食べれる食料になるわけです。

だから、そういう支援を行っていますが、私はその支援を行う時、今何故私が、ロータリーが、私がそこに行って支援をしなければいけないかということをずっと気になっていました。結局私は行って、一瞬の笑顔に会う為に行ったんだ。と思いました。本当に暗いんです、その子ども達。でも行って、お菓子を一緒に食べて、そして歌を歌って、本当に半日ぐらいですけど、お米の2ヶ月分前に一瞬ですけど、本当ににこやかに笑うんです。その笑うのを見る為に行くんだと。私はその笑顔に出会う為に行くんだなということ。本当に支援を必要としている人がここにいるということとそれと、ロータリーに財源、それとロータリーに人脈があるということ。それで支援が出来ている。一番最初は、バガンの遺跡の修復からはじまり、孤児院訪問と続いたわけです。

○森　はい、ありがとうございました。先程藤澤さんが言ってくれた、ロータリーの存在というのは国際的な連携で広がっているので、今荻田さんも言われたんですけども、やはり向こうのクラブの同じ団体が力を合わせてそういう活動をするというのは、1つの事例だと思うんですけども。他の方も具体的にもっ

と、何かこうノウハウをですね、僕らはロータリアンとして、考えることを一生懸命やられてると思います。秋山さんが仰っるように、ロータリーというのは結果を求めるんじゃなくて、ニーズ、皆さん方がどうしたら喜んでくれるか、為になるかということで一生懸命、職業もそうなんですけども。そういう視点でやっているんだけども、何かちょっとこういう見方をしてみたら、もっと良いことが出来るよというのがね、ちょっと何か欲しいんですよね。

○滝澤　今の森さんの問題提起とちょっとズレるかもしれないですけれどもよろしいですかね。2、3お聞きしたいことがございまして、今ロータリーは大きく変わりつつあるわけですが、1つは、今までロータリーというのは、陰徳を積むという言葉がありますけれども、要するに、良いことをしても、それを大々的に人に言ったりはしないと。いつかは誰かが評価してくれるというぐらいの気持ちでやって来たわけで、私達はそれで育ちましたので、未だにそういう気持ちがあるんですが、現時点ではロータリーは、積極的に公共イメージと社会的認知度の向上ということを強く言ってまして、大々的にロータリーは何をしているのかということを広報しようという方針になっているわけなんです。それは、ロータリーについて調査をしたところ、ロータリーというのは、名前も聞いたことがない、何をしてるかも知らないという人が半分以上、ロータリーという名前は聞いたことがあるけれども、何をしてるのか知らないという人が27%。ロータリーというのは、名前も聞いたことがあるし、何をしてるのかだいたいわかるという人がだいたい20%ぐらいしかいない。そういう状況のもとでは、私達がやってることが、どれだけの意味があるのだろうと、もっと趣旨に賛同して一緒に仲間をたくさん増やす為には、ロータリーというのをもっと知ってもらおうということで、今方針を展開しているわけなんです。そういうことを踏まえて、実は、私は兵庫の地区ですけれども、昨年あたり2つほどイベントがありまして、1つは、LTGという学習障害児に関する研修のセミナーをやってるんですね。もう1つは、あるクラブが主催したイベントで、地域の食育を兼ねて、地引き網を地域の子ども達に経験してもらうイベントをやったんですが、そのどっちとも、看板とか或いはそういういろんな郷土人の報道なりを、ロータリーの部分だけを綺麗に外してあるんです。看板の撮影もどちらもNHKが報道したんですけれども、全く無視されたわけじゃなくて報道してくれてるんですけれども、その2つともNHKのニュースを私も一生懸命になって見てたんですが、綺麗にロータリーのところだけ外してあったんです。看板は綺麗に映ってるんだけども、ロータリーのマークは映してない。それから、ロータリーの人達が出てくる所を全然映していない。

今日は、ロータリーのロゴが入ったジャンパーを着てる人はたくさんいますけども、実はそれは、1つはこういうイベントをした時に、このジャンパーを着てお世話をするとNHKはカメラで否が応でもこの人達を映さざるを得ない。ロータリーのマークも目に入るだろうということで、ジャンパーを着るようにということを言っているんです。そういうことからしたら、電子系統に訴える、ロータリーについてどういう姿勢を取っているかということなんです。ロータリーは映しちゃ駄目なのか。良いことをしてるのに、何故映しちゃ駄目なのか。ということを、私は言いたい、という思いなんですけれども如何でしょうか。

○森　今までの私達の話を聞いて、饗場先生なり藤澤さんから、何かコメントをいただいたらと思うんですけども。どなたか、自分と比べてちょっと変わった視点はないですか。

○吉岡　さっきのイベントの意見と少し違い

ますが、先輩ロータリアンらに教えられてきたのは、陰徳の積み、隠れて奉仕するということを言われてきて、それが本来のロータリアン、表に出ることが恥ずかしいことと教えられてきました。伊丹クラブでは外に出るのは恥ずかしいことだというのが前からの考えでしたが、すぐにご自分の理想とかいうのを発信するのを待って、上手く乗せられてしまう部分もあるわけです。それでさっきのNHKの話なんですが、若干の公平さというのはやっぱり国民全部見ておりますとあります。本来の公共放送というのは、公平感という感覚が常にこう、思いませんかといったら変な言い方ですけども、やっぱりちょっと違う所にいるんじゃないかなというような気がいたします。それと、大学教育、本来大学教育というのは、人格形成とかね、そんなの誰も求めてないと。本来であれば、学び方を教えてもらいたいみたいなところが、その学び方を大学で、人格形成とかそんなおこがましいことは、誰も世の中求めてないのであります。

○森　ごめんなさい、ちょっといいですか。話止めますけども。ちょっと、広報の方からちょっと元に戻りたいんです、すみません。ちょっとごめんなさい、後でまた。

○大森　同じクラブですけども、伊丹クラブの大森と申します。吉岡さんの言わんとしてる所は、煙草の吸い殻、ロータリーは吸い殻を捨てる人を減らすのではなくて、捨てないようにする人を増やす。それが煙草の吸い殻を減らすロータリー的なやり方やという風に、ずっと教えられてきた。それからもう1つ、聖書にも書いてますように「良いことをする時は、人に見つからないようにしなさい。」実はそれが1番の宣伝効果なんです。ワーワー言うて「ワシ今からこれからええことするぞー。」と言うてやったんでは、口コミに載らないです。黙ってるけども、あの人こんなことをしてるんやねというのを、密かに触れ回るのが1番効率的な宣伝です。今のRIのやり方は、1番馬鹿げた、1番稚拙な宣伝の仕方だという風に思ってます。だから、こういうことですけども、陰徳陽報とか、わざと隠れるようにやるんですね。で、ちょっとバレるようにするんです。誰かが見てますから、それを見てる人が必ず触れ回るんですよ。それが1番効果的な宣伝になると。それを今からええことするぞー、新聞社来て下さいーというのは、それはやっぱり1番効率が悪いと思ってまして。

○森　ちょっとすみません、話題が広報やNHKに広がりましたが、本来のテーマである社会奉仕関係の話題にもどしてほしいのですが、今までの話を聞いてですね、ロータリー外として、ロータリーでもしあれば、口で言っていただけたらと思いますが。例えば今、大森先生が言われたんですけど、何でゴミ拾いをしようとするんだと。分からない。それは自分が拾って、あ、捨ててている人は駄目なんだ、というのを体験させて、自分もじゃあ捨てないようにしよう、という人づくりなんです。だから清掃自体の目的じゃなくて、その先にあるはずだと先輩達から教えられているので。今も同じ考えだと思うんですけども。

○藤澤　直接関係するかどうか分かりませんけれども、さっき秋山さんが仰ったようにお話しされたことは、例えばダボス会議って今日お話ししましたけども、ダボス会議でここ5年ぐらいですかね、議論が高まってるのがCorporate social responsibility、企業の社会的責任という話なんですけど。これ昔はですね、企業が自分の活動とは全く関係のない分野でいろいろ社会に貢献する、という風に受けとめられてたんですけども、今はそういうことじゃなくて、企業が自分の企業活動を通じて、最低限社会に迷惑を掛けない、社会に損害を与えない、できるだけ社会にプラスになるよ

うな形で企業活動をやっていこうと、やるべきだという、そういう理念に変わっていて、要するに、自分の活動を通じて社会に貢献するということが、1番やりやすい教育になる場合もあるし、やりやすくて本当に社会にインパクトを与える、影響を与える活動だという考え方に完全に変わってきているんですよ。自分達の仕事なりを通じて、通常の業務化するといいますか、利益を得る活動を、プラスαでの出来事って僕はいっぱいあるんじゃないかという風に思うんですけども。だから、ロータリーのそれぞれのクラブが全体でやるとかいうのでなくも、ロータリー会員とかが、それぞれが自分達の仕事として、プラスαで社会に貢献するようなやり方というのはあるのかな、という感じがしました。

○饗場　地域の社会奉仕という関係で、藤澤さんは国際という強みを活かすという観点ですけども、やはり地域ということで考えますと、先程のボランティア活動の効果ということで、自らが結局は成長するんだというわけで、結局皆さんはこれぐらい立派な方が集まってるというのは、こうした活動をしてきている結果、こうした形の進歩があるんだということなんでしょう。

さっき申したように、私もいろんな若い世代や子ども等がなかなか積極性がないという中で、ボランティア活動に関わらせることで、さっきの自己肯定感が出て、立ち直ってきちんとやっていける効果が大きいというわけで、そんな関係で1つ具体的な提案なんですけども、東日本の震災の際に、私のゼミ生も実は東北に行って、一緒に行ってボランティア活動をしました。そこで実感したんですけども、彼らが直接ボランティア活動に関わることで、もの凄い効果があるんです。いろんなことを知って、いろんなことを考えて、非常にいろんな面で成長するという効果が大きいと。私の妻が、実はカンボジア支援のNGOをやってまして、その関係で子ども等をカンボジアに連れて行くんですけども。カンボジアという貧しい国のスラムとか孤児院とかに行ってみたら、日本とは雲泥の差です。この状況を、子ども等が見て非常にショックを受けて、自分達はこんなに恵まれているのに、学校行かないとか、勉強嫌とか思ってると。この子らは、こんなにも一生懸命勉強したいと言ってる、或いはこの子らはこんなに不便で貧しいのに裸足なのに、私達はこんなに恵まれているのに、何故日本では3万人もの自殺者がいるということで。いろんな所で、本当の幸せは何だろうと。単に物があって便利なことが幸せかと、いや、そうじゃないだろということで、いろんなことが分かってきたというわけで。そういうボランティアの現場に行くとか、そういう貧困地域に行くということは、非常に大きな効果があるんですが、ただ、なかなか経費がかかるというわけで、そうそう多くは行けないんです。そこで1つの有り難いことは、子ども等とか地域の人がボランティア活動で行ったり、そういう人口地域に行ったり、いろんな経験をするという時に、何らかの形の経費的なサポートとなると、そういう場合非常に促進できてその結果、地域のいろんなコミュティの人が非常に大きな成果を得るという状況が出来るので、ロータリーが活動されているボランティア活動に、いろんな地域の方を呼び込むというのも大事ですけども、それとワンクッション置いて、その地域の人がボランティアに関わる、その活動をロータリーの皆がバックアップするという風な形の発想が1つ大きな意味があるかなということです。

○森　ありがとうございました。ロータリーの友を編集をなさって、前理事長になられました安平先生。今ロータリーの友のいろいろな社会奉仕に携わっていて、普段からいろいろされていると思うんですが、何か編集に携わる時にこれはちょっと出そうだなとか、ちょっと感心したなとか全般的にですね、先

生が見聞きした中でですね、この社会地域における社会奉仕で、こういうのも大事だと思ったよと思えるものがありましたら、ちょっとお話いただいたら。急に申し訳ございません。



○安平　うちのクラブでは、こんなこともやってるよとか、うちの地区ではこんなことをやってるよとかいうのは、それは、友は全ロータリアンの為の情報誌というような感じでやってますので、よっぽど問題がない限りはすぐ取り上げて掲載するということでやっております。これは素晴らしいとかこれは駄目だとかいう判断は、友としてはやってないということであります。但し、その投稿の中でやはり素晴らしい記事はあると思いますので、それは皆さんが読んでいただいたら大変いいなあ、為になるなあという風なことでやっております。

地域のニーズをどう取り上げるかという、ちょっと友から離れますけども、大変難しいことでありまして、それはそれぞれのクラブなり、またロータリアンが取り上げてクラブないし地区で討議して取り上げるわけなんですけれども。心掛けなければならないのは、やはり押しつけになっちゃいかんということがあるだろうということ。私は、ロータリアンは謙虚にならないかんと。謙虚になって、そして本当にそれがその方々の為にもなり、しかも皆のロータリアンの共感を得るような形でないと、押しつけになったり、そして良いことでも、ごく一部の人だけがやってるとかいうのは、共感を得ない思うので、その辺のところだけはやはり注意してニーズを捉えていかないと、という風に思っております。とりあえず、そんなとこです。

○森　ありがとうございました。1つには、皆さん方の意見を聞いてますと、ロータリーの目的もそうかもしれないですけども、ロータリアンは目立たず、自分で良いことを信念として、結果として皆さんに喜んでくれたらいいというんで、非常に先程言いました広報とは相反する地道な活動なんですけども。それが1つ共通点ですね。

○荻田　そういうつもりでずっとしています。言いたくなくても誰かが出すと、ショックですよ。そういう時代という感じもしました。ずっとマスコミとかに出さなかったけれど、そっとしてても、外に出るような時代になってしまったなという感想です。

○滝澤　あのちょっと本当に誤解されてるんで。私が言ってるのはね、良いことをしてるから、皆にそれを宣伝しましょうと言ってるんではないんですよ。皆に知ってもらうことによって、仲間を増やしましょうというのが、ロータリーの今の考え方なんです。1人でも多くの賛同者を募って、そうすれば私達の力が、もっと強くなるんじゃないかと。そしたら、もっと大きなプロジェクトが出来るんじゃないかと、もっと良いことが出来るんじゃないかというのが、私達の目的であって、何も皆にこんなことしてる、こんなことしてると言って言い回るのは目的じゃないんですよ。そこを誤解しないでください。

○森　もう少し時間がございますので、この際ですからもう皆さん方も参加していただいて、ご意見、初めのように長くならないようにお願いいたします。

○中川　神戸西神の中川といいます。私もまたこのロータリークラブに入って、全然2年ぐらいしか経ってないですけども、私は何も地域における社会奉仕する為に入ったんじゃなく、いろんな知り合いが出来て、いろんなことを学べて、自分として成長したいなということで入ったわけで。地域における社会奉仕なんかは考えたことはありません。ただ単に、やっぱり自分としたらちゃんとした大人になって、年は食ってますけども、まだまだ死ぬまで成長していたいなということで入ったわけです。自分もロータリークラブに入ったから偉いなとか、そんなことは全然思ったこともないし、そういうことで、今から皆さんの意見を聞きいろいろ同じぐらいの仲間のいいところを取っていきたいなと僕は思ってます。それぐらいですね。

○永田　何か喋らなあきませんか。ほんと今日は地域における社会奉仕ということで、私は兵庫地区の社会奉仕委員長を仰せつかっておる永田と申します。本来私は、聞く耳を持ってお二方の先生にロータリーではこういうことをやってるのは、ロータリーのメンバーさんの中ではよくご存じかと思いますけども、それと違った方法で教えていただきたかったわけなんです。それで、お二人さんのご意見を聞かせていただいて、成る程な、こういう方向から見れば、社会奉仕が出来るんだなと。それで私らは、ロータリーこうであるということで勉強させられてきてますので、違った意味の方法で見なきゃ駄目だというもので。

兵庫エリアは、北は但馬、日本海、南は神戸の瀬戸内海の大きな範囲の中で74クラブの各クラブから、この社会奉仕の奉仕活動プロジェクトが今年度27件ぐらい上がってきてます。このクラブの特色のあるプロジェクトで私が関わらさせていただいたのは、神戸のあるクラブが王子動物園に中田萌さんを呼んで、子どもさんにお絵かきの勉強、勉強じゃなくて、動物の絵を描く指導をしていただける。それと同時に、案内板の看板を贈るというプロジェクトとか、それから、ちょっと言葉アレかも分かりませんけども、身体障がい者、ちょっと言葉選ばなあきませんけども、そういう施設に太鼓を贈って、リズム感を子どもさんに与える。そういう活動を、継続は駄目ですけど、言われておりながら継続を続けているクラブ。それと、テニスクラブの優勝のカップを贈る、それは本来はあまり多くは贈れませんけども。ロータリアンは、物を贈るのは駄目ですと、汗を流して奉仕をしてくださいと、そして主催でなければ駄目だという制約の中で、私は、ちょっと言葉を選ばなあきませんけども、審査をする方の立場で、いろいろな話を聞かせていただいてありがとうございます、ということで、もう少し違う方向で、お二方の先生から違うことを教えていただいたらよかったなあ、というのが今の私の感想でございます。

すみません、長くなりましたがありがとうございました。

○藤田　神戸西神の藤田でございます。先程からロータリーが、どんな風な形で世の中に宣伝するかというようなことを議論になっていますけども、出来るだけ謙虚な、先程安平パストガバナーが言われましたように、謙虚なものであってこそ値打ちがあると言いますか、そんなものだと思います。

神戸西神では今から16年ほど前から、台湾の姉妹提携しているクラブと、青少年短期留学という制度を取っておりまして、たくさん応募はあるんですけども、予算の都合で5、6名ぐらいをこちらからまた派遣し、また向こうも5、6名を入れるという風な制度をやってるんですけども。地道ではあるんですけども、派遣することによって、高校生が行って帰ってきた段階で、かなり顧問の先生とか父兄の方にお話を聞かせていただきますと、相当カルチャーショックを受けて勉強に取り組む姿

というか、そんなものも数段に向上するというようなのを聞いております。要するに、小さな事業ではありますけども、こういうことの積み重ねが10名、或いは5、60名のそういうカルチャーショックを受けた人が世の中に出ると。また、その人達がロータリークラブの幾らかの話を友達等にしていただけるという風なことが、何ていうか、そういうことこそがロータリーであろうというようなことで、我がクラブはそんな地道なことをちょっとやっております。以上でございます。

○北川　川西ロータリークラブの北川博崇と申します。私が入会させて頂いたのは今から4年前です。その当時感じていた事はロータリークラブって世間ではあまり知られていないなっていう事でした。温泉街や町の中心地にある『ようこそ○○市へ』と言う標榜には、ほとんどライオンズクラブの名前が書かれています。あれから4年、ロータリークラブは派手な宣伝をするのではなく、個々が自身の職業を一生懸命地域に根差してがんばる事が奉仕につながっていると言う事だと理解出来る様になりました。

ただ、自分達が実施している奉仕についてはもっと我々自身が知っておかなければならないと感じたことがあります。3月11日の東北震災時のテレビニュースでの出来事です。米軍が輸送機で物資どんどんと運び込んでくる画像の中にロータリーマークの入った大きなパッケージが続々と降ろされていました。『え？これは何？もしかしてロータリーからの救援物資？』後でわかった事ですが、これはいつでもどこへでも直ぐに運ぶことが出来るロータリーの救援物資だそうです。しかし、この話をクラブでしましたが誰に知りませんでした。

私は奉仕活動を宣伝する必要はないと思いますが、自分たちが実施ている奉仕活動は理解しておくべき事だと感じました。

○田中　伊丹ロータリークラブの田中でございます。社会奉仕ということですけども、ロータリーの奉仕というと、基本的には個人奉仕、或いは職業奉仕だと思います。仕事を真面目にきちんとすることが、社会に対する奉仕に繋がるということが、1番の基本になるんじゃないかなと思ってます。私は弁護士ですけども、弁護士業であれば弁護士としての仕事を全うすると。さらにロータリアンとしてプラスαが求められているんじゃないかなと思ってるんです。例えば、僕が借金の整理を頼まれるとするならば、借金の整理をするのは当然のことなんですけれども、借金が出来た原因が、例えば、その方に知的な障害があるのであれば、その方のかかえる借金以外の問題も解決出来ないかなという風にですね。或いは、非行少年であれば、審判を終わらせるということだけじゃなくて、自己肯定感がない少年というのは、非行少年になりやすいですので、そういう所も解決してあげるように考える、ということが重要なんじゃないかなと思っています。

ニーズの捉え方ということですけれども、やっぱりビビットにニーズを捉えるということは、自分の仕事に通じてしか、出来ないんじゃないかなと思ってます。僕が最近考えてるのが、精神障害とかです。身体障害という分野についてはかなりケアが為されてますけども、精神障害という分野についてはなかなかケアが為されてないんで、去年NPO法人を作りました。地域のニーズは仕事を通じてしか捉えることができませんし、ニーズを解決するにしても、いろんな方の手助けが必要ですんで、その知恵をロータリアン、いろんな職種の方がおられますんで、その知恵を借りて解決していくということが、社会奉仕に繋がっていくんじゃないかなという風に考えてます。以上であります。

○森　ありがとうございます。



○井本　今ずっと話を聞いて思ったことが、ボランティアと社会奉仕の考えが1番ですけれども、私自身ボランティアを十数年やってきた中、だいたいほぼ共通点というのが結構あるんですよ。その中で必ず必要なのが、今ボランティアの無償性だ社会性だとか継続性だとかっていわれるけれども、それよりもまず、1番大事なのは何か問題をキャッチすることです。問題点を見つけて、或いはそれがニーズであるかもわからないけれども、それを見つけてそれを解決する為の活動と考えれば、ボランティアとして社会奉仕と少し繋がっていくんじゃないかと思います。私自身、今までやって1番大きく取り上げられたのがあります。交差点に点字ブロックが歩道にこうあって、交差点に、直角に交差点があるんです。斜めにこうあって、点字ブロックがあるんですよ。歩道へ誘導するべき点字、横断歩道に誘導するべき点字ブロックが、交差点の反対側の所へ誘導するようになってて、幾ら役所に言っても動かないんで、マスコミに1枚ポッと手紙を書いたら、デカデカと通りました。そうすると役所も、「何で、言うてくれたらいいのに」って。幾ら言ったって動かんから、マスコミに「こんなんどうかな」っていう文を出した、っていう話で、笑い話になりましたけれども。それで同じで、陰徳善人という言葉で、私も仕事上話すこと結構あるんですけれども、それだけではやっていけない。やはり問題を解決しようとしたら、その地域或いは社会全体で解決するべきものが必ず必要なので、隣に困ったおばあちゃんがいたら、お向かいで困ってるおばあちゃんがいたら、それを手助けするのに一対一で済んだら、社会奉仕でもボランティアでも何でもないんです。人間関係なんですよ。でも、徘徊をしているからどうしようかということになったら、今度は地域で皆で考えないと、徘徊に対する解決は何も出てこない。だから、必ず問題行動とか問題点をきちんと押さえて、そして周りに、誰に動いてもらえればいいかっていうような動きをするのが、ロータリーであると思うし、ロータリーでなかったとしても、必要なんじゃないかな、ネットワークが必要だと思います。以上です。

○安行　今何か、陰徳の話をしていたんですかね。明治の時分内村鑑三とか、前島健、それから武士道の新渡戸稲造、この人達は札幌農学校の出身者です。前島健は、農村の解放か何かで挫折をしていた。内村鑑三は2つのJで悩んだんですよね。Japanというと Jesus Christ のJで悩んだ。彼はアメリカに渡って、ネイティブと言われる英語表記で、洗礼を受けて、当時のアメリカの、キリスト教の文明にあたって彼がそこで見たものは、所謂功利主義的な、キリスト教の実情だった。そこには何か、キリスト教的な精神でやってるんだけども、何処か、自分達の今までやったボランティアの経歴とかを、次の就職の為の、宣伝とかに使ってた。そういう現状がありのままを見て、彼は悩んだまま帰ってくるんです。そして彼は、日本的なキリスト教のものを追求していくわけなんです。

かたや新渡戸（にとべ）稲造はそうじゃなくて、アメリカで、その素晴らしい教育制度とかキリスト教文化に触れて、彼は自分でも日本で何か出来るものがあるだろうという感銘を受けて、ただ、その時の神父に「日本には、宗教的なものとか何か精神的な支えがになるものがあるのか」と言われて、あれば断ってしまおうという。彼は、その中で日本的なものといえば、

精神的なもので「武士道」というものがあるんじゃないのかということで、彼は武士道を書いた。でも彼は、武士道を書いた理由というのは日本、世界に対して、謝りをしたかった。謝罪したかった。と言ってるんです後で。新渡戸稲造の方は別として、内村は、伝統的なものが宣伝に使われるということを、嫌って嫌って、考えて考えてやってて、そういう宣伝をするというのがどうだ、ということを彼なりに分かってる。そして日本的なものを追求していく、日本では日本のキリスト教的なものを考えていこうということをやりだした。だから、宣伝にもいろいろあったり、PRにもいろいろあったり、陰徳というのも程度にもよるだろうし、非常に難しい綱渡りをしながら、かといって陰徳を積んでいくといったら何も出来ないだろうし、かといってそれを派手にやると、嫌われてしまう、疑われてしまうという。そういう真祖というのは非常に表裏一体で、親しみがあるようにも見えても、疎まわれるというようこともあったり、非常に難しいところだろうし。アメリカでもロータリアンというのは、例えばケネディの後の、ロータリアンだったというユアナー首相、スペインの国王もそうだし、みんなロータリアンなんて言わない。ウォルト・ディズニーだってロータリアンなんて言わない。昔はそうだったけども、そうではないというのが今の現状、非常にこれは難しいテーマだと思います。奉仕する部分についてのPRの仕方というのは、非常に我々の課題でもあるだろうし、日本人は特にその辺の所で悩む所があると思います。内村鑑三なんかがそうだった。以上です、感想でした。

○森田　私はまだ若輩のロータリアン、8年生なんですけども。ロータリアンになる以前は、やはり地域における社会奉仕です。ロータリーの中では有名な超我の奉仕というのがあります。4つのテスト、第一にある真実かどうか、公平性、好意と友情を深めようとか、そしてみんなのためになるかどうか、というこの4つのテストに照らし合わせて、奉仕活動の一員として8年間してきたことは、ロータリアンの幸せな人生の一部であると思ってますし、そういう活動をこれからもいろんな場面で活かしていきたいと思っているということです。以上です。

○加藤　私が言いたいこと、頭で整理していたのを今言われてしまったんですけども。我々ロータリアンという、ロータリーというのはいつもターゲットにしておられる職業奉仕という、先程先生が言われたように、やっぱり個人の高い倫理観ということがターゲットというんですか、清く、明るく、そして逞しく、という風なことで、仕事をすると。仕事って何やねんと。文字通り事に仕えるという、所謂、崇高な理念に仕えるという、真理に仕えるということじゃないかと思うんです。そこに今言ったように、ロータリーの非常に分かりやすい標語だと、真実かどうか、公平かどうか、友情を深めるかどうか、みんなのためになるかどうか、いうことだと思います。だから、あらゆる仕事ということでその仕事の中には、嘘はないかどうか、本当に世の為人の為になってるのかどうか、肌の色であるとか、或いは宗教の持ってる理念の為になるかどうか、こういうことですというように、真実であるかどうか。真実は2つはないですよ、1つですよ。真実はまさに実に始まるということ。そうして、やはり強くならなければならない。

それともう1つ、最近、あまり時間がないんですけれども、この間産経新聞を見たら書いておりましたけれども、士は、侍はですね、己を知る者の為に死す。最高のボランティアというものは、愛するものの為に、命をかけるというのは、これ最高の奉仕であると。これも、日本人ではかつてずっと言い尽くされてる。侍という者は、己を知るものの為に死すという風なことがあるじゃないですか。我々

は本当に、仲間の為に命を冒すほど、そういう努力をしているのだろうかどうだろうか。あれもしてくれない、これもしてくれない、くれないくれないばっかりで。これ以上喋ったら何言いたいか分からなくなるから。

とにかく、にこにこ顔で命懸けで奉仕しましょう。

○徳梅　ロータリーに対する考え方というのは、今まで喋られた諸先輩方のロータリーに対する倫理観、全く私も相違がないことで。私も、曲がりなりにも20年近くこのロータリーでいろいろな形で奉仕活動をさせていただきました。1番冒頭に、饗場先生の方から大学生のボランティア、それとロータリーの接点を求めるとかそういった話があったんですけれども。ちょっと情報提供なんですけれども、ロータリーの青少年奉仕部門の中には、4つのプログラムがありまして、中学生・高校生を対象としたインターアクトクラブ、それから大学生、そして30歳までの社会人を対象としたローターアクトですね、それから後、高校生の青少年交換プログラム、それと、今回やっているこのRYLAセミナーというのがありまして。私の記憶では、徳島には、徳島大学はローターアクトってあるんですか。

○米山　今はありません。

○徳梅　今はないんですか。香川大学はローターアクトクラブってございますよね、確か。

○米山　香川大学はあります。

○徳梅　ありますよね。神戸女子大学にもローターアクトクラブというのができて、何か活動しているみたいなんですけれども、できましたら2670地区の努力で、是非徳島大学にもローターアクトクラブを復活させていただいて。活動は、いろいろ賛否両論ありますけれども、スポンサー等がしっかりしておれば、非常に良いことをやるローターアクトクラブに大学の場合成長すると思いますので、その辺ご尽力をいただいて、また饗場先生にも、そういったことがあるということを、お見知りおきいただいたらなと思います。私からは以上です。

○常次　常次です、神崎ロータリークラブです。2680地区青少年奉仕委員長をさせて頂いています。私、今年で20年のロータリー経験でございますけれど、藤沢先生が仰ったロータリーとは何だという事ですが、職業理念、倫理をしっかり持つ事ですね。
RYLAはロータリー理念を子供達に伝える手段としては、良いかもしれないし、もう少しかわったことを教えていこうとすると、ロータリアンがもっと勉強しなければならない。またそのプロジェクトを充実しようという事で、何年もやっていますし、ずっと続けていくところもいいのですが、日本の場合コレいいねというと、すぐに真似をしてプログラムをする者が出ます。そうすると何もロークリーが手を出すことはない、ロータリーは又新しい事業をやったらいい、ということで、次のプロジェクトを考えていく。だから今何かないですかと聞くのも一つの方法かもしれませんが、クラブ会員といろんな知恵を出し合っていく。それにはやはり、いろいろな情報を集めて勉強していくという事です。プロジェクトはやって、出来たら次に渡していこう、ロータリアンは次々に新しいことを考えていく、という風に私は今思っている次第でございます。

○安平　ちょっと口幅ったい話でございますが、ちょっと原理的なことに改めて触れたいと思うんです。我々は何故、人の為に尽くすのか。それは、人の為になるけれども、それが廻り廻って自分の人生を明るくするんだと、これがロータリーの信念なんですよ。Rotaryでは He profits most Who serves best という風

に言ってますけれども、人の為に一生懸命やるということは、それはいずれ廻り廻って自分の企業を繁栄させるんだと。これが、ロータリーの基本理念だという風に思ってます。これが、利己と利他の調和といったりしますけども。この考え方というのは、ずっと日本でも昔から同じようなことを、また東洋でもいろいろ言われてまして、伝教大師は、道心の中に衣食あり。一生懸命一心に道を求めると、衣食、「衣食」と書いて「えじき」と読む、だから食い扶持はついてくるよと、こんなことを言っておりますし、そんなことがロータリーの考え方と東洋思想というのは非常に似ているという風に思ってます。今日CSRというふうな話にもありましたけども、やはり企業が、Corporate social responsibilityということで、いろんなステークホルダーのことを考えながら、それらの為になるんだということは、結局ステークホルダーの為になるけれども、それが廻り廻って自分の企業を栄えさせていくんだと。そういう永続的な企業の発展に繋がるんだという風なことでありまして、これが今改めて見直されてると、やはり考えられてるという風に思います。これが、もっと言えば企業そのものが、社会のグッドビジネスになるようにしようよ、というような考え方にも繋がってると思いますので、我々はそういうことを目標にやるんだと、それが自分の人生を明るくし、自分の企業を永続的に栄えさすんだと。これが、根本的な考え方ではないかなと思います。



○黒田　ちょっと、司会者側の立場なので発言は控えますけども、永松さん、初代、第1期ライラリアンとして、是非とも発言をお願いしなければならないと、司会者として。

○永松　ずっと横に隠れてまして、回って来へんと、いいなと思ってたんですけども、ちょっと見つけられてしまいました。話はちょっと違うんですけども、ロータリーのプログラムの中に米山奨学金というそういう奨学金制度というのがございまして、留学生に貸付じゃなくて、付与型の奨学金を渡してると。その時に、先程お話しにもありましたように、全国的に留学生の国籍順にいきますと、中国・韓国がやっぱり断トツで多いということで、それも、米山の奨学、留学生に関しましてもそういう傾向がやっぱりございます。我々は、ロータリーの、米山の特徴としまして、私、奨学金を渡すだけではなくて、1人ずつにカウンセラーというものが付いて、ゆっくり話が出来るという、で、日本を好きになって持って帰ってもらうということを心してやってるんですけども。ただ、どうしてもやっぱり中国・韓国が多くなってきますと、周りのバックグラウンドで、何故、中国・韓国今の時点で奨学金を渡すんやというようなあれもあるんですけども、全国的にそういう議論はあるんでしょうか、ちょっとお訊ねしたいんですけども。

○藤澤　全国的にかというのはちょっと知らないんですけども、一部ご意見としてはあると思いますけども。それはあまり気にする必要ないんじゃないかなと思いますけども。やっぱりだからこそ、やり続けますというように、僕は考えますけども。

○米山　松山ロータリークラブの米山でございます。先程から出ている、日本で初めてのロータリアンの米山さんとは全く関係ございませんのでお伝えしときます。僕もRYLAのカウンセラーを仰せつかって、はまっちゃっ

てるんですけど。社会奉仕ということで、皆さんほど立派なことは言えませんけども、この間、松山でローターアクトクラブの例会に久々に出まして、その中でローターアクトクラブの人の中には、今年卒業する人が君らたるんどるよ、何か最近若者の出席が悪いじゃないか。来さされてるのか、僕は好きだから来てるんだというふうに言ってたローターアクト倶楽部会員がいました。ボランティアとか社会奉仕というのも、やっぱりやらされるんじゃなくて、寧ろ好きなぐらいでやった方がいいんじゃないかと。そうすると、この間松山ロータリークラブの植樹をやったんですが、毎年80本だったんですが、何故か知らん120本あって、それでもやっぱり皆好きだからやってるのかなと、にこにこしてるのかな、という風に思いました。

私事ながら、私の親父もロータリアンですが、昔からよく、日曜日なのに野球の試合に引っ張り出されて、球拾いとか連れて行かされたりして、その頃は嫌でしたけども、今思えばどっかで親父の背中を見よったんかなと思います。そういうことが、継続に繋がるのかなという風に、何か今日のお話を聞いてて思いました。継続というのは、単体で続けるのも継続なんですけども、代々継ぐというのも継続かなと。それと、先日のRACで四国地区の行事が松山であったんで、RYLAというものもありますよと言ってみたら、5人来てくれました。そういうのも継続に繋がるのかなと思いつつ。我々は、やっぱり皆好きだから、RYLAに集まっていて、この時期、寒い時期、年度末の時期に好きだから集まってるんだから、にこにこして、受講生の前では熱い振る舞い出来たらいいなと思うんで、それも社会奉仕かなと思います。すみません、長々と。

○森　ありがとうございました。いろいろ価値観あるんですけども、私が安心したのは、皆さん方がロータリアンとして、先輩から学んできたことを引き継いでいただいておりまして、概ね共通点が非常に多いということです。これだけ皆個性の強い方々が、ロータリーの理論というか理念ですか、考え方をたくさん勉強なさって共通点が多いということにちょっと安心しました。それと、特に岡田さんも言ってたんですけども、職業奉仕を通じて、社会奉仕の気概を見つけるんです。これは分かりやすいもので、元々僕達の得意な職業奉仕の中で、何か地域にとっての社会奉仕が出来ないかというのは、1つ得意な考えだと思います。それともう1つは、やはりロータリーというのは継続が出来ませんから、日の当たらない、地域に日が当たらないことについて、ロータリーがしたらいいよ、という提言をして、ある程度の行政やいろんな団体に働きかけて、それの火付け役というんですか、そういうのも先輩方から必要だよということを教わりました。そういうことで、ただ今日は非常に拙い私のあれで、いろいろ力量不足もあるんですけども、皆さん方のお話を聞いて、本当に有り難いなあと思いました。時間もそろそろお開きですので、最後に饗場先生最後に何か一言。

○饗場　今のご理論を聞いていて、ロータリークラブの非常に根底の部分が、割と理解出来たかなという感じがしました。結局それは、次の会場を変えてのテーマにも繋がるんですけれども、先程から出てる広報の関係で、何故NHKが言われたように、ロータリークラブのところだけ綺麗に外して放送するのかと。私も以前、新聞社で新聞の記事を書いてましたから、同じような感覚が分かるんです。言われたように、ミャンマー支援をされてる、ロータリークラブがしてるというのと、普通の主婦の団体が、NGO作ってミャンマー支援してますというのと、僕ら受け方が違うんです。後者の方は多分大きく書けるんです。同じそういう傾向があって、よくよく考えるとこれは何だろうなと、恐らく共通してそういう感覚があると思うんですよ。それが、ロー

タリークラブというのに対する社会的なある種のイメージが何かあって、それが正しいかどうかは別なんですけど。そういうところも一面あるのかなと。逆に、今回の議論を聞いていると、非常に一般的なロータリーのイメージを失って、非常に深い所の理念的な、しっかりとした原則というのが今回分かるというのが、1つのその面ですけども。また違う面から見ると、何か世間的には違うようなロータリーのイメージがあって、それがマスコミの対応にも表れてるという所があって、そこの違う観点からの、非常に本質的にはある面かなという印象を持ちました。それに、詳しい話、とても素晴らしいお話ありがとうございました。

○藤澤　今、饗場先生が仰ったように、どうしてマスコミ、NHKがですね、ロータリーとかいろんな同種の団体の活動を取り上げないのかというと、そういう部分もあると思います。やっぱりある程度、恵まれたこの伝統のある、しかもそういう活動歴がある団体が何かやっても、それは当たり前のこととして受け取って、また違ったグループが新しくやった方を、どうしてもニュースに出してしまうことがあると思うんです。それと共に、さっき学習障害児とそれから地引き網を使った食育で、見事にロータリーの部分を外して放送したというのは、多分放送した側の、人間にとっては、良いことをやってるんだからそれは、そのこと自体がニュースでないかということで、誰が主催しているかというのを敢えて出さないと。もう1つ、出すことによって、他の団体から何でうちの方は取り上げないのかという、そういういろんな不満も来たり、バランス取るのが非常に難しいんで、ある程度の一律にニュース活動の、良い所は出来事そのものを伝えよう、という姿勢であったんではないかという風に思います。ただ、だからといって、それが広まらないか、というか知られないかというのはそうじゃなくて、それをすると、必ずいろんな視聴者から反応かものすごく来るんですよ。あれはどういう団体がやってるんだとかあれはどういう経緯であああいうことになったんだとかいう質問がいっぱい来て、それに対しては答えているわけで、じわあっとそういう形で、広がるというのは間違いないと思います。

私、今日来てロータリーの陰徳を積むというのが1つのモットーだというのを初めて知ったんですけども、私自身、良いことをやってたらどんどんPRするんだと、しかもその際マスコミというのは、表現の力がものすごいありますから、マスコミをどんどん活用していただきたいという風に思います。時に、取り上げてくれないとか一生懸命やったのに取り上げてくれないとか、他の団体は取り上げてくれるのに、うちは取り上げてくれないとかいう不満を持つかと思いますけども、多分一生懸命やってるからこそ、そういう不満が出てくるんだと思うんで、不満を持ったと、不満を持つということは自らが一生懸命やってるんだということをで、確認することにも繋がるという風に思いますので、陰徳を積むということだけじゃなくて、PRをして輪を広げて、仲間を増やすと、仲間が増えればまた運動も広がるわけですから、そういう風にやっていっていただければと思います。あんまり、マスコミを嫌わないでください。私メディアコンサルタントという仕事もやってますので、マスコミを嫌わずにどんどん利用していただければという風に思います。ちなみに、放送しないで新聞記事に載せるかどうかというのは、やっぱりそれはそれぞれのテレビ局・新聞社の判断として尊重はしていただきたいとは思いますけども、働きかけるというのはどんどんやっていただいてた方がいいんじゃないかと思います。以上です。

○森　講師の先生には、お忙しいところというかお疲れのところ、ロータリーのメンバーにお付き合いいただいて、ロータリーとは

違った観点のご意見を賜りまして、またロータリーの共通の考え方を知っていただいたと思います。本当にご協力いただいてありがとうございました。

これで、ロータリアンの夕べを終わります。最後に両先生に、お礼の気持ちでもう１回拍手をお願いします。

では、これで解散します。





リーダーとはどういうものか

―リーダーが目指す社会とはどういう社会か―

フォーラムリーダー

パストガバナー（2680地区）　深川　純一（伊丹RC）

RYLA小委員会　委員（2680地区）　安行　英文（三田RC）

○森　それでは、フォーラムを始めたいと思います。テーマがリーダーとはどういうものか、サブテーマがですねリーダーが目指す社会はどういう社会か、ということで、各班にセッションをしていただいてフォーラムで発表するという形になります。

2つお願いがございまして、各班の発表時間なんですけども、最長15分でお願いしたいと思います。もう1点は、発表する方は各班2名程度の代表者が前に来てお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

それからフォーラム、これからのフォーラムは今お着きになりましたRYLA顧問で2680地区のパストガバナーの深川先生と、2680地区のRYLA委員の安行さん、このお二人でフォーラムの司会と、コメントをしていただくようになりますので。安行さんよろしくお願いします。

○安行　こんにちは。大変長らくバズセッションをしていただきましてありがとうございました。ようこそ余島へ、改めて申し上げます。ここは、ご存じの通りぐるっと島を1周してもらって2キロ半ほどあるんですね。小豆島から少し離れた所ですけども、大変自然に恵まれて、今から64年ほど前に、ここをYMCAのキャンプ場にしようという風に、今井という我々にとっては大変尊敬する人物が見つけここを開発した。RYLAにとっては、これで36回目ですけど、私は実は今から30年ほど前の受講生です。それから、30年ほど経ってますけども、この私が第6回、奇しくもロータリーというところに入りまして、今まで未成年の支えをしてきたんですけれども。ご存じの通り、歩かれるとお墓があったりお社があったり、大変ここは近現代の施設なのですが、大変神仏習合みたいなことで、元々ここは個人の持ち物で、お家もお墓もあったんです。そこをお借りをしてここをキャンプ場にしたっていうのがあります。本当に昔はですねこういう所がなくて、食堂もまだ全然なくてキャビンもなくて、キャンプサイドだけがあって、電気も来てないというようなところでした。大変素晴らしい施設になったと思ってます。そういう所で、せっかくのお休みのところ3日間、大変申し訳なく思っておりますけども、いずれ皆さんの力となるだろうというところを、このロータリーが考えて、もう36回目になるんですよ。大変素晴らしい人達を我々と共に歩んでいただける人達が育ってくれてるということ、我々も大変感謝しているので、もう少し、今日1日だけです。辛抱してこのセミナーに寄り添っていただければ、大変嬉しいと思います。

今から、フォーラムをしようというふうに思ってますので、最初に皆さんの発表をリミット15分程度で発表していただきます。その都度その都度申しますけども、この場合は言葉が分からないからもう少し説明してくださいとか、或いはもう少しその背景ぐらいのところを言っていただければ大変嬉しく思うんだけど、というような程度の質問を最初に受けます。そして、A・B・C・D、順番は後でジャンケンで決めてもらいますけども、各班

に発表していただいて、それから後にいろんな、今自分が思ってる疑問とか、いやこれもうちょっと説明してもらいたいとか、私はこう思うんだけど、というフォーラムに入っていただこうと思っております。大変時間が限られてますから、既にバズセッションの間で皆さんには、入口と出口の平等を与えましたので、敢えて皆で出て行ってもらってここで発表するという処置は執りません。皆さんは既に全員を参加してもらってますので、ここでは代表の方々に発表してもらうということで効率を図りたいと思います。充分時間を取りますので、それから後で自分達の班はこう思うけど、あの班はどう思うのだろうということを聞きたいということがあれば、後ほどそれを質問していったり、皆さんからの疑問を受けたりしたりと思います。ただ、全員の方に当てて言うことも、出来ないわけじゃないですけど、そうすると時間が足りないので、一方的にこちらからいろんな人を当てたり、或いは手を上げた人に答弁をしてもらったりというようなことをしようと思いますので、大変偏ったことになるのかもしれませんけれども、その辺のところは、ご了解いただきたいと思います。

それで、少し詳しいこと、ロータリーも我々はある程度の説明的な分はもってますので、ロータリー的なことに関しては、深川顧問に話をして、分かりやすく皆さんには、ロータリーというのはこういうところを考えてるんだということを、あなた達の発表の中から添えて、もう少し踏み込んだ形の発表を深川先生からしてもらうと思っております。5時半頃迄には終われたらなという風に思っております。およそ4組ですから、15分を組みますと1時間と、今から行きますと2時、3時過ぎには終わると思います。充分時間を取って、皆さんの班の発表を聞いていきたいと思っております。

まず最初に、A・B・C・Dからいくのかとかでなく、ここは公平に代表に出てきてもらってジャンケンで順番を決めたいと思いますので、各班の代表の人出てきてください。誰でもいいです。前に出てジャンケンで順番を決めてください。

－4名が、じゃんけんをする－

○**受講生**　じゃあ、D班は4番目、大トリでお願いします。

○**受講生**　1番。A班。

○**安行**　B班2番、A班1番、それから

○**受講生**　お前ほっとした顔してるよ。

○**安行**　あの、内容に行くんはええけど、まだ始まったばっかりよ

○**安行**　じゃあAが1番でBが2番…

○**受講生**　ABCDやん！

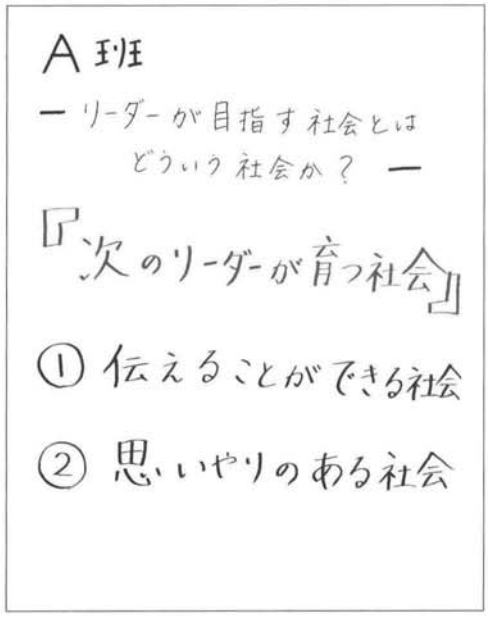
○**安行**　やらなくてよかったやん。じゃあ順番通りで。じゃあA班から発表してもらいましょう、どうぞ。



■■　バズセッション報告　A班　■■



○伊勢田　それでは、A班の発表を始めさせていただきたいと思います。皆さんこんにちは。始めます。


A班
ーリーダーが目指す社会とは
どういう社会か？ー
「次のリーダーが育つ社会」
① 伝えることができる社会
② 思いやりのある社会

A班がまず考えたリーダーが目指す社会とはどういう社会かというのをまず話します。

まず、社会とは何かを考えたんですけど、会社とか企業とか小さいグループも社会ですし、国とか世界とかも社会じゃないかと考えたので、下の方で具体例を上げるんですけど、その中の具体例は分かりやすいかなと思って、会社とか企業とか小さい括りでの社会について説明してます。けれど、さっきも言いましたとおり国とか世界でも通ずるところがあるので、それを通ずると思ってお聞きいただけたら有り難いと思います。

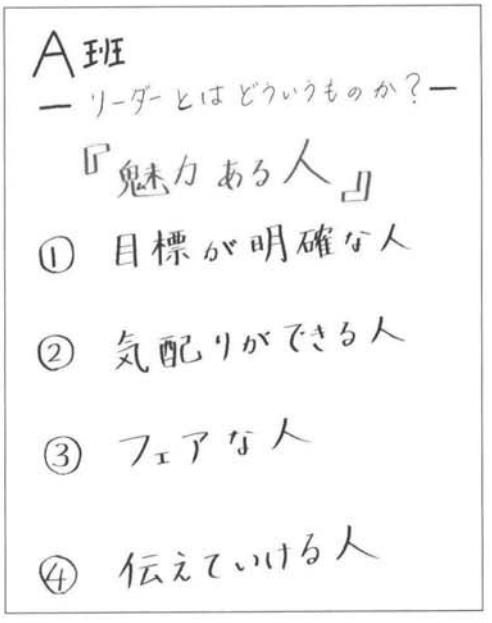
リーダーが目指す社会で、A班が考えた社会はこの赤字のところ、次のリーダーが育つ社会、大事なんでもう1回言います。次のリーダーが育つ社会、という風にしました。リーダーが育つ社会というのはどういう社会かというと、1番伝えることができる社会、2番は思いやりのある社会、という風に考えました。1番から説明させていただきたいのですが、伝えることができる社会というのはどういう社会かというと、リーダーとなる、まず人のスキルとか能力が伝えることが出来れば、これも役に立つんじゃないかと思います。会社、企業、あと地域社会、国、運営する時に必要な知識とか、運営とかする時によりスムーズに物事を進める為に必要な能力、これはやっぱり下の世代に伝えることがとても大切なことだと思います。例えば、うどん屋、香川県なのでうどん屋でとても人気のあるお店があったとします。でも、次の世代にその知識とか作り方、技能をちゃんと伝えなければ、次の代でその会社は終わってしまいます。だから育てる力というのは、とても大切だと思います。その他個人の力じゃなくて、伝統

とか文化も大切だと思います。会社、企業、地域社会、国、いずれにしてもそれぞれが持っている理念とか、信念があると思います。例えば、売上を上げようとか、もしくはお客様の満足度を上げようとか、それぞれ違うと思うんですけど、それはリーダーだけじゃなくてその他の人も共通で理解しておく必要があると思います。その方が目標も達成しやすいですし、グループとしてもまとまるからです。なので、個人個人がそれを口で言うのもいいし、あとは研修会なんかを開いて、全員に伝わるようにちゃんと話しをした方がいいと思います。

最後に、今までは能力とか伝統文化、物じゃないんですけど、マニュアルというのを作った方がいいんじゃないかなという話をしました。冊子とか書類に残すことで、基本的な礼儀とかシステムをいつでも気になった時に見ることができて確認できるんで、そういうのも理解しといた方が会社・社会がまとまるんで、リーダーが育つ社会に繋がるんではないかなと思います。

次、2番目思いやりのある社会にいきます。リーダーが中心になって、あることをしようと思ったら目標があると思うんですけど、その時リーダーだけが頑張ってもしょうがないので、リーダーとそれ以外の人がそれぞれ誰が誰にというんじゃなくて、それぞれ一人一人が相手を思いやって行動することが出来たら、その社会というのは団結できて問題解決とか目標達成にとても近づくんじゃないかなという風に考えました。例をあげると、部活動でチームがまとまらなかったり、上手くいかない選手がいたら、その人にキャプテンが声を掛けるとか、キャプテンじゃなくても他の選手同士が声を掛けるとかいう風にして、出来ないことを出来るようにしていけばそのチーム力は上がるし、その集団は勝利に近づくという風に考えていました。大きい話ですけど、世界規模でそれがもし出来るようになったら、環境問題とか、あと貧困問題みたいなのもあるけど、本当に一人一人が思いやる心を持って問題解決に努めれば、そういうのも解決に近づくんじゃないかなってところまで話しました。この2つが、次のリーダーが育つ社会でということになるんじゃないかなと思います。こちらは以上です。

○松谷　じゃあそれでは、彼はルーズリーフ1枚に対して、四角いパソコンで見ながら説明させていただこうと思います。



次のリーダーが育つ社会というのを踏まえて、じゃあリーダーとはどういう者かというのを考えてきました。1つの答えとしては、魅力のある人という風にA班は考えました。魅力のある人という中でも、どんな人が魅力のある人かというのを、4つに分けて考えました。1つ目が目標が明確な人、2番目が気配りができる人、3番目がフェアな人、4番目が伝えていける人というのが、魅力ある人ではないかと考えました。1つ1つについて説明していきます。

1番目の目標が明確な人についてなんですが、やっぱり目標が明確な人が魅力ある人だと思います。目標が明確であることで、その組織が、何処に向かって行けばいいのかというのも分かりやすくなって、皆が何をするべきかというのが具体的に分かってくると思い

ます。ちょっと具体例を上げさせていただきたいんですけれども、私の話になるのですが、私は今、保育士をしています。やっぱり子どもを見ているので、目標といってもやっぱり子どもを大切にするとか、そういうことなんですけど、そういう大きいところじゃなくて保育園では、一人一人が自分で考えられる子どもになろうとか、のびのび元気に遊べるようになろう等、具体的な目標があることで、一人一人の職員が、じゃあそれに向かって行くにはどうしたらいいかなっていうのを考え易くなっています。その目標が定まることで、その時代の流れ等を迅速に読み取ることができて行動することで、また目標が達成されやすくなると思います。これもまたちょっと、自分の話にはなるんですけれども、ちょっと最近核家族などとか、あと地域との繋がりが、繋がりを持ちにくいっていうことにもなっていますので、そういうのを先に見ていくことで保育園からちょっと保護者同士の繋がりを持てやすいような環境を作ったりなど、あとは地域の繋がりが持てるようにっていう、そういう場所とかも作っていけるのかなという風に思います。そういう目標が明確に持てる人というのが、魅力ある人だと感じました。

次は、2番目の気配りができる人が魅力ある人だと考えました。気配りができる人というのは、一人一人の特徴に合った指導ができる人。やはり組織の中には、一人一人の能力が異なると思いますので、一人一人のことをよく理解して、一人一人に合った、その人が最大限に、力を発揮できるようにしてあげることが大切であると思います。一人一人に最大限に力を発揮できるようにしてあげることで、その人にも責任感というものが生まれると思います。責任感を持つということで、自分が必要とされているというのを感じることができ、次はどうしていったらいいかなと自分でも考えやすくなることができると思いますし、その向上心は社会の為にもなると考えました。そのようなことから、2番目の気配りができる人が魅力ある人だと考えました。

次は、3番目のフェアな人、フェアな人が魅力ある人だと感じました。フェアな人っていってもちょっと大きいので、特に言いやすい人、全ての人に分け隔てなく意見を取り入れる人が魅力的な人間だと考えました。やっぱり自分の中に思いがあっても、言えないでいると、組織の為にもならないと思うし、新しいことも取り入れにくいという風に思いますので、そうやって一人一人の中にある考えをしっかり言いやすい環境にしてあげたり、また、しっかり聞いてあげることが大切であると考えています。そういう人が、魅力のある人だと考えました。

次、最後になりますが伝えていける人が魅力のある人だと考えました。伝えていける人というのは、自分の築き上げてきたものやその技術などを、全て出し惜しみせずに全て伝えられる人が魅力的な人だと思います。やはりそれは自分だけでなく、次世代のリーダーを成長させようと思って、考えを分かち合い、自分以上の人になって欲しいと思うことで、自分のみならず社会に貢献できると考えたからです。

以上のことが、魅力のある人だと感じます。

○伊勢田　A班はこのような意見から、リーダーが目指す社会は次のリーダーが育つ社会、次のリーダーが育つ社会において、リーダーはどういう人かというのを考えて、こちらの魅力ある人という風に、この4つを考えてみました。最初にも言ったんですけど、例としては、企業とか会社、学校、職場が多かったんですけど、それだけじゃなくて国とか世界とかにも通ずるような考え方を考えようということで、こういう結論に達しました。

以上で、A班の発表を終わります。

○安行　それではですね、A班の少し貼っていただけますか。もう少し詳しくこの辺の説明が欲しいとか、この語句がちょっとよく分

からないので、もう少し具体的な説明が欲しいとかそういうご質問ありますか。ないですか。お名前と何班か言ってから言ってください。

○大西　B班の大西といいます。すごく何か1つ1つのことについての説明が分かりやすかったです。タイトル、メインタイトル、メインの方の3番目のフェアな人のところで、話しやすい環境を作っている人というところで、1で目標を明確にしていて、その意見と全く反対の、またちょっと違う時の意見を持ってる人は、すごく話しにくいと思うんです。それを話しやすくする、どういう風に話しやすくしていくと考えているのかなと、そこがちょっと引っ掛かったんですが。話しやすい環境についてもっと説明お願いいたします。

○松谷　こちらの前提としては、同じ目標に向かってというのがありまして、目標が違う場合のことですか。

○大西　そうです。

○安行　それはもう少し具体的な内容に入ってくるので、後で話しましょう。良い質問だと思います。他に、この語句、この辺の説明っていうのはないですか。

じゃあ、深くは次のフォーラムの方でしましょう。今の質問良い質問だと思いますので。

じゃあA班よろしいですか。終わります。それではB班、これで一言申し忘れてましたけども、フォーラムで出た答えというのが、今皆さんが発表してもらってるのは、全てが正解です。これに間違いというのはないので、フォーラムに関しては皆様の思っている思いということを表現してもらっているので、この出題には正解っていうのはないんです。今が正解なんで、間違いを指摘するとか、これはこう思うとかいうのは、意見としてはこのフォーラムには通りません。ですから、皆さんの正解の中からもう少し掘り下げてもらいたい。実は私達はこう思ったんだけど、ここは違う答えになっているけれど、どういう理由があるんですか。ていうことを聞きたい。そういう風なフォーラムをしようと思います。ですから、全てが皆の答えだと思ってください。それが前提です。そうやって皆で考えたことをシェアをして、それがこのフォーラムのスタイルだと思いますので、そういうようにお聞きください。では、B班です。



■■　バズセッション報告　B班　■■



○坂本　それでは、B班の発表を始めさせてもらいます。B班、名前はボツです。よろしくお願いします。



まず初めに僕達B班は、リーダーとはどういう者なのかというのを皆で話し合いました。皆で、班を分けたんですけど。まず、リーダー像にいき着くまでのプロセスとして、自分達が思う、まずリーダー像というのを1人1人上げてもらいました。人によっては会社の上司であったりとか、あと中学校の時のクラスの委員長、あと明石家さんまとかビートたけし、そういうタレントさんまで幅広いリーダーがあがりました。そういう人達のことを項目でずっとあげていったんです。1番最初に自信があるとか、状況判断能力、あと話しやすい雰囲気であったりとか、あと幅広い知識だったり技術だったり、あとビジュアルだったりとか、その辺りまで幅広く項目があがってきました。ただ、それだけ多くの項目を網羅した中で、こんなに項目の本質的なところを突き詰めていると、リーダーはスーパーマンじゃないと、リーダーにはなれないのかというところにいき着いたわけです。それではやっぱり、皆がリーダーになっていくのは難しいんじゃないのかという風に考えたので、そこで次に、自分達が思うリーダーの共通点というところは何だろうというところで、議論を深めました。僕達の班で深めた結果、2つの要素に辿り着きました。

まず1つ目に、コミュニケーション能力です。まず相手のことをしっかりと見て、話を聞き入れて、そして相手のことを尊重した上で、ポジティブに意見を送ることができることがまず必要じゃないかなと思いました。そこには雰囲気だったりとか、多様性を受け入れる為の包容力なんてのも含まれてくるんじゃないかなと思います。

次に2つ目が、プレゼンテーション能力で

す。コミュニケーションを先に受けて、情報をある程度取ってきて、それを統合して出てきた考えを、如何に効果的に魅力的に提案していけるか。それには状況を判断をして、それを論理的に組み立てて、それを又理解する為の知識であったりとか。あと、僕なんかは、今病院で作業療法士をして、リハビリの仕事をしているんですけども、うちの班にも介護職のメンバーがいまして、そういう専門的な技術であったりとか、それも実際のところは、見せるだったりとか聞かせるだったりとか、そういうところのプレゼンテーション能力という意味で捉えることができるんじゃないかなという風に思います。

この2つは、非常にリーダーには不可欠な能力だとは思うんですけれども、ただ、これ2つだけでリーダーだといえるんであれば、これもうペテン師と同類に見なすこともできるんじゃないかなという風に議論は進みました。ペテン師は、コミュニケーション能力、あとプレゼンテーション能力、これものすごく多分長けてると思います。相手を信用させて、相手に行動を起こさせるのです。これをリーダーと言っていいのかなと議論は進んで、これはさすがにリーダーとは言えないだろうと、これリーダーではないです。やっぱりペテン師、何でリーダーとは言えないかというのは、やっぱりそれは、自分の利益の為に、人を動かしてしまう、自分の為に。リーダーたる者は、やはり自分の為だけにやはり人を動かすということでは、少しまずいと思います。やはりそこには、目指すべきリーダーというのは、人の為に社会の為に明確なビジョンを示すことが、大切になってくるんじゃないかなと思います。

その明確なビジョンを持ってたけど、説得であったりとか、判断を繰り返しながら人と社会に良い影響を与え、それを以て人を動かしていくことができる人物こそ、リーダーの像として相応しいんじゃないかなという議論にいき着きました。

リーダーは、ビジョンや技術、あとは精神を地域社会や次の世代や、またその先にある未来の世代に繋げていく繋がりを作っていって、リーダーに動かされた人は、その結果的にはその繋がりの中で成長が促されてくると思います。成長の過程の中で、多くの繋がりから刺激を受けて、次の世代のリーダーが形成されていくと思います。次世代のリーダー、次世代の行く末までが、やはりリーダーという者ではないかという風な議論が、B班の中でまとまった結論でした。



○大西　それでは次に、リーダーが目指す社会とはどういうものかということについて、私から説明させていただきます。

私達は、多様な国籍や年齢、性別の人達が率直に言い合える、話し合える場がある社会という風に考えました。そのような社会が成り立つ為には、共に打ち解け合える、仲良くなる必要があります。そこで私達は、このRYLAセミナー自体もこの社会を目指しているのではないかという風に考えました。皆さん思い出してください、この3日間寝食を共にし、共に学び、共に遊び、そうすることですごく仲良くなったのではないでしょうか。そしてこのテーマに取りかかった時に、個々が自分の意見を言い合い、語り合うことができたのではないでしょうか。それは、個々が多

彩な意見を出し、それを認め合い、共有し、最終的に全体の考え方が出るというプロセスだと思います。

さてここで現実ではどうでしょうか。テーマに対する答えは、時にして異なります。環境の問題、後継者の問題、国際問題、様々な問題は、そのグループ毎によって考え方が変わってくると思います。この原因として、何があるのかなということをグループで話し合った結果、それは、そのテーマについて話し合った時のタイミングや場所、人であると思います。そこで又、考え方がいろいろ出ることを、ここで止まってしまうことが、こういう率直に言いあえ、話しあえる場で出てきた考え方が、リーダーが目指す社会なのかなということを考え直した時に、いやそこでは違うだろうと。グループは、僕ら1つではない、A班・B班・C班・D班、またRYLA、ここでは2680地区、2670地区ですが、他の地区いろいろな地区があると思います。そこでも様々な意見が出ると思います。そこで1つのグループの考え方で収まるのではなく、他のグループの意見を取り入れて、また同じように多様な意見を語り合い、その意見を認め合い、共有し合う、そこで出た答え、考え方、新しい考え方のサイクルが、私達が考えるリーダーが目指す社会とはどういうものかという意見がありました。この考えについては、私達10名と同じようにこの考えを持つだろうという意見もあるかもしれません。ですが、私達がこの3日間話し合い、遊び、学び、した結果、話し合った結果、出た考え方がここにいき着きました。

以上で、B班ぼつの発表を終わります。ご静聴ありがとうございました。

○安行　B班について誰か、語句的な質問、ここが分からん、もう少しというところはありますか？1つ聞きたい、ボツというのは、没ですか。

○大西　底辺を支えるという意味です。

○安行　底辺を支えるという。

○大西　はい。悪い意味なんですけども、でも1番下って必要だろということで。

○安行　分かりました。はい、ありがとうございます。

○大西　これ、坂東さんじゃないですよ。これ坂東さんイメージして描いてるわけじゃないんですから。それだけ、すみません。

○安行　僕はそう思って描いてるのかと。分かりました。ありがとうございます。何分ここの自動販売機はサントリーばっかしなんで、有り難く宣伝をしていただきました。ちょうどサントリーとここは、共同でスポンサーをやっているので、ここの自動販売機にはサントリーのものしかないということもありましたので、宣伝ありがとうございました。ぼつの意味が分かりました。それじゃあ坂東と書いとったらいいんですね。

それぞれ詳しい内容等については、次のフォーラムの方に移ってからでお願いします。

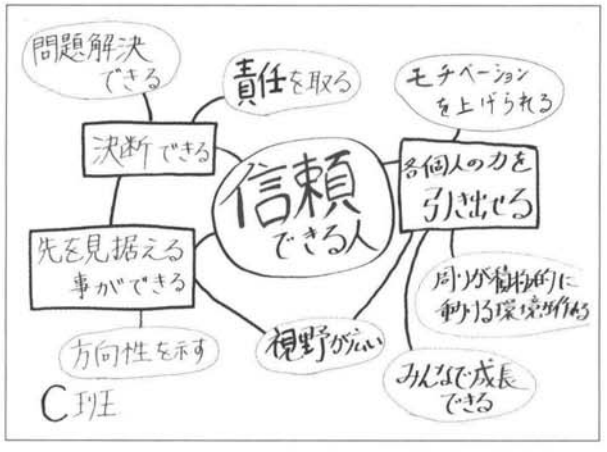
ではですね、次C班の発表に移りたいと思います。少し紙を貼り終えるまで待って下さい。

■■　バズセッション報告　C班　■■



○吉野　これから、C班の発表を始めたいと思います。よろしくお願いします。今日発表するのが、私吉野と、

○鎌谷　鎌谷と申します。どうぞよろしくお願いします。ちょっと皆さんのお話が終わって緊張してるんですけども。



まず、C班では、リーダーとはどういう人かということについて、信頼できる人という結論に至りました。では、信頼できる人というのは一体どういう人なんでしょうか。私達は、3つの軸・ポイントに意見が出ました。1つ目が個々の力を引き出すことができる人、2つ目に決断のできる人、3つ目が先を見据えることができる人です。

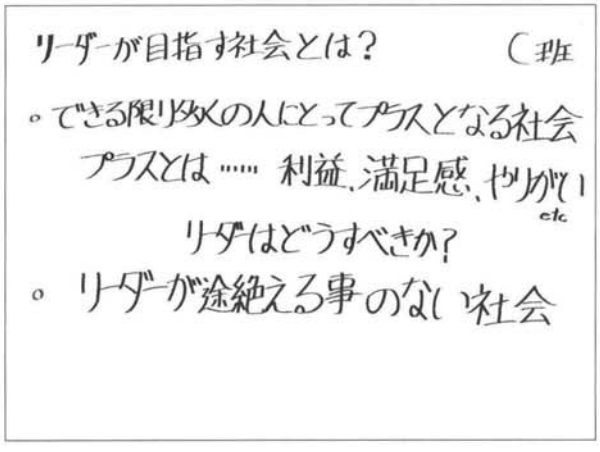
まず、1つ目の個々の力を引き出すことができる人とは、一体どういう人なのか。私達の意見に出たのが、まず1つ目は周りが積極的に動ける環境を作れることができる人、2つ目がモチベーションをあげることができる、3つ目にみんなで成長できる人ということです。やはり個々の力というところで、自分だけが仕事できても、リーダーとしては認められません。やはり、そのリーダーとして有能なのは、メンバーの力をそれぞれ1人1人の力を引き出すことができる人が、リーダーとして求められるものだと考えます。

2つ目、決断のできる人というのがどういう人かというと、責任を取ることができる人、そして問題解決ができる人です。決断したことに対して、結果として悪かったとして、その結果に対して自分は知りませんというような人に対しては、誰も信頼をしてついていくことができないと思います。また、問題解決能力はそういう決断に対して必要なものだと思います。

3つ目に、先を見据えることができる人。これは例えば方向性を示すことができる人と、あとは視野が広い人です。方向性というのが、やはり何処に向かっているか、リーダーが何処を目指しているかというのが、メンバーの中で共有ができていなければ、自分自身の組

織が何処に向かっているのかというのが、きちんと示されていなければ、皆が何処に向かっているのか分かりませんので、ついていくことができないと思います。組織としてのまとまりもなくなってしまうと思います。また、視野が広いというのは、やはり広い視野、いろんな多方面から見られる視野というのが、その方向性を決める為にも必要なものになってくると思います。このような表を作って、例えば先を見据えることができるというのは、視野が広いというのは個々の力を引き出せるということにも繋がりますし、このような要素を、それぞれの3つの要素を持ち合わせてる人には、フォロワーがついてくるので信頼できる人として、メンバーに認めてられることができると思います。この信頼できる人というのが、私達がリーダーとして考える人物像です。

では、このようなリーダーが目指す社会というものはどういうことかについて、吉野さんから発表していただきます。



○吉野　ありがとうございます。今鎌谷さんからご紹介に与りました吉野です。吉野です。大事なことなので2回言いました。ちょっと、どこだかの班のをちょっと使わしていただいたんですが、あんまり面白くなかったですか、すみません。じゃあ早速本題ですが、今鎌谷さんに言ってもらった、信頼できる人ということで、うちのベースとしてはそういう方がリーダーに向いているんじゃないか、リーダーとしていいんじゃないかということが決まったのですが、私達はリーダーとはどんな人か、次にリーダーの目指す社会の順番で考えているので、皆さん逆の順番で考えておられてたので、ああ、そういう考え方もあるのかなということでちょっとびっくりしたのと、ああそうなんだと勉強させていただいたのですが。今決まった信頼できる人ということのリーダーで、じゃあどういう、そのリーダーが社会を目指すのかなということを、皆でうちの班で、ちょっとブレインストーミングや話し合い方法を用いながら考えたわけですが、先に申し上げておかなければいけないのが2つですね、1つに絞ろうかと思ったんですけど、2つ社会ができてしまった、社会ができたという点ですけども、候補が立ってしまったという点に関しましてご容赦ください。これが何で2つできたかというのは、後々お話ししたいと思います。

じゃあまず1つ目ですね、1つ目はここにも書いてありますが、できる限り多くの人にとってプラスとなる社会。またプラスとかそんなざっくりした言葉使っとっていいの、みたいな話になるかもしれませんが。このプラスとはここに書いてあります、利益、満足感、やりがい。幸福感や達成感など、物に当てはまらず、良いことと置き換えてもいいかもしれませんか、そういう得られるもの、良いことに対してプラスという表現を用いてます。エトセトラですから、ここにご自分で得られたものを全部入れてもらってもいいんですけど。じゃあ何で今まで提起されたリーダーから、この話が繋がってくるかといいますと、B班さんの次世代のリーダーや、A班さんの伝えることができるというところと、うちの班が若干似ているところがあるんですけど、プラスとはですね、個々のプラスになる点でリーダーが支配するといったら変ですけど、司るといいますか、1番小さい社会でいうと家族が多分あげられると思いますけども、家族だったらだいたいお父さん、おじいちゃんがリーダーとして、もしかしたらお母さんの

所もあるかもしれないけど、うちの所はお母さんですから。ちょっと恐いですからお母さん。お母さんとか、リーダーがいますよ。学校だったら、生徒会長とか先生とか、社会だったらそれこそ社長さんとか、ロータリーさんの方もおられますけども。そういうリーダーが、グループの皆さんに対して方向性を指し示したりとか、能力、あなたはこれが向いてるんじゃないかなという、役割分担とか適材適所に当てはめることによって、実際にですね、あ、私これが向いてたんだ、A班さんの話にもありましたけども、私これが向いてたんだ。じゃあこれをここに行ったらということで、その仕事に対する満足感ややりがい、達成感等が生まれると思います。この満足感ややりがいが感じられないと、社会としても非常に、何て言うんですか、あまり楽しくなかったりするとあまり良い社会とはいえないっていう話もうちの中では出てきましたので、それも混ぜてできる限り多くの人にとってプラスになる社会ということで、1つの社会がこうした社会だということになります。じゃあそれをする為に、リーダーはどうすべきかというかということで書いてあるんですが、これの為に社会が2つできてしまったということになってしまっているんですが。じゃあそれは何かというと、リーダーが途絶える事のない社会ということで、このリーダーが途絶えることのないってどういう意味っていうことになるんですが、どういう意味といいますと、そのままの意味です。途絶えることのない、リーダーが絶え間なく、絶え間なく、絶えず出演してるのならいいんですけども、絶え間なく続いていくということです。そんなこと言われても分からんやんという話になるので、ちょっと補足説明をすると、今、信頼できる人ということでリーダー出してもらったんですけど、このプラスとなる社会を作っていく為にも、信頼できる人が一世代でも欠けてしまうと、もうそこで連携が取れなくなるといいますか、世代が終わってしまう。また、そこからまた復活させようとすると、更に途方もないエネルギーが必要ということもありまして、続けていく継続性というのが非常に大事なことだなということを私達の班は考えました。継続性の為に、リーダーはどうするのかということなんですが、先程も申し上げましたが、A班さんもそうですし、B班さんもそうですが、次世代、次世代のリーダーを育てるということで、ちょっと違う、うちの班がちょっと違うのは、そのリーダーを、次世代のリーダーを作る為に、現リーダーが、方法はそれぞれリーダーさんで違うと思いますし、私達がここでバンと言えることでもないかもしれませんが、自分から例えばその後輩、後進の人に向かって「こういうことをするんだよ」と発信してもいいかもしれませんし、一家の大黒柱として、お父さんとして俺の背中を見ろみたいな感じで、そこだけでもいいのかもしれません。

リーダーにとって伝える方法は千差万別かと思われますが、リーダーが次の後進を育てる為に自発的に私もリーダー意識を持とうみたいなそういう感じで、そういう機会をよく与える、多く与えるという意味でリーダーが途絶えることのない、作るじゃないです、途絶えることのない社会を築けていけたらいいのかなということです。

ちょっとまとめになりますが、リーダーの途絶えることのない社会がありきで、できる限り多くの人にとってプラスとなる社会が築けていければ、これからの世の中良くなっていくのかなと大きなことを言いましたが、なっていくのかなと思います。

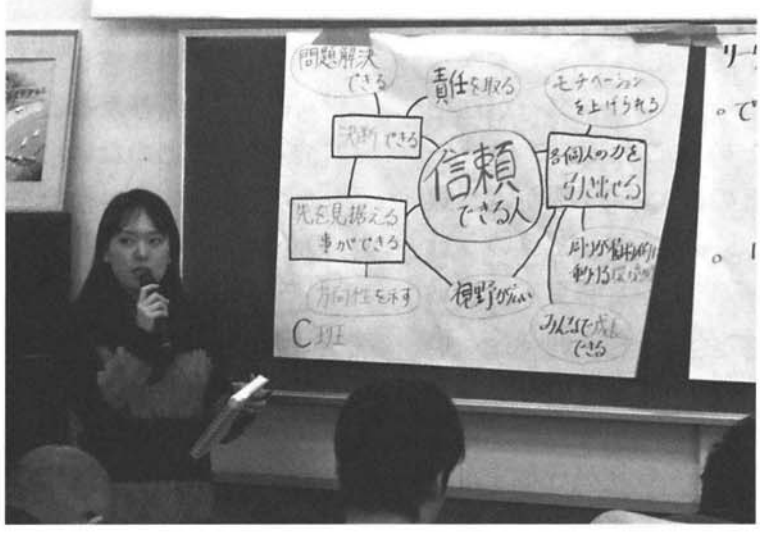
これでC班の発表を終わります。ご静聴ありがとうございました。

○安行　ありがとうございました。C 班の語句的に分からないとかいうところありますか。ここもう少し聞きたいとかいうところ。はいどうぞ。

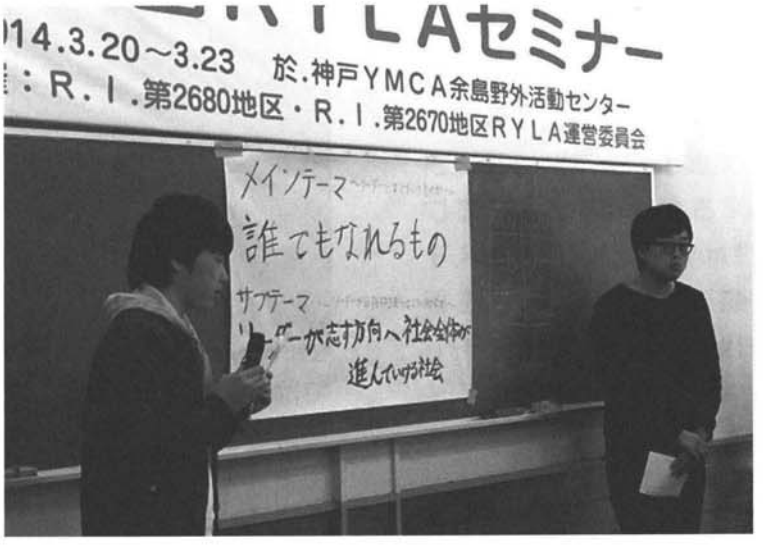
○坂本　すいません、B 班の坂本といいます。すごくいい発表ありがとうございました。1 つ語句になるか分からないんですけども、「できる限り多くの人にとってプラスとなる社会」というところで、皆じゃなくやっぱり大多数という部分で、やっぱり多少のマイナスがある社会というのは OK という意味で捉えてもいいですよね？

○吉野　貴重なご質問ありがとうございます。そうですね、1 番最初に、私達も当初できる限りという表現にはなって、全ての、本当、もう全員、できればそういう観点でプラスになっていければ、プラス、利益だけに留まらず、満足感が全員得られれば、勿論皆楽しく笑顔でいけるんじゃないかなというのもあったんですけど、この世の中ですからちょっとそこを考えると、少なくとも、勿論理想としてはそうなんですが、社会としてそれを寧ろ目指してしまうと、それこそ宗教的な、何もマイナスがなしに、皆が満足感を得られることになってしまいますから、私達としてはリーダーとして目指す方向として、勿論救える数は、出来れば低くしてしまいたいんですが、できる限りという表現を残念ながら使わせていただいております。そういうような意味になりました。

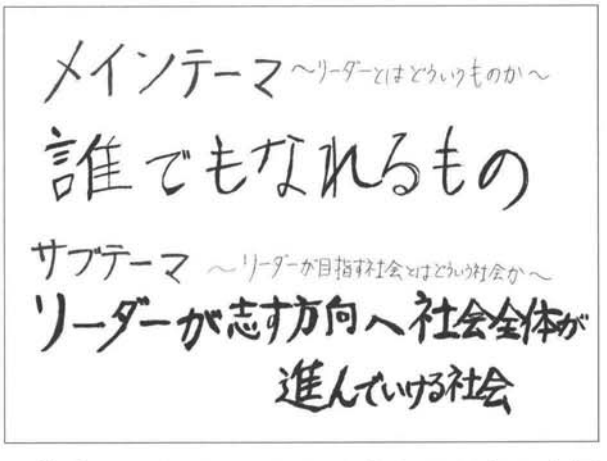
○安行　じゃあ他はないですか？もう少し語句の説明が必要だという。ないですか。じゃあ C 班ありがとうございます。
それでは最後の D 班ですね。



■■　バズセッション報告　D班　■■



○宮川　はい、今からD班の発表を始めていきたいなと思います。最初に言っておきたいんですけど、手抜きじゃないです。こういうことにしよう、1枚にバーッと書いていこうということで1枚になっているだけであって、手抜きではないです。それだけ押さえといてください。



社会というのは、いろんなものがあると思います。もう皆さん出たこともあると思うし、A班も仰られてましたけど、国だとか、さっきのC班だと家族だとかも社会という風に捉えることができます。私達はこの、A・B・C・Dそれぞれも1つの社会ではないのかなと捉えまして、このD班を具体例として発表を進めて行きたいなと思っております。私達D班は、その場の場面で、全員がそれぞれリーダーになることができる班です。そのリーダーの1人に今日発表をしてもらおうかなと思っております。よろしくお願いします。

○劉　見た目は3人なんですけど、実はこちらの事情があって王さんはあんまり日本語を喋れないので、ここではちょっと中国語を喋らせていただきます。私は、通訳を務めさせていただきます。よろしくお願いします。

○王　この島はとても綺麗です。しかもうちのチームは、女性は見れば分かるように皆全員綺麗なので、毎日とても楽しい時間を過ごすことができました。

○劉　さっきちょっと言いそびれたんですけども、ここではちょっと私の意見を言わせていただきます。あの実は、うちのチームでは女性だけではなくて男性の方も全員、見た目だけではなくて心もとても綺麗なんです。そのカリスマリーダー王さんの話に戻ります。

○王　リーダーとはどんなものかといえば、チームの皆を見て私はこう思いました。皆それぞれの個性を持ち、それを活かし、チームワークを発揮することができました。だから

皆全員、リーダーだと思います。例えば私、王が皆の憧れのカリスマリーダーです。Thank you.

○宮川　ありがとうございました。この王さんの他にも、うちの班にはたくさんのリーダーになってもらってる方がたくさんいまして、その中の１人、もう毎日毎日ムードメーカーとして、全員を楽しませてくれる大志さん。

○中川　はーい。

○宮川　もうご存じの方もいると思います。もうすごく楽しい方です。このように、たくさんのリーダーがおります。うちの班には他にもリーダーがたくさんいるんですけど、他の班員の方もそれぞれ違った形でリーダーとして活躍してくれております。場面場面によって、リーダーが変わってくる私達Ｄ班ですが、私達は1つの目標を持ってこのRYLAをやってきました。その１つの目標というのは、交流を深めて、深い交流を持って自身を高めるという、そういう目標です。この目標に向かって、皆で頑張って幸せな気持ちになれたら、これ以上素晴らしいことはないなと本当に思っております。

私達Ｄ班は、リーダーが目指す社会とは、そのリーダーによって異なってくるのではないかと思いました。というのは、勿論今までの班の方が言われてた理想的なリーダー、勿論それもリーダーです。しかし、大げさな話ですけれども、ナチスドイツのナチスも立派なリーダーだと思います。もう世界的には批判されてますし、悪い印象がいっぱいある人ですけども、それも１つのリーダーの形だと思います。リーダーによって、進んで行く方向というのはは違ってくるんじゃないかなと思いまして、どんなリーダーにも共通している、そういう良いリーダーも悪いリーダーも共通している、目指しているところがあるの



ではないかと私達は考えまして、それはここにあるように、リーダーが志す方向へ社会全体が進んでいける社会、これがサブテーマのリーダーが目指す社会ではないかと私達は考えました。どういうことか、漠然とし過ぎて分からんという人が多いと思いますが、それをＤ班に当てはめて考えていきたいと思います。例えば、私達Ｄ班には多くのリーダーがいます。そして深い交流を持ち、自身を高めるという１つの目標に向かって共に頑張っています。その結果、私達Ｄ班はご存じの方も多くおられますが、どの班よりも楽しく、どの班よりも結束力がある班になっていってると私は思っております。リーダーが目指す社会というのは、Ｄ班のように全員が１つの目標に向かって一緒に進んでいける、そういう社会なのではないかなと思いました。そこで、このリーダーが志す方向へ社会全体が進んでいける社会ということを、結論を出させていただきました。リーダーが目指す社会が、リーダーによって異なると言うたら、リーダーがどういう人であるかというのが問題になってきます。そこで私達は、どのような人がリーダーであるかを具体的にあげて考えていくことにしました。そこであがったのが、例えば人の心を理解し、好奇心･向上心を持って更なるステップへ導ける人がリーダーであるという意見です。または、先程からあがっておりますように、次世代のリーダーを育てていける人がリーダーではないかという意見など、他にも様々ありました。カリスマ性が

ある人、問題に対して積極的に取り組める人、責任感のある人、皆に平等な人、倫理的思考力がある人など、本当に多種多様なリーダー像があげられております。思い描くリーダー像は人それぞれ違っていて当たり前で、その全てが間違ったものではないんだと思います。

そして、その意見全てに当てはまる共通点を見つけて1つの言葉で表す、2つでも、複数の言葉に表すというのが、非常に難しいことなのではないかなと思いました。そこで私達は、視点を180度変えてどのような人にリーダーになって欲しくないかという視点で考えてみました。すると、大きく分けて3つの人物像が見えてきました。書いてないのでちゃんと聞いてください。

1つが、やるべきことが見えておらず、それによって適切な指示が出せないなど、臨機応変な対応力に乏しい人です。人に、リーダーとしてついていくからには、その人には自分を上手く使ってもらいたいと考えるのは当然ですよ。その上で目標、適切な指示などはなくてはならない要素なのではないかなと思いました。

2つ目は、口先ばかりで自身は行動をしない、行動しようとしない。自身は行動しようとしない上に、責任すら他人に押しつけてしまう、そういった人はリーダーになって欲しくないなと考えました。リーダーといっても、社会の中では1人の人間です。同じ方向を共に目指すのであれば、共に同じだけの苦労を共有してリーダーにも一緒に行動してもらいたいなと思いました。

最後3つ目ですが、頭が固くて、客観的に物事を見れず固定観念に囚われ、人の意見を聞かない、人を理解しようとしない人です。1つの社会といっても、その社会にいる人間は、本当にいろんな考えを持っていて、いろんなやりたいことがある人達ばかりです。同じ考えの人はなかなかいません。そういう中で、1人のリーダーになってる人が、突っ走っていくというだけの社会というのは、あまり自分は好ましくないなと思いました。

先程あげた3つが、私達D班が考えたこういうリーダーは嫌だな、というリーダー像なんですが、多かれ少なかれ、この社会には既に以上の要素を持ちながら、リーダーとなってる人はたくさんいます。このことから考えて、例え一般的にいわれているリーダーに必要とされている要素を持っていない人でも、リーダーとなることが出来るんではないかなと考えました。よって、メインテーマに対する私達の1つの答えですが、誰でもリーダーになれるのではないか、リーダーとは誰でもなれるものではないだろうかと考えました。私達は、先に述べたようなリーダーには、絶対ならないことをここに誓うと共に、RYLAセミナーで学んだことを活かし、これからの社会を変えていくリーダーになりたいなと思っております。

ご静聴ありがとうございました。

○安行　先に謝っておきます。全て当てはまります。短い文章の中でしたけれども深い内容でお話していただきましたけれども、その中で何かご質問等もう少しないでしょうか。語句に関してですけども、これは深いんで、この部分からは少し我々は読み取れない部分のお話をしていただきましたから、次のフォーラムの方で深く掘り下げても面白いかなとは思うんですけども。いいですか。

○質問者　噛んで聞こえなかったところを。

○安行　いやいやいやいや、大丈夫大丈夫。それでは、ロータリアンがすごく噛みしめなければならない、リーダーとして相応しくない条件の人達、後ろの方々よく噛みしめて、深い反省をしながらフォーラムに移っていきたいと思います。ありがとうございました。

■■　フォーラムディスカッション　■■

○安行　どういう意味づけがあったのかというのとか、いやでもこの班が言ってることと私達とは少し違う点だけども、これどう思って書いたのですかとか、どう思って、この質疑をされたのですか。というようなこと、或いはもう少し語句的にですね、意味を深く掘り下げていこうかなということについて、皆がそれぞれ意見を出し合って、このA・B・C・Dの皆が書いた意見をシェアをしていくというのが、これからのフォーラムになっていきます。ですから、人のことを責めるんじゃなくて、もう少し自分の理解に深く噛みしめていく為の話し合いをしようという風に思っています。ロータリアンの皆さん方もいろいろ意見があるかと思いますけども、後ほどの夕べの方で意見を戦わしていただいたら幸いです。

　では皆さん、実はこういう意見を一辺聞いてみたいなあというの、いろいろこれはランダムに手を挙げていただいてこれが聞きたいと思ってるのを、少し時間を与えますので何かないですか。ここのところをもっと聞きたいなとか、何でペテン師が坂東さんだったのとか。

○B班A　違う違う。

○安行　本当。違う。本当に信じちゃったんだけど。似てるじゃん。

○B班A　偽物ですよ。

○安行　偽物？帽子ほなあげよう、帽子被ったら本物になっちゃう。ないですか。少しきっかけを作りましょうか。深川先生には少し後から聞こうかと思うんだけど、僕は、少し最初に、C班に聞こうかなと思ってることがあって、何故、「信用」ではなく信頼と書いたのですか。C班、誰か言ってください。

○C班　ちょっと考える時間をください。

○安行　じゃあ考えて次いこうかな。A班の伝えることができる社会、何を伝えるのか。スキルと能力とか、ですけども、伝統とかいってましたけども、それだけでしょうか、伝えることは他にもありませんか。例えば伝統主義っていうのと伝統とは違うというのはどう考えますか。そのテーマ。伝えるものは、スキル・能力とか歴史的な文化とかというお話をいただきました。でも、伝統と伝統主義とはどう違うのか。伝統を伝えるというのは、いろいろ意味がある。それは伝えるものか伝えられるべきでないものかがあるのかどうなのか、それを少し考えてもらって。それからもう少し、これは深川先生にお話をいただく機会と思いますけども、D班ですね。リーダーとは誰でもなれるものなのというのがよく分かりました。皆さんの意見を聞いていると、割と伝承的なリーダー的な部分をいっているんだけども、本質的なリーダー論というのをもう少し掘り下げてもらいたいと思います。その辺のところについてですね、やはりリーダーとリーダーシップというのは少し違ってきます。その辺の所についてはですね、少し皆さんにも意見を聞きたいなあと思っています。D班、リーダーとリーダーシップの違いについてはお考えをどうするのかなと少しお考えをいただきたい。これについては、少し深川先生より補足していただこうかなと思ってはおります。B班では、プレゼンテーション力、知識と技術を同列に扱ってます。プライオリティーはどちらですか。じゃあB班から。

○B班A　すいません、そのプライオリティ

一の件なんですが、2番目のところに行くと思うんですが、そのところで、時・タイミング等によって変わると、その時々によって私達も変わると思っております。やはり、技術職だったならば、やはり技術、プレゼンテーションをする時に、その工程を復元する知識が説明にあります。ですがそれを作る工程に入りますと、その作るプレゼンテーション力は、知識よりも技術にあると思います。以上です。

○安行　そのタイミングとかシチュエーションとか、そういう部分のところによって、技術と知識はそれぞれによって優先順位が違う。これについて皆さんどう思いますか。そうであると賛成の人、或いはそうじゃないと思う人、いろいろあると。じゃあ他の人の意見も聞こうかなと思います。じゃあA班から、このB班のことについて、その時々によって違うと思いますよというのが、もし私は賛成だと思う人、どうしてですかと意見をお聞きください。そうじゃないという人も、どうしてと。どうしてですか。誰か代表で。はい。皆さんちょっとマイク渡しをして下さい。

○佐藤　佐藤です。僕も意見に賛成で、プライオリティーは知識と技術が場合によって優劣というか、優先順位が別に逆転しても構わないというか、そういうもんだと思いますよ、やっぱ、そういうTPOみたいなものだと思います。私からは以上です。

○安行　ありがとうございます。知識の方が先なのかということ、或いは技術、タイミングによるのか、これについてはC班はどう、何か意見はありますか？

○C班A　すみません、質問の内容がちょっと聞き取れなかったです。

○安行　聞き取れなかった。B班は、リーダーというものがコミュニケーション力とプレゼンテーション力が同時にいると。コミュニケーション力にはいろいろ人の話を聞くとか、人のことをしっかり見るとか、ポジティブな意見を送るだとか、そういうことがあって、プレゼンテーション力の中には、知識も技術も同時に並行して書いてもらった。でもそれは、知識的なものが先に来るのか、技術的なものが先に来るのか、優先順位的なものはどっちを取りますか。という質問をしました。同率に並べてもらっているから、疑問に少し思ったのは、両方なんですか、それともどちらか優先してる中、それは同列に扱ったのですかとかいう質問です。どちらもいるということは、やっぱりタイミングにもよるし、シチュエーションにもよるし、両方それぞれのその場所によってはそういう部分があるんじゃないですか、というご意見があるということです。それについて、B班の方では、両方それぞれの部分の立場がいるということで。それについてA班は、そうだと思いますよという。

○木下　C班の木下です。B班のどちらのタイミングでもいるというのは、それはやっぱ合ってると思います。やっぱ仕事で例えば、知識や技術は必要で、プレゼンテーションとかをする人は言ったら計画をする人で、技術は実行をする人なので、どちらが先に来ても別に問題もないし、いいんじゃないかと自分は思うんですけども。だからそれは、時と場合によって、技術の人達がこういうことができるからそれをプレゼンするという意味なので、知識とかで上手く説明して欲しいっていうのもあるし、それは逆のパターンもあるとは自分も思うんで、それはどちらでもいいんじゃ、一緒に並べても別に問題はないんじゃないかなと思います。

○安行　D班は、どう思いますか？

○D班A　個人の意見を述べたいです。

○安行　どうぞどうぞ。

○D班A　すみません、ちょっとこう、リーダーとリーダーシップに関してちょっと考えてましたんですけれども、やっぱりリーダーというのはやっぱり、特定的な個人ですよ。ある種個性を持つ人間なんですね。というか、いろんなタイプの人間がいるので、リーダーというか、どういう人がということが特定ができないはずなんですよ、と僕は思っています。リーダーシップなんですが、やっぱりある時代に、時代が求める特性とか特質なんです、ある種法律みたいな、というか普遍性を持つもの。あと、こういうリーダーシップというか時代が求める特質とか特性を持つ人間がこの時代でリーダーになれると思います。少なくともなる可能性があります。はい以上です、ありがとうございます。

○安行　今のは少し前ですが、質問の部分でリーダーとリーダーシップはどう違うのかということで、今少しちょっと論点を整理すると、今の部分では僕が出したのは、リーダーシップとリーダーの本質と伝承とが違ってきてるんじゃないでしょうかということを少し出して、これはD班の出した部分で、これは私が少しやっていこうかなと思ってるので、少し今のお話を聞いてから深めていきたいと思います。

さっきの話に戻るけども、皆さんの分のプレゼンテーションの知識力は同列扱いでいいですよ。これはシチュエーションによって違ってくるだろうし、タイミングによっても違ってくるということに関しては、それだと思います。それでいい。それでご理解でいいですか。少し今の所で、仰っていただいたような形でリーダー像というものとリーダーシップという内容は、少し本質が違ってくるのではないかということを、少し考えていっていただいて。他に皆で何かリーダー像というものとリーダーシップというものとは違うのかなと。皆があげていただいた部分の中では、少し現象的なものを扱っているのが多いのではないかなという印象を受けたので、そこからリーダーとリーダーシップの違いを、少し皆さんはどう思っているのだろうかなということを質問に投げかけてみたものが、僕が今言ったことから始まっていると。少し先程の部分は、質問内容的には同列扱いの部分でタイミングを見ましょうということで終わりたいと思いますけども。次の分で、何かないですか。

○鎌谷　C班の鎌谷と申します。個人的なうちの感覚というか意見なんですけども、リーダーシップというのは、リーダーだけが持つものというよりはリーダーシップを発揮するというか、リーダーシップという能力というイメージがあって、リーダー像では本当に全体で持ってるリーダーという立ち位置に立ってる人の人物像というイメージがあります。

○安行　はい、ありがとうございます。他にないですか。少し印象的にそこはこう思うけど、別にそれは間違いがあるというわけでは全然ないので、思ってる印象的なものを言ってもらってもいいと思いますけど。はい。

○坂本　B班坂本です。リーダーとリーダーシップについてなんですけど、B班の方では、さっきナチスドイツの話が出たと思うんです。ヒトラーの独裁政権であって、ある話リーダーシップという意味では、かなりやはり力を発揮して進めていった人だと思うんですけども、やはりそれは独裁政権であって、社会の発展性という部分に関して、広い意味をあまり持ち得ない場合が多いんじゃないかなと思います。本質的な部分のリーダーというものは、例えば、社会の発展に対してやはり広く繋がりを持って、社会の成長に寄与できる

ような人間であるというところが、やはり本質的なところに繋がってくるんじゃないかなと、よく分からんながらも思ったところです。

○安行　はい。他に印象的に持たれた方。

○大川　C班の大川ですけれども。リーダーシップというのは、自分の心の持ち様じゃないかなと思って。自分の中でどういう風に主導というか動かしていこうかとか、そういう風なことを考えることで、リーダーというのは、実際になっている。だからさっきいわれたヒトラーとかは、悪いことをしていても、リーダーっていったらリーダーなんじゃないかなと思います。



○安行　はい、ありがとうございます。他にはないですか。

○屈　C班の屈と申します。さっきも皆さんが言ったと思いますが、リーダーというのがまず、チームのトップに立ってる人。リーダーシップというのは、能力だと思います。そのリーダー、リーダーシップを持てないリーダーもいると思います。さっき私達が考えたリーダーというのは、多分リーダーシップを持っている理想なリーダーです。そうだと思います。以上です。

○安行　はい、他ないですか。

○B班A　リーダーシップというのは、仮にAという事柄があった場合に、それをすごくやりたいと思っている人。そして、皆を惹きつけることができる人。リーダーというのは、やろうと思ってることに1番知識を持ってたり技術を持ってる人なので、リーダーがいて、その横にリーダーシップを持ってる人がいる場合もあるし、その逆でリーダーシップを持ってる人が前に立ってて、そのリーダーが知識とか技術とかを補佐している形があるんではないかなという意見です。

○安行　はい。ありがとうございます。他にないですか。このことについて深川先生の方より、リーダーとリーダーシップ、要するに本質的なものと現象的なものの、本当にその違い的なものについてのコメントをいただきたいと思います。

○深川　深川です。皆さん良い意見を出してくださってる。私は今、安行さんの方から言われたんで。私が考えてるリーダーとリーダーシップ、頭の整理が出来てないのでご参考にならないかもしれなかったら申し訳ございません。リーダーというのは、今安行さんが現象と仰った。要するに現象とは何かといいますと、私達の目に映ってる世界、例えば背が高いとか低いとか、色が白いとか黒いとか、美人とかそうでないとか、車が走ってるとか飛行機が飛んでるとか、この目に映ってる世界のことを現象といいます。般若心経で色即是空という言葉がこの中にあります。色即是空の色（しき）の世界、色と書きますが、それが現象のことなんです。色即是空の空（くう）、そら。空の世界が本質の世界であって、私の明日の講義でもう一度言いますが、私の話は全部、「現象」と「本質」を分析して、そこから話を展開していきます。それからこれは、皆さん方がものすごくお考えになってる、そもそも現象と本質を分析して考えるという視点を見つけたら、頭の整理がしやすいんじゃないか

なと思います。ですからリーダーというのは、そういう意味では目に見えてる、さっきの個人とか人とかそういうのにあります。

リーダーシップというのは、現象の世界ではなくてその奥にある本質の世界、リーダーをリーダーたらしめておる、あるもの。それを持っている人がリーダーであります。ですから先程もちょっとありましたように、リーダーでも、リーダーシップのある人とない人いうというご意見になっておりますが、まさにリーダーというのが、選挙で選ばれてリーダーになる、それから学校から任命されてリーダーになる、それから皆におだてられてリーダーになる、いろいろあります。それ全部目に見えている人。だけど、その人が果たしてリーダーシップを持っているかどうか別問題、だからリーダーシップを持っていないリーダーもいます。そういう人が、リーダーシップを持っていない人がリーダーになると、その組織は壊れてしまいます。それじゃあリーダーシップがあっても、そのリーダーシップが悪い方へ働けば、例えばいろいろあります、リーダーシップの中で具体的にいえばカリスマ性の話。幾ら人を惹きつける能力、いろんな能力、先程も皆さん仰ってたけどもいろんなのです、心の中の問題ですね。それがあるけれども、それによって、それが良い方向に行けばいいんですが、ヒトラーみたいに悪いリーダーシップを持ってると、大変なところへ行ってしまう。ですから、リーダーシップがあっても、そのリーダーシップの中身によって社会が良くなるか悪くなるかが分かってくるということを考えて。ですからリーダーシップというのは、良いことの方のリーダーシップが働きかけるのがいいけど、そうじゃなくて、現象と本質という分析の仕方からいけば、必ずしも良いことばかりじゃない、悪いこともある。だから悪いことにいかないように考えるというのも大事だと思います。具体的なことは、いろんな例を出せばいいと思いますが、ちょっと話が長くなるのでまたその機会があったら。とりあえず今の、考え方だけ現象と本質というのはそういうものであるということ。

リーダーシップの１つの例を取ります。源義経が昔鞍馬の山で兵法の修行をしました。その時に六韜三略という中国の兵法書を学んだわけです。六韜三略というのは、３つの略と書くわけですが、上・中・下、上略・中略・下略と。上略が何かというと、戦争が始まる前の兵法、それが上略。それで中略というのは、戦争中の兵法のこと。それから下略というのは、戦争の後の兵法。今のこのリーダーシップにちょっと特に、良い例かどうか分かりませんけども、中国である将軍が、向かうところ敵なしの百戦百勝の将軍がおった。それがある村に来て、泊まりをしたんです。軍隊そこに泊まって。そこでその村の人達は、大変な大将が来たということで、中国の美味しい酒を持ってきて献上したわけ。そうするとその将軍が、自分に貰ったんだけども、自分１人で飲むかと思ったら、それを川の中へ、目の前に流れてる川の中へ流せと。そして「皆川の中へ入れ」と。何言ってるのかと皆思ったら、皆でその川の水を飲もうと言ったんです。それは何かというと、酒を貰った、それは将軍１人に対してその村人は持ってきたんだけれども、これは自分１人のものじゃないんだ。百戦百勝できるその軍隊の、皆の力の為にやってるんだから、これは自分１人の物ではない、皆の為の物だから。しかし１滴ずつ飲むわけにもいかんから、一応それを全部流して皆でその水を飲もうと。だからそれが酒の味がするとかしないとかそんな現象的なものじゃなしに、その心を説いてるわけですね。そういう気持ちの将軍だからこそ、百戦百勝いつも勝って勝ち続けた。そういうものが、リーダーをして、リーダーたらしめるということがあるのだと口では言えるけれども、他にも例はありますけれども。そういうものがリーダーシップの１つの中身だろうと思うんです。

○安行　ありがとうございます。という風に、心の中の問題というのはリーダーシップには大変必要だと。リーダーというものは、現象的な部分で、見ている部分ではないというのは、皆さんが書いていただいた通りだと思います。それで、やはりその中にはリーダーシップというのが大変必要になってくるということ。ちなみにヒトラーは、後々には独裁といわれてましたけども、彼は全部議会を通ってます。議会の選挙で選ばれて、議会の中で政策を承認されて全て進めてきています。ですから、如何に人々が方向付けをさせられて、カリスマの部分に添って間違った方向に行ってしまったのかというのは、歴史が示すところです。ですから、これもリーダーの1つの方向かもしれないですけども、後々に彼は独裁者と言われたけども、実は彼は1人ではやったわけではない。その当時全て議会が承認して、議会が全ての政策を彼のを選んで承認したということが、後々の歴史で分かっています。ですから、悪いのは悪いというのは後に言われましたけども、彼は、そういう道を選んでしまったということです。だから、良い勉強の1つですよ。単なるリーダーを選んでいると、間違った方向に行くかもしれないということ。

少し進んで行きましょう。今のはそれでよろしいですか？他にご意見ないですか、リーダーとリーダーシップについてということ。じゃあ、少し戻りましょう。ではまたちょっと、C班ですね。信頼は、何故信頼と書いたんでしょうか。いやまあ、単純にそう書きましたというのならそれでいいですし、ちょっとご意見聞きたいなと。

○吉野　C班の吉野です。信頼できる人という、書いた経緯自体が、リーダーってどんな人が出来るのかなっていう、まだそこまで内容が決まってなかった頃に、班の皆の時に、頼れる人・頼もしい人からの流れで信頼できる人になってるので、信用できる人と信頼できる人の引用されるかと、後、頼れるかという違いを考えた時に、頼れる方は、こちらの方が向いてるかなというところで、信頼できる人を選択しております。

○安行　日本語難しいよね。説明こうだろと思う人、いけるかな。これ非常に、僕は毎回RYLAで言ってるんだけども、この信用を書かなかったというのはこうだと思うという人いない。こうだと思うよとか、私はこうだと思うなあとか、いないですか。

○宮川　すいません、D班の宮川です。信用と信頼の話ですけども、自分の中で信用というと、前提として信じてなくて、もうこの人だったら、信じてない中で信じれるなというのが信用で、信頼というのは、信じてないという前提はなくて、誰をも頼ってもいい、信用してもいいなという状況の中で、特にこの人やったら頼れるなという、そういう人が信頼できる人というのではないかなとそう思います。だから、その差というのは、周りを最初にどう見てるかの差なんじゃないかなと思いました。

○安行　はい、ありがとうございます。あの、非常に良いことを言ってもらったと思います。C班の信頼できるという部分のものを最初に書いていただいたというのは、信用を書かなかった部分も、大変非常に重要なことだと思って、非常に嬉しかったと思うんです。それを、D班の宮川君が奇しくも説明していただいた通りだと思います。他にそれを説明する人、僕もそう思うよという人いないですか。

○佐藤　佐藤です。そういう「信頼」と「信用」の話を聞いてて、だったらこれより信頼できる人っていないなあって思ったんですよ。自分以外は信じれないんで、信頼できる人はいないなあって思ったら、今ちょっとリーダーって何だろうなあって、誰も信頼できな

い、その信頼できないは自分じゃないんですよ、相手が腹黒だったりするじゃないですか、人間って。よく分かんないですから、いつ裏切られるか。だから、本当にそういう、何ですかちょっと今、僕、じゃあリーダーになれないなって思ったんで、ちょっと、そういうもんなのかなとちょっと、そうちょっと思ったので言わせていただきました。

○安行　あの、非常に僕は良い意見を言っていただいたと思います。他にないですか。

○江本　B班の江本です。ちょっと上手く説明出来ないかもしれないんですけど、ちょっと思ったのが、信頼というのは、時間をかけてじゃないと生まれないのかなと思いました。それに対して信用は、ちょっとどうかな、というのは私の中では答えが出ませんでしたが。

○大川　あの、C班の大川ですけど。リーダー自身が、誰かを信頼できないんじゃなくて、周りの人がそのリーダーを信頼できるかどうかでリーダーが決まるんだと思っています。

○安行　他にないですか。

○小田　C班の小田です。僕は学生なんですけど、信用取引という言葉はあって、信頼取引という言葉はない。で、信頼関係というのはあって、信用関係はない。なので、仕事の関係なんでしょうけど、さっき江本さんが言った通り、信用というのは、役職上で相手がどういう役職だから信用していいかなと、その人個人を見るんじゃなくて、役職やその立場で信用というのは出来て、信頼というのは、やっぱり個人を見ていかないと出来ないということで、信頼という言葉は信用の上位語かなという風に僕は思いました。以上です。

○安行　他ないですか。何となく、皆の意見で何となく分かった、上手く説明が出来ないけども。でも、このリーダーの、すごく基本的な条件は皆の意見を見た部分で集約されていると思うので、これはすごく大切なことだと思います。心理学用語的に、信頼と信用は違うというのはよくあります。何故かというと、信用というのは、担保を取ります。信用組合とか銀行とかあります。そうすると、あなたのことを信じられないから、何か担保になるものを貸してくださいということで、それを担保に出して、お金を借りちゃうんですよ。そうするとです、信じることが出来なくなったら担保を取りますから、結局それをやっちゃうと、出てくる言葉は「裏切った」とか「こんだけ尽くしたのに」とか「これだけやったのに、何だ」ということが出てくる。これが「信用」なんです。担保を必ず取ってます。「信頼」というのは、例えば、親子の関係とか兄弟の関係とか親友の関係とか、そういうことで担保を取らないんです。何かあるんだと、全面的に信じて、まず何かあろう、だから応援しよう、そこに担保を取らない。だから裏切ったとか裏切られたとか、例えばこれが男女関係でもそうだろうし、恋人の関係でもそうだろし、何かそうなって裏切ったとか裏切られたとか、「これだけやってあげたのに」とかいう、そういう担保を取っちゃうんです。そうじゃないです、本当の愛情の関係とか本来信頼できるような人達というのは、担保を取らないです。だから全面的に信じる。まずリーダーになるような人達は、それをやろうと思います。今回の皆さんの班のお父さんやお母さん達は、あなた達に全体の信頼をおきました。それは我々も一緒です。そして、少ないルールしかあなた達に与えませんでした。それは、あなた達から担保を取るようなことをしません、我々は。全体の信頼をおこう、あなた達に任そう、あなた達がリーダーになることを心から願って、ここで信頼できる人になってもらおう、ということを、ここで考えて、担保を取るようなことをしません。

それがまあ、リーダーとしての条件の1つということをC班はあげてくれて、皆それを、それぞれの中に含んでるということを思ったので、それを少し取り上げていきました。それがまず1つです。まだまだ時間があるので進んで行きたいと思います。またC班の方から、あとはこっちへちょっと飛んでいきますけども、C班最後ですけども、できる限り多くの人にとってというのは、先程もちょっと最初の説明の時の質問がありました。では、少数の人はどうしようか。誰かC班、もう少し説明が出来ましょう、出来るでしょ。できる限りここには、もう1つあるんです。できる限りという限りは、持続可能の発展形式というのがあって、できる限りそれを維持をして、それを同化していかなければならないという、我々にとっては、とってもとっても大変なことになっていくんです。でも、それをずっとやっていくと、しんどくなっちゃうんだけども、できる限りというのは、どの変の程度の部分をいけるのかなということを、説明をもう1つして欲しいなあと思います。少数の人はどうしようかなとかできる限りというのはあるんだけども、少数の人の方はどう考えようかなというのを、少し説明していただければ。大変これはこれでいいと思うので、できる限り多くの人にとってプラスとなる社会、では、少数の人はどうなるの。それは浮かす。浮かさない。考える。考えない。というのを少し説明してください。どうです。その辺の話し合いは、合いましたか。それをちょっとお聞きしたいです。

○鎌谷　ちょっと、皆さんの意見の話し合いの中で過程で出てきてたのが、できる限りという中で、リーダーが目指す社会、リーダーが自分と関わる人に対して、できる限り自分と関わる人に対してプラスに、相手にとってプラスになるような社会を目指していきたいという意見が出てきたんです。

○安行　成る程成る程。この場合のできる限りというのは、自分の能力のできる限りということです。そういうことですか。分かりましたか。皆さん。決してできる限り、点やな、できる限り、句読点で、多くの人にとってプラスになる、そういう意味ですか。できる限り多くの人ですか。どっちでしょう。

○掘　C班掘です。できる限り多くの人というのは、例えば会社だったら、自分と顧客が取引して欲しい物を提供して、買い取った方は、その分があってお互い利益を上げてプラスとなるというのが、昨日もあったんですけど、三方良しみたいな話があって、その取引を公衆トイレを作るとかという話を、自分らの仕事の中にも組み込んだりして、いろんな人にとってプラスとなるようなことを行っていけば、自分だけじゃなくて関わる全て、社会も含めて、できる限り多くの人、物だとか社会だとかにとってプラスになるようなことを目指すという風な感じで話してました。例えば、話の中にも出たんですけど、できる限り多くの人をプラスにする、そのプラスの幅とかも、それもやっぱり、それもできる限り、こっちの人は例えば10点分しか満足度がなかった人もおるだろうし、こっちの人は70点分ぐらい満足したよという人もおるし、それもできる限り多くのプラスを取っていけるような社会を目指すのがリーダーであるという風に話してました。例えば、意見が合わない人がいるとして、いると思います。いるんですけど、そういう人は、その人自身がリーダーの目指してる方向とは違う方向に向いているわけなんで。ということは、意見が合わない人自身がリーダーとなって、別の社会を、コミュニティを作るとかいう風な感じで、いろんなグループが出来上がっていくのが社会ではないかなという風な感じにはなりましたね。

○安行　はい。これについて、何かありますか。

○**佐藤**　佐藤です。要は、自分の括弧内が幸せならいいってことですよね。

○**堀**　そうです。

○**佐藤**　いや、素晴らしい意見だと思います。真理だと思います。

○**安行**　はい、別にどうこうしようとかいうわけのはないので、そういう意見に対しては僕はこう思うけども、それについてはどう思うかということをしていただいたら全然大丈夫ですので。喧嘩でも何でもないです。

○**堀**　　そうなる意見もあるかとは思いますけど、そういうこともあるから、出来うる限りという文言がついてます。例えば、リーダーを含むコミュニティが、できる限りの範囲ですね。自分らの話ですね、その利益プラスを出そうというのは、自分らの関わる人とか自分らのコミュニティができる限りのプラスと多くの人のプラスだったんです。という話です。

○**安行**　他どうですか。

○**藤枝**　C 班の藤枝です。別の意見になるんですけど、C 班はまず班がリーダーとしてまとめる人で、信頼できる人とおいたんですけど、その信頼できる人の条件として、全体を見た状態で決断して、判断して、その物事を決めるんですけど、相手方にとってはいろんな意見があると思うんです。その意見を汲み取った上で、できる限りの多くの人にわかっていただけるようなことを考えて、そのまま責任を取った行動として、その説明責任を果たして満足していただくという意味で、そういう意味でできる限り多くの人にとってプラスとなる社会になったらいいなと僕は思いました。

○**安行**　他ないですか。

○**大西**　すいません、大西です。できる限り多くの人にとってプラスとなる社会のところなんですが、これはリーダー個人が決めてるものなんですか。それとも話し合った結果、皆でまあ、これがベストだろうっていうのでできる限りっていう意味になったんですか。それ、リーダー 1 人だったら何かリーダーの負担がでかいなあと。

○**白木**　C 班の白木です。「できる限り」というのは、皆この班でもいろんな意見が出て、賛成・反対が出るのと同じで、皆が満足できるっていうのは、多分なかなかそういう答えは出ないから、言ったら、大多数の方の、その 1 人の駄目な方の意見を参考にするわけにもいかないから、それはやっぱり全体を見てから、割合をリーダーとしては、1 人だけの意見とかを参考にするわけにもいかないから、全体として、100％は無理だけど可能な限りというので、できる限り多くのっていうのは付けたんですけども。やっぱ完璧というのは絶対無理だと思うんで、そういうのでやっぱ、皆ができる限りでできる範囲内でやるのが 1 番いいんじゃないかなということで。

○**宮川**　すいません、D 班の宮川です。さっきのご意見をお聞きして、お訊ねしたいんですけども、極端な話、多数決で決めるという風にちょっと聞こえたんですよ。その多数決と、今仰られたこととの差というのは何処にあるのでしょうか。

○**安行**　いいですか、もうちょっとあります。

○**白木**　多数決というのではなくて、例えば、会社の従業員さんがいる社長さんで、1 人が賛成している意見と 10 人が賛成している意見があるとすると、会社全体としての方針としては、社長が最終的に決断が決めるかもしれ

ないけど、社長はリーダーとして皆の信頼を得てるし、会社の雰囲気なりをやっぱ決めるじゃないですか。それでやっぱり、だから多数決に結局なるじゃないですか。何でも、選挙でも結局の所、多数決なんですよ。選挙ですけども、例えば、法律決めるのだって、自分らが選んだ国会議員が、結局多数決で決めてるから、投票して。だからその、何て言ったらいいのか、その、あーもう、台無しやな。

○安行　OK、OK、じゃあ締めましょう締めましょう。あのね、あ、もう1人だけ意見聞こうか。

○滝川　すいません、B班の滝川と言います。ちょっと別の視点からというか、やっぱり先程も仰られてたんですけど、やっぱり人間というか、1つのグループでできる範囲って限られてると思うんですよ。仕事なんかでも1個の業界、例えば僕なんかは今自転車の業界で、関わってるんですけど、やっぱその中でのできることって、絶対限られてきてると思うんですよ。やっぱり、他にもいろんな業界ってグループがあって、それぞれできることってやっぱり絶対限られてきてるんで、そこはちょっとB班の方の発表にもちょっとあったんですけど、やっぱりお互いのグループの方で、やっぱり相互補完というわけやないですけど、やっぱりお互いが高め合って、成長していくっていうのは大事なんじゃないかなという。さっきから、1つのグループだけというか、その中でできることだけで、ちょっと終わっちゃってるんじゃないかなというのは、ちょっと感じました。以上です。

○安行　じゃあ、このくらいでしておきましょう。皆さんの意見ご尤もで、これは、コミュニタリアニズムといって、共同体で、今流行のマイケル・サンデルって人が、ハーバードの白熱教室でやってることです。共同体の中で、これは功利主義といって、皆が大多数の部分の人達の功利、要するに高揚を高める為の手段というか、やっていこうというのがマイケル・サンデルさんの主張なんです。だからC班をあげてもらって、できる限り多くの交流を取るということなんですけども。

それに対してジョン・ロールズという人は、格差原理というものを今は主張していてです、大変もっともっと少数の、もっともっと格差のある底辺の人達を救うのは、勿論それは我々の義務だろう、という風に言っているんです。だから、この議論というのは未だに論争が続いているんです。だから今非常に良い意見は、皆の意見はそうだと思うんです。この前にもいろんな意見があるんだけど、この両方の、全体を高揚する、要するに全体の幸せを願う為の部分、それと、実は、元々おかれている格差のある人達のはどうするんだということを考えていこうという、この両方の調和を図っていこうということが、まずこれからの我々の課題になっていっているんです。だから、両方の意見があるのは当たり前。今もう1つのが、多数決の意見というのは、少数意見を排除するというわけじゃなくて、多数決が全て正しいわけじゃない。多数決は民主主義とは全く関係ない、後で採用されただけであって。これは枢機卿を選ぶ時に、昔大変だったんです、ローマ法王とか選ぶ時に。それで、こんなことをやってもどうしようもないので、全員の人達の中で、まあまあ大多数の人が手をあげた人に、法王になってもらおう、というのが、まず多数決の最初だと。ローマの法王を選ぶ為に、枢機卿を選ぶ為の方法論として多数決を選びました。これを後々に、議会で取り上げていったのが、そもそもの始まりです。だからこれは、多数決が決して良いというわけじゃない、民主主義のルールではないです。これは後から取り入れただけの話なんです。ですから、多数決で大方の総意をとろうというだけの話で、少数意見を捨てなさいというわけじゃない。だから、少数意見は大変必要です。でも、大方のやり

方を皆で、総意になったんだから、一歩やってみようよというのが、今の多数決ということです、先生。はい。お一恐かった。というわけで、少し先生のご意見をもらって。

○深川　今安行さんが仰ったこと、その通りなんで。もう1つ、こんな考え方もあります。ご参考までに。ユダヤの法律で全員一致の審決が無効であるというのが。これはどういう意味かというのは、人間の社会っていうのは、皆が真面目に議論すればするほど必ず違った意見が出てくる。それにも関わらず全員一致の採決をするということは、よほど不真面目な人間がそんなことどうでもいいやって言ったからできるか、或いはそれは神様の枢軸、神様の世界なら全員一致ができるだろうけども、人間の世界が真面目に議論をすれば議論するほど、必ず意見は分かれてくる。そのことを頭に入れておく必要があるだろうと思います。ですから、ユダヤというのも、良いことを言ってるなあと思うのは全員一致は無効だよ。こういう考え方もあるということを頭に入れておいて下さい。他にもあるけど、また思い出したら。

○安行　分かりました。ということで、ほっと安心しました。だから皆さんの意見は、全体の高揚を考えるというのでOK。そうじゃなくて、少数の意見も大変必要ですよというのが、今の世界というのは、そういう風になっています。ロールズなんてね、学生社会でね大変虐げられてる人達の分、それから見捨てられてるような人達の権利、そういうことも必要じゃないかということを、今やってる。だから、全体の高揚と少ない人達の、格差を受けている人達の高揚を図っていこうというのが今の課題なんです。だからこれには、両方の意見があって当然。これまだ結論出てないです。例えば、アメリカではアファーマティブ・アクションといって、昔虐げられてた黒人の人達に、大学の入学資格を与えようと、そういう風なことも必要ですということをやってるけども、これはやはり、少数の人達のやはり昔に受けた傷を、どうするのかという問題定義なんです。実際に行われている。そういうことが、ロールズの格差社会をなくしていく為の格差原理ということを、今始められてます。もう始めていってます。だから、両方の意見があって、そういう社会を望んでいこうとした人達の部分は、リーダーとしては必要だとよく分かりました。この話はこれで終わりたいと思います。だから、そういう論争がある、まだまだ我々の社会というのは、いろんな方向付けをしていこうとしている。だから、問題提起をしていただいたC班の部分の大きな人達を多くの人達を救うのはOKなんです。でも、虐げられてる人達の少ない部分も、どうかして頑張ってやっていかなければならない。今、深川先生が仰ったように、多数決の意見というのは、決して決して我々の方向を導いていくわけじゃない。少数の部分の意見も大切なものが確かにあるということです。それを、お分かりいただいたら幸いです。

○深川　今、安行先生が仰ったマイノリティの人達を大事にしようというのは、明日の講義の最後の最後に私が言います。

○安行　すいません。聞いていません。ではですね、次進んで行きたいと思うんですけども。A班で、フェアな人というのを少し、もう少し説明してもらいたいと思います。フェアというのは、どういうことなんでしょうか。そのフェアというのを、少しこういうのであり、こんなことをいうというのを少し補足説明をしてもらいたいと思うんですけども。どういう話し合いの中にフェアというのが出てきて、もう少し出てきたフェアというものの考えを、皆さんにお伝えしていただければ、大変嬉しいです。



○八木　すいません、A班の八木と申します。フェアな人間というのは、自分の意見が言えて、リーダーが全ての人に分け隔てなく、意見を取り入れてくれる人がリーダーだと思うんですけれども、コミュニケーション能力って、聞き上手な人間がなるべきだと思うので、リーダーは部下の考えてることを受け入れて、上手に質問して、例え部下が自分の考えと間違っていても、受け入れて、そういう考えもあるんだろうなと言って、意見をまとめることが、フェアなのではないかなとは思います。

○安行　今の説明でよろしいですか、皆さん。もうちょっと説明よろしいか。フェア。いいですか。じゃあ、もう1つ聞こうかな。魅力のある人、1番目標が明確な人、目標は手段ではないでしょうか。目標が明確な人よりも、何か目標じゃないものをいこうか、目標は手段に使うべきものかなと思うんだけども。ご説明をいただければ嬉しいです。

○A班　それは何故思いますか。

○安行　逆に皆に聞きたいんですけども、目標が手段になっちゃう場合があります。いいですか、答えを言っちゃうとね皆に分かっちゃうかな。

○八木　あのA班は、目標というものが方向、リーダーと全員が方向を示して、その方向を目指した、多分ゴールが目標だということを考えました。

○安行　他にこれに対してもないですか。

○宮川　何度もすみません、D班の宮川です。目標が手段と先程仰られて、自分なりにちょっと考えたんですけれども、リーダーは勿論、その組織全体をまとめる必要があります。まとめる方法として、目標を定めてていうのが手段という、そのまとめる為の手段ていう意味の手段で間違いないでしょうか？

○安行　はい。これに対しては。もうちょっと説明してもらう。もう1回してもらおうか。

○宮川　もう殆ど言うことないんですけれど、何でしょう、組織を作って、勿論バラバラでは、組織とはなかなか言いづらいものがあるんじゃないかなと思います。もう信頼だとかいう言葉もずっとさっきからあがっている通りです。その、まとめる方法としてはいろんなものがあると思うんです。例えばリーダーが信頼できるから、皆が寄っていくと。リーダーが信頼を持つということは、信頼してもらえるという素質を持つというのは、まとめる1つの方法だと思うんです。この目標を定めるという、目標が明確な人、目標を定めるということも、組織をまとめる上での1つの手段となり得る方法なのではないかと思いまして、進言させていただきました。以上です。

○安行　他にないですか。僕のその疑問を呈したというのが、少し、逆に質問されちゃったけど。

○瀬詰　B班の瀬詰です。目標が明確な人という分で、何故目標かということだったんですけど、だた目標というと、例えば会社だと利益を前年比10%上げるとか、そういうのを具体的なものが頭を浮かんでくるんですけど、最初10%を超えたら、何の為に利益10%を上げようとするのか、それが例えば、もっと事

業を拡大する為に、新しい店を増やす為にしようとか、ちょっと皆の給料を上げて、高い給料をくれる会社と思われるようにしようとか、そういう目標の1つもっと先というか、目的といえばもっと正しい言葉かもしれないけど、目的ということかなと思った次第です。

○安行　惜しいとこです。惜しいとこちゃう。言わんとしてること分かってる、分かります、分かります。何とか分かります。ここのところの、分かるようで分からないっていう部分ありますか。いいですね。もうちょっと何か上手く説明できる人いませんか。

○足立　A班足立です、お疲れ様でした。目標が手段になるという話なんですけど、一応目標というものがあって、方向性があるんで、それで皆が目標に向かって歩けるというもんだと、僕はそれを思って書かしてもらったんですけど。目標がなかったら多分、漠然とし過ぎて誰も同じ方向に向かないんじゃないかなと思って。その目標を掲げる上でリーダーが目標を持ってたら、その目標に向かって下も着いてくるという意味で使わしてもらったんですけど。以上です。

○安行　はい。

○坂本　すんません、坂本です。まずA班のリーダーというものがというので、魅力のある人というテーマが挙がってる中で、その目標という言葉が出てきたのが、ちょっと引っ掛かってるのかなというのが、よく分からないですけど。目標ということ自体、例えば明確に示してくれるのであれば、例えば悪徳上司であって、じゃあ前年比の2倍にして下さいと、でも人員は半分に減らしますといった場合でも、それは目標になって、やはりそこが辿り着く所になるのであれば、それに魅力を感じるかというと、少し疑問を感じるところがあるなと思いました。

○安平　勿論、目標を定めるというのはすごくあれなんで、それの上になるかということなんだろうと思います。ごめんなさい。

○A班　そういうことを言ってしまったら多分キリがないと思うんで、ちょっと言わしてもらうんですけど、それはある程度のシュミレーションとかをした上での話ですか。目標というのは、多分ある程度のシミュレーションをして、その上で決めていくものだと思うんですけど。それじゃなかったら、幾らでも高く設定をしてしまうんで、もう空想とか妄想になってしまうと思うんですけど。その点についてはどう思いますか。

○安行　はい。これについてはどうですか、いいですか。

○坂本　多分、言葉遊びになってしまうかもしれないですけど、多分目標という言葉、多分B班で使ったのはビジョンという言葉にしたんです。多分その目標は、多分何かに向けての目標、A班と一緒だと思うんですよ。ただ目標という言葉を使った、先のことがあって、それに対しての計画・目標があって、多分それをクリアした段階だと思うんです、きっと目標というところが。その先にあるのが、目標であるのか、それともビジョンであるのか、きっと多分達成可能であるものということは、多分目標になってくると思うんですけど、達成可能であるものじゃないところに多分何か価値観があったりとかするところがあるんじゃないのかなというのが、ちょっと上手く表現できないですけど。

○安行　はいはい、他に意見は。今の非常に面白いですよ。これは。面白いというけど、解釈してますけど非常に重要な所を突いてますよ、皆。どちらも正しい、非常に大切です、これ。他にないですか。じゃあこれは、この場所で置いとくかなあと思います。企業経営

をなさっているロータリアンの皆様方には、大変よくお分かりだと思うんですけども、ゴールは動きます。目標は動くんです。だけど、動かないのもあります。それは、その人の持ってる理念なんです。理念を定めておくと、目標の設定は何処においても達成できる。理念というのが先にあって、それに向かってゴールを設定するということです。ゴールは動くんですよ。目標は動くんです。だけど、動かないものがある。どんな遠い所からでも、どんな近い所からでも目標を超えた理念に向かって動けるんです。だから、最短距離であっても、長い距離であっても常にその理念を目指すことができるから、そこに向かって目標設定ができるということです。だから目標ではなくて、理念を追求できるような人であれば、魅力がある人になるということですよ。だから、決して目標というのは間違いでない。これは絶対に必要なことです。しなければならない設定です。だけど、そこから上に置くとすれば、今皆が何か違うなというのが、もしも理念というものを持てばということです。これが、その魅力になるんです。理念を追求できるような人達は、必ず目標設定は柔軟にできる。だけど、雲の上にあるような理念というのは動かない。それに向かって行くということなんです。その為の、僕は手段という言葉を使いましたけども、その為に目標を設定するんです。だから、目標は、ゴールは動くんですよ。おわかりいただければ嬉しい。これが企業経営の鉄則ですよ。そういうことがあるということです。これ先生どうでしょうか。目標・理念ということについて。ロータリーというのは、理念というものを大切にします。我々は、その理念に向かって動いています。その理念について少しお話をいただきたい。

○深川　でっかい仕事を与えられたけども。

○安行　時間稼ぎです。

○深川　ロータリーの理念というのは、だいたいロータリアンというのは職業人なんです。会社経営者です。いつも１番大事なのは経営理念と言うています。経営理念をあげて、それに向かってやっていく。普通は、経営理念というのは、仏教なんかではかなり高い、殆ど人間なんかが到達できないようなところに理念をおいていきます。安行さんは曹洞宗のお坊さんで、専門道場で修行をした人で、その手のことはよく分かってるんだけど、殆ど理念、お坊さんの世界なんかでは、それから私達一般人には、理念というのは実現不可能なんです。理念が実現できるのは菩薩というんです。我々は、理念に向かって一所懸命、少しでも少しでも良くなりたいと努力していく、そういう世界にあるのが我々ロータリーの世界なんです。だからロータリーの世界というのは、実現された菩薩の域に到達することじゃなくて、実現の世界ではなくてあくまでも夢に向かって少しでも前進しようという念願の世界なんです。ですから私達ロータリアンのことを、未来を夢見る人だという風に言うんです。いつも未来を夢見て、そしてその夢に向かって、夢は理念といったらいいんですけど、その夢に向かって一生懸命努力していく。その努力していく瞬間となると、ロータリアンみたいになります。全てのロータリアンがそうかどうか分かりません。いろんな人がおるのがロータリーです。それはいいんだけど、理想としてそういうことを目指しているのが、ロータリーの１つの在り方だということだけを申し上げておきたいと思います。

○安行　ありがとうございます。時間稼ぎををいただきました。嘘です。ロータリーというのが、そういうふうに理念を大切にします。大変精神的な世界ということです。何も人の為に何かするというのは先には来てません。やはり、理念というものをしっかりと見据えて、ロータリーというのは活動してるという

ことをご承知でお聞きくだされば幸いです。

では次、もう少ししたいんです。B班の人が成長できるっていうのを、もう少し補足していただいて、あとそれには何が必要なんでしょうか、もう少し補足していただければ大変嬉しいんですけども。何が必要なんでしょうか。あれ以外にいろいろあると思いますので、少しお話の中で、何かいろんなことが出てきたでしょうか。もし出てくれば、少しお話の中の内容を教えていただきたいなと思います。何もご飯を食べたら成長するっていうわけじゃないでしょ。それもあるでしょうけど。人って成長する為に必要なものって何か分かりますか。そういうことなんです。

○B班　すいません、ちょっと否定的な意見なんですけどよろしいでしょうか。人が成長するのところなんですが、まずリーダーがグループを動かして、その動いてる過程で部下が経験を積んで、その経験が人を成長していくという風に私は考えています。その動く時も、リーダーが持ってる理念ですか、目標理念を持ってる、ビジョンを見ながらそこで動いていって、そこでまた自分の考えとかビジョンとかを蓄積していくということが、成長するということだと思います。以上です。

○安行　他にないですか。人が成長する為に必要なものって何でしょうね。

○伊勢田　A班の伊勢田といいます。先程言われたことにちょっと付け足して、経験を積むということが大事なんですけど、やっぱり失敗を積み重ねて、それを学ばないと成長はないと思うんで、失敗をたくさんして成長すると思います。

○安行　他にないでしょうか。いろんなものがあるかもしれないですよ。何か思いつくままに言ってもらってもいいですよ。これ必要だよ、これ絶対いるでとか。



○佐藤　A班の佐藤です。僕は衝撃だと思うんです、成長する為の。だから、ずっと同じような暮らしをしてても成長はないんで、自分から違う世界に飛び込んだり、最近の自分の体験でいうと、最近水シャワーを浴びてるんですよ。これ違う世界だなあって。本当に自分の偏見とか思い込みとか変な常識で物事を、例えば、だからそうなんです。だからそういうのを、ぶち浴びたいなあって、そういう衝撃が多分、人を変えるんだと思います。

○安行　成る程ね。それは有りだね。自分の違った所をちょっと変えようってね。

○坂本　ちょっとB班の、ちょっとだけ補足なんですけど、一応さっきの話の流れの中で、一応言ってたところで、多分成長を促すのは繋がりではないかなという話を、一応冒頭の方で喋らさせてもらいました。やはりさっきの衝撃であったりとか、という部分もそうですし、失敗とかっていうのもそうですし、やはりその繋がりの中で、社会のコミュニティの中で得られるものってかなり大きいと思うので、やはり繋がりの中で成長は促されるのではないかなと考えます。

○安行　成る程成る程。

○吉野　C班の吉野です。ちょっと何でもいいと言われたんで、何かなということで、ちょっと自分の体験で、本当個人的にはなる

んですが。人にとってというのは、先程のB班の坂本さんにも通ずる所があるんですけど、繋がりの中というか、人と人とのふれあいかなというのはあります。

○安行　気配りができる人というのを、もう少し詳しく説明してもらったら嬉しいです。気配りができる人というのは、どういう人なんでしょうか。少し皆参考にしてもらって、それを糧にしたいなあと思います。どんな話し合いをされたのか、少し話の内容も含めて気配りのできる人の、どんな人でしょう、というのあれば、教えていただきたいです。

○八木　何度もすいません、A班の八木です。気配りができる人間といわれましたが、気配りができる人間というのは、余裕があるから気配りができる方だと思うんですよ。リーダーというのは、余裕を持って行動しないといけないと思うんで、その辺も含めてひっくるめているんですけど、どう言ったらいいですかね、すいません。以上です。

○安行　いいよいいよ、よく分かる。そうですよ、忙しいとそんなに気配りしてくれないですよ。本当、それも大変だと思います。本当に、寧ろ心に余裕のある人でしょう。そういうのは。他にないですか、気配りのできる人、どういう人でしょう。

○松谷　A班の松谷です。最初の説明でも言わせていただいたんですけど、やっぱり気配りができるというのは、相手のことをよく知ってないと、気配りってどういう相手への言葉かけをしていかないと駄目というのは、どういう言葉がけをしていくかというのを考える為にも、ちゃんと相手のことを理解できてないと出来ないと思います。

○安行　はい、他にないでしょうか。ないですか。本当に気配りをできる人というのは、本当に人に勇気づけをしてくれる人だと思います。本当に頑張ろう、頑張ろうというのはあまり使わない、やる気を起こしてくれる人。頑張ろうというのは、あまり気配りが出来る人ではないです、心理学的に。頑張ってくださいというのは、相手目線というので駄目です。特に、子どもさんのお仕事に携わっている人いらっしゃいますか。はい。頑張りましょうとかいうのは駄目です。相手側の立場になるので駄目です。これは、わたし言葉で言うというのがあります。私はどう思うのかです。相手がどうなのかというのは、頑張りましょうです。だから、私はどう感じたか、私は嬉しい。私はこう思うとかでいけます。またその詳しいことは聞いていただいたら。

それでは最後に、先生もう1つ何かございますでしょうか。時間5時半までですから大丈夫です。

○深川　えーと、何喋りましょうか。

○安行　先生には、多様性についてです、どっちにしようかな、B班の部分で。

○深川　リーダーシップで、この世の中は縦型社会と横型社会で、縦型社会というのは、軍隊だとか会社だとか、要するに命令服従によって成り立ってる社会です。その中でのリーダーが、まずいます。それから、横型社会というのは、命令服従の関係がない、皆完全平等・対等な立場にある人達の社会。例えば、ロータリーの世界がそうです。ガバナーと言われる人も、一般の会員さんも完全に平等です。ガバナーが偉いわけではない、偉いのは、体が偉いだけです。それから、ロータリアンと一般地域の社会の人達とも完全に平等です。地方によっては、ロータリアンは一般の社会で1番偉いんだという間違った認識を持っているところもあります。それは間違いです。それは縦型社会で、縦型社会で典型的なのが、イギリスの社会です。貴族を頂点

として、所謂ノーブレス・オブリージュという言葉があります。あれは、イギリスの貴族というのは、自分が国家から与えられた特権・身分、そういうものを持って国家社会に奉仕をすることを表した精神なんですよ。これだけでは、崇高なあれなんですけども、イギリスの社会は、貴族と一般の人とは完全に区別されてる。ですから、第1次大戦・2次大戦の戦争の時に、圧倒的に戦場に行ったのはケンブリッジ大学とかオックスフォード大学の、ああいう秀才の人達が将校になって、行って戦死してる人が多いんです。これなんかも、やっぱり崇高な精神を表している。だけどもそれは、あくまでも、だからイギリスの将校は、身長を見たって、その将校と下の兵隊とは違うという風にいわれておるんです。それ程、完全に、体格まで違うほど区別がある。こういう階層社会がある。日本ではどうかというと、完全に平等対称というので、平等な社会です。これは非常に。だけど日本では、会社の中では命令服従というのがあって、会社では縦型社会。しかしロータリーはそうでなくて、完全に横型社会。ここで、じゃあ縦型社会のリーダーシップは、先程も皆さん説明で分かってるように、命令服従で、選挙によって選ばれる、会社で命令される、いろんな話になるけど、実際にその人がリーダーシップを持っておるかどうかは別問題。リーダーシップを持っておっても、よくリーダーシップを持ってる人もあれば、仕切るリーダーシップを持ってる人もいる。それは大体整理できますね。ところが、ロータリーはそうじゃなくて横型。完全平等対等な社会で僕らは生きてます。その中で、リーダーシップを発揮するのはどういう人なのか。これは勿論、いい意味のリーダーシップです。だからそれはまさに、例え話を出しますけれど。このRYLAを始められた今井鎮雄先生なんかは、あれはもう、本当そういう横型社会のリーダーシップ。だからあの人は、国際ロータリーの理事までやっておられた人ですけども、兵庫県の地区、それから日本国中のロータリアンの皆が慕ってる。何故かというと、金があるとか身分があるとかそんなこと関係なくて、とにかくその人格に惹かれて慕っている。こういうリーダーシップ、これが本当のリーダーです。しかもそれは、簡単ではない。だから私達は、今井先生から怒られても同じように友達のような話し方をするし、そして今井先生も別に怒りもしないし、本当に友達のように、同じ平面でお付き合いをしてくださる。それが、ロータリーの世界であります。ですから、ここでもロータリアンがおられる、そのロータリアンでもいろんな方がおられて皆平等なんです。そして、ロータリアンと皆さん方とも、完全平等対等な社会にある。ですから皆さんの中でも、平等の中でリーダーシップを発揮する人もあるし、出来ない人もあるだろう、それもいろいろあっていいと思いますが。リーダーシップというのを考える時に、縦型社会と横型社会、そして横型社会とリーダーシップを発揮するのがあると思います。だから先程言った、六韜三略の将軍の話をしたら、縦型社会ではないです。横型社会のリーダーシップ、これはまた時間がかかるんで、今日は止めます。何かのテーマで喋りますが、そういうものがあるということだけ、心に留めておいてくれたらと思います。以上です。

○安行　ありがとうございました。それでは、最後になりましたけど、D班でリーダーが志す方向へ社会全体が進んでいけるような社会、それに伴って、いろんなリーダーというのを挙げていただいたと思います。全員が1つの方向にどのような人がリーダーになるかということは、人の心を理解して、向上心を持って、更なる境地へ導いていく。そのようなリーダーが1番いいだろうと。これは矢張りお話し合いの中で、大人に対する不信があったんでしょう。それをお聞きして、我々の反省として終わりたいと思います。どのような

リーダーですかと言った時に、人の心を理解して、向上心を持って、更なる境地へ導くような人がリーダーだと、これはお話し合いの中で、我々大人を見てそう思われたんでしょうか、ということをお聞きして、我々の反省を込めてそれを思って、ここは終わりたいと思うので、そういう話し合いがあったのかどうかそれを1つ。



○宮川　はい、D班の宮川です。先程の話なんですけれども、これは大人への不信感があってという話ではなくて、この反省の中でこのリーダー像というのも、いっぱいあがったリーダー像の中の1つのリーダー像なんですけど、このリーダー像があがったのは、不信感からというのではなくて、寧ろ逆にそういう、まさにさっき言った、人のことを理解して、向上心を持ってっていう方がおられて、その方を目標にしたいという、そういう希望を持って、そのリーダー像というのをあげさせてもらったんです。だからもう、不信感があってとかそういうのがあったわけではないです。

○安行　それも嬉しい。涙がちょちょぎれる。他にないですか。非常に大変、我々の大人の方にとっては大変嬉しいことを仰ったので、本当にこれは心に留めて。本当に我々大人の方、大人の中は、いいおっちゃん、おばちゃんなんですよ。本当に若い人の期待に応えられるような大人にはなりたいと思っています。ロータリーは少なくとも、恐らく紳士淑女の集まりだと思ってますし、大変皆さん、次の世代ということについては大変考えておりまして、是非是非、機会があれば、あなた達と共に行動にできる場面、プログラムがあれば、是非一緒に何かしていきたいなあという風に考えています。

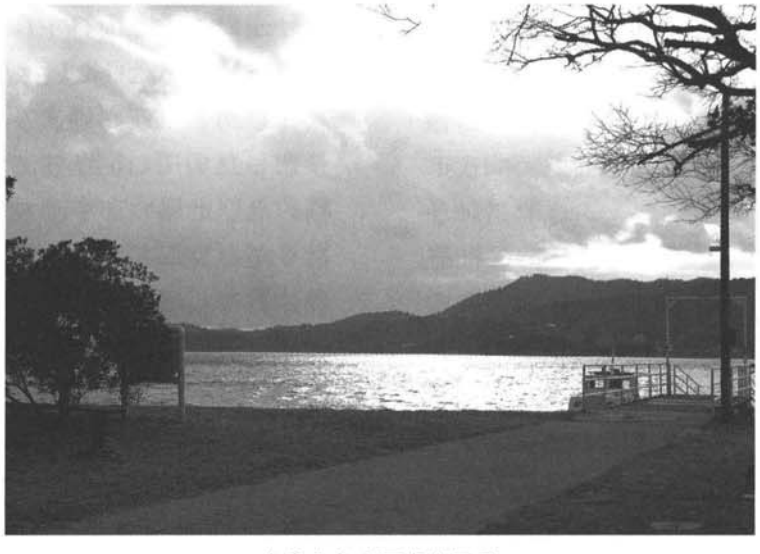
大変長く、3時間ぐらいしてたのかな、大変お尻も痛いと思いますので、ここでこの場を、大変貴重な賛成の意見をいただいたので、今日は皆、嬉しく寝ちゃうかな。どういう風に思われてるんやろうと言うて、常々部屋に帰っては細々と話をしてましたけども、今日は大変ぐっすり寝られると思います。皆の意見は、大変参考になりました。本当にA班からD班まで、長い間議論を重ねていただいてこのような結論的な部分を発表していただいて、大変嬉しく思っております。決して取り上げられなかった意見、それからもっと言いたかった意見等あるでしょうけれども、我々としては、大変参考になることをそのまま持って帰ってですね、今後のその青少年の育成の部分の、1つの指針の1つにしたいと思います。

それでは大変長時間、有り難く思います。お互いをお互いの為に称えてですね、それと自分達の苦労とそれからその成果をあげて、両方に拍手を送りたいと思います。

ありがとうございます。ちょうど時間になりましたので、5時ちょうどですのでこれで締めたいと思います。大変有り難く思います、ありがとうございました。それでは10分ほどお休みをしてから、ファイヤーの説明に入りたいと思いますので、5時10分から始めたいと思います。



余島のエンジェルロード



余島から小豆島を見る

カウンシルファイアー



RYLA 小委員会　委員（2680 地区）
安行　英文（三田 RC）

はい、お待たせしました。私の方から説明しろと言うことですので。

カウンシルファイアーというのは、ファイアーには 2 種類あって、皆さんがご存じなのは、ボーンファイアーといって、楽しくファイアーのサークルを囲んでですね、今までのキャンプを振り返りながら、楽しく終わろうというのがボーンファイアー。しかし、RYLA で採用しているファイアーというのは、カウンシルファイアーといって、少し大人のファイアーをします。それはどういう風にするかというと、大人だから、大人のようにお酒を飲みながらというわけじゃないです。少し静かなファイアーをしようということなんです。今から午後 7 時に出発しようと思いますから、ご飯を食べる夕食の時に、まつぼっくりを渡します。この中に、皆さんのこの 3 日間の思い、或いは何をしようと思うのか、夢或いは自分の気持ちを、紙切れに書いてここに挟んで下さい。願いがあったり、希望があったり、今の自分の熱い思いがあったり、例えば友達と知り合った気持ちがあったり、いろんなことがあるだろうと思います。ご両親に感謝しようと思ったり、いろんなことがあるだろうと思います。それを、夕食の間に自分達で書いたものを、このまつぼっくりに挟んでもらって持っててください。大きいので、1 つのまつぼっくりに 3 つ、3 人ぐらいですか、4 人。4 人の思いを、このまつぼっくりに挟んで持っててください。代表が。4 人の 1 人が、だから班に 3 個ぐらいいるのかな、で、持っててください。それで 6 時 50 分ぐらいに、インフォメーションがあります、初日に受付をした所に集まってください。そこで少し歌の練習をしましょう。最初に歌の練習をして、もう覚えてない方もいらっしゃいますけども、そこで歌の練習を少しします。7 時になると鐘が鳴ります。鐘が鳴るのを合図に、黙って話をせずに、班ごとに移動してもらいます。移動先はそれぞれ RYLA の委員が先導しますので、それに従って、少し暗いです。足下は少し危ないので、その都度その都度委員が足下気をつけてくださいとか段差がありますと言ったり、小さいライトで照らしてくれるので、それに従って黙ってファイアーの場所まであがっていきます。途中にはいろいろなコ



メントを書いた立て札があります。それをよく皆の心に刻んで下さい。ここにはいろんな言葉が書いてあります。それをよく心に噛みしめながら、サーフィンの方へ上がっていきます。野外集会場という所がありますので、そこは非常に風が、今日は、暖かいと思いますけども、大変風が強くて寒い所だと思いますので、充分防寒をしながらあがってもらいます。先導された部分で1周回って、所定の位置を申し上げますので、皆さんでそこのサークルに座っていただきます。それから、カウンシルファイアーが始まります。私が少し言葉を申しますので、それに伴って皆さんはずっと聞いていただけたらいいんですけれども、途中やはりファイアーの火が少し消えかかりますので、それをタイミングを見計らって、皆の思いをくべてください。そうするともう一度、火が、ファイアーが立ち上がります。そして私がもう一度話をして、静かにまた歌を歌ったりしながら、終わる時を告げるんですけども、それで代表の人は、係が案内しますので1人、私がもう1回その消えかかる火にトーチを点けてもう1回皆に火を分けます。それで代表と共に、その集会場を去るということをします。それまでは一切話をなさらないでください。それは、自分でその集会の中で、この3日間の意義、最後の夜になると思いますので、その分をもう一度噛みしめて、自分というもの、或いは仲間というものそれから各班での思い、或いはその自分の位置付けなのかを、もう一度噛みしめながら部屋に戻ってください。それがカウンシルファイアーの今日1日の最後の皆さんのプログラムです。後は、朝まで時間がたっぷりとあります。どのようにお過ごしになるかは、我々の関知する所ではないので、充分最後の夜を楽しんでいただければいいと思います。だけど、最後のこのカウンシルファイアーだけは厳粛に、それから、もう少し大人の、それから自分達の思いをもう一度見つめ直してもらう為のファイアーだと思って、もう少し律した、きちんとしたようなファイアーにしたいと思いますので、協力していただければ大変嬉しく思っております。時間にしてはそんなにかからないと思うんですけれども、でもトータル的には1時間20分ぐらいかかると思います。ですから、風邪をお召しにならないように充分暖かい格好で臨んでいただければと思いますし、足下がです、木の根っこが大変自然のままに残ってますので、整地をしてませんから、躓いたり、或いは傾斜があるので、幾らかあるので、そこを気をつけていただきたいと思うんです。集会場は風が多分きつくて、西側からの風が大変きついので恐らく、私の言葉が聞き取りにくいと思うんですけど、それは雰囲気を汲んでいただいて、今おかれてる立場というのを汲んでいただいた形で、全てのことが理解出来なくても、その場の雰囲気を味わっていただいたら大変嬉しく思います。それが今日の最後のプログラム



です。これをカウンシルファイアーという、自分達を見つめ直す、楽しく終わるんじゃなくて、自分達を見つめ直すファイアーを、節目とするのが今日最後のプログラムです。それを終えると、後はお楽しみなわけなんですけれど。最後いろいろ楽しんでいただきたいと思います。

以上です。後は、ご飯を食べたり歌の練習が待ってます。

○質問者　携帯と電気。

○安行　お部屋の電気を、出発する時には真っ暗の中で出発したいんです。だから、お部屋の電気は消していただけると嬉しいです。全棟消灯します。ですので、ロータリアンの方々もお部屋の電気は消灯していただきたいと思うんです。出発には真っ暗の中で出発していきたいと思いますので、ご協力お願いします。

○森　少し補足します。夕食は6時からとなっております。これからのことについては、受講生の皆さんはカウンセラーの方の指示を聞いていただきたいと思います。食堂の所にまつぼっくりに入れるメモ用紙を置いてます。班に何人かが一緒にまつぼっくりに入れるようになりますので、指示に従ってください。それじゃこれで終わりますので、班ごとに移動してください。よろしくお願いします。





学友会案内

すいません、お時間いただいてありがとうございます。皆さん、僅かなフォーラムお疲れ様でした。学友会の方から少しお知らせとお願いがあります。これは、2670地区も2680地区も共通をする所がありますので、横の方聞いていただきたいんです。セミナーの初日に、受講生とカウンセラーの方にお渡ししました、同窓会の案内についてなんですが、日時は4月26日土曜日、神戸三宮のカフェアトリエ、神戸国際会館の少し南側になります。時間は14時半から2時間ほど、会費は1000円でやります。昨年も、両方の地区から多くの方が参加していただいて、大変好評な会となりました。是非ご参加ください。

次にお願いです。メルマガ登録の案内なんですが、これも初日にお渡しさせていただいております。登録のやり方なんですけども、ホームページにアクセスしていただいて、メニューからメルマガページを開いていただいて、必要事項を記入し登録となります。学友会のお伝えする行事や、活動報告をこちらで配信をしたり、あと、連絡をですね1000人以上の会員がいますので、大変役に立っておりますので是非登録をしてください。それで、出来ないという方もいるかと思いますので、その場合はこちらの広報担当の奥田の方にお問い合わせください。お願いいたします。

もう1つ、最後にお願いなんですが、受講生、カウンセラー以外の方へのお願いです。両地区の学友会の会則にも載っておりますが、RYLAセミナーを運営していただいておりますロータリアンの皆さんと学友趣旨にご賛同下さる皆様についても、年会費1000円をお納めいただきますと、参与会員となっていただけます。学友会は、会費で運営しておりますので、是非ご協力をお願いいたします。

あと、帰路の説明については、閉講式後にさせていただきますのでよろしくお願いいたします。

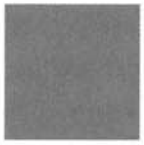
お時間いただいてありがとうございました。



早朝のカウンセラーミーティング



ライラ学友会ミーティング





パストガバナー（2680 地区）

深川　純一（伊丹 RC）

プロフィール

● 学 歴

1952 年　関西学院大学法学部卒業

● 兼 職

学校法人大阪学園理事長
社会福祉法人伊丹社会事業協会
理事長

● ロータリー歴

1973 年　伊丹ロータリークラブ入会
1990 年　1990-1991 年度 RI 第 2680 地区ガバナー
1992 年　1992-1993 年度 RI 規定審議会代議員、各地区大会 RI 会長代理 8 回、各地区大会記念講演講師、各地区大会パネリスト、各地区大会セミナー講師、各地区 IM 講師等々

ご紹介にあずかりました深川です。今日はまず、自己紹介をしておきます。私は弁護士をしております。兼職として、大阪高等学校という学校法人の理事長職とそれから伊丹社会事業協会という社会福祉法人の理事長職を預かっております。この RYLA は、今井先生という RYLA の顧問がおられますが、今井先生と一緒に 36 年前に始めました。今井先生に導かれながら、いろいろと教わりながら、今日までやってきたわけであります。

今井先生がいつもこの RYLA の最後の講義の総括として素晴らしいお話で飾っておられたんですが、今回は私がお話いたします。今井先生みたいに素晴らしいお話は出来ないと思いますが、今までたくさんの人達から教わってきた。そのことを私なりにまとめましてお話をしていきたいと思います。座らせていただきます。

まず、リトラクション的な話から入りたいと思うわけなんですが、俳句を一句紹介しておきます。この俳句、一爛々と昼の星見え　菌生えー という歌ですが、高浜虚子という人の作品であります。これはですね、伊予の国松山で生まれて俳句を始めた正岡子規。皆さんご存じだと思いますが、その人と共にこの近代俳句を奨励した人なんです、この高浜虚子なんですが、その人の代表句の 1 つがこの、一爛々と昼の星見え　菌生えー というのがあります。これは、終戦直後、戦争が終わった直後の昭和 22 年の作品なのであります。皆さんご存じのように、一国破れて山河在り一っていう言葉がありますように、当時の日本というのは、原子爆弾と焼夷弾で焼き尽くされました。東京も大阪も広島も全部焼き尽くされて、まさに荒涼とした日本の現実があったわけであります。工場の煤煙などはありません、全部焼き尽くされました。そして、従って澄み切った青空がありましたし、公害なんてありません。そして、生き生きとした山川そのもの。草も木も生き生きとしておりました。しかし、私達国民はですね、食べるものも着るものも、住む所もなくてまさに貧困のどん底にあったわけであります。従って、当時私は 17 歳でありましたが、育ち盛りであります

のに、ガリガリにやせ細っていたのであります。そういう状況の中で、この神経の研ぎ澄まされた高浜虚子が、見たものは一体何か、それがこの爛々と昼の星見え　菌生えこういう状況だったわけであります。真っ昼間の大空に、爛々と星が輝いている。そして、荒れ果てた大地に群がり生えているきのこ。そういうものを、高浜虚子は見たわけであります。まさにこれは、異様な情景でございました。しかし、私はこの一句から太陽の限りない恵みと、生きとし生けるものの逞しい生命力というものを感じるのであります。ところが、この一句の意味するものは一体何かということであります。真っ昼間の大空に、爛々と星が輝いて見える。そして、きのこが群がり生えている。という、まさにこの世のものとは思えぬ情景を与えますが、しかし、皆さんよく考えてください。きのこは目に見えます。しかし、真昼の星は目に見えるはずがないのであります。それにも関わらず、高浜虚子は、その星が見えると言うんです。一体、彼は何を言わんとしているのか。私の解釈は、目に見えてるきのこというのは、現象の世界だと思います。昨日もちょっと話が出てると思いますが。一方、目に見えない真昼の星、お星様は、これは本質の世界の状況にあるのであります。現象の世界というのは、昨日ちょっと出ました般若心経というお経がございますが、その中に色即是空、私昨日ちょっと喋りましたね。こういう言葉がございます。この色即是空の色の世界、色って書いてあります。これどういうことかというと、要するに、人間の肌の色の白いとか黒いとかね、背が高いとか低いとかいうような、要するに私達の目に映っている世界のことです。それが色といいます。これに対して、本質の世界とは何かといいますと、こういう言葉があります。月落ちて天を離れずといいます。お月様が、西の空に沈んでいっても、お月様は大空、即ちこの宇宙を離れるわけではないのであります。従ってこの、ー月落ちて天を離れずーという言葉は、この宇宙を統べてある物事の真理を述べたものであります。即ち、星というものは、真っ昼間には目には見えません。けれども、厳然として大空に存在してあられるという意味であります。これが、物事の本質であります。さっき今、現象と書きました。それに対して本質があります。現象と本質、これ頭に入れておいて下さい。従って、この高浜虚子は、この世の中にはきのこという目に見える現象の世界と、そして真昼の星という目に見えない本質の世界がある、ということを感じ取りまして、その時の心持ちを俳句に託して詠んだわけであります。これは私の解釈であります。

そこで私は、ロータリーの思想の世界、ロータリーも１つの思想であります。ロータリーの思想の世界では、目に見える現象に惑わされてはならない。いつも目に見えない本質を見抜くということを忘れたら駄目。これは全てのロータリアンに必要なことでもありますし、そして、RYLA で学んだ皆さん方にも必要なことだと思います。ロータリー思想というのは目には見えません。しかし、目に見える現象それにも惑わされてはいけないということであります。いつも本質を見抜く心掛けをしなければならないということであります。皆さんご存じだと思いますが、明治の薄幸の詩人、幸の薄い詩人、金子みすゞっていう人ご存じですね。あの人の詩に「星とたんぽぽ」という詩があります。どういうことかといいますと、もうご存じの方もあろうかと思いますが、－青いお空のそこふかく、海の小石のそのように、夜がくるまでしずんでる、昼のお星は目にみえぬ。見えぬけれどもあるんだよ、見えぬものでもあるんだよ。－こういう詩であります。この見えぬけれどもあるんだよ、見えぬものでもあるんだよという言葉には、全ての在を見通してる金子みすゞの、愛の言葉の隠れておるものの大切さを伝える強い言葉でもあるんだと思うのであります。従って私は、この金子みすゞの詩に、現象と

本質を分析して考えていく、このロータリー奉仕哲学というものがありますが、それと共通の境地にあるものだということを感じとるわけであります。このようにいたしまして、今日の私の話の根底に、一貫して流れてるものは何か、所謂、裏のテーマであります。表のテーマはグローバルでありますが、裏のテーマは、これは、現象と本質であります。現象と本質についての分析的な考え方、即ち、現象に囚われずに、本質を見るということ、これが今日の裏のテーマであります。この現象に囚われずに本質を見抜くということを、もう少し詳しく具体的に説明いたしますと、今早くも解釈として申し上げました、大事なことでありますから重ねて申し上げます。現象というのは、例えば色即是空という言葉の色(しき)ということ、つまり私達の目に見えておる世界、即ち、肌の色が白いとか黒いとか、背が高いとか低いとか、そしてマンションが建っておるとか自動車が走っておるとか、誰かが酒を飲んでおるとか、とにかく私達の目に移っている情景、見えている世界。これが色(しき)であります。現象であります。

これに対して色即是空の空(くう)というものは何か、これは先程申し上げました物事の本質のことであります。大空に存在している星のように、目には見えないけれども厳然として存在している。それが、物事の真理であり物事の本質なのであります。この現象の世界の根底にある物事の本質のこと、これが大事なことでありまして、目に映っているいろんな出来事、政治の世界でもいろいろありますけれども、それに惑わされてはならないよという。

では、この現象と本質の関係を、具体的にもっと、例え話で言えばどういうことになるとか。歌を一緒に書きます。

最初の歌は、一骨かくす　皮には誰も　迷いけん　美人といふも　皮のわざなり一意味分かりますか。美人とか何とか言ってるけれども、結局1枚剥いたらその顔の裏は骸骨だよ、ということで。これは、足利6代将軍に仕えました、蜷川新右衛門とういう武士の作なのであります。これに答えて、皆さんご存じの一休禅師が歌った句集で、それが後のこれであります。一皮にこそ男女の　へだてあれ　骨にはかわる　あとかたもなし一皮があるから、男だ女、美人だそうでないだと言ってるんだけども、骨身は変わる、死んで火葬場で骨になったら跡形もないじゃないか、そういう皮肉を言った歌なんです。どちらも、歌としては大した作品ではありませんけれども。あるものを訴えることはあると思います。これまた余談ではありますけれども、例えば美しい人を見て、アメリカ人は裸体を想像するか、フランス人か、そういう話があります。しかし、この一休にかかると、美人を見てもすぐに骸骨と見とるという、そういう例えです。要するに、皮というのは目に見えてる現象、目に見えてる。本質というのは「骨」、骸骨になってしまうと、それは人間の本質はそこだよということ。もっと突き詰めれば、骨が本質かというわけです。じゃあ、私は誰でしょう。って、私というのは目には見えないんです、だけどあるんです。そういうことを考えていただいたら、これ言い出すと長くなるんで、これはギリシャの哲学が云ってる例えになりますが、これは省略しておきます。とにかく、この歌のことを見ていただければ、現象に囚われずに本質を見るということの意味がお分かりいただいてるかと思うのであります。枕を振るうのはこのくらいにいたしまして、本論に入ります。

さて、今日のテーマ「グローバル」というテーマをいただいております。ところで、このグローバルという言葉はね、globe という名詞の形容詞型なのであります。分かります。global というのは形容詞であります。globe というのは名詞なのであります。従ってこれは、グローバルというのは形容詞ではありますけども、その言葉を受けうる名詞を伴って初めてその内容の意味・内容が完結するわけであります。例えば、グローバルな視野とか、世

界的な問題、グローバルプロペン、或いは国際標準、世界的な標準グローバルスタンダードとか、全世界的に事業展開を行っておることのグローバルビジネスとか、全世界を市場として捉えるというグローバルマーケット、このようにグローバルという言葉は、それを受ける名詞を伴って初めて意味が完結する。グローバルという形容詞自体では、意味が完結しないのであります。従って、単にグローバルという言葉だけでは、その意味・内容が確定いたしません。そこで、今日のこのテーマ、この趣旨は一体何か。恐らく、グローバルなもの全てを含む趣旨であろうかと思うのであります。従ってこれは非常に大きなテーマなのであります。例えば、本質的な問題で、今ちょっと申し上げましたグローバルスタンダード、国際標準。そういう言葉1つ取り上げたのは、これはどういうことかといいますと、皆さんご存じだと思いますが、金融市場とか会計制度や技術、そういう様々な分野での日本独自の制度とか、日本独自の規制に対する、これは反対する言葉なのでありまして、そういう方で用いられている。じゃあそれは、具体的には、もっと具体的にいえばどういうことかといいますと、例えば接待ゴルフなんてのがあります。この接待ゴルフの後ろにある、日本型管理社会の、構造そのものの風通しをを良くして、所謂世界標準、グローバルスタンダードに耐えられるように、変えていかなきゃならないよ、というふうな使い方をします。それから、グローバルスタンダード、これに従って市場原理と利用者本位のうちの基本をです、国際協調力を付けていかないと駄目だ、生き残れないよという考え方でもあるわけです。グローバルスタンダードとはそういう意味です。このようなことを考えますと、グローバルというテーマは、大変大きなテーマでございますので、話の焦点を絞らなければなりません。じゃあ一体、何処に話の焦点を絞るのか。グローバルな分野というのは、まさに広いです。政治の分野、経済の分野、財政、教育、歴史、様々な分野に広範囲に広がっていきます。例えば、政治の分野につきましては、皆さんご存じの通り、今日的な問題なら、ウクライナの問題があります。その話、グローバルな問題が山積しております。しかし、ここはロータリーの世界なのであります。従って、そんな時事問題や政治問題に関わっておることはできないのであります。やはり、ロータリーの視点から見て、一番大事なものは一体何か。ということに焦点を絞らなければならないと思います。ということになりますと、やはりこのRYLA、RYLAに関わる問題に焦点を絞るべきだと私は思うわけであります。

そこで、RYLAというのは一体何か。もう皆さんご存じの通りだと思います。英語ではね、"Rotary Youth Leadership Awards"、即ち日本語に訳しますと、ロータリー青少年指導者養成計画。青少年の、要するにリーダーを育てるところなのであります。青少年のリーダーシップを育てることが第一の目的でありますから、従って、グローバルというテーマとの関わり合いでいいますと、リーダーに必要なことは一体何かそれは、グローバルなリーダーシップなのであります。このリーダーとリーダーシップとの関係は、昨日フォーラムのところで、偶々私が申し上げましたから、もう申し上げません。今の現象と本質でいえば、リーダーは現象、リーダーシップは本質だと、そういう考え方でもいいだろうと思います。

さて私は、このグローバルなリーダーシップということを考える時に、まず当然のことながら、グローバルな視野、世界的な視野を持たなければならないわけであります。

実はロータリーというのは、既に20世紀の初め、1921年頃からこのことを考えて参りました。そして、世の為、人の為に奉仕をするということが、単に私達の地域社会に対する奉仕活動だけではなくて、国際社会に対する奉仕、即ち国際奉仕という考え方を開発いた

しました。それから更に41年経った1962年になりますと、今度は世界社会に対する世界社会奉仕という考え方を開発していきます。このように、いろいろとグローバルなプログラムを、企画立案し、実施してきたわけであります。このRYLAは、参考までに申しますと、1968年から72年ぐらいだろうと思いますが、そこで、この国際社会に対する奉仕というのは、一体如何なるものなのか、世界社会に対する奉仕とは一体如何なるものなのかということは、非常にまたこれ大きな問題でありました。従って、また話の焦点を絞りながら、この問題について考えてみたいわけであります。

まず、リーダーとしての世界的な視野を持つ為に、どうしても避けて通れない重要な問題は一体何かなということ。これは、国際理解ということであります。実はロータリーも、国際理解ということにつきましては、大変重要な問題といたしまして、ロータリーの定款第4条にロータリーの目的といわれてますが、その中で、国際理解について規程をしております。実は、この国際理解ということも大変重要な問題でありますが、このことにつきましては、今から約3、4年ぐらい前だったかと思うんですが、神戸大学の学長であられました新野幸次郎先生が、このRYLAに来てこの国際理解ということについて素晴らしい話をしてくださったことがあります。従って私は、この新野先生の話を引用させていただきながら、話に入っていきたいと思うのであります。

そこでまず、国際理解ということがあります。国際的に理解されておるということで、そんなこと分かってるじゃないかというかもしれませんが、実は、これがなかなか簡単なことではないのであります。まず、自然の理解については、国際的な誤解は殆どないといいます。即ち、自然の理解というのは、自然現象を観察しまして、その中にある種の法則性がある。即ち、何かが起こると必ず一定の結果が発生するとか。また、何かと何かとの間には、相互に関連性があるというようなことについて、長い間の科学的見知、知識の発達の中では貯蓄されてきたものがありますが、そこでは国際的にその差はありません。どういうことかといいますと、例えば寒くなれば雪が降る、自然現象です。梅雨になれば雨が降るという、自然現象の法則性には、国際的な差はありません。尤も知識の遅れた国とそうでない国とでは、かなりギャップがあるかとは思いますけれども、しかし、少なくとも広く知られた現象については、自然に対する認識には国際的な差はあまりないと考えていいと思うのであります。ところが、人間の理解、或いは社会の理解、或いは文化の理解になりますと、その国際理解は如何なるものかということになると、自然については、今申し上げました国際理解と違いまして、非常に大きな差があります。例えば、人間の理解についていいますと、同じ国内でも、同じ国の中でも十人十色、皆違った環境で、違った考え方を持って、長い習慣の中で、それぞれ特殊な条件の中で皆生きてるわけであります。そして或いは、皆成長してきてるわけであります。従って、人間の理解ということになりますと、同じ国の中の人でも、皆違うわけであります。この点が、自然の理解とは全く異なるわけであります。そして、人間についての理解というものは、少なくとも次のような条件がなければ絶対にできないということであります。その条件というのは、一体何か。それはね、お互いが、お互いの為に生きようとか、理解しようという時に1番基本となるのが、思いやりなのであります。大切な条件であります。相手の立場に立ってものを考え、その考え方をフォローしているということがなければ、人間を理解するということは出来ないのであります。しかも、他人を理解するということは、相手の立場に立って考えるということであります。他人を理解する、相手の立場に立って考えることです。このことはどういうことかといいますと、要するに相手

の立場に立って考えるということは、自分の今までの考え方を崩してしまうことと同じ意味を持つものであります。分かりますか。他人の立場に立って、その人なりに物を考えてみるということをしないと、他人を理解することはできません。ところが、その人の立場に立って物を考えてみようとしますと、今まで自分の持っておった固定観念を一度捨ててみなければならないわけであります。分かりますか。従って、自分の持っておる固定観念から物を考えていこうとする限り、どうしても人を理解することが出来ないことになるわけでございます。要するに、相手に対する思いやりなしには、人間を理解するっていうことは、あり得ないことなのでありまして、他人を理解するということは、自分の今までの固定観念を崩してしまうことと同じ意味を持つわけであります。

ロータリアンはよく、相手の立場に立ってとか、思いやりということを、いつも簡単に言ってのけますけども、このように考えてみますと、そう簡単なことではないのであります。この RYLA を始められました、先程紹介しました今井鎮雄先生というのは、人を理解すること、人への愛情、人への思いやりということを中心に、生きてこられた人だろうとは思うのであります。そのような人であって初めて、人を理解するということが可能になるわけであります。従って、思いやりなしには、人間の理解ということはあり得ないわけであります。ここ大事なところであります。思いやりの心の欠けている人は、人間を理解することは不可能なのであります。従ってまた、身体障害者の問題にしましたら、その人達に対する深い愛情とか、思いやりなしには、その人達に対する理解があるということは生まれてこないだろうと思うんです。

そこで、このことは実は国際的な理解についても全く同じことがいえるわけであります。国際的、国際理解の為には今までいろんなことを言ってきたわけであります。相手の国民、様々な人種の人達に対して、その人達の立場に立って物を考え、いろいろな発想をフォローしていく、こういう努力のできない人には、国際的な人間の理解ということは起こり得ないのであります。従って、グローバルな視野を持つこともできませんということになるわけであります。このようにいたしまして、外側からチラッと眺めとるだけでは、これは現象の問題です、外側からチラッと眺めとるだけでは、理解ということはできないということが分かるわけであります。そういう意味では、人間を理解するということは大変なことなのでありまして、例えば、目に見えておる現象としては、夫婦 2 人で生活をしておっても、本質的に本当の理解がその夫婦の中にあるのかということは、一生掛かるかもしれない。或いは、一生掛けても分からないという人も出てくるわけであります。さしずめ私なんかは、現象としての夫婦に過ぎないのかもしれないのですが。このように、この思いやりの心が欠けてる人には、どうしてもこの理解というのができないわけであります。言葉でどんなことを言っても、理解ということはできないと思うわけであります。

よくいわれる例えに、外面如菩薩内心如夜叉という言葉があります。外面だけを見てると仏様のようだけども、その心は、どうも夜叉、インドの鬼の神様ですが、それみたいだという意味であります。そこで次に、この世の人間が作り上げてる文化とか、社会の理解となりますと、文化も社会も、人間が作り上げたものです。その文化とか社会の理解があると、一層この難しさが顕著になります。甚だしくなります。今、文化の理解について新野幸次郎先生はね、テクニカルの例を 1 つあげておられます。どういう例かといいますと、例えば絵画、絵ですね。絵画とか一般的な芸術作品、それから刀、刀剣類、それを理解するには、どのようなことが必要なのかということを考えてみますと、例えば刀剣の鑑定、刀の鑑定ですね、本物か偽物かということも含

めて。この鑑定は、理解が前提になります。理解がなければ鑑定なんでできないのであります。これが本物かどうか、いつ頃作られた刀か、誰の作品かということを知ろうとします。これ専門家に言わせますと、だいたい3万時間ぐらいかかるそうであります。例えば、いろんな名作を見ます、それについての解説の本を読みます。正宗の名刀、それが本当、本物の作品を見たりします。そういうことをしまして、3万時間ぐらい鑑賞すれば、その刀の偽物か本物かが分かるというのであります。実はこれは、簡単に言葉では言いますけれども、大変なことでありまして、3万時間というのを考えてみてください。1日8時間で、10年3ヶ月掛かるのであります。これでほぼ、大体のことは分かるということであります。しかしこれは、一応の目安でありまして、人によってはものすごく集中力を働かせて1時間過ごす人と、ぼや〜っと1時間過ごす人と、非常に大きな差が出てきます。従って、また人間のこの集中力の持続時間ということを考えますと、これはせいぜい集中力というのは2、3時間が限度だと思います。そうすれば3万時間というのは、実はその倍ぐらい見なければ分からない解釈になるわけであります。これと同じようなことが、絵画とか或いは陶器とか、いろんな物の鑑定についてもいえるわけであります。これ実は私の経験でありますが、昔、大阪のロータリークラブの卓話で聞いた話であります。例えば、中村なおたつ先生、これ絵描きさんであります、画伯でありますが。この人は、職業柄、絵画の鑑定、絵が良いかどうか、本物かどうかというのを鑑定して欲しいというのを頼まれることがあるようでありますが、普通は、これは大変難しいことなので、中村先生は断るそうであります。しかし、どうしても断り切れない依頼があります。その場合には仕方ないので、その絵を壁に掛けて、何日も何日も見続けるそうであります。そうすると、偽物はやがて馬脚を現すというのであります。それからもう1つ、画商というのは、画商とは絵を売ったり買ったりする商売の人、画商は、絵を買う時に必ず子どもを連れて行けと言うのであります。誰かが画商に、良い絵を買いたいんだけどと言って相談します。すると、その画商が必ず子どもさんを1人連れて行けと言うのであります。何故かといいますと、大人は、欲がありますから目が曇ってる、良い絵を見抜くことができないのであります。しかし、子どもは間違いなく良い絵を選ぶと画商は言うのであります。これは、文化の理解にはかなり傾聴すべき見解だと思います。それからまた画商は、お客様に売った絵が、もし偽物だと分かった場合どうするか。売った代金に、10%、10%の金額を付けて買い戻すそうであります。これはどういうことかといいますと、このロータリアンというのは、自分が提供した商品に絶対的な責任を負わせるという、これを職業奉仕という、職業を以て世の為人の為に奉仕をする、その1つの実例として、自分がお客様に提供した物については、徹底的な責任を負わなければならない。これは、ロータリアンなら皆実行してることだと思います。この画商の、この今の例、もし自分が売った物が偽物だったら、10%付け加えて買い戻すということであります。それ程実は、絵の真偽、本物か偽物かということの鑑定は、難しいということであります。よく仮に箱書きがあるからって、あんなもの1番当てにならないそうでありまして、そんなものを信じては駄目だということであります。

要するに、私達は、文化というものを理解する時に、何時間も掛けて、しかも、そのことに集中することなしに、それを理解することはできないということであります。最近、私達の生活水準は非常に上がりました。文化の時代なのかと言われまして、皆が美術館に行きます。これも大変結構なのでありますが、もし本当に美術品を分かろうとするならば、3万時間とまでは行かなくとも、少なくとも、ある程度集中してやってみなければ、理解と

いうのはできなかろうと思うのであります。美術品が、ただ目に映っておるだけ。まさに現象の世界であります。本質を分からない。これは実は大変なことではありますけれども、しかし努力をすれば、その理解はできるわけであります。歌とか俳句とか小説を読んで、鑑賞をしたり、評価したりすることと全く同じなんです。要するに、理解には集中ということが必要であるということが1つ分かるわけです。

ところが、この社会の理解ということになりますと、これもまた大変な問題を含むというわけです。社会というのは、人間の集団でありますから、人間についての理解ができない人に、社会の理解ができるはずがないのであります。文化の理解の場合は、今申し上げました3万時間ぐらい使えば、そして一生懸命努力すれば、多少個人差はあるといたしましても、理解はできるかもしれません。しかし、社会となると、もっと複雑で大変な問題をその中に含んでるのであります。国際社会の理解が如何に難しいかというのが、大体分かるだろうと思われますが。例えば1つ例を出します。イザヤ・ベンダサンというペンネーム聞いたことあるでしょう、皆さん。ないかな。イザヤ・ベンダサンというペンネームで知られている山本七平さんという方が、作家であります。この方が日本人とユダヤ人という本を書きました。その中で、イスラム教の社会は原理社会であるけれども、日本人の社会は状況論理の社会なのであるというものです。どういうことかといいますと、日本人の社会には全然原理がないわけではない。しかし、状況によって判断する社会であるということを、山本七平さんは言っておられたわけです。

例えば、イスラム社会では、1日に何回かお祈りをしなければなりません。例え勤務中、時間中であっても仕事を放っといてです、必ず床の上に座ってアラーの神に祈るのであります。それから、断食をする時期があります。このようないろんなルールが、イスラムの世界にはありますので、原則を決められております。そして、彼らは忠実にそれを守ります。そこで、例えばある月のある日には、絶対取引をしてはならないというルールがあるとしますと、彼らはその日には絶対に物を売りません。取引ですから。物を売らないのであります。例えば、美術館の切符も売りません。従って、美術館へ行って、美術館に受付嬢もおるし、守衛もおるし、見学者もたくさんおるのであります。しかし、その日は切符を売らないのであります。だから日本人が、明日日本へ帰らなきゃならないから、どうか切符売ってくださいよと言っても絶対に駄目なんです。昨日切符を買っておけば、今日見学できます。しかし、今日は切符を売らない。これが、イスラムの社会の考え方であります。じゃあ、日本人ならこの場合どうするか。あなたは明日日本へ帰ってしまうんです。それは大変気の毒だ、じゃあ特別に切符をあなたにだけ売りましょう、あんまり人には言わないでくださいよと言って切符を売るんであります。そこで、日本人の社会にも原理が全くないわけじゃないわけではありますが、仏教社会でも同じでありまして、原理が全然ないわけではない。しかし、この状況なら原理を破っても許されるだろうというのが、私達日本人の精神タイプなのであります。そして周囲の人達も、必ずしもそれを否定しない。こういう状況だから、こういうことをやったんだから、やむを得ないだろう、一概に悪いとは言えないよなという具合に、日本人は理解しようとするわけであります。そこで原理社会では、絶対にやってはいけないことと、やってもよいこととは非常にはっきりしています。従って、ある意味では行動しやすいのであります。何故かといいますと、やってはならないことさえやらなければ、非難されることは絶対ないわけであります。ところが、日本のような状況論理の社会では、大変なのであります。いわば、剣が峰を歩いていると

いうようなものでありまして、例えば、こういう時には原理を破ってもこの非難されないだろう、こういう時には非難されるだろうということを、絶えず頭の中で判断をしながら行動しなければなりません。そうでなければ、あの男は融通の利かない奴だとか、あの男は状況には適応できない、変化に適応できない男だと言って爪弾きされてしまう可能性があります。

このように見ていきますと、原理社会に生きる人達は、行動のルールが非常にはっきりしております。従って、ある意味では行動しやすい、生きて行きやすいのであります。ところが、日本のように状況論理の社会に生きてる人達は、生きる為に大変な能力が必要になります。そこでもし、原理社会と状況論理の社会のどちらかに住むことで、他方の社会の在り方を考えようとしますと、なかなか理解ができないのであります。即ち、原理社会から見ますと、日本人はどうしてスパッとした行動が取れないのかということになります。1番良い例を申しますと、日本人にあなたどんな宗教持っていますか。どんな宗教を信仰していますか。と聞きますと、私は宗教がありませんと言う人が多いのであります。私も、そうではありますが。そこで、原理社会に属しているイスラム教徒とかですねキリスト教徒の多くは、宗教のない人間など考えられない、何という人間だろうか、これは動物に近いのだろうかという風に考えが浮かびます。このようなことが、国際理解ということを考える時に非常に断層が深いということを、考えなければなりません。それぞれの社会の生い立ちが、それぞれの社会の特有な形で出来上がっておりまして、一方は原理社会で、他方は状況論理の社会であります。そして一方から他方を理解することは、非常に難しいのであります。どんなに思いやりの心を持ってしても、難しいのであります。例えば、バングラデシュの社会なんかで、人から施しを受けても、ありがとうとは言わないのでありま す。これは、私達日本人には理解できないところであると思いますが、日本人とヨーロッパ人とが、果たして本当に理解し合えるのかどうか、政治的にも経済的にも文化的にも、この異民族間の国際理解というのは、大変難しいとは思うのであります。ことに、旧約聖書のルーツとするヨーロッパ人と、仏教をルーツとする日本人とでは、その文化のルーツが全く違うのであります。人間の理解ならば、理解できないこともありません。2つの異なった社会の人間が、お互いに接触して、お互いに惚れ合って恋愛をすることもあり得ます。お互いに理解することもできます。しかし、社会全体について相互理解は、大変難しいというのであります。個人と個人の場合、例えば日本人の留学生とイギリスの下宿屋の夫婦、或いはその下宿屋の家族という関係では、これは日本人の留学生と、お互いに人間的に理解し合うこともできます。しかし、日本の社会とイギリスの社会について理解し合うということは、なかなか難しいのであります。ましてや、中近東の国々については、その理解は本当に難しいということがいえると思います。このことが実は、政治問題とか外交問題でしばしば紛糾することは、ご承知の通りなのでございます。「1つ、例を出しておきますが、大阪市立大学の名誉教授で原田伴彦先生の話があります。これは、日本では牢屋、牢獄ですね、牢屋は城の隅の方に作ってあります。大体、お城の隅の方にしか牢屋はありません。ところが、西洋ではどうかというと、牢屋はお城の中央、即ちお殿様の住処からすぐ側に作ってあります。これはどういうことかといいますと、敵の大将を捕虜にしましても、決して殺しません。いつまでも生かしておく。そして、自分の側に置いて、どうだ悔しいだろう、悔しいだろうと言って、からかって苦痛を与えるんです。お城の中央から遠ざけてしまうとそれができなくなります。そして、この敵の大将が死にますと、今度はそれを剥製にして、やあ、こんにちはな

んてやっている。またその、死んでしまうと、敵の大将の頭蓋骨を漆で固めて、それで酒を飲んだりすることもあります。原田先生、こういうのを出しておられてますが、私はこれからふと思ったのは、蝋人形なんてのはまさにその完全型の1つの表れかもしれないですね。私達には、あの蝋人形、あれ程克明にそっくりに作ると寧ろ気味が悪いのであります。この辺の感覚は、日本人には理解できないものなのであります。日本人の場合はどうかといいますと、例えば皆さんご存じの菊人形、あれ見たってある程度デフォルメされております。そっくりには作ってありません。尤も、日本人でも日本人離れした人もいるのであります。私の友人で、まだ生きておりますけれども、彼は、死んだ父親の遺骨を、薬研ですり潰して飲んでしまったと言っておりました。その母親も、それを飲んだと言っておりますが、親子共々変わっておるなあと思ったのですが、まあそういう人もいます。人様々であります。少し横道に逸れましたけども、要するに、国際的に相手の国を理解しようということになりますと、相手の国の生い立ちとか歴史、そして社会の原理が一体どういうことになっとるのか、その中で政治というのは、どう行われて、経済がどうなって財政がどうなっているのかというようなことを、全体的に捉えないと本当の理解は出来ないということになるわけであります。そうなると、とてもじゃないですけどよその社会を理解し、その社会の中で動いてる人間を理解する、国際理解というのは非常に難しいということが原理的に分かるのであります。そこで、原理的に非常に難しい国際理解ということを考えるのに、非常に参考になる本が1つあります。これは、エンディミオン・ウィルキンソンという人の著書でありまして、誤解という意味であります。この誤解という本、今から30数年前に、TBS系のテレビで連続4回まで放送されております。この本は、国際理解について具体的な例をあげておりますので、これを考える時に非常に面白い本であります。ただし、これは全部現象に関するものでありまして、本質的な思想を語るものではございません。これは、どういうことを言っておるかといいますと、昔からヨーロッパの人達は、日本についてどういう理解をしてきたか、そして今日に至るまでどういう理解が一般化しておるかということを書いているわけであります。ウィルキンソンという人は、これはちょっと履歴を紹介しておきますと、1941年生まれであります。1964年にケンブリッジ大学のキングスカレッジを卒業して、その後は北京とかポリンストン、東京で研究を継続いたしました。1970年に、ロンドン大学の講師なんかを歴任した人なのであります。

この本は逆様の異境、異境とは異なった国境の境です、逆様の異境というテーマで、いろいろな具体的な例をあげながら、ヨーロッパの逆様は日本であると言っておるわけであります。例えば、1583年に来日いたしましたイタリアのイエズス会の巡察師であるヴァリニャーノという人がいます。その人の報告を取り上げたり、或いはポルトガル人のルイス・フロイスという人の報告を取り上げております。それによると、まさにヨーロッパと日本との逆様ぶりというのは、想像を絶する程だということを書いてあります。日本というのは、ヨーロッパの完全な裏返しと見て間違いないだろうと極論を申しておるわけでございます。その内容は、後で申し上げるといたしまして、まず、資料を出します。これは、今からだいたい約35年前の1978年の日本の外務省の資料によりますと、ヨーロッパで行われた意識調査では、過半数の人達が日本と聞いて原爆を連想しています。原子爆弾です、そこまでは正しいのでありますが、それから先が間違っておるわけであります。回答した人の3分の1が、日本は核爆弾を持っておると回答したそうであります。勿論、日本は原爆など持っておりません。ただし、原爆を落とされた世界でたった1つの国であります。これ

は、ヨーロッパ人の認識の中で、日本についての真実が逆転した良い例だと思うのであります。こういう誤解は、1つの文化が、他の文化を基本的に認識していない場合に起こるわけでありまして、そして、まさにそのことが日本について起こっているわけであります。何故かといいますと、日本という国はヨーロッパ人の認識の中で、殆どこの近世に至るまで問題にされていなかったからであります。東アジアの他の国、特に中国は、何回もヨーロッパ人が認識の上に重要な役割を果たしてきたのでありますが、しかし、日本については、そのようなことが全くなかったのであります。これでは、国際理解はあり得ないわけであります。中国につきましては、18世紀のヨーロッパ人が、中国にバイブル以前の、4000年の文明があるということを発見いたしましてビックリしました。それは、ヨーロッパ人のその歴史観に、基本的な修正を加えるものであります。しかし、中国文化の発見によって、ヨーロッパ人の哲学が修正された時にも、日本からは何の影響も与えなかったのであります。それは何故かというと、日本が自ら選んだあの江戸幕府300年間の鎖国、その為に当時の日本はヨーロッパとの接触の機会を持たなかったからなのであります。ヴォルテールとかモンテスキューとかライクニスとかいろんな人達が書いた物の中には、頻繁に中国というのが出てくるのでありますが、日本については、誰も殆ど一言も触れていないのであります。彼らは、中国の存在を使って、ヨーロッパ人の哲学を作り直そうとしましたけれども、日本については、全く無縁の国として問題にしていませんでした。ヨーロッパが日本を発見したのは、実に19世紀も終わりに近くなってからのことであります。しかし、幸か不幸か当時のヨーロッパというのは、日本より遥かに強大でありますし、強かった。従って、ヨーロッパ人というのは、安心して日本人を含む東洋人を見下ろしていたのであります。実質的な偏見というのも、その分長く変わらなかったのであります。ヨーロッパというのは、日本を急いで理解すべきだとは感じなかった。東洋の現実なんか全く理解せずに、勝手な幻想によっておくことができたのであります。要するに、ヨーロッパというのは、第1歩から日本を過小評価しとったわけでありまして、俗な表現で言いますと、要するに嘗めておったというわけであります。しかもその態度は、日本と実際に接触が持てるようになった後でも、なかなか変わりませんでした。

16世紀時点のヨーロッパ人の日本人に対する認識というのは、全く現実を無視したかなり酷いものでした。即ち、日本というのは、東洋の中では1番東にあります。それを知ったことにヨーロッパ人は、日本の位置を地球の裏側と考えたわけであります。何でもかんでも逆、表と裏、前と後ろ、日本についてのヨーロッパ人の基本的なイメージというのは、ヨーロッパと完全に矛盾をする正反対のものだということであります。まるで皆さんご存知の不思議の国のアリスというお話がありますが、あれに出てくる国、大変面白いけど真面目に考える必要のない国だったわけであります。そのようなものの見方を見事に代弁しとったのが、先程もちょっと紹介しました、1583年のイエズス会の巡察師ヴァリニャーノの書いた文章であります。どういうことを言ってるかといいますと、日本人のお祭りだ儀式というのは、他の全ての国に比べて全く異なっておる。その逆様ぶりは、実に想像を絶するもののほどではない。日本を、ヨーロッパの完全な裏返しと見たのは間違いないだろう。全てのことが反対で、我々の方式と同じものは事実上皆無である、と言い切っております。衣服、食べ物、誇りの表現、儀式、言語、そして交渉の仕方、座り方、建物、教育、何から何までかけ離れておって、その為に、我々にとって望ましい物、要するに理解できる物は何1つないと言い切っております。もっとも、このヴァリニャーノという人はイ

タリア人でありますが、同じ16世紀、同じイエズス会で巡察師だったポルトガル人のルイス・フロイスという人も、やはりもっと具体的に日本人の逆様性を次のように報告しております。これも全部現象的な話ではありますが、ヨーロッパ人は、概して身長が高く、日本人は、概して身長も体格も我々より劣っている。我々の間では、色の付いた衣服を着ることは軽率で笑うべきだろう。しかし日本人の間では、坊主と剃髪した老人以外は、一般に全て色の付いた着物を着ておる。それから、ヨーロッパでは、妻は夫の許可なくては家から外へは出ない。しかし、日本の女性は夫に知らせずに好きな所に行く自由を持っていると言ってあります。かなり、彼らにとっては異様に感じるんでしょう。それから、我々の間では、女性が文字を書く、字を書くということはあまり普及していない。識字率は殆どなかったんでありましょう。しかし、日本の高貴な女性、身分の高い女性は、それを知らなければ価値が下がると考えておる。こんなことは、日本では当たり前だと思ってはいますけども。それから、ヨーロッパでは男性が最高者になる、所謂跡継ぎ。日本では、女性が最高者になる。それから我々の子どもは初めは読むことを習って、後で書くことを習う。しかし、日本の子どもは、まず書くことから始めて、後で読むことを学ぶ。よく考えるなあと思うんですが、我々は死者を、人が死ぬと埋葬をする、土に埋める。しかし、日本人はこれを焼いて火葬にする、ヨーロッパ人は、焼いた魚、煮た魚を好むけれども、日本人は、生で食べることを喜ぶ。まあ、刺身の話でしょうけど。我々は馬で戦う、馬に乗って戦う、ところが日本人は、戦わなければならない時には馬から下りる。これは、やあやあ我こそはというか、昔の戦争の話だと思います。

以上のように、この宣教師達が日本について書いてから、それから更に300年後、驚いたことには、これ19世紀になります。300年後。駐日イギリス総領事のオールコックという人が、ほぼ完全に同じことを書いておるのであります。

要するに、日本は異様な国だということを、実例をあげて言っております。約300年のという長い年月の後でですね、2人の西洋人の日本に対する観察が、ほぼ似ておったということは注目すべきことであります。オールコックの観察は省略しておきます。要するに、彼に言わせれば日本というのは、逆説と倒立の逆立ちした国だということを言っておるわけでございます。ちょっと理由を言いますと、字を書く時に、彼らというのは日本人のことでありますが、日本人は、上から下に書く。そして横に書く時は、左から右へではなくて、右から左へ書く。日本の本を読んだらいっぺんに分かりますね。彼らの本が、我々の本の終わるページから始まるのを見ても、逆転の法則が如何に完全に働いているのかが分かるだろうと。これは、イギリスのオールコックの観察感であります。

更に驚いたことがありまして、この19世紀のオールコックから更に25年遅れて日本に来たボストン天文台のパーシバル・ローエルという人がいます。彼は、こういうことを言っております。子どもの頃、地球が丸いのであれば反対側に住んでる人達は、逆様になっていなければならないはずだと考えた。横浜に着いて、思いがけなく真っ先に思い出したのはその感じであった。少なくとも知的生活において、彼ら日本人は、重力の法則を無視して、面白い表現をするもんです。私が感じるのは、彼らの世界が、我々の世界の滑稽なまでに裏返しにした壮大な体系を持っておると言っております。このパーシバル・ローエルという人は、それでも殆ど未知の国・日本について書いている、ハンディキャップを持っているのであります。しかし、このローエルから更に90年経った1971年、もうこれ現代であります、殆ど20世紀の終わりに近く、1979年東京に駐在する外国人記者のジョン・ルイスという人が、同じ調子で依然としてこういう

報告をしとるわけでございます。彼は言います。日本を外から眺めている観察者達は、日本という現実から少なからず、現実離れした点を見出す。最初はすんなり理解できた物が、再び見直した時に、たちまち理解を絶する不条理に遭ってることに気が付く、こういうことを述べております。日本に、日本人に対する非常に深い愛情で知られておるラフカディオ・ハーン、小泉八雲。彼の本を見ましても、彼の本は今日ではたくさんの人に読まれておるのでありますが、そのラフカディオ・ハーンがですね、1904年にもうすでに日本に滞在して、14年間滞在した晩年に書いた物に、こういう次のような一説があります。如何に深く、日本の神秘さを知るようになっても、最初に日本を見た時に感じた不思議の念が消えることはない。と言っております。この国では、人々の仕草そのものが奇妙である。動作は、西洋で我々がやるのと反対の方向で行われる。道具類は妙な形をし、使い方も流儀もひどく変わってる。例えば、鍛冶屋は鉄床の前に尻を押し付けて座る。そして大工さんは、風変わりな鉋やのこぎりを持ってくる。しかも、それを押さずに手元へ引く。左が正しく、右が間違いである。これは錠前、鍵ですね。錠前の開け閉めには、必ず我々が逆だと思う方向へ鍵を回す、日本の場合は。これはホテルの鍵見てたら分かります。まさにその通りでありますが。これを見ただけでも初期の日本を研究する人達が、同じ論点をおうむ返しに繰り返して、多くの場合同じ実例を、飽きることなく引用していることが伺われるわけであります。はっきり言えば、進歩がないというわけであります。元来、このヨーロッパ人が初めてじっくり観察できるようになったのは、これは19世紀の後半であります。対人関係におけると同じように、文化においても、初対面の印象が全てを決定したというわけです。ヨーロッパと日本との大切な初対面の時期に、日本ではヨーロッパと全てが正反対という観察が、何回も何回も繰り返して書かれた為に、そのことがヨーロッパ人の意識の底に深く植え付けられてしまった。そして、揺るがしがたい日本の認識となってしまったわけです。

このような、逆様の文化とか人間関係を持つ日本人とヨーロッパ人が、果たして本当に理解し得るのかどうか、異民族間の国際理解というものは、大変難しいということが分かるわけであります。ことに旧約聖書をルーツとするヨーロッパ人と、仏教をルーツとする日本人とでは、その文化のルーツが全く異なるわけであります。要するにウィルキンソンは、16世紀のヨーロッパと日本を比較しながら、世界が日本を誤解をしておるということについて言っておるわけでございます。ヨーロッパの人達は、日露戦争までは日本人を取るに足らない人種だと考えておった。ところが、日本は日露戦争で大国ロシアを破った時に、一般の人達は初めて、日本という国の存在に気付き始めた、とウィルキンソンは言っております。経済の方面から見ますと、現在の日本の貿易は、大変な勢いで拡大をしております。日本の面積はどうかといいますと、世界の0.3%にしか過ぎないのであります。その日本が、今世界のGNPが世界貿易の場面では大変な躍進をしてるわけであります。もっとも顕著なのが、輸出の増大で、もう皆さんのご存じの通りであります。皆さん、例えば60年前、日本の車を外国で見ることは殆ど稀でありました。ところが、今やどうですか、世界の自動車産業で1、2位を争うようになってる。こういう風潮を、ヨーロッパの人達はどのように見ておったのかといいますと、今から40年ぐらい前の話でありますが、日本はダンピングをしておる。その為に労働者の賃金を切り下げて、コストを安くしておるという理解があります。しかし実際には、もう当時から日本の賃金は、アメリカ、ドイツ、スウェーデンに次いで高い賃金にありました。だからここにも、すでに誤解があります。多くの外国人は、単純にこのように日本はダン

ピングしている、けしからんと考えてたわけであります。それから、経済侵略によって各国を支配しようとしている。これも全くの誤解であります。それからまた、政府が関与して、日本株式会社を作って、経済侵略が必要だというわけであります。要するに、今から40年ぐらい前までは、日本というものをこのようにヨーロッパ人は見ておったというわけであります。こういう見方についてウィルキンソンは、こういう誤解を解いて、正しい理解をさせたいと思って、この誤解という本を書いたようであります。

そして日本というのは、資源が非常に乏しい。だから、生産を増加させようと思って、どうしても石油を中心としたエネルギーを輸入しなければならない。それとその他の原材料を全て外国から輸入しなければならない。しかも、そういう状況の中で貿易赤字を出さずに日本が生きていく為には、輸出の増大しかないんだ。その点、アメリカみたいに広大な土地や或いは豊かな資源があって、国内の資源で生産して、需要がまかなえる国とは全く違うんだよ。だから、その辺の所を誤解しないように、日本をもっと正しく知ってほしいということを、このウィルキンソンは書いておるわけであります。さあそこで、この国際理解について今1つ問題があります。言葉の問題であります。皆さんお気付きの点と思いますが、外国語というのが、外国人に自由に通じるかどうかということは、国際理解については大変重要な問題であります。しかし、仮に通訳を使ったとしても、国際理解というのは大変難しいと思うのであります。これにもいろんな理由がありますが、1つだけ問題を出しておきますが。1つの問題は、言葉が通じて国際的に理解ができたとしても、自分と異なる文化、異民族の文化を、どれほど受け入れる度量があるか否かの問題があります。この問題は、実は日本人同士でも、日本の中でも自分と異なった文化を、受け入れることが出来ない人達もいるということを、心に留めておかなければなりません。悲しいことに、これは実はロータリアンの中にもあります。ロータリアンだけでは、日本中の至る所で、自分と異なった文化を受け入れる度量も少ない人達もいるわけであります。そういう心の狭さでは、国際理解などとてもできるものはないと思うんです。また、異民族間の人種差別の問題も未だに根強いものがあります。更にこの問題は、国際的ではなくて同じ国の中でも根強く存在しております。その国の憲法が、人種差別のみならず、社会的身分、思想・信条についても平等であることを宣言しても、未だにこの人種差別が存在しておることは、皆さんご承知の通りであります。

地域社会で理解し得ないものが、国際社会で理解し合えるはずがないのであります。現実の世界を見る限り、この国際理解ということは、遥かに道は遠いなと言わなければならないのであります。

さあそこで、今までウィルキンソンさんの論説を述べてまいりましたが、これを、もうお聞きになったら分かりますように、国際理解についての現象的な観察、目に見える、私達の目に映っている世界での観察でありました。これは本質的な、人間の本質を語るものではございません。本質的な視点からの観察というのはないのであります。

そこで、アメリカの女性の、文化人類学者でルース・ベネディクトさんという人を紹介しておきます。これは、今のウィルキンソンさんの現象論とは違って、ちょっと突っ込んだ話になります。ルース・ベネディクトさんが、日本についての論説で菊と刀という本を出しました。戦後間もなくのことであります。彼女は、1887年の6月5日にニューヨークで生まれております。そして、1914年に生物学者のスタンレー・ベネディクト博士と結婚をしました。そして、その9年後に1923年コロンビア大学を卒業して、それと同時に、アメリカの博士のPhDを取ったのであります。そして、アメリカ人類学の第一人者となった人

なのであります。これがルース・ベネディクトさんです。彼女は、日本がアメリカと戦ったあの太平洋戦争、その終わる1年あまり前、1944年の6月に、アメリカ政府から、日本研究の仕事を委嘱された、頼まれたわけであります。それは何故かといいます、敵を知り、己を知れば、百戦危うからずという日本のことわざがあります。その言葉のように、日本人が一体どんな国民であるかを明らかにする為に、アメリカ政府から頼まれたわけであります。彼女はこの書物の冒頭で、次のように述べております。日本人はアメリカがこれまで国をあげて戦った敵の中で、最も気心の知れない敵であった。大国を敵とする戦いで、これほどはなはだしく行動と思想の習慣を考えなければならない必要に迫られたことは、未だ嘗てなかった。と彼女は言っております。我々は、我々よりも前に、1905年、明治38年、日露戦争で日本と戦った帝政ロシアと同じように、西洋の文化伝統に属さない、完全に武装され訓練された国民と戦っておったのだ。西洋諸国が人間の本線に属する事柄として、承認してきた戦時ハンデ、戦時中の慣例。そういうのを明らかに日本の眼中には存在しなかったと言っています。要するに、そんな戦時慣例なんてのは、日本には通用しなかったということであります。この為に、太平洋における戦争というのは、島から島への一連の上陸作戦を決行する、それだけではなくて、軍隊の輸送、軍隊の設営・補給に関する、容易ならぬ問題を解決するだけではなくて、まず敵の性質を知ることが重要な問題となった。我々は、敵の行動に対処する為に、敵の行動を理解しなければならなかった。ここでも矢張り、理解というものが問題になるわけで。このように、彼女は述べております。まず、敵がどのようなものであるかを理解する必要があったわけであります。そして彼女は言います。困難は大変大きかった。鎖国によって閉ざされた日本の門戸は、開放されて以来、75年の間に日本について書かれた文書がたくさんある。しかし、その中には未だ嘗て世界のどの国民についても用いられたことのない程、奇怪至極な、しかし、またという言葉の連発が見られる。これはどういうことかといいますと、例えば真面目な観察者が、日本以外の他の国民について書く時に、そしてその日本以外の国民が、類例のないぐらいに礼儀正しい国民であるという時に、しかし又彼らは、既存で尊大である、と付け加えることは滅多にない。又ある国の人々が、この上なく頑迷固陋があるという時に、しかし又彼らは、どんな新規な事柄にも容易に順応する、と付け加えることは絶対にない。又、ある国民が従順な、大人しいという、しかしまた彼らは、上からの統制になかなか従わないと説明したりはしない。又、西洋の学問に熱中する国民について述べる時に、同時にまた彼らの熱烈な保守主義について詳しく述べることもない。それからまた最後に、美術を愛好し俳優や芸術家を尊敬し、菊作りに、刀の菊ですね、菊作りに技術を尽くす国民に関することを書く時に、同じ国民が、刀を崇拝し武士に最高の栄誉を与える事実を述べたもう1冊の本によって、それを補わなければならないということは、普通はないことであると言っております。

ところが、これらの全ての矛盾を、彼女は言ってます。これら全ての矛盾が日本に関する縦糸と横糸になるのである。それらはいずれも真実である、矛盾しておるものもいずれも真実である。菊も刀も共に1つの柄の部分である。日本人は、最高度に喧嘩好きであるとともに大人しく、軍国主義であると共に耽美的である、美を愛する、耽美的である。不遜であると共に礼儀正しく、頑固であると共に順応性に富み、従順であると共に煩く小突き回されることを憤り、忠実であると共に不忠実であると言っております。要するにベネディクトさんにとっては、ここは一体どういう人間なのかさっぱり分からないということを言っているわけであります。そして更に続けて彼女は言います。日本を理解すること

が、アメリカにとって非常に重要な事柄になってきた。そうでしょう、敵を知らなければ、どんな人間かも知らない。敵が分からなければどういう作戦を用いるべきか、迂闊なことになるとアメリカ人が大変な被害を受ける、たくさんの戦死者を出さなきゃならない。そういう意味で、日本を理解することがアメリカにとって非常に重要な事柄になってきた時、これらの多くの矛盾を見て、見て見ないふりをするわけにはいかなかったと彼女は言います。重大局面が、刻々ときびすを接して我らの前に立ち現れつつあった。日本人はどうするのだろうか、というのが彼女の重大な疑問でありました。

例えば、戦争の末期になりますから、日本の本土に攻め入ることなしに日本人を降伏させることができるのだろうか。最後の１人まで戦うという日本人の決意を弱めることができるだろうか。これらの点について日本人は、よく知っている人々との間でも、意見は甚だしく違っていた。また、アメリカ軍は、日本の山の中にある要塞で死に物狂いになってて、最後まで抵抗する日本人と戦う覚悟をしなければならないのか。もしそんなことになれば、アメリカ兵は大変な戦死者を出すことになります。

国際平和が可能となる前に、フランス革命とかロシア革命程度の革命が、日本に起こる必要があるのだろうか。こういうことを考えると、我々の判断いかんによって大変な相違が常に生じることになる、と彼女は述べているわけであります。要するに、日本人がどのような人間か理解ができない為、恐ろしく不安がったのであります。

このことを考えますと、グローバルな国際社会においては、戦争というものが、相手の国を理解することを切実に要求するものであることだと分かるという問題です。平和の時には、これほど他の国を理解しようとは思わなかったはずであります。戦争が起こったからこそ、アメリカは必死になって日本を理解しようとしたわけであります。しかしまた、私が思うに、平和な時にこそ他の国を理解する必要もあるのでありまして、理解が不充分であったり誤解があったりしますと、そのことから国際紛争とか戦争が起こることにもなり兼ねないわけであります。従って、世界中の国民が、それぞれどのような物の考え方を持っているのか、どのような生活をしているのか等ということについて、お互いに本質的な理解をしていくことが重要なのであります。ウィルキンソンさんが言うように、背が高いとか低いとか、そういう現象の問題ではなくて、日本人とは一体如何なるものか、日本とは一体如何なるものか、そういうことを理解してもらわなきゃならない、同じことをアメリカ人についても日本人が考えなきゃならないことであります。そこでルース・ベネディクトさんは、この「菊と刀」という本は、日本人の生活の営み方に関する根本的な考え方、本質を検討するものであって、日本を知って日本人の国たらしめてきたものを、それを取り扱った書物であると言っております。これは、とりも直さず、先程のウィルキンソンさんが言ってるような、私達の目に映っている現象の問題ではなくて、日本を知って日本人の国たらしめているところのものを、即ち、日本という国の本質、日本人の本質とは一体何か。ということを問いかけているようなものであります。

そこで、彼女は20世紀のハンディキャップの１つは、日本を知って日本人の国たらしめているもののみならず、アメリカ人を知ってアメリカ人の国たらしめているもの、フランスを知ってフランス人の国たらしめているもの、そしてロシアを知ってロシア人の国たらしめているものについても、我々は依然として最も漠とした、さっぱり分からない、また最も偏った観念を抱いているということであると。この知識を欠いている為に、世界の国々がお互いに誤解し合っている、と彼女は言っております。大事なところであります。

そして彼女は言います。1つの世界ということを提唱する人達は、東洋と西洋、黒人と白人、キリスト教徒とマホメット教徒との差別は、全て皮相のもの、うわべだけのものであります。私の表現を借りるなら、借りるなら現象と考えています。現象のものにあたって、全人類は本当は同じ心を持っているのだという信念を世界中の人達に植え付けることを提唱してきた。この1つの世界ということを提唱する人達は、総じて人類はうわべだけ、黒人とか白人の区別とか、キリスト教徒とマホメット教徒の差別、これ全部皮相のもの、現象のものであって、その本質を見ると、全人類は本当は同じ心を持っているのだ。こういう信念を世界中の人々に植え付けるものだと、こういうことを提唱しているというのであります。1つの世界で提唱することを、これを四海同胞主義と呼ばれることもあるわけであります。ちょっと解説しておきますと、黒人と白人、キリスト教徒とマホメット教徒の差別というのが、皮相のものに、私申し上げました。私なりの表現によれば、これらの差別というものは、現象のものだということでありまして、また全人類は本来は同じ心を持っているというのは、人間は本質的に見れば皆同じ心を持っているということを言っているようであります。そしてこの四海同胞主義について、彼女は更に続けて言います。しかし、私には四海同胞を信じるからといって、どうして生活の営み方について日本人は日本人特有の、アメリカ人はアメリカ人特有の考えを持っていると言ってはならないのか、全く合点が行かない。このような考え方の人達、1つの世界の人達、皆同じフィルムから焼き付けられたプリントのように、一様な諸民族から成り立っている世界にならなければ、国際理解は成り立たないと考えているかのようにも思われると言います。

しかし、他国民を尊敬する条件として、そのような確率性を要求するのは、自分の妻や子どもにそれを要求するのと同じことじゃあまりにも神経質すぎる。寧ろ心のしっかりした人達は、差別があることに安心するんだ。彼らは差別を尊敬する、心のしっかりした人は。彼らの目標は、差別があっても安全が確保されてる世界であります。世界平和を脅かすことなくして、アメリカが徹底的にアメリカ的であり得る世界、同じ条件でフランスは、フランス的であり得る世界、日本は日本的であり得る世界であります。外からの干渉によって人生に対するこれらの態度のどれかが成熟するのを禁止することができないと思われると彼女は言い切るのであります。

要するに、民族的に人種的に差別があったとしても、安全の確保されている世界、世界平和を脅かすことなくして、アメリカが徹底的にアメリカ的であり得る世界、同じ条件で日本が徹底的に日本的であり得る世界であることが大事なのであります。このように彼女は言っています。

そして更に続けて、文化的差異を助長するということは、固定した世界を意味するものではない。これは、大事なところでありまして、例えば彼女は言います。エリザベス女王時代の後に、アン女王時代が来て、そしてヴィクトリア女王時代が来たからといって、イギリスはそのイギリスらしさを失わなかった。それは、イギリス人が自己を失わず、異なった時代に異なった標準とは独自の、イギリス独自の国民的文化を作り出したからに外ならないと彼女は言っています。要するに彼女の主張を、一言で集約いたしますとどういうことになるかといいますと、各国は、それぞれの国は、それぞれ自分の国本来の独自性を持たなければならないということであります。そして、自分の国と異なる他の国の伝統を尊重しなければならない、ということであります。このように考えますと、何故自分の国の伝統を無視して、グローバルな画一的なものに統一しなければならないのか、理解に苦しむところなのであります。従って例えば、今日話題となっている、所謂グローバルスタ

ンダードというものになると、簡単に認めても良いのかどうか、私は疑問なしとしないのであります。従ってまた先程の国際奉仕、世界社会奉仕というものも、国によって皆事情がそれぞれ違うのでありますから、その国の事情に合った奉仕をしなければならない。これを、ロータリー全体で1つの基準にまとめてしまうということは、とんでもない話なのであります。

そこで、ここで少し視点を変えます。国際理解を深める為に、何故グローバルスタンダードなるかということが主張されだしてる。ちょっとこれは現象的な話に戻りますけども、その部分に本質があるというのを、申し上げておかなければいけないのであります。ちょっと言っておきます。これは、先程の話の冒頭にも申し上げましたグローバルというテーマの裏のテーマ、現象と本質というものを理解するのに参考になろうかと思います。

そこで、まず現象の話から入ります。さて、現在世界が激しく変動していることは、既に皆さんのご承知の通りであります。私達は今、日本という一国だけでは、生活ができないことを実感として持っています。ご承知の通りであります。まさに、これを国際化というべき社会なのであります。そして、日本はご承知の通り、従来から、友好国アメリカの影響を強く受けていました。それが、軍事面のみならず、経済や財政の面でも、強い影響を受けています。それが時には、内政干渉にもなることがあります。実はその影響は、内政干渉が強く出てきたのは、1980年代以降であります。これ大事なところであります。この点については、一橋大学の名誉教授の中谷巌先生という方が、資本主義以後の世界という著書の中で、誠に明快な論説をしておられますので、それを引用させてもらいながら、職業を通じて世の為人の為の奉仕をするというロータリーとの関連を私なりに申し上げたいと思うのであります。

さて、話はちょっと遡りますけれども、1968年、日本が世界第2位経済大国になった時に、日本の自動車や電気製品というのが、まさにアメリカ社会を横行しておりました。すごい勢いであります。そこで、アメリカは物作りでは到底日本には勝てないと思ったのであります。そこで、1980年代に入ってからは、金融によって経済力を回復しようと考えました。つまり、今までの物作りの実物経済から、金融経済への転換を図ったわけであります。そこで、あのレーガン大統領が、1981年高金利政策によって世界中の資本をアメリカに引き寄せるという政策に転換をしたのであります。これは、アメリカの牽引によってアメリカの経済を回復しようとしたものでありました。

ところで日本は、世界大戦後、国の安全保障を全面的にアメリカに依存するという状況がありました。皆さんご存じの通りであります。従って、アメリカの要求を呑まざるを得ない立場にあったわけであります。そこでアメリカは、物作りは日本に任せておこう。そして自分の国は日本で作られた優秀な製品を買う方がいいじゃないかと考えたわけであります。しかし、アメリカの分を買うということは、何を一体意味するのかといいますと、当然その代金の支払いの為に、アメリカのドルがどんどん海外へ出て行くことになります。従って、やがてアメリカは、貿易赤字が大きくなったのであります。

その結果、世界はどのように変わったかといいますと、アメリカが世界中から物をたくさん買った為に、世界経済はおかげさまで活況を呈したのであります。景気が良くなった。その結果、日本は勿論のこと発展途上国までも景気が良くなったわけであります。

しかし一方アメリカは、貿易赤字が膨大に膨らみだしたから、それをなくす為に、今度は海外に支払ったドルを回収しなければなりません。その為にアメリカは、世界中へ出て行った金を、今度はアメリカに引き戻して、国際収支を均衡させようと考えたわけであり

ます。そこで、アメリカはどうしたかといいますと、デリバティブ、ご存じだと思いますが金融商品です。そういうものをどんどん開発しました。そして、このご承知の通り、株式とか債券、金利、外国為替、こういう金融商品から派生した金融商品が、このデリバティブの意味でありまして、先物取引とかオプション取引とかスワップ取引なんていわれているのでありますが。また、これに加えて、当初ITによる新しい情報技術がこういう金融商品の開発に役立ったわけです。アメリカの金融商品というのは、世界中で大いに売れに売れたのであります。このようにいたしまして、アメリカは一旦流出したドルを、再び吸い上げることに成功したのであります。要するにアメリカは、自分の国の所得以上に消費をする、金を使うという、所謂消費経済によって世界の経済成長を支えたといえるわけなのであります。

このようにいたしまして、物作りでは競争力を失ったアメリカなんですけども、あのリーマンショックに至るまでは20数年間、年率3%以上の経済水準を保つことが実現することができたのでありますけども、これはまさに今申し上げました、情報技術をふんだんに使った金融商品を開発した結果でありました。実は、この経済成長の過程に起きましては、アメリカは、グローバルな資本が自由に国境を出入りできるような金融市場を開発する必要があると考えたわけであります。その理由は一体何かといいますと、それは、資本が国境を越えて、自由に動き回ることができなければ、市場は拡大しませんから、大きな利益を獲得することができないわけであります。

そこでアメリカは、世界に対して国境の壁をなくして、市場をグローバル資本に開放させようと考えたわけであります。これが実は、アメリカによるグローバルスタンダードであります。ワシントン・コンセンサスとも呼ばれておるわけであります。それが具体的には一体どのようなことかといいますと、ワシントン・コンセンサスというのはね、ワシントンに本部を置いてあるIMF (International Monetary Fund)、国際通貨基金のことでありますが、このワシントンに本部を置いてあるIMFとか、世界銀行が提唱した考え方でございます。それはどういうことかといいますと、まず第一に民営化、小泉首相らが言いました、民営化。それから規制の撤廃、これもやっております。それから小さな政府こういう3項目に従って、国内の構造改革をやらない限り、IMFや世界銀行からの融資はしない、お金は貸しませんよというものなのであります。このようにしてアメリカは、金融資本が自由に国境を越えて移動することができる、グローバルな金融システム、グローバルスタンダードを作り出すことに成功したわけであります。

ところが、2008年のリーマンショックによって、このアメリカがせっかく作り上げた金融システムが、一挙に縮小してしまったのであります。これが、この市場原理に任せた、アメリカ型の株式資本主義の結末でありまして、このことが、今日の世界的な不況の原因になっているわけであります。これはまさに、ロータリーでいう職業倫理というものが退廃します。人間がいたずらに金を求めた結果なのであります。これ大事なところであります。

じゃあアメリカはその結果、どのような対策を立てたのかといいますと、アメリカは、2009年になって景気を刺激する為に、アメリカ中央銀行にあたるFRB、ご存じですね、このFRBの直接引き受けによる、6千億ドルに上る国債発行に踏み切ったのであります。実はこれは、財政政略として原理的には禁止をされてるのであります。禁じ手であります。それは一体何故かといいますと、普通政府が、国債を発行して資金を調達する場合には、発行した国債を市場に売りに出します。このようにして、政府が調達した金を使って財政政策を実行するわけであります。従ってこれは、市場にあった金が、国債の発行によって政府

の手元に来るだけのことでありますから、国全体の通貨の量は変わりません。参考までに言いますと、我が国では、日銀によるこの新規の国債引き受けということは、財政法という法律によって原則として禁止をされております。それは一体何故かといいますと、それを実施すると、インフレを引き起こしてしまうからなのであります。どういうことかといいますと、国債を市場に売り出すだけであれば、今申し上げましたように、市場に貯まっておった金を国が吸収をして、その金を財政投融資に使うわけでありますから、国全体の通貨の供給量は変わりません。しかし、市場を経ずに、市場をほったらかしにしといて、直接中央銀行に新規国債を引き受けさせるということは、中央銀行がどんどん札ベラを印刷して、新しい通貨を出していくわけです。そして、そういう新しい通貨で、財政投融資なんかの景気対策を行うということは、その分だけ国全体の通貨の量以外にです、新たな通貨が国中に出回ることになります。従って、このようなことが続けられますと、通貨の供給過剰になってインフレが発生するわけであります。従ってこれは、財政政策としては、原則として禁止されておるわけでございます。ところが、アメリカは、景気の回復の為にはこんなこと言ってられないよ、背に腹はかえられないとばかりに、FRB直接引き受けの国債を発行しました。じゃあそれで、アメリカの景気は良くなったのかといいますと、それにも関わらずアメリカ経済は、現在もまだ立ち直ってはいないのであります。実は、このアメリカ経済の不況は、日本の経済にも影響を与えたのは当然のことであります。更に問題なのは、アメリカ政府が日本に対する不当な干渉であります。それは具体的にはどういう形を取ったのかといいますと、これも少し古い話ではありますけれども、アメリカは、1989年にソビエト連邦が崩壊しましたその頃から、日本に対して、経済システムの構造改革というものを要求するようになったわけであります。

その始まりは何かといいますと、1989年の日米構造協議であります。その最も厳しいものが、1994年のクリントン政府による年次改革要望書であります。これあんまり一般の人は知らないのでありますが、それは一体どういうものかといいますと、日本古来の取引慣行や商慣行を廃止しなさいということであります。これは明らかに内政干渉であります。何故かといいますと、もしこれに従いますと、日本は国際競争力を失ってしまうことになります。これは明らかなのであります。じゃあアメリカの論理は一体何かといいますと、日本のこのような取引慣行とか商慣習というのは、外国企業が日本と取引する場合に大変障害になる、邪魔になるから、このような閉鎖的な商取引慣行を廃止しなさいというわけであります。

しかし、これはアメリカの一方的な論理でありまして、日本には日本独自の取引慣行や商慣習があります。従って、アメリカの論理は、先程から申し上げております国際理解を無視するものなのであります。要するにアメリカは、自らの一方的な論理に基づいて日本の取引慣行を閉鎖的なものだと決めつけて、企業間で地道な取引交渉を行うことを否定してしまいます。そして、頭ごなしに政府間交渉によって圧力をかけてきたわけであります。

しかし、日本の取引慣行というのは、これはロータリーの職業奉仕の原理にのっとったものでありまして、あらゆる当事者間の信頼関係を前提にいたしまして、長期的に安定した利潤を着々と獲得していく、そういう強靭な体質の企業を作り上げる原理に基づくものであります。それは、アングロサクソン的発想に基づく株主資本主義のように短期的な取引を前提とするものとは全く異質のものであります。従って、私達は常に物事の本質を見つめて、このような現象に惑わされてはならないのであります。今、世界的な視野に当たって、グローバルな視点から各国の財政経

済なんかを見る時に、それぞれの国にはそれぞれの事情がありまして、まさに世界の様々、世界は多様性に富んでいるわけであります。その多様性を無視して、1つの国を基準にして世界的な基準で統一しようとするグローバルスタンダードというものは、これは原理的に見て無理があるといわなければならないのであります。このようにいたしまして、アメリカのグローバルスタンダードというものは、日米間の国際理解というものを全く無視をして、力で自国の利益を獲得しようとするものなのであります。

それでは、どのようにしてこれに対処するべきか。これは、国際社会は力の世界であります。ロータリーは原理の世界であります。従って、二国間、2つの国の間の利害が衝突した場合に、現象としては、短期的には他の国の力によって、アメリカの力によって、日本の取引社会や原理や伝統が押し切られてしまうことがあります。しかし、長期的な視点に立ってみますと、原理が勝つのであります。ここ大事なところ。では、どのような場合に原理が勝つのか、それは、その国の取引社会の原理や伝統が優秀な場合なのであります。従って私達は、日本の取引社会の根底に表れる日本古来の優秀な思想に学ばなければならないところであります。そこには、日本独自の素晴らしい原理や伝統がございます。従って私達は、いたずらにグローバルなものを求めるのではなく、まず自分の国の独自の文化伝統を理解して、それに誇りを持つべきであります。自国の文化伝統を理解することなくして、国際理解などあり得ないのであります。

このようにいたしまして、国際理解に大切なことは一体何かということを集約いたしますと、まず第1に、私達は自分の国の固有の伝統に誇りを持つべきであります。これ大事なところ。誇りを持つこと。従って、日本人は日本固有の文化伝統、即ち、社会伝統、宗教伝統、経済伝統、それらの伝統に誇りを持たなければなりません。私達はまず、日本の先輩達が積み重ねてきた日本固有の文化伝統、その尊さというものを、誇りを持って理解する努力をしなければなりません。そうでなければ、真の国際理解などあり得ないと思うのであります。自分の国の文化伝統に、文化の理解がある、できない部分がある、到底他の国の文化伝統を理解することができないのであります。従ってまず、日本人にとっては、日本の文化伝統は世界一だと思うところがあります。アメリカ人にとっては、アメリカの文化伝統は世界一だと思っているわけであります。このようにいたしまして、各国の国民はまず、それぞれ自分の国の伝統が世界一だと思うことであります。そうすると、国家の数だけ最高の文化伝統があることになります。

ところが、自分の国の伝統が最高だと考えます。ともすれば、他の国に対する優越感に結び付きがちであります。このことが時には、国際紛争の原因となったり、ひいては新戦争を引き起こすことにもなりかねないのであります。

そこで第2に、私達が自分の国の伝統に誇りを持つが故に、他の国の伝統に対して優越感を持ってはならないということを考えなければなりません。そして、第3に、私達はいつも他の国の伝統に対して、謙虚に頭を垂れて学ぶ姿勢を持つべきことなのであります。以上の3つのことが、国際理解の為に大切なことなのであります。

そこで最後に、先程国際理解については、言葉が通じて国際的に理解できたとしても、自分と異なる文化、異民族の文化をどれほど受け入れる度量があるか否か、という問題が大事であることを申し上げてきました。この点について、皆さんは青少年のリーダーとして、心に留めておいていただきたいことを1つ話しておきます。

この話は、今から約20年前、評論家の草柳大蔵さんが一燈園という修養団体と話されたことなどがあります。その話は、昭和62年に、ユル・ブリンナーという映画俳優が、これあり

ました、皆さんご存じないかもしれません。かなり古い話でありますが、この映画俳優が、肺癌で亡くなったのであります。ユル・ブリンナーという人は、王様と私という映画の主演男優でありまして、お坊さんのように頭をツルツルに剃り上げた有名な俳優さんであります。このユル・ブリンナーは、亡くなる8年前から、肺癌になったということが分かっておったのであります。その4年前に京都に参りまして、お忍びであの有名な大徳寺の和尚さんに会いました。この和尚さんは、仏教哲学者の鈴木大拙先生を凌ぐほど英語のできる人だったのであります。ユル・ブリンナーは、和尚さんに向かって真剣な眼差しで2時間にわたって話を聞いたのであります。死ぬということは、どういうことですか、生きるということは、どういうことですかと、真剣に聞いたのであります。すごい切り込みであります。後で聞いたところ、彼は曹洞宗の道元禅師の本を、実によく読んでいたのであります。ニューヨークの本屋に行きますと、道元禅師の翻訳本がたくさんあるそうでございます。そして、道元禅師の教えを元にして、和尚さんに話を聞いていたのであります。そして2時間、そして終わった後に畳に手を付いて、本日は誠にありがとうございました。と言って、丁寧にお辞儀を一礼します。そして、ついてはもう1つ質問があります。あなたの着ていらっしゃる、白い着物と白い帯が実によろしいので、それを我々が着てもよろしいのでしょうか。と質問をしました。すると、和尚さんが、あなたの頭は、我々と同じだから、大丈夫ですよと言ったのであります。すると、彼は喜んで、すぐ西陣へ行って白い着物を2着作って帰ってきたのであります。彼は、肺癌になってからの8年間、死生観というものを実に突き詰めて考えていたのであります。

そして、お寿司が大好きでね、ニューヨークの竹寿司というお店によく行っていた。劇場を離れると、彼はスタッフを連れて行って一緒にご飯を食べます。お寿司を食べたいだけ食べなさい。日本酒を飲みたいだけ飲みなさいと言ってごちそうをします。ところが、その連れてくる人はといいますと、切符もぎりの女の子、掃除係のおばさん、照明係の若い人のように、人生で1回も脚光を浴びたことのない人、所謂誰もライトを浴びたことのない裏方さんばかりであります。そのような人達を連れて来て、さあ、食べたいだけ召し上がれと言ってごちそうをするわけであります。この辺が大変魅力的なのではありますが、彼の周辺の人達と話し合ってみますと、実は彼は、蒙古人とハンガリーのジプシーの間に生まれた子であるといわれてます。もう皆さんご存じのことと思いますが、実はヨーロッパとかアメリカの社会では、ジプシーだと分かった途端にそのことだけで社会的な存在を抹殺されてしまうのであります。すごい人種差別なのであります。例えば、ご存じだとは思いますが、あの有名な第3の男という名曲があります。この名曲を作ったアントン・カラスという人がいました。世界中に、あの第3の男の音色が流れて、アントン・カラスはついに、ホワイトハウスの大統領の前で演奏会を開いたり、フランスの大統領の官邸で演奏会を3日間も続けたという、それくらい世界中のハイライトが当たりました。そして彼は、たくさんお金を儲けて、ハンガリーの首都のブダペストにカラスというレストランを開いたのであります。このレストランは、2ヶ月前からでないと予約ができない程流行ったのでありますが、ある時、アントン・カラスは、ジプシーの子だという新聞記事が、僅か100行くらい載った為に、サーッとレストランから客が引いてしまいました。その店は潰れてしまいました。そして、アントン・カラス自身は、ついに昭和61年ユル・ブリンナーが亡くなる1年前でありましたが、昭和61年、落剥のうちにこの世を去ったのであります。ハンガリーの、本当にうら寂しい雨漏りのするアパートのベッドの上で、誰にも看取られずに

ただ1人で死んでいったのであります。それくらい厳しいんです。ユル・ブリンナーは、このような環境の中を耐えに耐えてきたからこそ、下っ端の人達の涙が分かるのであります。社会の底辺で支えてる下積みの人達の気苦労が分かるのであります。だからこそ、その人達をお寿司屋さんに呼んでご馳走をするのであります。実はこのようなエピソードが、たくさんあるはずなのでありますが、ユル・ブリンナーはそういうことは、一切自分の口からは話さなかったのであります。これはまさに、日本流にいいますと陰徳陽報の心、陰徳陽報というのは、隠れた徳のある行いは、やがて明らかなる報いがある、という中国の越境にある言葉なのでありますが、これと同じことを実行した人が、日本のロータリーの創始者であります米山梅吉先生であります。彼は実業家でありましたが、湯水の如く入ってくるお金を、全部世の為人の為に使い果たして、最後は破産しそうになります。そこは先生やったら駄目だと言って側近が止めて、やっと破産は免れた。自分の持ってる財産を、全部若い人達とか困った人達に貢いでしまった。そして彼は、日本の貴族院議員になったのであります。そういう人もおったということを心に留めておいてください。この米山先生のやった仕事を、先生が亡くなった後で東京ロータリークラブの人達が、どうしてもこれは後に残そうというので、奨学金を作りました。これが、今盛んになっている米山記念奨学会なのであります。そのこともちょっと覚えておいて下さい。要するに、この世の中には下積みの人達の意見、それから更に使い捨てのものもあって、初めて成り立っておる。これがこの世の中なのであります。従って私達は、下積みの者とか陰の力に感謝をする心を忘れてはならないと思ってます。この世の中には、一方に、今ちょっと申し上げました、ノープレイスフォーページといわれるような、身分や特権のある大変豊かな社会があります。日本の社会も大変豊かな社会であります。それと共に、他方による、差別されたユル・ブリンナーとかアントン・カラスのような貧しい社会もあるのであります。そして、どちらの社会に生きている人達にも、赤い血の通った人間なのであります。従って、リーダーたる者は、常に弱者に涙をする心を失ってはならないと私は思うのであります。会社でも病院でもロータリーでもその他あらゆる団体の組織の中で、リーダーシップを発揮する者は、常に社会的弱者に対する思いやりの心がなければならないと思うのであります。これは先程、人間の理解について申し上げたところであります。これは要するに、私は、ロータリーのリーダーも、RYLA のリーダーも、情理兼ね備えた者でなければならないと思うのであります。従って私はこういう風に集約したのであります。

情理の理です。利に走って、情を忘れたる者、これをリーダーということを得ない。また、情に溺れて理を忘れたる者、これまたリーダーということを得ないと、集約できると思っています。

以上申し上げましたことは、グローバルなリーダーシップの前提であります国際理解ということの概略であります。国際理解というのは、私達日本人が、国際的に奉仕事業を行う時の基本前提なのであります。従って私達は、世界的な視野に立ってグローバルな視点から物を考える時に、以上のような様々な問題を乗り越えて、国際理解に努めなければならないのであります。

ロータリーというのは、未来を夢見る思想であります。従って、RYLA の皆さん方も、未来を夢見る人達なので、従って、ロータリアンそしてライラリアンは、国際理解という高い理想に、少しでも近づく努力をしなければならないと思います。また、RYLA の若い皆さん達にも、この理想に、高い理想に少しでも近づくように努力をしていただきたいと思うのであります。

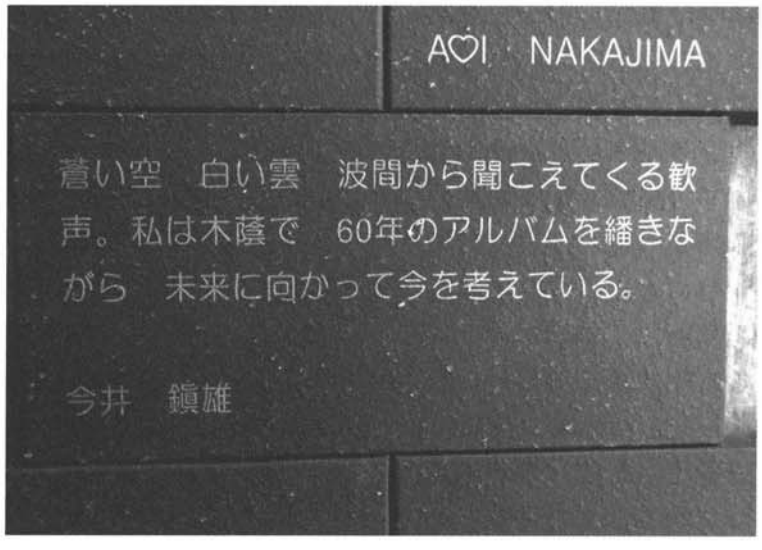
これからの皆さん方のご活躍を祈って、私の話を終わりたいと思いますが、長い間辛抱していただいてお疲れになったと思います。お許し下さい。

ご静聴有り難うございました。

○森　皆さん如何でしたでしょうか。深川先生は皆さんに、ロータリーのこのセミナーの本来の狙いをお伝えしたいということで、周到な準備をしてお話をしていただきました。どうか、このセミナーの狙いですので、覚えておいてください。

では先生、どうもありがとうございました。





閉講の挨拶

パストガバナー（2680地区）
三木　明（姫路RC）

4日間本当に有難うございました。講評というよりもまず、皆さん方にお礼の言葉、感謝の言葉を述べさせていただきたいと思います。四国全域そして兵庫県から50人近い受講生の皆さん、そして、ロータリアンまたロータリー関係者80名、大変大勢の皆さん方がご参加くださいましたことを、大変感謝申し上げます。特に受講生の皆さん、慣れない所においでになって、初めてのことがいっぱいあったと思いますが、4日間本当にお疲れ様でした。これが、有意義な4日間であったということを、私は信じたいと思います。

冒頭、開講式でも話がありましたけども、5つの奉仕でございます。今回いろいろな講義、今回は、普段私達が直接話を聞くことができないような藤澤先生、そして饗場先生、お二方の素晴らしいお話を広い視点でお話をしていただきました。また、先程の深川先生から本質とは何かということを、懇切丁寧にお話していただきました。深川先生のお話の中に、ロータリーの本質というのが、しっかりと込められていて、皆さんの為にお話をいただいたわけであります。本当にありがとうございました。

私達ロータリーでは、次の世代を担う皆様方を育てるといいますと、ちょっとおこがましいかもしれませんが、皆さん方の為にいろんな活動を続けてます。そしてまた同時に、皆さん方と接することによって、私達ロータリアンもいろいろたくさんのことを学ぶことができる、それを集約されたのがこのRYLAセミナーでありまして、大変私達にとっても素晴らしい機会だという風に思っております。お互いに切磋琢磨し、そして心を磨く4日間ということを、今実感し確信しているところであります。

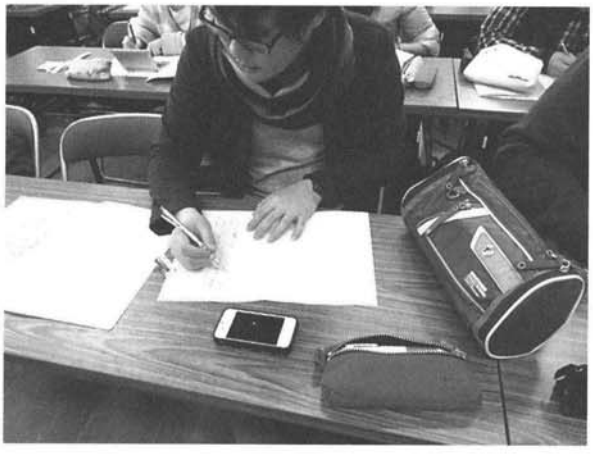
皆さんがこの4日間で学ばれたこと、感じられたこと、そんなことを心の中、小さな楽しみとして、それぞれの地域に持って帰っていただきたい、そして、その灯を地域の、同じくリーダーとして活躍されてる方々と共に共有していただきたい。皆さんの灯を少しずつ広げていっていただきたい、そんなふうに思っております。

皆様方が、リーダーのリーダーとして今後ご活躍なさることを、心から祈っております。そして、皆さん方がこの4日間充分学ばれたことでありますから、その資質は充分にあるわけであります。どうぞ地域でご活躍ください。そして今日から、皆さんライラリアンという名称ですが、肩書きが生まれるわけであります。RYLAセミナーをしっかり4日間学ばれた、このことによって、ライラリアンという肩書きを得ました。世界中にライラリアンはたくさんいますけれども、皆さん方の先輩は1800人ぐらいの先輩が、ライラリアンがいます。後ほど後でお話がありますけれども、学友会という組織がありますから、そこに所属していただいて、ロータリーと縁が切れることなく、これからも活動してご活躍を願っております。

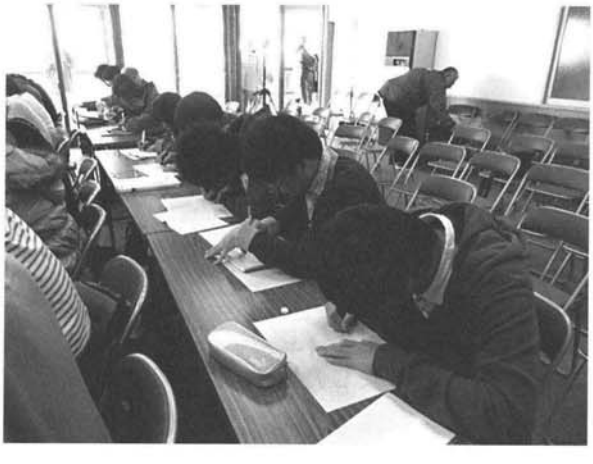
ロータリーには、ロータリーファミリーという言葉があります。ロータリーは、家族であります。皆さん方、今日からロータリーのファミリーであります。どうか、そのロータリーファミリーに、一生このロータリーと

関わりを断つことなくご活躍いただきたいと思います。そして、地域のリーダーとしてますますご活躍をいただきたい、そんなことを思っております。

4日間お疲れ様でした。そしてありがとうございました。心から感謝致します。
ありがとうございます。よろしくお願いします。













参加者感想文

■■■　A 班　■■■



ライラセミナーを終えて

◆A班カウンセラー　田中　恵美

今年でカウンセラーをさせていただくのも3回目となり、どんな出会いがあるか楽しみな一方、緊張感を持って余島にやってきました。

出会ったことのない人達との4日間ですから緊張と不安が受講生の皆さんにはあったと思います。しかし、A班の皆さんは前向きにプログラムを受けて下さいました。

年令も出身も職業もバラバラの人達ですから、バズセッションの時には、本当に色々な意見がでていました。班の皆さんにとっても色々な発見があったのではないかと思います。

プログラムを終えた今、3日前に初めて出会ったとは思えないほど打ちとけた様子を見て良かったと思います。私自身、A班の皆さんからたくさんの刺激と優しさをいただきました。A班の皆さん、久保田お父さん、この4日間本当にありがとうございました。

第36回ライラセミナーに参加して

◆A班カウンセラー　久保田　敦

今年で、カウンセラーとして3年目になります。毎年、若い方々から、多くの事を勉強させていただきました。最近、私の心の中では、「若い人は？今時の人は？」と評判する方々の言葉に違和感を持つようになりました。

考え方は世代間で大きく異なり、日々変化します。それを受け入れて、理解することがとても難しいことではあると思います。しかし、最終日の深川先生の講義であったように、〝おもいやり〟を持った人が、他人を理解できる！固定概念をくずさなければいけない。と言うことを、我々ロータリアンが、今こそ理解しなければいけないと思います。

ライラは、ロータリアンにとってもすばらしい勉強をすることが出来るプログラムです。今後も多くの若い、未来のあるロータリアンに参加してほしいと思います。

最後に、A班の皆さん、4日間とても楽しかったです。ありがとうございます。

●羽原　未紗

第36回RYLAセミナーに参加する機会を持てたこと、本当に感謝しています。

様々な職種、年齢の方がおられる中で、A班として4日間、多くのことを学ぶことができました。一人一人、自分の考えを持っておられ、その考えを真面目に討論し、共有することができ、貴重でありました。若者は、若者の経験の中で、しっかり考えていて、この様な仲間と共に、次の社会を考えていきたいと思いました。自然あふれる余島で、高いレベルの講義を受け、バズセッション、カウンシルファイヤーなど、自ら仲間と考え、見つめ直す時間をもつことができよかったです。

これから社会に出て、中心的に社会を担う私たちは、社会について考え、行動する義務と責任があると思います。一人ではなく、共にいる仲間と、行動していきたいと思います。今回、RYLAセミナーに関わる、企画とお世話をして下さった全ての方に感謝します。

本当にありがとうございました。

●鎌田佐和子

私は、ライラセミナーに参加できたことに感謝の気持ちで一杯です。

バズセッションでは、年齢も職業も異なるメンバー12名で、1つのテーマについて意見を出し、皆で語り合ったことは、多くの学びがありとても勉強になりました。又、班のみんなと寝食を共にした時間は、とても楽しい一時でした。日常生活を離れ、大自然に囲まれた余島での4日間は、自分自身を見つめなおす貴重な時間となりました。

これからは、ライラリアンとして、人と人とのつながりを大切にしていきたいと思います。

最後に、A班の久保田パパさん、田中ママさん、A班の皆さん本当にありがとうございました!!又、お会いできる日を心より楽しみにしています。

●津村奈緒子

「余島」という大自然に囲まれた場所で、グローバルに関する講義を受けたり、皆さんでディスカッションしたりするのはとても興味があり不安もありながら楽しみでもありました。この3泊4日は濃いプログラムでした。2日目の講義の中で『国際ニュースに日頃関心を持つこと。またメディアの情報の伝え方によっては極端な表現で誤解を招くこともある。』という内容は興味深かったです。国際理解できる人は自分の地域社会のことをよく知っている人ということも分かりました。フォーラムでは皆さんの話し方や教養知識の高さには驚きました。大学での専門分野だけでなく、幅広いことに関心を持ち、自分の意見が主張できるようになれば良いなと思いました。

このライラセミナーを通して、残りの大学2年間をどのように有意義なものにできるのか、目標も明確に定まりました。貴重な出会いに感謝です。Vielen Dank!

●松谷　実里

3日間を通して、リーダーとはどういう人なのか考え、学ぶことができました。私は職場では、リーダーという立場ではないのですが、子どもを保育していくなかでも、大切にしていかなければならないことを見つけることができました。

私は、子ども一人ひとりが、自分に自信を持って社会に出ることができる、そして社会を引っぱっていけるような子どもを育てることができるようにしたいと思っています。そのためにも、子どもが自分で考えて問題解決できるよう、子どもの思いを聞き、うけとめてあげたり、子ども一人ひとりを認めてあげたりして、子どもを支えながら、引っぱれるようにしていきたいと思いました。

第 36 回 RYLA セミナーを終えて

●清水　裕哉

私は、まず、この 4 日間、学んだこともたくさんあり、楽しかったこともたくさんあり、何より、たくさんの人と出会えて、とても一生の思い出になる 4 日間でした。

まず、私が、1 番作業として、「リーダーとは何か。」について話した時に、班員の方の色々な意見で、共感を感じられた部分や、新しい発見など、とても密度のこい話だったと思います。リーダーは、やはり信頼され、その信頼を得るためには、色々な過程があると思います。本当に、信頼されるリーダーそういった人になれる自分がまだ想像はできませんが、いつかこの先の未来そういった信頼を持てるリーダーになる事があれば、それは、この「RYLA セミナー」のおかげだと思います。

最後に、講義でも、少し難しかったですが勉強になった部分がたくさんあり、会社に帰ってから、しっかり見つめ直したいと思います。そして、何より、4 日間共にしてくれた、カウンセラーの方、同じ班員の方に出会えてよかったです。

●伊勢田隆司

私はこの RYLA セミナーに参加する前、ロータリーの存在を知りませんでした。講演を受けてどんなものかを徐々に理解しました。どの職種でも活躍できる人材育成をする考えにとても感動して、少しでも多くのことを学ぼうと思いました。このセミナーで一番刺激的に感じたことは、若い人達でもそれぞれの考えをしっかり持っていると知ったことです。また、様々な分野で活躍されている人から、学生まで幅広いメンバーが集まっていたので、普段絶対に体験出来ないような体験が出来ました。RYLA セミナーでは、初日に決められたメンバーが最終日まで固定で一緒に活動するので、お互いよく話し、時には意見をぶつけあいながら理解していくことが出来ました。こんな活動がとても楽しく感じる自分にも驚きました。4 日間という短い期間でしたが、今までの自分とは少し違う自分に変わったと確かに感じています。この気持ちを職場に帰っても持ち続けたいと思います。

RYLA セミナーを終えて

●増田　理人

スケジュールを眺めてもいったい何をするセミナーなのかわからないまま、初日を迎えました。初対面の人たちと同じ部屋に寝泊まりし、4 日間も過ごすのは人生初めてのことでした。

人間は第一印象が大切だとよく言うけれど、僕はこの合宿で、第一印象が次々と変化していく様子をたしかに実感しました。きっと人間は第一印象が大切だなどと言う人は、時間がないだけなのです。僕は日常から隔離されたこの余島での 4 日間で、たっぷりとした時間の中で人間のすばらしい一面をたくさん見ることができました。

1 つ、改善点をお願いしたいのは、夜はグループ間の移動は自由にしてほしかったということです。もしそれができたなら、さらに多くの友人をつくることができたのではないかと思うのです。

セミナーを終えて

●足立　達哉

本日で 4 日間の予定がすべて終り、非常に濃い 4 日だったと思います。

普通の生活では、学べないこと、知識、情報、色々な人の考え方を知ることが出来、とても嬉しく思っています。

この先でこのように学べることはだんだんと少なくなっていくと思うのでこの 4 日間で学んだことを、しっかりとこれからの人生に役立てていきたいと思うとともに忘れないようにしたいと思います。

4 日間、共に過ごした仲間達も賢く、すごく頭の良い方々が多く、とても良い機会を

与えて頂き、有難く思うとともに、感謝しております。

この長いようで短い非日常的な4日間とても楽ししく学ばせて頂き、有難うございました。

青少年指導者養成セミナーを受講して感じたこと

●八木　勇樹

4日間のセミナーで私が一番印象に残っていることは、リーダーとリーダーシップの違いについてです。リーダーとは現象であり、つまり能力がなくても成り立つ人のことで、リーダーシップとは、本質であり、つまり人を引っぱっていく能力がある人のことであるというリーダーとリーダーシップの違いに非常に感銘を受けることができました。またリーダーとリーダーシップの違いのみならず社会全体においても現象より本質をどれだけ見抜くことができるかの重要性を学ぶことができました。

最後になりましたが、レベルの高い討論をしたり、さまざまな分野で、そして広い視野で意見を共有し、社会人にとってなくてはならない能力を向上させていただいた仲間に感謝したいと思います。

●姚　　立穎

余島はとても綺麗だと思います。特に海と星、感動しております。

A班の皆さんの出会いは素晴らしいと思います。皆さんと友達になって、一緒に話したり勉強したりして、とても楽しかったです。

今回のロータリーのセミナーを参加できること本当によかったと思います。ロータリーに感謝しております。

この4日、皆さんに大変お世話になりました。本当にありがとうございました。

私のライラ

●佐藤　周平

今回3泊4日のプログラムで学んだことはとても多く、その1つ1つを語るにはとても時間が足りません。その中で1つ挙げるとしたら、余島で出会った仲間の存在です。班にわけられ顔合わせをした時は、色々な業種や年代の人達とうまくやっていけるかとても不安でした。しかし、一緒に暮らしを共にしていく中で班のメンバーとどんどんうちとけていきました。また、バズセッションでは互いの意見をどんどん伝えていくことで、よりアイディアが洗練されていくのを感じ、グループでものを作り上げることの大変さや、完成しやりとげた時の喜びを味わうことができま



した。とても短くても中身の濃い時間を仲間達と共有できたことをとても幸せに思います。今回のプログラムを支えてくれた、ロータリアン、YMCA、そして他のスタッフの皆さん、本当にありがとうございました。

●西鼻　祥太

今回のRYLAセミナーに参加して、1人の価値について学んだ。

1人ひとり思いや価値観等、考え方においても様々でした。最後の講義にもあったように、人の容姿とは別に内面や考えがしっかりと持ち発言する場面を何度も見てきた。職業や立場もちがうが、人と人が共有できるのは不安があるが、同じビジョンや理念があるので団結してなし終えることが出来たのではないかと思う。短い3日間半程度の時間でしたが、今までの歴代の先輩方が作ってきた過程があるからこそ、上手に運営し、後世に引き続き残していけるのだと思う。不安が多くあったがカウンセラーの方々と共に一緒に生活でき安心することが出来ました。

今回のセミナーを通して、自分という価値と他者を思い共有していくということを再確認し、今後、後世に残せるように努めていきたいです。

■■■　B　班　■■■



第36回RYLAセミナーを終えて

◆B班カウンセラー　坂東　隆弘

セミナーの4日間、受講生の能力を最大限に引き出し、リーダーのリーダーたるものを育成する。

カウンセラーの仕事は、受講生達と寝食を共にし、しかも付かず離れず、自律を促す絶妙な距離を取り、セミナーや彼らにとって有意義になる様に配慮することである。班分けされた担当の受講生の名をよく観察し、個々

の理解に努めながら、組織キャンプとして成立するようにグループ行動を指示する。これは最初に行う仕事である。

個々に参加している者にとって、この形態の意味を知らなければ、グループに属することによっての自己存在の認識という意味を理解できない、これが出きれば、8割は成功である。今回、非常に満足できるセミナーが出来たと思う。受講生に感謝である。

第36回ライラセミナー感想文

◆B班カウンセラー　阿部　真弓

このたびはライラセミナー関係者の皆様、大変お世話になるとともにご指導いただきまして感謝しております。

受講生は協調性をもって集団行動が出来ておりました。どの場面においても一人たりとも時間に遅れることなく最後まで終えることが出来ましたのは、とても素晴らしいことで、参加者一人一人の自信となり貴重な財産となったのではないかと感じます。この3泊4日の間、集団で自律した生活を過ごした参加者は、個々のおかれた場所に戻っても更なる帰属意識をもちリーダーシップを図ることが出来ると思います。そして私事ですが初めてのカウンセラー体験でお役に立てることもなかったかと思いますが、ロータリアンとしての勉強をさせていただき感激しています。来年もまた、カウンセラーとしてお声をかけていただきライラ発展のお手伝いに寄与させていただければ幸いです。

●江本　美穂

私はリーダーに向いていないだろう。本当にこのセミナーに参加して良いのか、という不安をかかえたまま始まったRYLAセミナー。しかし、今では新しい仲間が増え、自分にはなかった発想を得る事が出来、本当に参加して良かったと感じている。このセミナーを通したくさんのことを学び、考えたが、私が得た大きなものは「勇気」である。フォーラムの時に「目標は変わるが理念は変わらない。」という事を聞いた。私は、その言葉を教師の立場におきかえてみた。来月から先生になることに大きな不安を抱いていたが、「英語の楽しさを伝え、より多くの生徒が英語を好きになるきっかけをつくりたい。」という理念をもち、頑張っていこうという勇気につながった。

たくさんの人と出会い、たくさんの事を多方面から考えることが出来たこのRYLAセミナー、また出会った人々に、本当に感謝しています。

第36回RYLAセミナーに参加した事による意思の変化

●大西　康仁

私はロータリーの内容も知らなかったし、このセミナーにも自ら参加した訳ではなかった。参加理由は会社の研修としてでした。

余島についた時、周りは一度も顔を合わせたことがない人達ばかりでこの状況下で4日間も共に過ごすと思うだけで憂うつであった。さて、この文章を書いている今の気持ちはどうであろう。心の底から参加してよかった。

このセミナーで知らない事柄、人についてそれを知ろうという姿勢と意志を共用する大切さを学びました。特にバズセッションは衝撃的でした。12名個々の意見があり、それらを共に理解することで新たな意識改革ができました。これは寝食を共にし、学び、遊ぶ事で全員が率直な意見を言いあいできた事だと感じました。

意思の変化には時間と理解が必要だと学びました。

感想文

●嵇　元琦

日本に来てからちょうど2年になるところに第36回RYLAセミナーに参加させていただいて、心から大変感謝しています。日本語の

中で、大好きな言葉があります。「一期一会」という言葉から相手と出会う時の気持ち、その場で作られた素晴らしい時間の大切さを学びました。もちろん今回のセミナーも人生の中で、2度とはない経験に所属していますが、私が学んだことがもう1つ増えました。人と人のつながりはその場で終ることではないことです。時間の経つことによってその場の気持ちはだんだん忘れていくかもしれませんが、人が居れば、つながりがあれば、これからどんどん新しい思い出を作っていくことでしょう。

「清君試問東流水 、 別意与之誰短長？」
—李白

感想文

●井門　里美

4日間のライラセミナーの受講を終えて、4日前の自分にはなかった大きな気づきを得ることができました。自分の予想をはるかに超える熱い充実した日々を過ごす中で、人と人が意見を語り、共有し合う素晴らしさを感じ、自由に語り合える仲間ができたことが大変嬉しいです。

また、3名の先生方の講義を受け、思いやりの心をもって理解すること、世界各地でおこっている様々な問題が日本、また地域にどう影響しているのかを考えること、リーダーについてなど、今後もその内容を忘れず、生かしていきます。

さらに、今回のセミナーで学んだこと、また出会えた仲間たちとのつながりを大切にし、学び、成長し続けることができる様、努力していきます。

●松本佳世子

私にとってこの4日間は、大変充実し、多くの学びと気づきのある有意義な日々でした。20日に初めて出逢った国籍も業種も世代も違うメンバーとこんなにも真剣に討論し、共感し合い、1つのものを作り上げられたことに大変驚いています。短時間で、こんなにも熱く討論したことは、一生忘れないだろうと思っています。

再会を約束されていても、この研修が終わることの寂しさを今、とても感じています。しかし、余島との出逢い、多くの人との出逢い、そして何よりもB班のメンバー、お父さん、お母さんとの出逢いに心から感謝しており、ここで学んだこと、得た〝つながり〟をこれからも大切にし、いつまでもここで灯した火を胸にとどめて置きたいと思っています。

ロータリーやライラのことを何も知らずに参加した研修ではありましたが、参加できたことを光栄に思い、本当に感謝しています。ありがとうございました。

RYLAセミナーに参加して

●瀬詰　　功

「グローバル」そして「リーダー養成」という二つのテーマに関心があったため参加しました。集団生活、そして長期間にわたって行われることに不安も大きくありましたが、B班のカウンセラーのお2人、そして参加した11名の仲間たちのおかげで、楽しくそして意義深く4日間を過ごすことができました。

何よりも、B班全員で私を受け容れてくれていると実感したことはキャビンタイムやバズセッションの最中に何度もありました。私自身もそのことが話に積極参加できるようになったり、レクリエーションで笑顔で走り回れたのかなと思います。そして私も仲間たちのことを知り、敬意を持ち、受け容れることができました。「受け容れる」これがリーダーとして、大人としてまずすることかと感じました。

このような機会をいただきありがとうございました。B班のみなさん、これからもよろしく！

●新石　圭輔

セミナーは、自分が想像していたものよりも内容が濃く、充実したものだったと思う。

1つの議題に対してみんなで話し合い、齢や職種もバラバラな人が集まって深く議論することは初めての経験となった。社会人の方々は、思考や時間の使い方が上手で、普段厳しい環境に身を置いて頑張っているんだということが伝わってきた。また、すべてにおいて自己責任であり、自分の意識の甘さなど反省する機会となった。

いかにして人を引っ張ったり、コミュニケーションをして仲良くなっていくか、またその重要性を知った。講義において学んだことは、自分の心構えや理念にそって働いたり、行動していくことだ。生き方や仕事からその人の考えや人柄が表面にでてくるので何が自分にとって大事なことなのか真剣に考え、これから何をしていくのか明確にして自信を持って取り組んでいこうと思った。

第36回 RYLA セミナー

●坂本　敏行

今回、余島という一般社会から離れた場所で4日間という長いようで短い時間を、すばらしい仲間と過ごすことが出来たことに感謝します。リーダーを育成するという本セミナーには、ロータリアン・RYLA がつないできた、成長を促すための多くの仕組みを感じとることが出来ました。

私は現在社会人として、同じ業種と過ごすことが多く、どこか変化や革新の少ない日常をおくっていたように思います。

RYLA のメンバーは、国も業種も年齢、性別、普段であれば交わることのない人達で、自分に新しい価値観や、役割をあたえてくれました。また、カウンセラーにはリーダーとして、どうやって集団をまとめ、つながりを作り、一人ひとりの成長に関わっていくかを目の前で見せていただき、本当に意味のある時間を共に過ごさせていただきました。このつながりを、長く持ちながら、次は自分がその経験や思いをつなげていけるようにします。

感想

●小山　真玄

今回 RYLA セミナーに参加し、日頃の職場内研修と違った意味でためになったと思いました。職場内研修では、介護技術や介護のための知識を広げるものばかりでした。それにより、つながりというものが介護、医療関係の人ばかりになってしまっていたのかなと思いました。今回一番ためになったと思ったのは、近い年の仲間というものができたことだ



と思います。30才前になるとなかなかこのようにつながれる場は、そんなに多くないです。また、普段は違った仕事をしているのに同じ課題について意見を夜遅くまでかかっても出し合い、1つの意見にまとめていく過程に楽しさも感じました。今回の研修を基に今後仕事中でも時間があれば意見交換というものをしていこうと思いました。

第36回RYLAセミナー感想文

●滝川　裕史

私が今回のセミナーに参加することになったきっかけの一つとして、ローターアクトクラブの活動があります。前回35回目の受講者である同クラブのメンバー及び、お世話になっているロータリークラブの方からこのセミナーのお話を聞き、参加する決意を固めました。実際に、セミナーが終わった今、思うことは、「最高のセミナーであった」この一言に尽きます。ある程度、前もってセミナーに関するお話は伺っておりましたが、想像以上に内容が濃く、おもしろいものでした。私の班でも、様々な出身、経歴、職種に属する、多様なメンバーがおりましたが、3泊4日、寝食を共にし、交流し、時間を共有すること、また、バズセッションによる白熱した議論、そこから集約に至るまでの作業、そのどれもが今までに私が体験することができなかったものであり、私自身も非常に良い刺激となったように思います。セミナーで学んだことをこれから活かしていきたいです。

ライラセミナーにて学んだこと

●齊藤　裕子

私はこの3日間で最高の仲間と出会い、本当に素敵な毎日を過ごす事が出来たと感じている。年齢も職種も国籍も違うメンバーでお酒を飲みながら大笑いしたり、時には真剣に討論し共有し合った事。いつもの日常から離れ、この自然の多い余島で一人になり、自分を見つめなおし、心も体も本当にリフレッシュする事が出来た。

私は高齢者福祉施設で働いている。今後、このメンバーと共に過ごした日々で成長出来た事を職場で生かしていきたい。リーダーになりたいと感じた。

4日間のRYLAを通して

●池信　拓哉

今回、RYLAにて集まった人達と、普段ならは体験できないことを経験しました。人々と話し合い、議論するだけならば、いつか体験することもあると思います。しかし、その議論する人々と寝食を共にし、楽しむことは、そうそうあることではありません。

集った仲間達とは非常に楽しい時間を過ごすことができました。その楽しむことにより仲が深まり、議論することによっても仲が深まりました。仲間達と共通の目的を持って行動すること、それが楽しいと思えたことは、非常に素晴らしいことだと、この4日間を経て感じたことです。

この4日間のRYLAが終わった後も、この仲間達と何かを為すことができればと思う次第です。

■■■　C 班　■■■



◆C 班カウンセラー　藤原　賢治

友情そして思いやりを持つ事の大切さを、改めて感じさせられた RYLA セミナー。

今年度初めて RYLA セミナーのカウンセラーとして拝命を受け、12 名の受講生をお母さん役のカウンセラーと共に学びを受けました。

カウンセラーとして任務を与えられてはいるものの、私自身も受講生の気持ちを出来る限り取り組みながら、少しでも一人一人の性格や理解する事に専念してカリキュラムを共に進めてきました。

私の班の皆の取り組む姿勢は、他の班の受講生よりも優秀であると思うくらい、一つのテーマに向けて、時にはぶつかり合いながら、時にはお互いの意見を尊重し合う姿に感動をした次第です。

12 名の受講生の皆と出会い、短かったけれど、同じ時間を過ごせた事に感謝しています。有難うございました。

第 36 回 RYLA セミナー

◆C 班カウンセラー　伊藤　幸美

3 月 20 日、あいにくの雨の中 RYLA セミナーが始まりました。

カウンセラーとして 2 回目の参加。2 回目のお父さん役カウンセラーと 2 回目の子ども達。受講生の 1 人に「おかん！」と呼ばれ、戸惑いながらも嬉しさを感じ、がんばらなくてはと思いました。

翌日からは晴天に恵まれ、うぐいすの声を聞きながらの講義、レクリエーションに普段の生活を忘れ没頭することができました。

バズセッションやフォーラムでは、受講生達の多様な意見、考え方に感動させられました。

余島という自然の中での生活をし、初対面の子ども達と寝食を共にすることで感じたことは、普段いかに自分が人に甘え、ぜい沢な生活をしていたのだと反省する次第です。

第 36 回 RYLA セミナー受講感想文

●屈　　璐

「あ～」と言う間、3 泊 4 日のセミナーが終わりました。参加できて、本当に良かったと思います。ロータリーの皆様に感謝致します。

この 4 日間に、RYLA セミナーの魅力を実感しました。まず、①「たくさんの出会いの機会」。美しい孤島－余島、新しい仲間達、スーパー講師の先生達、優しいパパとママ、いつも支えてくれるロータリアン達とお会いすることができて、また、楽しく交流することもできまして、本当に良かったです。②かしこくて、可愛い仲間達と共に笑って、共に勉強し、そして、共に成長したことは一生忘れられない良い思い出になると思います。

③高いレベルの講義を受講し、知識を深めた一方、自分の考え方も熟成した気がします。グローバルについての話を聞いて、その重要性を知り、外国人である私はこれから世界の舞台で活躍していきたいと思います。

●小田　真大

この RYLA セミナーでは、小さな島で初めて会う人と 3 泊 4 日を過ごすという非常に貴重な経験をすることができました。普段関わることのない、かつ様々な職種の社会人の方々と毎日楽しく語り合ったり、リーダーに必要な素質や行動について夜遅くまで議論し合ったりと、日常とは異なる生活を過ごしました。また、3 つの講話では、グローバルなテーマに沿ったお話を聞き、国際化へ進む世界で起こっている現状の問題についての知識が深まりました。

一番印象に残ったのは、2 日目のプログラムにあった「思索の時間」と「レクリエーション」です。「思索の時間」では、神戸では見ることのできない大自然に囲まれ、雑踏の多い都会から解放されることができました。「レクリエーション」では、他の班の人と交流することができ、とても楽しかったです。

●池田　繁人

私は、普段会えないような職業の方々とこのライラセミナーで出会うことができました。他の方々と話をしていると、本人は控えめに話をしているのですが、よくよく考えると、この人はこんなにすごいことができるのか、と驚かされることが多かったです。かつ、誰もが自分はまだまだ未熟で他の人はもっとすごい人だと言っていました。この人達に負けないためには現状に少しでも満足することは絶対厳禁だと確信しました。少し気をぬいていると、たまに顔を合わせたりする時に、自分が一番何もできない人間になってしまっている予感がしました。

また、バズセッションでリーダーについて考えましたが、小さい範囲でリーダーをしている自分と出てきた内容を照らし合わせると、自分がリーダーとして望まれることのうち、できているのはせいぜい 1 つでした。自分が形だけのリーダーだと思い知らされました。

余島にて

●白木　朝乃

何もわからずに余島に来て、オリエンテーションで内容を聞いたときは、場違いな所に来てしまったなという思いがした。講義の内容もかたく、半分も理解できなかったが、この研修で「社会」というものを考えさせられた。今私が、どれほど小さな社会の中で生きているかを思い知りもした。グローバルというテーマだったが、生活の中で考えてみたこともなかった。

この研修はとてもいいきっかけ作りになったと思う。研修中では自分の中でまだ結論がでず、もやもやしているが、今後の生活の中でさらに考え、自分なりの考えを見つけていきたいと思う。

さらに、今まで会うこともなかった性格の人たちに出会えたことは大きな得だった。こんなにまじめな人たちに囲まれ、まじめに生活したのはおもしろい発見になった。

●釜谷知沙子

今回初めてライラセミナーに参加いたしましたが、最初はどういったことを目的としたセミナーなのか、概要も分からずに参加いたしました。セミナーを終えてみて、得たもので一番自分にとって大きなものは、やはり人との出会いです。このセミナーを通して、様々な職業や立場の人と出会いました。そのような方々と、たっぷりと時間を掛け意見を話し合う時間は、私にとってとても貴重な機会でした。どの立場でも同じようなことを考えていることもあれば、自分では思いもつかないような意見を聞き視野が広がることもありました。今回感じたことを忘れず、今後の人生に活かしていきたいと思います。

また、今回のセミナーは自分自身とじっくりと向き合う機会にもなりました。このような、一度立ち止まって自分自身を見つめなおす機会をつくることは大切なことだと改めて感じました。

●藤枝佑一朗

RYLA セミナーを終え、一番に思ったことは、このセミナーに参加できたことへの感謝の気持ちだった。自分は行政の立場として当セミナーに参加したが、初めは青少年指導者養成という趣旨と現在自分が勤めている職場との関連がないものと考え、受身での参加であった。だが、4 日間、民間の方や大学生、自営業の方等、様々な意見を持った方が集まり、毎日、語り、議論できたことが本当に貴重な体験だと思っている。今回、討論の内容が、リーダーとはどういうものか、また、そのリーダーが目指すべき社会とは、というものであった。議論していく中で感じた事は、皆、言葉や表現が違うだけで、伝えたい本質は同じだということだった。その中で、皆で結論を出した、理想のリーダー像、また、目指すべき社会を自らの理念とし、そんなリーダーとなるよう努める。

ライラアリアンになるまでの過程

●吉野　一晴

「ライラセミナーに行くと洗脳されるよ。」と当初参加する以前から言い聞かされ、多大な不安とローターアクターとの自覚だけを持ち、このセミナーに今回参加しました。いざ参加してみると身内のローターアクトとも別の班になり、さらに不安になっていきました。しかし 1 日 2 日と C 班の皆と過ごしていく内に、皆ともどんどん打ち解けられていきました。2 日目と 3 日目で行ったフォーラムに向けてのバズセッションでは、皆で 2 日目にぶつかわせあった意見をまとめ、発表すること



で1つに近づいて行く感覚を味わいました。その後少し物足りなさを感じて3日目の夜にはテーマを自分達で設定し、夜通し話し合いました。そして4日目に昨日のファイアーについてしみじみと感傷に浸っていると見事に洗脳され、仲間を大切に思う自分がいました。別の機会でも仲間と再会したいです。

ライラセミナーに参加をして

●松木　祐太

私は現在社会人として働いているが、働く際には常にリーダーシップをとれるように意識をしております。しかしながらこのセミナーに参加する前と後ではリーダーシップのとらえ方に変化が起きました。今までは仕事をする中で業務効率化や指示出し等の非常に実務的なものでした。しかしながらライラセミナーにて同じ参加者とリーダー像や目指すべき社会というのを十分に議論し考えることで自身の中に目指すべきものを明確化することができました。共に議論を交わした仲間の素晴らしさがより強く自身に目指す社会を明確化させました。現在の仕事をする上で、まずは目指すべきものを意識し、それを共有化しセミナー参加を最大限活かせるように心懸けていきたいと思う。

●木下　勝太

セミナーに参加できて、精神的に大きく成長することができ、リーダーとしてどうあるべきか学ぶことができたと思う。

1日目に班に分かれて初めて出会った人たちと寝食を共にし、また互いの考えを話し合うことで、たった3泊4日ですが互いの信頼や絆はとても深まったのではないかと思います。講義では、普段聞く機会がない貴重なお話を聞くことができ、よい経験になりました。バズセッションでは、班のメンバーと真剣に自分の考えを発表し合い、今まで自分とは違った視点での考え方もあり自分にとってプラスになりました。

長いようであっという間の3泊4日でしたが、このRYLAセミナーに参加してよかったなと思います。これから様々な場面で今回のセミナーで学んだことを活かしていきたいです。

●森　　寛

3泊4日のセミナーが始まった初日、ライラセミナーがどのようなものかわからず不安がありました。リーダー研修ということで、班を組み寝食を共にしながら、仲間達とリーダーというものについてセッションを通じて深く考えることができました。

職場だけでなく、地域、家庭、仲間内のグループでもリーダーはいます。そのリーダーが目指すべきものについても班内で話し合い、フォーラムでの発表を通じて、様々な人の意見に触れることができました。先日結婚したばかりでもあり、職場でもリーダー的な立位置にいる自分にとって、家庭という社会や職場の中のリーダーとして、漫然とまとめ役としてリーダーをこなすのではなく、目的やリーダーとしての資質というものについて、講義やセッションを通じて学ぶことができました。

最後に、勉強だけでなく仲間との出会いを通じて、とても楽しく過ごせました。

ライラセミナーに参加して

●大川　理恵

今回のバズセッションのお題は「リーダーとは」だった。班で話をしていた時、様々な意見を忌憚なく発言して下さいと言われたが、1つ言うと「それはマイナーな意見だから」ということで付箋にも書かれない状況だった。これでいいのかなと思っていながらフォーラムに臨んだ時、顧問の先生が「少数意見も切り捨ててはいけない。」と言われ、また深川先生が「大勢で意見が一致してしまった場合は、無効とみなす」という国もあったことを教えてもらい、目から鱗でした。

最も驚いたことは、多数決をとるのは、意見をまとめる時、普通だと思ってきたのだが、

それは、ローマの法王を選ぶ時に必要にかられて生まれた方法だということがわかり、これから会議など様々な場面で多数決をとる場面がきってくるに違いないから、その時には毅然として少数意見を大切にしたい。

4日間という長い様で短い研修セミナーに参加させていただいて、大変感謝いたします。他のセミナーでは誰も伝えてくれない事を教えて下さいましてありがとうございました。

セミナーに参加して
●谷野佳奈子

普段の生活では深く考えることのない「リーダーとは」「社会とは」というテーマに本気で向き合い、考えた3泊4日。いろいろな地域・職種・年齢の方々と話し合う中で、多種多様な意見があることを改めて実感した。

フォーラムでは、私のいるC班を含め、大半は理想のリーダー像を思い描いての発表だったが、D班の「誰でもなれる」という発表を聞いて、「確かに！」と、切り口の違いに驚き、感心した。理想のリーダー像を思い描き自分に足りないものを考えるより、自分もリーダーになれると信じて、物事の「本質」を見るよう意識し、経験を積むことが必要だと感じた。

第2の家族と思えるほど打ち解けられたC班のみんなを含め、このセミナーでの出会い、つながりを大切に、これからも頑張っていこうと思う。

■■■　D　班　■■■



第36回ライラセミナーを終了して
◆D班カウンセラー　白井　良夫

今回私自身3度目のカウンセラーを無事に終了する事が出来た事を大変うれしく思っています。

今回はカウンセラーの私が、大変受講生に勉強させてもらったと痛感しております。

体調のすぐれない受講生もあり、今までに

経験のない状況での3泊4日で戸惑う事も多かったですが、阿部純子お母さんの初めてのカウンセラーとは思えぬサポートと、受講生のみんなの積極的な参加意識で、しっかりD班として強いスクラムを組めて、目標としていた班の絆は深まり、最終日の夜の各自の班メンバーへの想いを語り合い、より尊敬と信頼を再確認するとともに、この出合いを運命ととらえ、これからもつながって行くことを大切にしたいと誓い合えたことはすばらしいことだと思います。

カウンセラーとして、RYLAのすばらしさと、ロータリーがこのRYLAを開催している意味も伝えたつもりです。

ぜひ又、この余島で会おう！君たちの今後の益々の活躍を願い、そして見守っていきたいと思います。

カウンセラーを初めて体験して

◆D班カウンセラー　阿部　純子

今回のRYLAセミナーのカウンセラーをロータリアンではない、ロータリアン夫人として初めて参加することになり、本当に大きな不安をかかえての参加でした。ロータリーとはRYLAとは何かすら理解していない私にとって未知の世界に飛び込む一人の挑戦者でもありました。本当を言うとこのセミナーの一週間前まで不安と緊張で体調を崩す時期もありました。しかし、私がドタキャンすれば他の方に迷惑がかかると思い直し、心を強く持ってこの場所に来たしだいです。

私の不安をRYLAカウンセラーの先輩や関係者の方々にあたたかく見守りサポートをして頂きながら3泊4日のセミナーを終えた時に自然と責任を無事終えたことでことが流れました。

今回のセミナーに参加して、最も印象的で刺激的で感動したことは、夕食後のキャビンタイムでした。1つの部屋にD班の全員が集まり、白井カウンセラーを中心として、全員が朝方まで一人も場を離れることなく熱く語り合い、大声で笑い、フォーラムで班が発表するテーマについて長時間をかけて討議した熱気にあふれた雰囲気は、子供の成長と共に若者と交流する機会が少なくなっている私にとって新鮮で若者の純粋さを肌で感じる経験をしました。違う意味では体力勝負のRYLAカウンセラーという役を無事終えることができたことにRYLA関係者の方々に感謝致しております。

最後にセミナー最終日にパストガバナーの深川純一氏が講義された内容の中に「思いやりの心が欠けている人には、人間を理解することができない」という言葉の深い意味を考えながら、日常生活の中で実践をしていきたいと思います。

●王　　揚

3泊4日のライラセミナーを思い出すと私にとって、沢山貴重な経験を得ました。

今回のセミナーは講義、キャビンタイム、バズセッション、フォーラムとカウンシルファイアーの五つの部分で構成されました。饗場先生、藤澤先生と深川先生の講演により、私はロータリーの精神について、大変勉強になりました。また、グループディスカッションで、「リーダーとはどういうものか」について、討論が行われました。ディスカッションを通じて、同じ班の方と交流して、お互いの考え方を深くまで理解ができて、有意義な時間を過ごしました。そして、最後の日に、カウンシルファイアーが行われました。

今回のセミナーは私にとって貴重な体験になりました。今後もセミナーで勉強したことを活かして、ロータリー精神を勉強した上で、頑張って行きたいと思います。

ありがとうございました。今回のセミナーは楽しかったです。大切な思い出として残せると思います。

●杉本　洋一

今回のセミナーの参加では、多くの年代の人達と話ができた。20代前半の学生達はとても熱く、まさに現役の学生時代の自分を見ているようだった。そんな熱い学生達と語り合う中で、少し離れた所から見守るように話を聞く自分に気がついた。学生達とは3～5年ほど多くの人生経験しかないが（現在自分は26歳）その数年で進歩があったのだと思った。熱くなりすぎて言い合いになったり、論点がずれてきたときにフォローに入れる自分に成長を感じた。若い学生達が弟や妹のようでかわいくてたまらない気持ちです。

もう1つは大人達との出会い。ロータリーの大人達は本当に気さくで、いつもの社会人生活の中には決していない。何か特別な物を持った大人達だと感じた。参加者達の言うことや思いを否定せず、すべてを受け入れる姿は、4日間そんな場面を見るたびに感動した。「なんて素晴らしい大人達なんだ！」と。それは今の自分が目指すべき人物像で、本当に勉強になった。

そしてリーダーについて考えた結論だが、リーダーとは人の心を理解し、それをすべて受け入れる、それを自然にできる人でなければならないと思った。そんな理想のリーダーと今の自分。まだまだ足りないものを多く感じた。今回の参加は、これから社会で生きていくための、人として成長していくための大きな力になった。そして何よりも楽しかった。感謝でいっぱいです。

RYLAセミナーを終えて

●甲斐　瑛之

今回初めてRYLAセミナーに参加させて頂きました。私は今までにロータリー関連の活動に参加したことがなく、実際に活動してみるまでロータリーがどのような団体であるかさえきちんと理解できていませんでした。よって、セミナーに参加するに当たって目的意識などはほとんど持っておらず、理由も明確ではありませんでした。

しかし、実際に活動を行い、将来地域でリーダーとなり得る目的意識の高い班員に多く感化され、今の自分が将来、社会でリーダーとして活躍するためにどのような能力を磨かなければならないかが明確になりました（具体的には、傾聴力、論理的思考力、発言力など）。

この3日間で、私は将来長い間連絡を取り続けるであろう良い友人を多く得ることができました。このような良い友人を持てたのは、班員各々が一所懸命努力したからだと思います。また、私達と生活を共にしてくれたカウ



ンセラーの方々の努力によるものだと感じており、心から感謝しています。本当にありがとうございました。

ライラセミナーを通して

●土田　詩歩

まず初めに、第36期のライラセミナーに参加できたことを、心より有難く思っております。20代からのこのようなプログラムに参加したことは初めてでしたが、今後も付き合い続けたい仲間と出会うことができました。カウンセラーが上手くグループの個々人を引き立て、力を伸ばして下さり、普段から人の上に立っていらっしゃる方々の器量は尊敬と共に、非常に興味深いものでした。

今回巡り会えたグループメンバーは、今まで交流したことのないような方もいらっしゃいました。外に出るからこそ頂けた貴重な出会いで、刺激を受け続けた日々でした。腹を割って、普段なら話さないような方と会話をする。自分の持っていなかった視点を吸収することができ、自分の立ち位置、今後の課題も確認できたように思います。尊敬する方と今後も交流し、お互いを高め合いながら、社会に貢献できる人材になっていきます。ありがとうございました。

第36回RYLAセミナーを終えて

●稲田　麻里

今回、RYLAに参加させて頂くきっかけとなったのは職場のオリンピアでした。毎年私たちの同僚がこのRYLAに参加させて頂き、たくさんの学びをして帰ってくる姿を見てきて、ぜひ今回のRYLAに参加させて頂きたいという強い思いを、館長にお話しさせて頂きました。そして、参加できることとなり、行く前から本当に楽しみで、必ず何かたくさんのことを学ばせて頂き帰りたい!!という思いを持って来ました。

そして、RYLAがスタートし、毎日というよりも、1分1分が驚きと刺激の連続でした。同じ班のメンバーの思いの熱さと、志の高さ、積極的に吸収していこうという向上心に、始まってすぐ驚き、大きな刺激を常にもらうことができました。私は多くの人（グループ）でいる中で、自分の思いを言葉にすることがとても苦手なんですが、だからこそ、どんどんそういったグループワークができる空間にまずは参加してみることから取り組みはじめていました。今回のRYLAでもグループワークの時は、やはり聞いていることが多く、中々思いを発言することができませんでした。しかし、このRYLAで本当にすごい仲間と出会え、同じ時間を共有し、皆で1つの答えを出すためにしたたくさんの話し合いの中で、すごく多くのことを感じ、学び、刺激を受けました。このRYLAでの経験を必ず自分自身のこれからにつなげます。

そして、ここで出会った仲間とのつながりをこれからも大事にし、つながっていきたいと思います。

仲間全員と、白井パパ、純子ママに本当に出会えて良かった。感謝しています。

RYLAセミナーを経験して

●奥野　修示

私はこのRYLAセミナーに参加させていただき、多くの仲間と出会い、交流することができました。私は社会人となり、同じ年代の人と交流する機会がなくなったため、とても刺激を受け、成長につながったと思います。相手のこれまで生きてきた背景を聞き、そして1つのテーマについてセッションする。その中で新しい考え方や、価値観を知ることができました。3泊4日という短い期間であるからこそ、普段友人とは話せないことも相談できたり、新たな自分に出会うことができるのだと感じました。

今後、自分が悩んだ時に、今回のセミナーの経験は必ず活きてくるのだと確信しています。刺激を与えてくれる仲間と出会えたことに感謝し、またこれからも継続して、今回出会えた

仲間たちと交流を深めていけたらと思います。そして、更に人脈を広げ、そこから多くのことを吸収し、自分の目指すべきリーダー像へと近づけるよう努力していきたいと思います。

3泊4日で感じた事

●笠井　美里

セミナーの全日程を終えて、今一番に感じることは、私はとても引きの強いラッキーな人間だということです。班分けを発表される前から話をしたいと思っていた人ばかり集まった班に入れたことや、私のとがった意見を、大人な対応で受け入れてくれたことに本当に感謝したいという気持ちでいっぱいです。このセミナーに参加して、今までよりも自分の意見を言葉にすることの大切さをより濃く実感することができました。

人は自分をさらけ出すことに不安を持ってしまう部分が必ずあると思うが、意見を言うことで考えを共用し、それが班全体の宝物になったという感じがしました。カウンセラーの2名が班員のことを真剣に考え向き合い、突破口を作ってくれることがとても嬉しかったし、班員のやる気の原動力になっていたと思います。このセミナーで私はたくさんのことを班員から教えてもらうことができました。リーダーとしての要素を持った人の集まりの中で学ぶことは多く、吸収しきれないところがたくさんありましたが、新しいアイディアを作り出すために反対の意見を取り入れていくことが何よりも難しくて大切なことだと気づくことができました。

本当にこのセミナーでの出会いをこれからも大切にしていきたいと思います。そして、互いに高めあえる関係になるくらいに自分が成長していきたいと思います。

ライラセミナーでの経験

●宮川　寛明

私が、このライラセミナーに参加したきっかけは、私がローターアクターであり、提唱ロータリーの方に参加を勧められたことでした。私は、ローターアクトクラブでは、今期に幹事をやらせてもらっています。このライラセミナーでは、ローターアクターの幹事では経験することができないような体験ができるのではないかという期待を持って参加しました。

このライラセミナーで一番の良い経験は、人前に出てしゃべる機会を頂いたことです。結果的には、自身の経験不足もあり、成功とはとてもいえないものとなってしまいましたが、その失敗について、なぜ失敗したのか、どうすれば失敗しなくてすむかを自分なりに考えて、これからの様々な活動に活かしていきたいと思いました。

感想文

●常次　浩継

まず、最初に出て来る言葉は「疲れた」の一言です。

この様な時間を過ごすのは10年以上も前のことなので、色々な面でとても不安でした。

班のメンバーが発表され、年令を聞くと、皆が私よりも10歳以上下で、毎日3時、4時まで話し合い、レクリエーションではサッカーをし、本当に疲れました。

しかし、この4日間で、自分の中に20代の時のあの感覚が、また新たに注ぎ込まれて来る様でした。

そして、班のメンバー・カウンセラーの方々にも恵まれ、他の班よりも高いレベルでの討論ができ、親睦を深めることができたのではないかと思います。

今の自分にとっての、この非日常のRYLAセミナーは有意義でした。

RYLA Seminarを終えて　～ここからが始まり～

●中村　大志

私はこのセミナーに参加することになり、

1つの決意を決めてこの余島に来ました。それは多くの人々と共に歩き、共に築き、共に笑い、共に泣きたい、仲間とアツくなりたいという目標がありました。実際に3日間を終えた今、その目標が達成できたと思っています。みんなで1つのことについて納得いくまで語り様々な人と盛り上がるという当たり前のようで当たり前に出来ないこの貴重な体験をさせて頂いて、本当に喜びと幸せに満ちあふれています。この貴重な体験をさせて頂いて、今日この地を、このメンバーと離れるということは本当に悲しいです。しかし本気で語り合ったこの仲間となら離れてもしっかり繋がり続けることができると思います。

そう・・・ここからが始まり――であると思います。

参加感想

●劉　婷婷

元々私は今までしたことがないことにチャレンジしようと思いながら、今回のライラセミナーに参加しました。しかし、その3泊4日のセミナーを通じて、我々青年は社会に対する責任感を感じました。国籍と関係なく、私はライラセミナーに感動しました。今回のセミナーを通じて、私は同じ世代の人の豊富な生活を知りたい願望を持つようになりました。短い4日ですが、私にとって貴重な思い出が残されました。

同じ班の方と仲良くなることを通じて、私は全く知らない世界へ辿ることができました。元々知らない人たちがこのような方式を通じて友達になりました。そして、次の日に発表のため、みんな一緒に頑張って夜中まで準備したことが私の記憶に深く残されました。

皆の努力のおかげで、私たちの班は成功的な発表ができました。

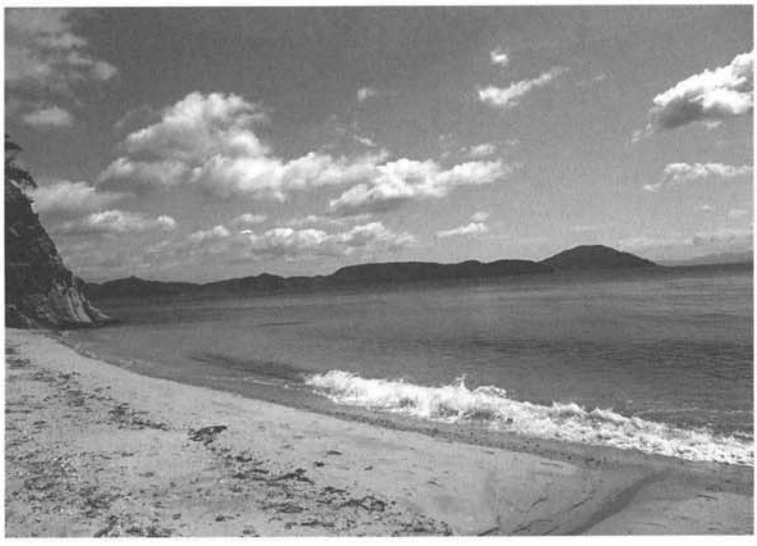
私は今回のセミナーに感謝します。皆さんとの出会いに感謝します。そして、最後にうちの班のお父さんとお母さんに感謝します。

いろいろお世話になりました。ありがとうございました。

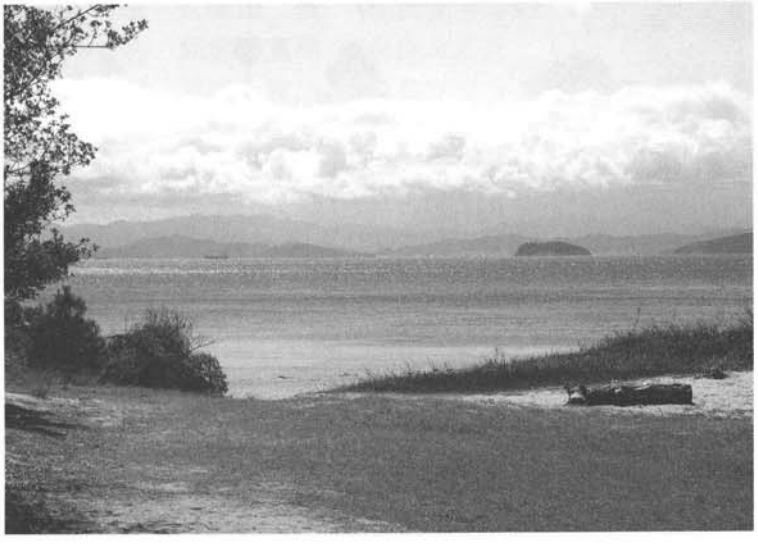









人と出あい
神と交わり
愛の火の
もえるところ
礎
1976









第 36 回 RYLA セミナー運営委員会

ガバナー　大室　儁（第 2680 地区　宝塚武庫川 RC）
　　関　裕司（第 2670 地区　高知 RC）

顧　問　今井　鎮雄（第 2680 地区　神戸西 RC）
　　深川　純一（第 2680 地区　伊丹 RC）
　　安平　和彦（第 2680 地区　姫路 RC）
　　三木　明（第 2680 地区　姫路 RC）
　　三宅　洋三（第 2670 地区　高松 RC）
　　飯　忠悟（第 2670 地区　今治 RC）

新世代奉仕委員会
カウンセラー　今井　正信（第 2670 地区　観音寺 RC）

■青少年奉仕委員会（第 2680 地区）
委員長　常次　佳丈（神崎 RC）
副委員長　徳梅　明彦（あわじ中央 RC）

■新世代奉仕委員会（第 2670 地区）
委員長　古川　充（脇町 RC）

■ＲＹＬＡ委員会
ディーン　森　廣一（第 2670 地区　美馬 RC）
副ディーン　黒田　建一（第 2680 地区　西宮夙川 RC）

■カウンセラー
（第 2680 地区）
　　白井　良夫（伊丹 RC）
　　坂東　隆弘（柏原 RC）
　　田中　恵美（伊丹 RC 会員夫人）
　　伊藤　幸美（明石 RC 会員夫人）
（第 2670 地区）
　　久保田　敦（松山北 RC）
　　藤原　賢治（徳島プリンス RC）
　　阿部　真弓（今治 RC）
　　阿部　純子（松山南 RC 会員夫人）

■ＲＹＬＡ学友会代表
第 2680 地区代表　倉本　勉
第 2670 地区代表　里見　和彦



2013-2014年度

国際ロータリー第2670地区ガバナー事務所
〒780-0842
高知県高知市追手筋1-6-3-3E
TEL 088-855-7775　FAX 088-855-7774

国際ロータリー第2680地区ガバナー事務所
〒665-0004
兵庫県宝塚市梅野町1-46
宝塚ホテル407号室
TEL 0797-84-2000　FAX 0797-84-2100